

偽ゲッターロボ レプリカ

オンドウル大使

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類と偽人類（レプリカント）が静かな闘争を続ける惑星で、科学者サオトメはレプリカントの擁する巨大兵器、ネフィリムの脅威に対抗するため、とある決戦兵器を開発していた。その名前は——ゲッターロボ。

運命に導かれし三人の男が鬼の威容を持つゲッターロボの下に集い、ネフィリムと偽人類に戦いを挑む。

戦闘兵器ベータのエースパイロットであるナガレ・リヨウマはこの戦いに否応なく巻き込まれる。ゲッターロボ、その戦いは人類と偽人類の存亡のため苛烈さを増していく。

果たして偽人類とは？ 終末の惑星で生き残るのはどちらなのか。

※オリジナルのゲッターロボと敵が出てきます。ご注意を。

目次

第一話 「地獄を征く者」	1
第一話 「地獄を征く者」	2
第一話 「地獄を征く者」	3
第一話 「地獄を征く者」	4
第一話 「地獄を征く者」	5
第一話 「地獄を征く者」	6
第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ」	1
第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ」	2
第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ」	3
第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ」	4
第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ」	5
第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ」	6
第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ」	7
第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ」	8
第三話 「月世界の咆哮」	1
第三話 「月世界の咆哮」	2
第三話 「月世界の咆哮」	3
第三話 「月世界の咆哮」	4
第三話 「月世界の咆哮」	5
第三話 「月世界の咆哮」	6
第三話 「月世界の咆哮」	7
第三話 「月世界の咆哮」	8
第三話 「月世界の咆哮」	9

第四話 「鎧悪鬼」	1	169
第四話 「鎧悪鬼」	2	178
第四話 「鎧悪鬼」	3	184
第四話 「鎧悪鬼」	4	190
第四話 「鎧悪鬼」	5	200
第四話 「鎧悪鬼」	6	206
第四話 「鎧悪鬼」	7	209
第四話 「鎧悪鬼」	8	217
第五話 「咎人の声」	1	223
第五話 「咎人の声」	2	230
第五話 「咎人の声」	3	234
第五話 「咎人の声」	4	241
第五話 「咎人の声」	5	255
第五話 「咎人の声」	6	259
第五話 「咎人の声」	7	263
第五話 「咎人の声」	8	272
第五話 「咎人の声」	9	276
第六話 「異界奇譚」	1	285
第六話 「異界奇譚」	2	291
第六話 「異界奇譚」	3	298
第六話 「異界奇譚」	4	302
第六話 「異界奇譚」	5	305
第六話 「異界奇譚」	6	312
第六話 「異界奇譚」	7	325
第七話 「崩壊への序曲」	1	330

第七話「崩壊への序曲」	2
涅槃	
第七話「崩壊への序曲」	3
第七話「崩壊への序曲」	4
第七話「崩壊への序曲」	5
悪魔の胎児	
第七話「崩壊への序曲」	6
第七話「崩壊への序曲」	7
三匹が征く	
神格巨人	
鋼鉄の虚無	
最終話「聖なる未来へ」	1
最終話「聖なる未来へ」	2
最終話「聖なる未来へ」	3
最終話「聖なる未来へ」	4
真最終回	
あとがき	
	443
	439
	429
	424
	419
	413
	402
	396
	393
	386
	382
	372
	368
	360
	357
	344
	339

第一話 「地獄を征く者 1」

地獄への送葬歌だった。

鼓膜が破れ、瞼の裏は赤く濡れている。既に出血しているのだが、それを認識しわざわざ脳に刻み付けるような余裕もなかった。頭蓋が震える。顎が外れ、よだれがついて落ちていた。そのよだれも見る見るうちに赤く染まる。

『バイタル危険域です！』

耳朵を打ったオペレーターの声に地獄は終わったかに思われた。そもそも心音さえも自分で分からないほどに全身が悲鳴を上げている。今にも口の中から臓物が飛び出しそうだった。

『続ける。シークエンス5からもう一度だ』

ふざけるな、と脳内で言い返す。だがそのような微弱な脳波は間断なく続く振動によって掻き消された。

視界に広がっているのは青空であるが瞼の裏から出血しているせいで赤く染まった空だった。これはまさしくこの世の終わりだ。

「降ろしてくれえ」

最後の呻きも聞きとめられる事はない。残酷な命令が下され、彼の意識を拭い去ろうとする。

『今だ。シークエンス5から一気に飛ばして変形シークエンスへと移行。ゲッターチェンジだ』

そのあまりにも残酷な指令にオペレーターですらうろたえた様子が分かった。

『しかし。このままではパイロットの負荷は……』

『ワシはやれと言っている』

個別回線が開きモニターに映し出されたのは地獄へと誘う鬼の老人だった。顎鬚をたくわえ白衣を身に纏っている。矮躯だが眼光は人間とは思えぬ鋭さだった。

『やれるな？』

二言を許さぬ声音に彼はレバーへと手を伸ばす。この作戦が成功すれば自分はオペレーターの女性と婚約を交わす約束だった。

だがそれが悪かったのか、あるいは星の巡り合わせか。パイロット志願などやはりするべきではなかった。結局はこの老人の言いなりでありそして道具なのだ。今までも散々見てきた。自分ならば大丈夫だという過信があったわけではない。準備に準備を重ね、この日のために過酷な肉體改造も行った。自分のこなしてきたメニューは軍隊の行うそれである。だがそれでも足りなかった。何が足りないのかは今の彼の脳細胞では分からない。次々と壊死していく細胞が彼に告げるのはたった一事のみ。

このまま続けければ死ぬ。

死にたくはない。だがこの状況ではどうしようもなかった。別のモニターに映し出された鋭角的なフォルムをした機体の状況が目に入る。機体は万全であった。だがパーツの一つでも欠損すればそれは失敗だ。この場合、欠損パーツとはパイロットである人体であった。頭蓋へと一気に血が昇ったかと思えば今度は一気に下半身に血が下る。あり得ない速度の急上昇急下降にパイロットスーツの下の肉體はぶくぶくに膨れ上がっていた。

『やめさせてください！ サオトメ博士！』

フィアンセのオペレーターが耐え切れなくなったのか悲鳴を上げる。だがサオトメと呼ばれた老人は臆する事もない。

『彼は自ら志願してパイロットになったのだ。それにこの程度で音を上げるのならば、人類に未来はない』

サオトメのどこまでも冷徹な声にオペレーターの嗚咽が混じる。彼は必死にレバーへと手を伸ばそうとした。レバーを引き、正規の手順を踏んでボタンを押せば変形が出来る。変形を果たせばサオトメ博士は自分を見直すだろう。結婚も許してくれるかもしれない。ただそれだけの、一事だというのにレバーまでの距離がどんどんと離れていくのを感じられた。違う、離れているのではない。これは指の神経が次々と死んでいるのだ。実際にはレバーに触れているもの、指先の末端神経の死によってレバーに触れているという感覚機能が殺されていく。

彼はかっ血した。ヘルメットの中は既にどろどろの血で一杯に

なっている。目や鼻、それに耳からの出血にさらに口からの出血によって前はほとんど見えなかった。オペレーターの声が響く。

『イーグル号、急下降しています！ このままでは岩礁に激突します！』

『持ち直せ』

『やっていますが……、自動制御にしてもこの下降速度ではどう足掻いても着陸不能です！』

ああ、早く楽にしてくれと彼は声を出そうとする。だが声の代わりに身体から飛び出したのは脳髓の一部分だった。急制動のブースターが焚かれたせいで彼の身体は圧迫され揉みくちやになってコックピットの中で沈黙する。

死体に乗せたまま、赤い機体はゆっくりと下降していく。戦闘機の両翼を備え赤を基調とした機体色に緑色のエネルギーラインが走っていた。

『……イーグル号、帰投コースに入ります。パイロットバイタル、ゼロ……』

聞き届ける者のないコックピット内に虚しく報告が木霊した。

外で待っていたのは結果を確かめるためだ。それ以上でも以下でもなく、その白衣の老人の胸中にあったのはただ「結果」のみであった。果たして今回のパイロットは成功したのか。バイタルサインがゼロを刻み、限りなく絶望に近いとはいえレバーを引けていれば今次パイロットの「役目」としては上々だった。

「博士、イーグル号が帰ってきました」

その声に空を仰ぐと赤く眩しい機体色を煌かせながら鋭角的な戦闘機がゆつくりと下降してくる。イーグル号と名付けられた戦闘機は長い両翼を畳みつつ着地用の推進器を起動させ老人と研究員の待つ岩場へと降り立った。着地するなりメカニックが取り付きコックピットを強制的に開かせる。

うわっ、と悲鳴が上がった。老人は下駄の足音を響かせながら機体に飛び乗りコックピットを窺う。

中にいたのは人の形状を最早していなかった。パイロットであったはずの肉体は激しく損傷し、機体の推進力に負けて圧死したその姿は血溜まりに浮かんだ肉塊だ。

「チェンジを行った形跡は？」

老人の声にメカニックと研究員が精査する。

「手はレバーにかかっています。ですが、やはりそれ以降の行動はありません。今次パイロットもまた失敗です」

老人は嘆息を漏らし最早興味が失せたようにコックピットから視線を外す。歩き去っていくその背中に、「待ってください！」と女の声がかかった。振り向くとオペレーター女性の顔が顔を泣き腫らして佇んでいる。老人は、「何かね」と尋ねた。

「彼は……、彼は死んだんですか？」

「そうだ」

冷徹な老人の声に女はさめざめと泣く。口元を押さえながら、「でも」と声にした。

「彼は、彼の死はゲッターの、人類のためになったんですよね？　彼が死ぬ事で、また技術は進歩したんですよね？」

責め立てるような、あるいは懇願の塊の声だった。老人はしかし頭を振る。

「先のパイロットよりも彼の成果が上々だったと、ワシに言って欲しいのか？　彼の死は決して無駄ではない、彼の死はこれから先の未来を切り拓くための必要な犠牲だったと」

女は膝を折り曲げてそうであって欲しいと願っていた。老人は言

い捨てる。

「甘ったれるな。いいか？ チェンジも果たせないのでは被験者としても何の成果も得られなかったという事だ。今回のイーグル号の成果はチェンジの成功のみ。それ以外は全て失敗だ。何の積み上げにもなっておらんし、それに彼の死は何の意味もない。レバーに手が届いた事を褒めても、死者は蘇らん」

老人は踵を返す。その背中に向けて罵声が放たれた。

「鬼！ 悪魔！」

そう罵られても老人の顔色に変化はない。むしろ当然だとも言うように。白衣の研究員が一人、老人に追いついて来て書類を捲る。

「サオトメ博士。第十二次プラネットシエル計画の報告会が一時間後に予定されております」

サオトメと呼ばれた老人は首肯して了承する。

「第十二次、か。それほどの時をかけてもまだ本来の成果の半分以下だとは」

嘆かわしいとでもいうような声音に研究員は返した。

「ですが、プラネットシエルは惑星そのものを覆う計画。そう容易く成功はしませんよ」

サオトメは用意された車に乗る前に振り返った。イーグル号に取り付いた人々の背後には巨大な墓石を思わせる研究棟がある。サオトメ研究所、と看板が立てかけられていた。

「ワシがこの研究を始めて、もう十年は経った」

研究員は車の扉を開けて運転手に行き先を告げる。

「ええ、そうですね」

研究員も乗り込み車が間もなく発進する。サオトメは後部座席で揺られていた。

「だが惑星保護のためのプラネットシエル計画はまだ四割の成功であり、さらに言えばもう時間はない。一刻も早く、あれを完成させねばならぬのに肝心のパーツが見つからん」

「ゲットマシンに見合うだけの人間が、果たしてこの世にいるのでしょうか」

「研究员へとサオトメはぎよろりと睨みつける。

「居なければならぬのだ。ゲットマシンを自分の手足のように操れるだけの人材が。そうでなければ人類には緩やかな消滅が待っている」

サオトメの宣告に研究员は書類を捲りながら応ずる。

「……今回のパイロット。もし試験が成功すれば挙式するとの事でした」

「そうか」

淡白なサオトメの声に研究员は言葉を重ねる。

「博士は、命に頓着しないのですね」

「命？ 人の命か？ 真っ先に掻き消されかねない命になどいちいちワシは信仰心もなければ頓着などするはずがない。どっち道、奴らが動き出せば人命など瞬く間に千人規模で消える。一人の人命に涙してはいは大勢を救う事など出来んのだ」

「ですが、博士。何も思わないのですか？」

研究员のしつこい声にサオトメは、「言つて欲しいのか？」と聞いていた。

「尊い犠牲によって、また一つ技術は躍進し、人類は段階を踏んだ、とでも。馬鹿な。ワシからすれば、一つでも駒が進められない人類など居てもいなくとも同じ事だ。明るい未来が待つていようが、その人間がいくら善人であろうが関係がない。あれの完成こそが、全ての人類を救う礎なのだ」と

「そう、お考えなのですね……」

口を開いたのは運転手だった。サオトメが怪訝そうにする前に隣に座っていた研究员が動いた。振り返った運転手の手には拳銃が握られておりサオトメの額に銃弾が撃ち込まれる前にその軌道が逸れた。車が横滑りし木々にぶつかる。運転手は研究员に拘束されてもまだ抵抗の意思を見せた。

「驚いたな。何者だ？」

「プラネットシエル計画をやめろ。そしてもう一つのおぞましき計画も。でなければ天罰が下るぞ」

運転手の声にサオトメは鼻を鳴らす。

「おぞましき計画だど？ おぞましきとは、貴様のような事を言うのだ」

運転手が拘束を解いて瞬く間に変貌していく。腕から刃が出現し拘束具を引き千切った。

「偽人類……」

研究員が声にする。運転手は、「天罰が下るぞー！」と黄色く濁った眼光で睨んだ。

「この世界の天罰が、お前ら人類に下るのだ！ 我々は神罰の代行者であり、やがては大いなる巨人がお前達人類を滅ぼすだろう。その時、願っても祈っても、人類には絶望しかないのだー！」

「タツヒト」

研究員の名前をサオトメが呼ぶ。タツヒトと呼ばれた研究員は懐から銃を取り出した。

「撃て」

銃声が放たれ運転手の額を貫く。運転手は仰け反って倒れた。痙攣しているその身体へと何発か銃弾が撃ち込まれる。どうやら止めがさされたらしい。サオトメはそれを観察する。

「死んだか？」

「恐らくは」

タツヒトは銃を懐に仕舞い、運転手の死体を蹴った。するとどろどろと溶け出し、運転手は死骸さえも残さなかった。焼け爛れたような人間の痕がその場に刻まれる。

「偽人類……。奴らはどこまで、我々を脅かそうというのでしょうか？」
「脅かす、か。そうされないために、あれを開発しているのだ。奴らにとつて、あれは猛毒そのものだからな」

タツヒトは車を検分し、「大丈夫そうです」とエンジンをかけた。

「車そのものに爆弾の類は見られません」

「奴らの襲撃の間も、あまり空かなくなってきた」

サオトメは再び後部座席に座る。タツヒトが運転席についた。

「それだけ連中も焦っているのでしょう。我々ほどではないのかもし

れませんが」

タツヒトの声にサオトメは流れる景色を視界に入れる。樹海を抜け、整備された道路に入ると一面の海岸線を埋め尽くす銀色の地平があった。海があるはずの岩礁を無骨な鉄が覆っている。それはまるで巨大な外殻であった。

「ここいらの海面は全てプラネットシエルの対象だ。だから昔馴染みの海などもう見られはしない」

「漁業関係者が抗議デモを何度も行ってきましたが実際に海が埋め立てられると静かなものです」

彼らとて分かっているのだ。プラネットシエル計画の必要性を。そしてどのような障害があろうともそれを強攻するサオトメという男の事を。

「ワシは随分と年老いた。だからこそ、この計画だけは進めなければならぬ。タツヒト、端末はあるな？」

タツヒトがダツシユボードから端末を取り出し後ろのサオトメへと手渡す。今も研究所内で選抜されている次のパイロットのデータが羅列されていた。

「ラグビーの名門校の出自である体力自慢の男に、陸上自衛隊勤務の男、それにアメリカ軍に入隊経験もある凄腕が集まっています」

「三人とも試せ。シミユレーターでまずは振るいにかける。その後、実際にイーグル号に乗ってもらう」

サオトメの命令にタツヒトは、「そう伝えておきましょう」と応じた。サオトメは銀色に染まった地平線に映える陽射しを見つめながら目を細める。

「タツヒト。ワシは鬼か？ それとも悪魔だろうか」

このような質問、常ならばしない。だが今回のパイロットが結婚を控えていた事、その結婚相手に罵倒された事をサオトメは持ち出した。

「あなたが鬼で悪魔ならば、我々としてその片棒を担いでいます。ならば我々も悪魔でしょう」

タツヒトの理想的な返答にサオトメは呟く。

「ワシは悪魔であろうと鬼であろうと、喜んでこの身を差し出そう」

第一話 「地獄を征く者 2」

会議室に入ると待ちかねていた高官の人々が円卓を囲っていた。サオトメは椅子に座り、「始めよう」と口火を切った。

「第十二次プラネットシエル計画概要を伝えたまえ」

『そもそもプラネットシエル計画とは』

機械音声で今までの会議を纏めたデータが円卓の中心に出現した。ホログラムで惑星が表示される。青い惑星に銀色の装甲が付与されていく様子が克明に刻まれている。

『この惑星そのものを強靱な一つの装甲版で覆って外敵からの侵入を一切許さない一つのシステムとして統合してしまおうという計画です。もちろん、環境保護団体からのバッシングや、惑星保護の観点から好ましくない、という声も見受けられますが既に荒廃の一途を辿る惑星の情勢から鑑みても惑星の人工化はある程度容認されるべき、だというのが十五年前に国連で可決されました。それ以降、惑星全国家、全民族総出でのプラネットシエル計画が推し進められ、現在四割の国家と海がプラネットシエルに賛同しその成果として我々の提供する資材で我々の提言する通りに推進されています』

「しかし、この計画。思っていたよりも遅延が見られる」

そう口にしたのは青白い肌の高官であった。痩せぎすであり神経質そうである。

「本来ならば一年で一割のペースが望ましいのだがその四分の一にも満たないペース。それに比して資財と時間、それに人だけは消費される。これでは国がいくつ傾いてもおかしくはない」

「だがプラネットシエルは必要なのだ。それを及び腰になる事こそ、最もあつてはならないのだと私は思うがね」

赤髪の高官の声に今度は甲高い声が同調した。

「そもそもプラネットシエルは来る段階の第一段階に過ぎないのだから？ 既に動き出している連中もいるようだが」

暗にサオトメの研究を責めるような言い草だったがサオトメは風

と受け流した。

「ここにいる人々ならばプラネットシエルがいかに必要なのかをご承知のほうですが」

「だがね、誰も彼もが君の言う偽人類の脅威を真に受けているわけではないという事だよ」

そのキーワードを受け、自動診断プログラムが走ってデータベースより情報を引き出した。

『偽人類とは、三百年前に第一号が確認されてから何度か人類史で見られる人間の模造体です。俗にレプリカントと呼ばれ、彼らは人間社会に溶け込み、逆襲の機会を窺っていると第六十七回レプリカントレポートにあります』

情報端末の即座の対応にサオトメは満足していた。このプログラムを組んだのもサオトメの功績だ。サオトメ研究所はAI技術を含め、他国を二十年は引き離している。

「レプリカントなど……。一部でまことしやかに囁かれている噂、それこそ都市伝説ではないのかね」

豊かな白髪と顎鬚をたくわえた高官が疑問視する。サオトメはつい先ほどもレプリカントの襲撃に遭ったばかりだと言おうとしたが無駄だろうと取り下げた。未だにレプリカントの死体の標本もないのだ。

それは彼らが死すればすぐに溶け出し蒸発するからである。サンブルさえも残さない連中の手腕にここに揃った高官とサオトメは毎度煮え湯を飲まされている。正体さえも掴めない、その存在を疑問視されても仕方がない存在。

「レプリカントは存在する。だからこそ、プラネットシエルの正当性が容認されているものだ」と我が方では感じていましたが」

サオトメの言葉に高官の一人が鼻を鳴らす。

「間違えるのではない、サオトメ博士。あなたの功績は確かに素晴らしい。あなたがもたらした人類の叡智も。しかしだからと言ってイコールあなたに全て従属する、というわけではないのだ。プラネットシエルは国家の力添えあつての事だと弁えたまえ」

「左様。サオトメ研究所がいかに優れていようと我々は一島国に全権を任せるほど、寛容ではない。我が国家は既に軍備増強を行っている。これはプラネットシエルの恩恵である。『無限の軍隊』の理想プランに沿った行動だが、それも君だけの功績ではないよ」

無限の軍隊計画はプラネットシエルが及ぼす恩恵の一つだ。鋼鉄の外殻はあらゆる敵への牽制であると共に対立国家間でのパワーバランスの調整も担っている。全ての国家に等しい軍事力を配給する事により国家間の睨み合いを解消する。冷戦状態に近い結果ではあるがプラネットシエルが国連で可決された計画だからこそ成せる平和の理想像でもある。

「私をどう思おうが皆様の勝手です。だがこれだけは忘れないでいただきたい。プラネットシエルは来るべき敵に対してのものだという事を。私が人類の事を第一に考えての行動だという事を」

「レプリカントの尖兵、ネフィリムかね。だが今のところ迎撃成功率は九十八パーセント。現行の軍事力だけでも充分ではないのかな？」
キーワードに対応し、アクセスプログラムが起動する。

『ネフィリム、とはレプリカントの使用する大型機動兵器です。現在確認されているタイプは二つ。霧型と実体型です。霧型には攻撃すれば霧散する、という特徴がありそれほど脅威ではありません。実体型も我ら国連の有する機動兵器ベータ七式に遠く及びません』

ベータ七式、の簡易図が呼び出される。全体像としては旧世紀のヘリコプターに近いが大きく異なるのはプロペラのない事と下腹部に備え付けられた円形の反重力機構だ。反重力で飛行ではなく浮遊しており、コックピットの下部には携行火器が装備されていた。

国連で推奨された火器は今のところ全てのネフィリムに対して有効であり軍備増強と言っても大国同士が睨み合いのついでにミサイルを建造しているだけである。

「ベータか。そういうえは島国にもあつたな。ベータ部隊が」

サオトメは机の下でベータ部隊について詳細データを受け取る。外でタツヒトがそれを研究所の電算機にかけて処理しているはずだ。「島国のベータ部隊はお強いと聞いた。我が国にも回してもらいたい

ものだ」

相変わらずの皮肉を受け流しサオトメは本題に入る。

「ネフィリムとレプリカント、嘗めていれば人類は必ず手痛いしっぺ返しを食らう」

「まだ言うかね。ネフィリムの迎撃率は九割で——」

「その確率が、今に反転する事を、私は宣言しよう」

サオトメの強気な発言に高官達が次々と哄笑を上げた。

「面白い、実に面白いな、サオトメ博士。だが、間違えないで欲しいのはあなたの有する権限は所詮、対レプリカントではなく、プラネットシエルの管理権限の一部。島国の国会があまりに腑抜けているから、あなたに全権を委譲する事を決めたのだ」

「対レプリカントはPMCでも軍隊でも対処が可能。それに国家間の軍事競争をあなたは横目に、つまらない趣味に金と資金をかけている、と小耳に挟んだのだが」

誰かがリークしたのだろう。サオトメは、「何の事やら」ととぼけた。

「ゲッター、だったかな。そう資料には書かれている」

「この場にいる誰とて突かれて痛くない横腹を持っていない人間はいないでしょう」

暗にこれ以上の詮索はお勧めしない、と言ったつもりであったが高官達は誤魔化して微笑む。

「ゲッター線、無限エネルギーとそれを自在に操れる機動兵器の実現。いやはや末恐ろしいね。そのような恐ろしい兵器を島国の辺境で何故、あなたは造っている？ それがどれほどまでに重要なのか我々にご高説願いたいものだ」

高官達はサオトメの研究を馬鹿にしている。その時不意に今日発せられた女の罵声が蘇った。鬼、悪魔——。

「あなた方は人類のために、鬼でも悪魔にでもなる覚悟がおありか？」

「何だって？」

「少なくとも私は自分の利益だけのために動いているのではない。自分の利益だけで動く人間は真っ先に消滅するだろう」

サオトメは立ち上がる。その背中に追及の声が飛んだ。

「待ちたまえ！　つまりはゲッターとやらの、君の道楽を認める、という事でいいのかね？　それは我々を敵に回すぞ」

「敵は、人類の敵はレプリカントのみです。そのためのプラネットシエル」

サオトメの抗弁にも高官達は渋い顔をする。

「人類規模の平和を君だけが考えている、というのは驕りだ。ここに揃っている誰もが人類の恒久平和を望んでいる」

「なればこそ、私の研究に口は出さないでもらおう」

サオトメは会議室を立ち去った。口汚く罵る声が聞こえてくる。

「黄色いサルめ！」

タツヒトは情報を処理していたらしく端末に視線を落としていた。サオトメが歩み寄るとその気配に気づいて顔を上げる。

「博士、会議は」

「終わった。研究所に帰るぞ」

あのような会議など所詮は兎戯だ。頭の固い役人を納得させるための方便に過ぎない。

「博士の送ってくださいだったベータ部隊のデータですが」

会議中にベータ部隊の編成データをタツヒトに解析するように頼んでおいたのだ。「見込みのある奴はいたか？」と尋ねる。

「一人だけ。もしかするとチェンジに耐えられるかもしれない男がいきました」

ほう、とサオトメは端末にその男の情報を受け取る。表示されたの

は蓬髪で荒々しい顔立ちの男だった。

ベータ部隊の正式ユニフォームに身を包んでいなければチンピラか、あるいは凶悪犯罪者だと言われても納得出来る。凄味のある眼光をシャッターに向けた男のデータに視線をやる。体力、持続力、集中力が数値化され、最後に暗号化された適合値が表示される。

「適合率六十パーセント。今までのパイロットは何割越えが平均だった？」

「二割ですね」

その三倍近く。それだけでも魅力的だったがタツヒトはさらに納得出来る材料を見つけてくれたらしい。

「その男、全ての数値よりも実地試験、つまり実戦において相当な戦果を上げています。噂程度ですがベータ七式の空中変形が可能な唯一のパイロットだという話もあります」

その言葉がこの男を地獄に落とすのに相応しいのだとサオトメに判断させた。サオトメは先刻タツヒトと研究所が弾き出した適合者のデータを全て排除する。

「前の三人の可能性は全て棄却せよ。この男こそ、イーグル号のパイロットに仕立て上げるのに相応しい」

「了解しました。ではどう致しますか？ ベータ部隊に直通で特命でも降ろしますか？」

「いや、いつものやり方だ。この男のスペックが知りたい。荒療治の方向で行け」

サオトメは端末に表示された男の名前を読み取る。その名は――。

第一話 「地獄を征く者 3」

『リヨウマ。ナガレ・リヨウマ!』

通信網に割り込んできた声にリヨウマは言い返す。

「何だよ、うるせえな」

『何だじゃない! 先行し過ぎだ! 相手が霧型とはいえ油断すれば死ぬぞ』

リヨウマはヘッドアップディスプレイに表示された相手との距離を見据える。霧型と表記されたネフィリムは雲と雲の合間に隠れていた。雲と大きく違うのはその身体に潜む赤い球体だ。それをコアと呼称している。赤い球体が蠢きリヨウマの駆るベータ七式を睨み据えた。

「来い、来い、来いよ」

リヨウマの挑発が聞こえたかのように雷鳴が走りベータ七式の機体に反射する。リヨウマはアームレイカーを引いてベータを稼動させた。横殴り気味の機動に機体が軋みを上げる。暴風が反重力装置に危険値を示させた。

『馬鹿! 反重力装置を横に逸らす奴がいるか!』

喧しい声にリヨウマは左腕を引いた。

「分かってん、よっ!」

ベータの機体が正常な位置に戻り霧型ネフィリムを照準する。ネフィリムは赤いコアを逃がそうとした。雷が発生し刃のようにベータを襲う。外観だけならば旧時代のヘリコプターのベータだがその機動力は昔の高速戦闘機並みだ。ぐんと重力が腹腔にかかりパイロットスーツの中で血流が一気に逆巻く。一瞬のブラックアウトだがリヨウマは奥歯を噛んで持ち直した。すぐさまベータの下部に備え付けられた銃口を向ける。

「食らいやがれ!」

火器管制システムに切り替わり照準の中央に据えたコアを銃弾が叩いた。だがコアに亀裂が入っただけで完全な崩壊には至っていない

い。

『全機、包囲陣形！ リヨウマはそのまま上に抜ける』

「そんなしやらくせえ事してられつかよ！」

ベータの機体が跳ね上がり、ネフィリムの上を取った。するとベータの黒い機体の上部に伸びているサブアームが下部へと仕舞い込まれる。代わりにメインアームが背部から伸長し、コックピット下部に装備された重火器をメインアームの指先が捉えた。

コックピット内部が変化し、先ほどまでの前傾姿勢から足元が引き出されて直立姿勢に近いものとなる。ベータ七式そのものが人型へと変貌していた。一瞬の変形に接合部が火花を上げる。ベータにかかる負荷が計算され「危険域」の赤い信号が放たれたがそれを無視してリヨウマは推進剤を焚いた。

ベータの背面にある反重力装置の補助として使用されている推進剤の推力によってネフィリムへと肉迫する。ネフィリムはベータの接近に雷撃を見舞おうとする。だがリヨウマの操るベータはそれこそ人間のように華麗に回避しコアへとサブアームで着地を果たした。メインアームで掴んだ重火器のセーフティを外しリヨウマはコアへと銃口を突きつける。

「これで終いだぜ！ ネフィリム野郎！」

コアへと間断なく攻撃が仕掛けられ一気に膨張した。赤く広がった視界の中、膨れ上がったコアが拡散する。直後、ネフィリムの形状が崩壊し霧のようだったその姿が緩やかに固形化していく。

『ネフィリムの死だ！ 各機！ 放散爆発に備えろ』

放散爆発。ネフィリムは死に際に巨大なエネルギーを放出して爆発する。それに巻き込まれればベータの機体とて無事では済まない。リヨウマはベータにコアから離れるように促そうとする。だがそこで弊害が生じた。見やるとコアの一部が溶解してサブアームへと流れ込んでいたのである。このままでは放散爆発に巻き込まれる。

『リヨウマ！ 遅れているぞ』

「分かってんよ、んな事は！ 近接用ナイフ、出てくれよ」

近接用のナイフをメインアームの手首から出現させた。重火器で

サブアームを撃って継ぎ目を弱め、そこにナイフを突き込んで一気に剥離させた。支えを失ったベータの機体が宙に浮く。直後、赤い放散爆発が視界を埋め尽くした。ベータが爆風に煽られ反重力装置に異常を来たす。反重力の能力を失ったベータは落下するしかない。リヨウマは舌打ちを漏らして足元にある緊急射出レバーを引いた。

瞬間、コックピットが爆砕ボルトによって弾き出されリヨウマの身体はコックピット共々宙に投げ出される。リヨウマの駆っていたベータはそのまま落下し銀色のプラネットシエルの外殻に触れて爆発した。恐らくプラネットシエルの防衛機能が働いて敵だと誤認されたのだろう。一秒でも遅れていれば火の海の中だった。グライダー形態になった脱出機構が風で煽られる。近くまで他のベータが迎えに来ていた。リヨウマは、「よう」と声を投げる。

『よう、ではない。ナガレ・リヨウマ。手痛い報告書と罰則が待っていると見え』

「堅い事言いなさんな。幸いにして生きている」

『……本部についてからじつくりと聞かせてもらおうぞ』

ベータのサブアームが伸びて自分を回収する。リヨウマは吹き荒ぶ風の中で、「お優しいねえ」と呟いた。

「ナガレ・リヨウマ。今期になってから何機、ベータ七式を損壊したと思っっている?」

上官に責め立てられてリヨウマはパイロットスーツのまま応じる。
「確か、五機目でしたかなあ」

「訂正する。八機目だ」

隣に侍った真面目腐った男の声にリヨウマは眉間に皺を寄せた。執務机に座った上官は、「困ったものだな」と口にする。

「ネフイリムを倒せるのはよし。だがね、誰が空中変形などというベータにとって最も負荷のかかる技をやれと言った？ 我々はベータ部隊であってトリッキーな行動に出るサーカスじゃないんだ」

「サーカスならばおれの技術は相当なもんでしょ」
「茶化すんじゃない」

ぎろりと隣の男が睨む。彼もパイロットだ。だが階級章は自分の上官である事を示している。隊長の階級章が彼の胸に輝く一方、自分はパイロットだった。

「ナガレ。君はこのベータ部隊において、いや恐らく世界を探しても空中変形してネフイリムに接近戦を挑むなどという命知らずはいないだろう。それは高く評価しているつもりだ」
「どうも」

「だがね、命令を聞けない隊員はいらない。それも分かるな？」

リヨウマは不服そうに返す。

「お言葉ですが、おれがいなけりやネフイリム一体倒すのにどれだけの弾薬と、時間が必要かお分かりですか？ その時間を省いているんですよ」

「だがその結果がベータ七式という最新鋭機を一機損壊するというものだ。それを容認していればいくら予算があっても足りはしない」

その言葉にはリヨウマも言い返せない。上官は嘆かわしいとでも言うように顔を覆った。

「……タツマ隊長。君から見て、彼はどうだね？」

タツマ、と呼ばれた男は拳手敬礼をしてから報告する。

「ナガレ隊員の技術は相当なものです。ですがベータ七式に空中変形は構造上、相当な過負荷を与えるものと推測されます。さらに言えば武器の無断使用、及び命令違反。通常ならば隊員証明書の剥奪さえもあり得ると」

「おいおい！ そりゃあねえぜー！」

張り上げた声にタツマが睨みつける。リヨウマは、「そりゃあ、ないと思いますよ」と言い直した。

「ベータ七式はまだテスト機なんだ。それに関してはナガレ隊員も理解しているな」

「テスト機だからこそ、色々試すんでしよう？ どうして分からないんですかね」

「最新鋭のテスト機を掴まされて、それでいい気になっている子供ではなからうに。いいか？ 我々の目的は確かにレプリカントとネフィリムの根絶だ。だがそれは予算を食い潰し、最新鋭機を何度も何度も壊してしかも反省のはの字もなく、無謀な空中変形と命令違反をしてもいいという免罪符ではないのだ」

上官が鶏冠に來たとでも言うように小言を並べ立てる。よくそこまで思い浮かぶものだ。リヨウマは胸中で感心すらした。

「ベータ七式は借り受けている機体に過ぎない。我が国が開発しているのならばまだしも、開発資金そのものは未だに大国のものであり、それを使っている我々は壊さないようにひたすら善処せねばならない。だというのに何という体たらくだ」

「でもネフィリム迎撃という任務はきちんとなしているじゃないですか」

「迎撃は当たり前なのだ。むしろ迎撃成功して褒められるとも思うな。ひたすら備品を壊すな、ベータをこれ以上損壊させるな、変形したければ別の機体でも探して来い！」

上官の喚きにリヨウマは、「善処しますよ」と応じた。今にもやかんのように怒りを噴き出しかねない上官にタツマがフォローする。

「指揮官、ナガレは一応、我が部隊のエースです。その辺りを加味してやってください」

「余計な事は言わないでいいんだよ」

リヨウマは部屋から出た。タツマが上官に挨拶をしてから部屋を後にする。リヨウマにすぐに追いつき、「お前」と声にする。

「そんなんじゃないどこにも居場所なんてないぞ」

「なくたってどうにかならあ。おれは戦うしか能のないさね」

「……まったく。そうなってしまえばお前はチンピラかあるいかヤクザの子飼いだ。その程度の未来は容易に見える」

「おれはヤクザの使役される側なんて回らねえよ」

「お前が使う側に回るってのか。案外、それもあるかもしれないな」

タツマの声音にリヨウマは口元を緩める。

「しかし、そうまでして庇ってくれる意味がねえってのか、庇ってくれたってポイント稼ぎにならないら」

「そんな理由で庇っているんじゃない。お前はベータ部隊のエースだよ。それは間違いないんだ」

「お優しい隊長さんだこと」

タツマは額に手をやって、「どうしていつもそうなんだ」と嘆いた。

「口を開けば憎まれ口ばかり。お前、よくベータ部隊に入れたな」

「研修機で変形してやったら面接官全員があんぐり口開けてやがったぜ。ありや傑作だった」

今でも思い出すと笑えてくる。タツマはやれやれと首を振った。

「どこで空中変形なんてリスクの高い操縦方法をものにしたんだ？」

大国のベータ部隊でも空中変形なんて誰も教えないのに」

「ベータは人型と空中機動型を行き来できるもんだろ？　だって言うのに誰も空中変形をせずに変形機構を殺しているのがもったいないと思わないのかね。おれだったらもったいないの精神で使うね」

「そんな理由だけで空中変形が可能なら誰だってやっている。問題な

のは変形時のモーメントと反重力装置が発動しなかった時のリスク。それに推進装置だつてももしかしたらついてこないかもしれない。ど

こか一つでもガタが来れば変形後指一本だつて動かせないんだぞ。それだけベータという機体がデリケートなんだ」

「女を抱くみたいに繊細に扱えって？　そりや無理な話だぜ」

リヨウマの口調にタツマはいい加減言葉を選ぶのをやめたようだ。ため息を漏らし、「言い合いも疲れる」とこぼした。

「何だよ、音を上げるのか隊長さんよ」

「まさか」

タツマはリヨウマへとキーを投げる。単車の鍵だった。

「いつものおでん屋で続きの討論と行こうじゃないか」
タツマは歩み進んでいく。リョウマは鍵を握り締め、「上等！」と言
い放った。

第一話 「地獄を征く者 4」

馴染みの店は今日も混んでいなくって二人からしてみればちょうどよかった。店主は顔見知りで二人の事を幼少期から知っている。鼻の大きい店主はビールをジョッキに注いで、「大変だねえ」と口火を切った。

「何がだよ。親父、牛すじな」

煮込んでいる具を取り分けて店主が口にする。

「まさかタツちゃんもリョウちゃんもベータ部隊なんて入るとは思わなかったよ。おじさん、いつも言っているだろう。二人はそうでなくともいつも一緒だったのに、いまや隊長と平隊員だ。どこで差が開いたのかね、って」

「こいつは大学出た。おれは大学出てねえ」

それだけの違いとも思えないのだが店主は誤魔化すように微笑んだ。

「防衛大学を出た事が必ずしもいいとは限りませんよ。現にリョウマはうちのエースパイロット。僕はいつまで経っても隊長というレベルだけはいいだけの臆病者だ」

「おい、タツマ。てめえの泣き言聞きに来たわけじゃないんだぜ？

おれを論破してみろよ」

「リョウマ。僕はお前を論破なんて出来ないよ。空中変形をやっているってだけで普通に羨望の対象だ。他の隊員達は僕がお前に入れ込んでいると思っている。だが現にはただの幼馴染の情だ」

タツマとは小さい頃から集合団地で育った幼馴染である。だから顔立ちも似ているが自分のほうが何度も警察に呼び止められた。何が違うのだろうか。リョウマは、「そうかい」と酒を口に含む。

「だがな、おれは別にエースになりたくってなっているわけじゃねえ。他の奴らがヘナチヨコ過ぎんだよ」

空中変形の一つも試す前から諦めている。それがリョウマには理解出来ない。ネフィリムやレプリカントを相手取るのならば一つで

も多い戦法が有利になるはずだ。

「お前は意外と真面目だからな。そんななりでも一番にベータの隊員の職務を全うしている」

店主も一緒になって笑う。リヨウマだけは不貞腐れたように悪態をついた。

「何だよ。おれは馬鹿正直だったか？」

「存外にリヨウちゃんはそういうところあるねえ。だってさ、小学校の時」

「ああ、思い出した。台風の時でしょう？」

思い出話に華を咲かせる二人を他所にリヨウマは牛すじを頬張った。

「十年に一回の台風でさ、絶対の外に出るなって言われているのに、リヨウちゃん、いなくなって。で、見つかったのは学校だったって話。今思い出しても笑えてくる」

店主の声にタツマも同調する。

「そうそう。何で学校なんて行ったんだ、って全員が詰め寄るとこいつは……」

くつくつと笑うタツマにリヨウマは言いやる。

「悪い酒だな。特に昔話を誘発する奴はいけねえ」

「だって登校日でしょう？　って言ったんだよ」

ゲラゲラ笑う二人にリヨウマは白けたように立ち上がった。

「おい、どこ行くんだよ、リヨウマ。これからじゃないか」

「いいのか？　未来の大隊長がこんなところで油売っていて。おれみたいな落第生はともかくな」

「お前のお守りが僕の役目みたいなものだよ。なに、悪いようにはしないさ」

「どうだか。おれは誰かにお守りされるようなガキじゃねえつての」

リヨウマは屋台から離れる。「シオンベンはサツに見られないところでしょうよー」と店主までも自分を馬鹿にする始末だ。リヨウマは鞆を肩に担いで、「嫌になるぜ」と呟いた。

だがベータ部隊に不満はない。上官の小言や同じ隊員同士の小競

り合いはあるものの概ね自分に合った職業だ。戦う事が自分の性には合っている。どうしてだか昔から腕っ節だけは自信があった。それを活かせる職場だと聞いてベータ部隊を志願したのだがどうもこいつも腑抜け揃い。ベータ七式を含むベータシリーズを誰一人として百パーセントの性能を引き出そうとしない。

空中機動形態からの人型形態の変形機構。

それを知った時リヨウマの魂の奥底が震えた。これで一人でも多くの人命が助けられる。ネフィリムに立ち向かうための矛として機能出来るはずだと。だが実際には人型形態での運用は思っていたよりも少なく、災害派遣に使われる程度だった。サブアームを脚部として用い、常時では飛行補助として用いられるメインアームを引き出して変形する際、リヨウマの中で何かがいつも閃く。それが何なのか、自分にはまだ分からなかった。一体何が、自分をこの場に留まらせているのか。それとも何が、自分を燻らせているのか。

やはり戻ろう、と踵を返しかけた、その時である。

「ナガレ・リヨウマだな」

その声に振り返る。酔っ払いだろうか、足元がおぼつかない男が立っていた。リヨウマは、「んだよ」と因縁をつけてきた相手を見据える。酔っ払いは、「お前を待っていた」と声にする。どうやら相当酔っている様子だ。

「おいオッサン。あんまし飲み過ぎんな。今サツのところまで送ってやるから」

肩を貸そうとしたその瞬間、リヨウマは膨れ上がった殺気の渦に思わず飛び退いていた。酔っ払いが目にも留まらぬ速度で繰り出したのは拳だ。その拳は頬を掠めた。それだけなのに刃で切られたように血が出ていた。

「今の、酔拳か……」

酔っ払いがファイティングポーズを取る。ただの酔っ払いではない。その構えは熟練者を思わせた。

リヨウマも対応して構える。怪我をさせてはならない。ベータ部隊の掟だ。一般人と喧嘩で更迭など目も当てられない。だが酔っ払

いの動きは思いのほか鋭かった。まずは蹴りの応酬。リヨウマは蹴りをさばきながらどうやって懐に潜り込むかを考えていた。鳩尾に一撃、それで勝負はつくはずだ。そう思っていたリヨウマの隙をつくように背後に気配を感じ取る。咄嗟に前に転がった。酔拳の蹴りが腹部に食い込む。だがそれよりも恐ろしいのは背後に立った相手の一閃だった。まさか、とリヨウマは宵闇に浮かび上がった相手の得物を目にする。

「刀だと……」

刀を持った相手は狂気に滲んだ瞳で刃を舐めた。明らかにカタギではない。酔拳の男も、リヨウマを狙っている。刀を手にした男はリヨウマへと一気に距離を詰めた。切っ先が額を割ろうとする。

リヨウマは身体をひねって蹴りを放つ。切っ先が眼前を行き過ぎた。刀を持ったほうの男が吹っ飛ぶ。だが背後には酔拳の男。リヨウマは蹴りの姿勢をそのままに身体を沈ませた。男の拳が空を切る。リヨウマは股を割ったまま腕の力だけで脚部を回し、相手の足元を狙った蹴りを放つ。姿勢を崩した男へとリヨウマは立ち上がって顔を思い切り蹴りつけた。酔っ払いも裏通りを転がる。だが刀を持った相手も健在であった。リヨウマは指を鳴らして言い放つ。

「どこの手の者か知らねえが、おれに喧嘩売るってのは賢くねえ選択だな。ベータ部隊だからって無抵抗にやられるって思ったのか」

刀の相手はリヨウマへと飛びかかる。後ろで酔拳の男がやおら立ち上がった。リヨウマは振り落とされる刀から逃げずなんと手刀を形作り白刃取りを決めた。刀を持った相手が狼狽する。それを他所に酔拳の男が迫る。

リヨウマは思い切り刀を振るった。背後を取ろうとしていた酔拳の男の額へと切っ先が突き刺さる。刀を持った相手が瞠目した瞬間にリヨウマは回し蹴りを叩き込んだ。刀だけを残して相手が壁に頭を突っ伏す。血飛沫を吹かしながら酔拳の男が仰向けに倒れた。荒々しい息をつきながらリヨウマは二人を見やる。

「いつら、何だっけ言うんだ？」

「やるな」

その声にリヨウマは振り返る。表通りの光を背にして老人が佇んでいた。その隣には長身の男が侍っている。

「何者だ！ てめえら！」

「裏社会ではなかなか名の通った暗殺者二人を相手に大立ち回りに見事だ」

老人が乾いた拍手を送る。リヨウマはまさか、と予感した。

「てめえら、おれをはめようとしてこいつら掴ませたのか？」

「はめる？ ベータ部隊にいられなくするという意味でか？ そのような必要性を感じないが、どちらにせよお前はワシらと共に来なければならぬ」

老人の言い草にリヨウマは反骨精神を剥き出しにする。

「ぎげんな！ こちとら死にかけてたんだぞ！」

「構わん。この程度で死ぬのならば、これから先に待つ地獄を生き延びられるはずもないからだ」

老人の声音はどこまでも冷徹だ。自分と自分の予測の範囲内以外は全て切り捨てる、とでも言うように。

「地獄だと……。じいさん、あんまりおイタが過ぎると怪我するぜ」

暗殺者二人を差し向けた、というだけでもふざけた話だ。だが当の老人は改める様子もない。

「おイタ、だと？ そうだな。お前の實力をはかるのに、暗殺者二人では不向きだったかもしれん」

老人が指を鳴らす。すると今しがた死んだはずの暗殺者二人がよろりと立ち上がった。リヨウマは戦慄する。確かに刀が頭蓋を貫いたはずの酔拳の男は目の奥を黄色く濁らせて蘇った。刀の使い手も同じくである。黄色い眼窩が夜の闇で妙に光っていた。

「こいつら、何だって言うんだ？」

「レプリカント。ベータ部隊ならば聞いた事くらいはあろう」

老人の言葉にリヨウマは聞き返す。

「レプリカントだと？ 馬鹿言え。あいつらがそんな簡単に出てくるわけが——」

そこから先の言葉を遮ったのは蘇った男の振るった刀だった。

リヨウマは咄嗟に飛び退る。酔拳の男は既に構えが解け、ほとんど隙だらけの状態にも関わらずリヨウマは踏み込めないと感じていた。先ほどのまでの「人間」の使い手ではない。これはまるで隙のない「化け物」である。

「どうなってやがる……」

リヨウマの思案を他所に刀の使い手が牙を剥いて襲い掛かってくる。その眼差しに理性はない。獣同然の相手にリヨウマの戦闘本能は全力の拳を見舞っていた。放つてから、「やべっ」と声にする。今まで殺されそうにはなってきたが本気は出していなかった。だが今の拳は自分の本気である。そのせいか刀の使い手は命中した部分の骨が陥没していた。一撃で顎が砕け散り血潮を噴き出す。

「結構。やはりワシの眼に狂いはなかった」

「狂ってんのはためえらのほうだろうが。何のつもりだつてんだ」

刀の使い手も、酔拳の男も諦めた様子はない。それどころかより凶悪な眼差しとなってリヨウマを睨んだ。

「レプリカントの細胞を埋め込んだ暗殺者二人。さあどう立ち回る？

ナガレ・リヨウマ！」

老人の狂喜めいた声にリヨウマは舌打ちをしてみず刀の使い手へと飛び込んだ。得物を持っていない相手を無力化するほうが早いと踏んだのだ。だがその目論見は容易く崩れ落ちる。

接近した瞬間、刀の使い手の背中が蠢いて服を突き破った。肩甲骨の辺りから飛び出したのは二本の腕だ。計四本の腕にリヨウマは狼狽する。だが拳を振るう、という当初の目的を忘れなかった。刀の使い手の鳩尾へと一撃。それで勝負はつくはずだった。だが相手は四本の腕を持って人間ではあり得ない軌道でリヨウマを立体的に攻めようとする。

瞬間、背後で獣の叫びが生じた。刀を握り締めた酔拳の男がリヨウマへと突っ込んできたのだ。その動きは無茶苦茶でありながらも先ほどまでよりも洗練されているように映る。獣でありながらどこか理性的なのだ。

「こいつら、ただ闇雲におれを襲っているわけじゃねえのか」

四本の腕をくねらせて刀の使い手がリヨウマへと噛み付こうとする。リヨウマは回し蹴りを食らわせたものの相手は首の関節を伸ばしてその一撃の威力を霧散させた。最早刀の使い手は人間の形状をしていない。人が昆虫のように変化すればこのような形状になるだろう。

「博士。あと三十秒です」

言いつけた長身の男の声にリヨウマはハツとする。そうだ。レプリカントであるならば、何故連中は老人を襲わず自分だけを襲う。そこにこそカラクリがあるのだとリヨウマは悟った。

「そこだな！ てめえ！」

老人へと駆け込む。長身の男が前に出て拳銃を突き出した。それでもリヨウマは臆す事はない。銃口がリヨウマの額を照準するもリヨウマは引き金が引かれるよりも素早く懐へと潜り込んだ。拳で拳銃をぶれさせる。遅れて引き金が引かれ、銃弾が空を穿った。

その目に映ったのは老人が握っている機械だ。それでレプリカント二体が操られているのである。リヨウマは手刀を形作り、機械を割った。老人の手の中で機械がショートする。当然、老人は戸惑うかに思われた。だがその予想に反して老人は嗤っていた。

「素晴らしいな。ナガレ・リヨウマ」

「……何なんだ、てめえ」

コントロールを失ったレプリカント二体が頭部を抱えて呻き声を上げる。それを聞きつけたのか今さら警察が飛び込んできた。

「何をしている？」

まずい、とリヨウマが感じた瞬間、地を蹴って弾き飛んだレプリカントが警察官の首筋へと噛み付いた。刀を持ったレプリカントは警察を袈裟切りにする。

「イカれてやがる……」

「だがそれこそが人類の敵、偽人類の脅威だ。お前は最前線でそれを見てきたはずだが？ ナガレ・リヨウマよ」

「気安くおれの名前を呼ぶんじゃねえ！」

リヨウマの拳が老人の顔に食い込もうとする。だがその前に長身

の男が動きリヨウマの首筋へと注射器を突きつけた。老人の眼前で拳が止まるのとリヨウマの意識が混濁を始めたのは同時だった。

「何、しやがった……」

「少しばかり眠ってもらおうと思っただけ。なに、お前を害そうとしたわけではない。お前のスペックが知りたかった、それだけだ」

老人の声も形状も、全て意識の闇の底へと落ちていった。

第一話 「地獄を征く者 5」

台風之夜、リヨウマはどうしてだか学校に行かなくてはならないと感じていた。それは決められた事であるからだ。だから破る事など考えもつかなかった。

だが十年に一度の巨大台風は河川敷の堤防を打ち崩し鉄砲水が通路を歩いていたリヨウマに降りかかった。リヨウマ自身、これが死かと感じていた。ここで終わるのもまた決められた事なのかもしれない。だが何かがある。鉄砲水を防いだ。空から降りてきた巨大な影は鉄砲水を背中で受け止める。リヨウマはその姿を目にした。

白光が走る。雷鳴轟く中、浮かび上がったのは黒い鬼の姿だった。黒い表皮から赤い結晶を生やした鬼がリヨウマを見下ろしている。その眼にリヨウマは生まれて初めて本物の「恐怖」を味わった。

逃げなければ、と道も順序も無茶苦茶に走った事を今でも覚えていた。鮮明な恐怖の記憶がリヨウマの意識を侵食する。あれは何だったのか。そもそも自分は本当に鬼と行き会ったのか、全ては判然としない。気づけば学校に辿り着いており、いつの間にか大人達に保護されていた。鬼に会ったなど言えるはずもない。リヨウマはただ自分しか感じられなかった恐怖に震えるばかりだった。

震えた指先が夢と同期してリヨウマは目を覚ます。

瞼を上げて周囲を見やると鉄格子があり自分はベッドに寝かされていた。これも夢の続きか、と疑ったが両手両足が拘束されている事

で夢でも何でもない現実なのだという実感が伴ってきた。

「これは……、どうなっている?」

リヨウマの声に、『説明をお望みですか?』と澄んだ女性の声が耳朶を打った。この牢屋の中に自分以外の誰かがいるのか、と目を向ける。だが女性などいるはずもなかった。

「幻聴か」

『いいえ。ナガレ・リヨウマ。あなたは私へとアクセスしているのです』

その声は幻聴でも何でもなくリヨウマの鼓膜を震わせる。リヨウマは身をよじって、「誰だ」と呼びかける。

「おれを拘束して、何のつもりだ?」

『その疑問に関する説明をお求めですか?』

妙に落ち着き払った声にリヨウマは苛立った。

「てめえも、あのジジイの仲間か……」

噛み付きかねない気迫に声の主は、『仲間、というのは適切ではありません』と応じる。

『私は被造物です。だから聞かれた事を答えるのみ』

リヨウマは身体をひねったがどう足掻いても相手の顔も正体も分からなかった。

「……てめえ、何者だ」

『ガイドシステム3365号。ミチル、と便宜上と呼ばれております。私はサオトメ研究所の頭脳として機能しているのです』

「サオトメ研究所?」

リヨウマはその響きに聞き覚えがあった。真偽を確かめるためミチルとやらに尋ねる。

「そいつはプラネットシエルを推し進めているこの国の研究機関じゃねえのか?」

『ご存知でしたか』

「知らない奴はいねえと思うけれど」

惑星そのものを覆ってしまう大規模計画プラネットシエル。それを島国で推し進めている第一人者こそがサオトメ博士、だと聞いた事

はある。しかしそのサオトメ博士は公の場には決して姿を現さない
変人とも聞いた。

『そのサオトメ博士が、あなたが目を覚ましたのならば三十秒以内に
呼べとのお達しです』

その言葉にはリヨウマも絶句した。まさかあの老人がサオトメ博
士だというのか。

「サオトメ博士ってのは、あのジジイの事なのか？」

『あのジジイ、というのがどの人物を示すのか私では見当がつかか
ねますが、恐らくあなたはサオトメ博士を目にしているはずです』

『どういうこった？ いつからサオトメ博士はプラネットシエル計画
じゃなく、化け物の量産計画を進めるようになったんだ？』

自分を襲ったレプリカント二体。あの後どうなったのか知る必要
があった。だがミチルは何て事のないように告げる。

『レプリカントですね。あれは僅かに採取出来た細胞を培養し、暗殺
者二人に埋め込んだ擬似的なレプリカントです。だから純正のレプ
リカントではありません』

何とこの声の主はレプリカントを育成していた事を認めたのであ
る。リヨウマは口角を吊り上げる。

「いいのかよ？ 公的機関が外敵を育てていたなんて知れたら？」

「構わんさ。どうせ、ワシもお前も、地獄へと行くのだからな」

その声にリヨウマは身体をひねる。鉄格子の向こう側にいたのは
間違いなくあの老人であった。リヨウマは食いかかりかねない勢い
でベッドを転がる。ベッドから落ちてまでも老人の首根っこを押さ
えつけたかった。

「威勢のいい事だ。鎮静剤が打たれたとは思えんな」

老人の値踏みする声音にリヨウマは叫び返す。

「てめえ……ベータ部隊の人間を拉致するたあ、いい度胸じゃねえか
！」

「拉致？ 人聞きが悪いな。ワシは君を歓迎しておるのだよ。ナガ
レ・リヨウマ君」

「歓迎？ 歓迎にしちゃ、たちが悪いぜ。拘束服で縛り上げて歓迎な

んてムードは特にな」

リヨウマは老人を睨みつける。しかし老人の眼光も負けていなかった。何を聞かれようとも、いや何を言われようともこの老人は決して屈しない。その光がありありと分かる。

「レプリカントの培養……」

口火を切るが老人は鼻を鳴らす。

「ワシをゆするか？」

「いや、多分無理だな。てめえはここで自分の意地を曲げないタイブだ。それが目を見りや分かるさ」

「どうやらただの野獣ではないらしい」

ふっふつと笑ってみせる老人にリヨウマは問いかけた。

「あんた、サオトメ博士なのか？」

「ミチルが聞かせたか。そうだとも。ワシがサオトメだ」

「分からねえな。何でプラネットシエル建造を推し進める科学の第一人者が、おれみたいなたつ端を拉致する必要があるのか」

サオトメが勅命を出せばどの機関とて喜んで人材を差し出すだろう。サオトメに牛耳られているといってもこの国は差し支えない。だがサオトメはそのような権力を嫌っている様子だった。

「ワシが権力や財力のために、プラネットシエルを推し進めていると？」

「違うってのか」

サオトメは眉間に皺を寄せてから、「些事だ」と言い捨てた。

「何だって？」

「些事だと言った。権力も財力も、言ってしまうえば人望さえも、ワシには必要ない。プラネットシエルは必要悪なのだ。だからいくら反抗の声が上がろうとワシは気にも留めん」

リヨウマは伊達や酔狂の言葉でないのはその声音から思い知った。この老人は全てを投げ打ってでも何かに賭けようとしている。あるいは諦めの境地、あるいは一縷の望みを託す人間の輝きそのもの。どちらとも取れるサオトメの言葉にリヨウマは事がそう容易くないのを感じる。

「……どうやらベータ部隊から金をゆするだとか、そういう小さい目的じゃねえのは分かった」

「ナガレ・リヨウマ。お前は、レプリカントをどう思う?」

唐突な質問にリヨウマは面食らった。今まで教えられてきた通りの事を口にする。

「どうって、人類の敵だろう。そいつらからの防衛のためにプラネットシエルはあるって……」

「その通りだ。だが、実際に戦ったお前ならば分かるな? プラネットシエルがいかに無意味で、奴らは狡猾に隠られるのだと言う事を」

サオトメの言葉に息を呑む。確かに殺すまでレプリカントとは分からなかった。もし人類の中に連中が混じっているのだとすればそれは恐るべき脅威だ。

「でもありや、あんたが用意したんだろう?」

「あれは、な。だが連中が既に我々人類に潜り込み虎視眈々とその反逆の芽を育てている事をワシは知っている。いや、ワシだけではない。各国の諜報機関はもうレプリカントによる穏やかな侵略が行われている事を証明する資料がいくつもあるのだ」

目を見開く。そのような事、今まで聞いた事もない。

「でまかせだ! そんなのあって堪るか! だったら、それこそ中世の魔女狩りの再現だぜ。隣人がレプリカントでない証明が出来ないならな」

「その通り。それこそ地獄よ。だからこそ、我々はレプリカントの侵略を止めねばならない。手遅れになる前に完成させなければならぬ計画があるのだ」

サオトメの声は切迫している。今まさにレプリカントが攻めてくるような言い草だった。それはさすがに大げさだろうとリヨウマは口にする。

「……おい、被害妄想か? 確かにレプリカントはいるのかもしれないしネフィリムだって出現している。でも今すぐの脅威じゃねえはずだ」

「いいや！ 脅威なのだ。今すぐにも連中を駆逐せねば人類に未来はない！」

サオトメの言葉にリヨウマは気圧されていた。この老人は妄想に取り付かれているか、あるいは執念の塊であった。こちらの言葉を聞き入れる様子はない。

「……あんた異常だ。どこかの病院で診療を受けな」

「そうしたいのは山々だがな。その時間すらも惜しいのだ。タツヒト」

その名を呼ぶと長身の男が牢屋の外に立った。自分に注射器を打ち込んだ男だ。覚えず身が強張る。

「てめえ……」

「恐れるな。拘束具を外してやろう」

タツヒトは牢屋に入るとリヨウマの拘束服を一つずつ外す。リヨウマは口元を緩めた。

「いいのか？ 拘束具を外した途端、てめえの喉笛に噛み付くかもしれないんだぜ？」

「構わない。博士が選んだのだ。むしろそれくらいの野生があったほうが、あれの適合者になり得る」

タツヒトの言葉をリヨウマは静かな心地で聞いていた。あれ、とは何なのか。両手の手錠以外は全て拘束具が外されリヨウマは自由の身となった。

「聞かしてもらおうか。あんたら何のつもりでおれをこんな目にした？」

「こんな目？ まさか自分の境遇がかわいそうだとでも思っているのではなからうな？」

サオトメの声にリヨウマは言い返す。

「少なくとも理不尽だとは思っている」

「理不尽か。だが真の理不尽とはどのようなものか、これから貴様は嫌でも思い知るのだ」

サオトメの言葉にリヨウマは問い詰めようとしたがタツヒトが制する。

「順を追って説明する」

そう言われてしまえばこちらは黙るしかない。サオトメは下駄を鳴らしながら研究所の廊下を歩く。タツヒトが腕時計型の端末に呼びかけた。

「ミチル。彼にガイドを」

『了解しました。ナガレ・リョウマさん。あなたが知りたいワードを入力してください』

腕時計型の端末が点滅し音声を響かせる。リョウマは目を瞠る。

「この声……、オペレーターか何かじゃねえのか？」

「彼女はミチル。文字通りサオトメ研究所の頭脳であるAIだ」

「AI……、だがこんなに高度なものがあるなんて知らねえぞ」

『サオトメ研究所のみで使われているAIですので、一般的には私レベルのAIは存在しないでしょう』

ほとんど人間と会話しているのに等しい。リョウマは改めてこの場所がサオトメ研究所というパンドラの箱なのだと思い知る。

「ここが、最先端の研究所か……」

『生物学、精密機械、先端科学、全ての粋を凝らしたものがここ、サオトメ研究所にはございます』

「レプリカントも、か？」

皮肉を込めて言っただが返ってきた声は意外に落ち込んでいた。

『……レプリカントの細胞は採取出来たサンプルが極めて少なく、実際あの二人に埋め込むのが精一杯。まだ分からない部分のほうが多いのです』

ならば何故、その貴重なサンプルを使ってまで自分を試そうとしたのか。余計に疑念は募る。

「おい、ジジイ。何のつもりでおれを試した？ 何が目的なんだ」

「レプリカントに素手で勝つ。それが出来るような人間は世界広しといえども、ナガレ・リョウマ、貴様の他あるまい。身体データを見させてもらったが」

サオトメの手には自分の身体データがあった。それはベータ部隊

で一年に一回は義務付けられているものだ。

「これらのデータ、貴様、手を抜いていたな？」

思わぬところで心臓を鷲掴みにされた気分陥る。リョウマは、「何の事だか」と平静を装ったがサオトメは騙されなかった。

「とぼけおって。レプリカントに勝つにはこのデータでは不可能なのだ。だがお前は二体のレプリカント相手に大立ち回りを決め、さらにワシらに掴みかかる真似まで出来た。どう考えても貴様の能力がこのデータ通りでない事の証明だ」

だったらどうするともいうのか。ベータ部隊にいられなくすると脅迫するつもりか。だがサオトメはその懸念を読み取ったように答える。

「安心せい。脅迫してベータ部隊を追放、などはせんよ。だがな、お前にはもつと残酷な未来を見てもらおう。それこそベータに乗って空中変形をしているほうがまだマシだと思える未来をな」

第一話 「地獄を征く者 6」

「……何だっけ言うんだ？」

サオトメの背中を見つめながらリヨウマはただ連れられて歩くほかない。サオトメが自分に何を望んでいるのか。実験棟の一つにはベータの格納庫があった。そこに並んでいたのは七式ではない。まだ彩色もされていない最新鋭機だった。

「これは？ ベータだよな？」

背面の反重力装置とその意匠は間違いなくベータだが七式と大きく異なるのは張り出した巨大なスラストと大口径の武器だった。恐らくはビーム兵器、とリヨウマは唾を飲み下す。

「ベータ改八式。今後正式採用されるであろうベータの最新鋭機だ」

タツヒトの説明にリヨウマは疑問を挟む。

「ついこの間だぞ、七式が正式採用されたのは」

「一般隊員は今まで通り七式だが隊長格を含むエースパイロットには改八式に搭乗してもらおう。ついでに言えばサオトメ研究所の隊員もな」

ベータに取り付いて作業をしているメカニックのほかに明らかにパイロットだと思いき人間を見つける。リヨウマは羨望の眼差しで見つめたが相手はこちらを認めるなり声を潜めた。まるで死人を見めるかのように青ざめて眩く。

「あれが、例の……」

何なのだ。リヨウマは戸惑う。サオトメが先導しているだけでこれほど奇異の眼に晒されるのだろうか。

「おれはベータ改八式の実験台か？」

浮かんだ考えにそれならば好都合だと感じる。どうせ七式には早々に限界を感じていた頃合である。だが発せられた声は全くの別種だった。

「ベータ？ あのようなおもちやに乗せるためにお前を呼んだのではない。おもちやの操縦ノウハウは全て忘れろ。これから見せる怪物に呑み込まれぬようにな」

サオトメはそう言い捨てて嚴重な隔壁のロックを解除する。何と扉が四重にも跨って存在し一つの扉ごとにカードキーと網膜認証を必要とした。リヨウマは面白がって口にする。

「おいおい、核兵器でもあるってのか？」

茶化した声にも二人して黙している。まさか、と嫌な汗が背中を伝い落ちる。

「安心しろ。核兵器よりかは人類の味方になってくれるものだ」

タツヒトの声に腕時計型の端末が照合される。ミチルの最終チェックを抜けると重々しい扉が開いた。油圧扉の向こう側にはデッキがありまたしてもベータの格納庫かと思われた。だが威圧的にこちらを見下ろしているのはベータのような無機質的なコックピットではない。

そこにいたのは赤い鬼であった。

いや鬼だとリヨウマは錯覚した。一对の角を持ち、黄色い眼窩がこちらを睨んでいる。緑色のエネルギーパーティションが立体的に繋がっており今も脈打つ鬼の鼓動を伝えさせる。リヨウマは息を呑んだ。目の前のマシンは一体何なのだ？ 少なくとも今まで見てきた機体とは一線を画している。人のために造られた機械ではない。むしろ機械がこの形を望んで成型されたかのようなようだ。

「……これは？」

ようやくその問いを発するのでいっぱいだった。汗の浮いた額を拭きたいが両手は拘束されたままだ。サオトメは鬼に勝るとも劣らない眼光でリヨウマを睨んだ。

「これこそが人類最後の希望、悪魔のマシン、ゲッターロボだ」

悪魔。そう形容されると胸のつかえがすっと落ちた気がした。確かに一对の角と禍々しささえ漂わせる眼光は悪魔そのものだ。

「これが、どうしたって言うんだ？ だってまだ……」

そう濁したのはその悪魔が胸より下が存在しない状態だからだ。鎖で縛り上げられている赤い身体は上半身のごく一部、言ってしまうば腕もなければ腹部もなく、当然の事ながら足もない。

「未完成なのだ。だがいずれ完成する。この機体がネフィリムを駆逐

するのだ」

サオトメの言葉にリヨウマは底知れぬ恐怖を覚えた。この鬼が完成する時が来るというのか。だが未完成という声にどこか安心している自分もいた。

「そうかい……。こいつは驚きだ。天下のサオトメ研究所が老人の夢想に金を注いでいるとはな」

リヨウマはくっくつと笑う。だがそれは震え始める歯の根を無理やり合わせるための三文芝居に過ぎなかった。どうしてだかゲッターを見た瞬間から血流が逆巻く。原初本能が呼び起こされたかのように額が疼く。熱い血潮は今まで感じた事のないほど滾っている。「リヨウマよ。お前はベータ七式を、いつまでも遊びにつき合わせているつもりか？」

「何だと？」

「ベータで変形の真似事をしていても、所詮はままごとよ。だがこのゲッターは違う！ ゲッターは最初から変形合体が組み込まれており、それこそがこのマシンを操る最も優れた素質の一つなのだ」

サオトメの熱弁にリヨウマは強がった声を出す。

「馬鹿野郎。そんな無茶苦茶な機体があるもんか」

「だが、ゲッターは実在するぞ。お前の目の前にな。そしてネフィリムも、お前達が思っているよりもずっと手強い。霧型なんぞ、尖兵に過ぎん。それは我がサオトメ研究所が弾き出したデータによって既に解明されているのだ。霧型でどこまでやれるのか、と奴らは人類を嘗め腐っている。だが人類が思っていたよりも賢しい活躍をするものだから奴らは本物を送り込んでくる」

「本物？ 今までのネフィリムは偽物だったのか？」

嘘も大概にしろ、とリヨウマは考えていたがサオトメは首肯した。「その通りだ。偽者、贋作の巨人達だ。皮肉なものだな。偽物の人類が造った偽物を、我らは本物だと思いついて今まで防衛してきた」

だがネフィリムの脅威は存在するのだ。それを偽物だといふ老人に断じさせるわけにはいかない。

「てめえ……。あれがいくら弱くたって死んでいった人間はいるん

だぜ。だつてのに、その言い草……、あんたは犠牲を何だと思つてやる！」

リヨウマの怒りにサオトメは全く臆する事もない。それどころか犠牲という言葉聞いて鼻を鳴らす。

「犠牲？　犠牲と言つたか、リヨウマよ。小さい、小さいな。それこそ有象無象の羽虫の出来事だ。これから先、ネフィリムに、偽人類に、我ら人類は隷属させられる。消滅の危機に瀕するのだぞ。それに比すれば、何という些事よ」

リヨウマは飛びかかっていた。両手の拘束など関係がない。ただ自分の散つていった仲間達の犠牲を些事と呼んだ、この老人を許せなかった。それこそ野生の本能が発露し、リヨウマはサオトメを食いかろうとする。

だがそれを制したのはタツヒトだ。拳銃を突き出し、何の宣言もなくリヨウマの肩を射抜いた。銃声と薬きょうの飛んだにおいがすぐ近くで炸裂しリヨウマは撃ち抜かれた肩からの出血に身悶えする。真に悔しいのは銃の前に成す術もない自分ではない。銃を出されて単純に力で引き下がった自分だ。

「おれは……い！　サオトメ！　てめえを許さねえ」

「お前に許されるためにやっておるのではない。人類のためを思つて建造した機体だ。人間一人の許しなど吐き捨てればいい」

サオトメの言葉はどこまでも冷たい。リヨウマは怒りで思考が焼け爛れるのを感じた。過負荷が手錠にかかり腕時計端末のミチルが、『危険信号！』と声にする。

『拘束を……』

その言葉が消える前にリヨウマは自らの力で手錠を引き千切っていた。食い込んだ手首からは血が滴っているが構いはしない。リヨウマの眼はサオトメを殺す事だけを考えていた。その成果を見やつてサオトメが手を鳴らす。

「素晴らしいな。データの数値の、これは五倍以上か？　それほどまでの膂力、やはりゲッターには欲しい」

「ぎげやがつて」

最早言葉は不必要だ。リヨウマはサオトメを殺すために全神経を傾ける。戦闘本能が研ぎ澄まされ今にサオトメに飛び掛るかに思われた。

その緊張を割ったのは警報である。デツキが赤いランプの警戒色に塗り固められた。

「何だ？ ミチル」

戸惑うサオトメへとミチルが状況を報告する。

『サオトメ研究所上空に巨大ワームホール反応。これは、ネフィリムです！』

ネフィリム。その言葉でリヨウマの熱していた思考が冷まされた。タツヒトが苦々しげに口走る。

「馬鹿な。ネフィリムが何故ここを狙う？」

『僅かに漏れていたのかもしれませんが。ゲッター線が』

「だとすれば順当とも言えるな。契機を狙っていたか。何度もゲッターの運用に失敗しているのを目にして今だと思ったのかもしれない」

サオトメの達観した物言いにタツヒトが提言する。

「どうします？ 今の不完全なゲッターでは返り討ちですよ」

「相手の規模は？ 霧型か？ 実体型か？」

サオトメの問いにミチルは数秒の逡巡を置いてから、『これは……』と声にする。

『霧型でも、実体型でもない。今までのどのネフィリムとも合致しない反応です！』

「何だと……」

呻くサオトメにタツヒトは、「外周カメラを」と指示を出す。すると端末にカメラの映像が映し出された。リヨウマも目にする。空を仰ぐ形で備え付けられたカメラが捉えたのは巨大な人型であった。

中央部にコアらしき赤い球体があるがそれ以外は既存のネフィリムではない。長大な腕と足は何キロあるのか分からなかった。それそのものが巨大建造物と言われても差し支えない。腕と脚部の付け根に一對ずつある緩やかに回転する円形の構造物は一切が不明だった。

「……それがネフィリムだったのか」

「新たなタイプ……オベリスク型とでも名付けるべきか」

オベリスク型と名付けられた巨大な人型ネフィリムはコアを覆うように頭部があった。狗を思わせる形状で赤い眼窩の奥が輝いている。その眼光が瞬いた瞬間、サオトメ研究所を激震が襲った。今の攻撃でカメラが何個か損壊したようだ。タツヒトの端末には砂嵐が走っていた。

「攻撃……！ おのれ小賢しい」

サオトメはタラップの上で声を荒立たせた。

「ゲッターは出せんのか？」

「無理ですよ！ まだイーグル号の可変機構を確認している状態です。こんな状態で出しても武器の一つも使えやしない」

メカニツクの悲鳴じみた声にサオトメは舌打ちする。

「この研究所はもしもの時にバリアーが備え付けられている。それが作動したから衝撃程度で済んでいるのだ。それがなければ今頃我々は消し炭だぞ」

サオトメの真剣な声にリヨウマはようやく実感する。これが現実である事を。

「おい！ ジジイ！ これてめえらの仕込みじゃねえのか！」

「悪いがこのような悪趣味な趣向はない。ゲッターの性能試験の最中にこれとは……。全く、運に見離されたマシンとでも言うべきか」

「どうするんだ？」

「頭が冷えたようだな、リヨウマ。どうするか。二者択一だ。ゲッターに乗るか。それともここで死を待つか」

サオトメはこの段になっても自分を試している。タツヒトもさすがにうろたえた。

「博士。この状況で……」

「この状況だからだ。ゲッターが動かないのならば我々は死ぬ。無論、お前もだ。だがゲッターを動かせれば、方に一つでも可能性はある。ゲッター線エネルギータンク貯蔵量は？」

サオトメの質問に答えたのはタツヒトの端末のミチルだ。

『現在、三十パーセント。イーグル号の運用のためにゲッター線は最小に抑えてあるのでゲッターエネルギー兵器の使用は絶望的かと……』

「このような時に、人間のためを思って抑えていたゲッターの力が仇となったか」

サオトメの嘆きにリョウマは拳を握り締める。このまま、ゲッターに乗るほかないのか。今一度、ゲッターの威容を睨み据えた。赤いフォルム。鬼、悪魔を想起させる形状。不完全な装備。だが自分が乗らなければもつと不完全だ。

乗る、と言いかけた、その時であった。

第一話 「地獄を征く者 7」

「自分が乗ります」

リヨウマも目を瞠った。そう進言したのは他でもない、タツヒトだったからだ。サオトメもそれは予想外だったのかうろたえていた。「だが、お前ではゲッターの規定値を満たせていない」

「しかし自分ならば、ゲッターの性能を博士の次に理解しているつもりです。三十パーセントのゲッター貯蔵量、ならばゲッタービーム一発分は撃てるでしょう。的確にコアに放てば一発のゲッタービームでも奴に届く」

覚悟を決めた男の眼をしたタツヒトにサオトメは渋った。

「……駄目だ。危険過ぎる。リヨウマほどの肉体ならばともかく、お前では不可能だ。ゲッタービームを撃つ云々よりも前に、イーグル号の機動に耐えられまい」

「しかし今やらねば！ 多くの人命がかかっているのですよ！」

人命。その言葉にリヨウマはベータ部隊に入ってからからの事を反芻する。無理な空中機動も変形も全ては仲間の命を守るため。被害を最小限に抑えるためだ。だがそれは全て身勝手に映っていた。自分とてサオトメと何が違う？ 自分勝手に規定した枠の中でしか、人を助けようとしていない。

「チクシヨウが！」

吐き捨ててリヨウマは駆け出した。隔壁を抜け辿り着いたのはベータ改八式の格納庫だ。スクランブル発進をかけようとしていたパイロットに取り付き、そのヘルメットを奪ってコックピットに無理やり収まる。

「な、何を……」

「おれが出る！ 改八式とやら。その性能、おれに見せてみろ！」

改八式のベータは空中機動形態だった。都合だ、とリヨウマは唇を舐める。機動シークエンスを三段階ほどずつ飛ばして無理やりエンジンに火を通す。点火したスラスタから焚かれた推進剤でベ-

タが飛び出した。どうやら自分が一番乗りらしい。他のベータ乗りはいなかった。

空中に躍り出てリヨウマは息を呑む。ネフィリムの大きさは今まで相手してきた霧型や実態型の比ではない。景色一面を塗り潰したかのようにネフィリムの巨体が視界に入る。

オベリスク型、という名前も分からなくもなかった。まさしく構造物だ。

「ベータ改八式！ 持ってきてくれるか？」

臓腑にかかるGは想像以上だがそれでも想定内だった。これくらいならばシミュレーターの数値をいじって体感した事がある。リヨウマは迷わずネフィリムの上を取ろうと上空に昇る。

完全になを取ったところで変形レバーを引いてボタンを三つ同時に押す。するとセーフティが解除された改八式は容易く空中変形を成し遂げた。もちろん、機体にかかる負荷は凄まじい。その腹部に収まっているパイロットは何十倍にも押し潰されそうになる。だがリヨウマはそれさえも想定内だと奥歯を噛んで受け止めた。

改八式のベータは今までのようにコックピットが突き出される形ではなく、より人型に近いスマートな体躯だった。頭部には扁平ながらもメインカメラを有しており有視界戦闘においては優れている。ベータの扁平な頭部に備え付けられた人の眼を思わせるアイカメラがネフィリムを睨む。空中機動形態では下腹部に位置する重火器を今は右手に装備して雲を引き裂いた。ネフィリムは待っていたかのように狗の頭部を上げる。赤い眼窩が煌いた。

「させつかよー！」

下降と同時に左に機体をぶれさせる。ネフィリムのビームが逸れてベータのすぐ脇を掠める。だが回避出来た。その確信にリヨウマは重火器を構えさせる。アイドリング状態だった火器管制システムに逐一学習させるような余裕はない。即座に手動操作に切り替え、リヨウマはアイカメラから与えられる情報だけで照準した。

「ビーム兵器なんだから。だったららよー！」

コックピットの叫びと同期したようにベータが腕を上げて重火器

の引き金を引く。セーフティが自動解除され青白いビームが発射された。コアを撃ち抜けば一撃のはず。だがそれを阻害したのは狗のように張り出した頭部だった。あの頭部はただの意匠ではない。コアを保護する皮膜なのだ。それを理解したのはビームが弾かれてからだった。

「何だってー！」

ネフィリムの腕が持ち上げられる。質量をまるで感じさせない素早い動きでベータを捕らえようとした。リヨウマは推進剤を焚かせてその手から逃れる。恐怖が背筋を走る。今、ネフィリムはこちらを捕まえようとした。やはりこの巨体からしてみれば自分など羽虫なのだろうか。サオトメの言葉が思い起こされる。

羽虫の些事。

それが自分達であり、これまでも、これからもそうなのか？ だとすればベータに乗って戦っている自分は――。

その考えのせいか腕と脚部の付け根についていた円形の構造物が離れている事に気づかなかった。リヨウマが気づいた時にはアラートのブザーが鳴り響く。円形の構造物から新たに赤い光条が放たれリヨウマのベータを撃ち抜いた。完全に不意打ちの一撃に推進剤が射抜かれる。赤い危険信号の表示が幾重にもヘッドアップディスプレイを塗り潰した。

「嘘だろ……、おい！」

このままでは樹海に墜落する。リヨウマは咄嗟に補助推進剤と反重力装置の機能をフルに稼働させた。寝ぼけた頬を叩き起こされた形で反重力装置に火が灯り樹海に激突寸前に機体がふわりと持ち上がる。墜落は免れたが圧倒的不利には違いなかった。こちらを睥睨するのは狗の形をした頭部だ。ネフィリムがまさしく羽虫を踏み潰すが如く、足を持ち上げる。

——まさか、ここまでなのか？

リヨウマの意識を掠めたのはタツマとの当たり障りのない会話や、仲間との日々だったが、それよりもなお鮮烈だったのは幼少時に行き会った鬼の像だった。黒色の鬼の姿が網膜の裏から広がっていく。

その瞬間、その像を引き裂いた機影があった。赤い機体がベータでは考えつかないような速度でネフィリムへと直進していく。両肩から即席のミサイル弾頭を射出しネフィリムに攻撃する。爆発の光の輪が広がってネフィリムの身体を叩いた。

「あれは……」

あれはゲッターだ。だが誰が乗っている？ リヨウマの思案を読み取ったようにベータの通信網を震わせた声があった。

『……ナガレ。ナガレ・リヨウマ……』

タツヒトの声だ。あの機体にはタツヒトが乗っているのだ。リヨウマの確信よりも速かったのはネフィリムの動きだった。腕を振り上げ羽虫を払うかの如く赤い機体が風圧になぶられる。接近してからの事など考えていなかったのだろう。赤い鬼の機体はそのまま自然落下しようとしていた。

「やべえ……！」

リヨウマはそれこそ考えていなかった。思考せずにベータを機動させ、補助推進剤とメインスラスターを限界まで開きゲッターをアームで受け止める。赤い警報や警告メニユを全て無視してリヨウマはコックピットから呼びかけた。

「おい！ タツヒトって言ったよな？ お前、大丈夫なのか？」

通信網を震わせたのは僅かな声だ。ほとんど呼吸音と大差ない。

『ナガレ・リヨウマ……』

「無茶しやがって！ こんなモンスターマシンで特攻なんて馬鹿げているぜ」

ゲッター自体明らかに飛行を想定していない。上半身のみの赤い鬼の中でタツヒトは呻いた。

『それでも、やらねばならないのさ……。人類の、未来を』

「喋るな、もう。後はおれが……」

そこから先の言葉を思わず飲み込む。どうするのだろうか。圧倒的な戦力差を見せ付けられてネフィリムにベータでは敵わない事を突きつけられた。だからと言ってゲッターに乗れば勝てるという算段もない。畢竟手詰まりの状況にリヨウマは歯噛みする。何も出来

ずにこのまま散っていくというのか。

その思考にタツヒトが声を差し挟む。

『……ナガレ。お前ならば変えられる。レプリカントの、ネフィリムの好きにはさせない未来を創造出来るんだ』

「喋んな、って言うってんだろ。その声、もう肺も内臓もやられている」
慮った声にタツヒトは静かに笑んだのが伝わった。

『私は恐らく死ぬ。もう助かるまい』

「諦めてんじゃねえよ。天下のサオトメ研究所だろうが」

タツヒトを助け出す手段くらいはサオトメが考え出すだろう。問題は今だった。ネフィリムが地を踏み締め樹海を進む。サオトメ研究所への再攻撃を許してはならない。だがベータのビーム兵器ではネフィリムの装甲に風穴一つ開けられない。

「どうする？ もう推進剤も逝っちまってる。飛ぶ事も出来ねえベータじゃただの的だけ」

『方法は、ある』

タツヒトの声にリヨウマは視線を振り向ける。赤い鬼の機体自分を試すように睨んでいる。

『ゲッターを使え。ゲッターの攻撃ならばネフィリムに届く』

「何言ってやがる。不完全なゲッターでどうやって……」

その時、一つの考えが浮かんだ。だがそれは大きな賭けだ。しかしタツヒトはそれに託しているに違いなかった。リヨウマはサオトメ研究所へと通信を繋ぐ。

「サオトメ研究所のメカニック！ ゲッターのエネルギーチューブの規格は従来の機動兵器と同じか答えろ！」

何を問うているのか分からないのだろう。答えたのはミチルだった。

『ナガレ・リヨウマさん？ 何を言っているんです？ 早く、ベータで撤退を』

「どこへ逃げるって言うんだ？ 逃げ場なんてない。前にも後ろにも、おれには進むしかないんでな」

通信チャンネルが変わり今度はサオトメが出た。

『リヨウマ。何のつもりだ？ エネルギーチューブの規格なんて知ってどうする？』

「おれはメカニックに聞いているんだ。サオトメ研究所の、ゲッター担当のメカニック。エネルギーチューブの規格を教えろ」

通信に逡巡が混じる。しかし時間はない。今もネフィリムはサオトメ研究所を攻撃範囲に入れている。いつでも攻撃出来るが自分が立ち足かかっているから辛うじて攻撃していかないだけだ。ネフィリムに比すれば自分など羽虫に違いない。だが羽虫なりの意地はあった。

「答えろ！ 早く！」

急かす声によくやくメカニック担当らしき男の声が通った。

『エネルギーチューブの規格は、ベータ含む従来の機動兵器と変わりません。ですがこの状況で何を……』

その言葉を遮ったのはリヨウマの決断だった。ベータのメインアームを動かす、あろう事かゲッターの内部へとベータのアームが差し込まれた。剥き出しのゲッターの接合部よりひねり出したのは銀色のエネルギーチューブである。その段になってようやくサオトメが勘付いたらしい。

『リヨウマ。まさか、お前……』

「そのままかよ！ エネルギーチューブの規格が同じだってんなら！」

エネルギーチューブを繋いだ先はベータの所持するビーム兵器だった。重火器へとコネクタが通り外部火器管制システムが立ち上がる。リヨウマは照準機構や複雑な設定を全て排し、ベータのコックピットから這い出た。手にはコックピットから引き出したボタンが握られている。煤けた風の中にネフィリムの巨体が浮かんでいる。ほとんど冗談としか思えない巨大さにリヨウマは口角を吊り上げた。「でけえじゃねえか。だがよ、でかかって事は、的も広かって事なんだよ」

足でベータのメインアームを操作する。ベータは腕を上げると真っ直ぐにその銃口をネフィリムに向けた。

『やめろ！ リヨウマ！』

サオトメの声弾けた瞬間、リヨウマはボタンを押し込んだ。

直後、空間を激震する緑色の光条がベータのビーム兵器から放たれた。明らかに出力の違うエネルギーの束が収束しネフィリムへと直進する。風圧に煽られリヨウマはコックピットから投げ出された。周囲の樹木が薙ぎ倒され緑色の光が空を覆う。網膜の裏を焼きかねない一撃の行方をリヨウマは見据えた。

ビームの照準はベータのメインアームがその衝撃に持たなかった事で僅かにぶれた。逸れたビームの切っ先が捉えたのはネフィリムの左腕だった。ネフィリムの腕の付け根に命中し、貫いた光が雲を裂く。リヨウマは舌打ちする。コアを的確に狙ったつもりだった一撃は虚しく空を穿ったようなものだ。ほとんど通信の聞こえない聴覚の中で静かに響いた声があった。

『ナガレ・リヨウマ、後は』

そこから先は声になっていなかった。途切れた通信にリヨウマは全てを悟る。ネフィリムを倒せなかった。その悔恨が胸を締め付けた。

緑色に染まった空の下でネフィリムが甲高い鳴き声を発する。攻撃か、と身構えたがネフィリムは右腕を掲げて上空に黒色の雲海を形成した。あれはネフィリムが移動用に使うワームホールである。ネフィリムはそのワームホールへと逃げ帰っていく。リヨウマは思わず叫んでいた。

「逃げんのか！ てめえ！」

だがこちらに戦う手段は残されていない。負け犬の遠吠えに過ぎなかった。ネフィリムの去った後、ようやく自分が何に守られているのかりヨウマは戻ってきた視界の中で目にする。ほとんど原形を留めていないベータをゲッターが抱くようにして守っていた。もしゲッターに守られていなかったら自分もベータ共々粉々になっていただろう。リヨウマは無駄だと悟りながらもゲッターのコックピットブロックへと歩み寄った。

ぽつり、ぽつりと雨が降り出す。リヨウマはコックピットハッチに

備え付けられている緊急射出レバーを回した。蒸気が棚引きコックピットが強制排除される。

コックピットに収まっていたのはタツヒトだった。白衣を血に染め、安らかに眠っている。このような戦闘の只中に安楽死出来た事がせめてもの救いだった。リヨウマは無言で挙手敬礼する。

タツヒトの勇気に。ゲッターに未来を託した男の人生に。

サオトメ研究所からおっとり刀のベータ部隊が押し寄せてくる。もう戦闘は終わったのだ。一人の犠牲を出してネフィリムは後退した。

ベータに乗り合わせていたサオトメがタツヒトの死に様を目にする。リヨウマは問いかけていた。

「何も感じねえのか？」

「これもゲッターのために必要な犠牲よ」

リヨウマは拳を振り上げる。サオトメへと迷いなく打ち下ろしていた。サオトメの身体が転がる。すぐさま隊員達がリヨウマを取り押さえた。

「てめえ！ タツヒトはゲッターとやらの理想に殉じたんだぞ！」

やり場のない怒りにサオトメは口元の血を拭って応ずる。

「ゲッターは健在だ。そしてリヨウマ、お前というカードもな。これは最良の結果であったと言えよう。新たなタイプのネフィリムに対してゲッターが有効であったという事を示せた」

どこまでも冷淡なサオトメの態度にリヨウマは噛み付かんばかりの気迫で詰め寄る。

「研究員の、てめえの側近じゃねえのかよ！」

サオトメは白衣に付いた泥を払って、「知らんな」と背中を向ける。リヨウマが隊員達の拘束を振り解こうとすると声が弾けた。

「何も知らないくせに偉そうな事を言うな！ タツヒトさんは、博士の實の息子だったんだぞ！」

その言葉にリヨウマは硬直する。本当なのか、と問い質すまでもない。背中がそうだと語っていた。この狂科学者は自分の息子の死に様でさえも研究の糧にするとも言えるのか。怒りと共にリヨウマは

波のように悲しみが押し寄せてくるのを感じた。もし自分が最初からゲッターに乗ると言っていればあるいは、タツヒトは死ななかつたかもしれない。その遅過ぎた後悔が胸を締め付ける。自分ならばゲッターを扱えたかもしれないのだ。

サオトメは空を仰いでいた。ネフィリムの後を執念で追いつがる老人の姿にリヨウマは何も言えなかつた。

怨敵だ、と言えばよかつたのだろうか。

それとも貴様のせいだと糾弾すればまだ楽だつたかもしれない。

だがそれは許されないのだ。サオトメは自らの胸中が思いのほか
凧いでいる事に驚愕する。息子の死を悲しむでもなく悼むでもなく、
ただ事実として受け止めている。ゲッターのために必要だつた。そ
れだけだ。今までもそうだつた。これからもそうだろう。ゲッター
のために死んだ人間はゲッターにいずれ生かされる人命のためのも
のだつたと。

だから後悔も、ましてや人並みの悲しみも背負っていないつもり
だつた。だがこの時ばかりは自然と目頭が熱くなつた。ぐつと堪え
る。涙は見せまい。それは侮辱に繋がるからだ。タツヒトは全てを
分かつた上でゲッターに乗つた。その行為を侮辱する事だけは自分
でも許されない。

「いれでいれ」

そう繰り返して呟いた。これで、ゲッターとリヨウマさえ生き残つて

いれば、全てはこれでいいのだ。
ぬかるんだ地面は下駄の音を吸収し、サオトメに退路さえも許して
いなかった。

第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ 1」

銀色の外殻を割ったのはハンプティダンプティの童謡のような調べではなく、それこそ破碎の物音だった。

砕け散った銀色の破片が他の外殻に突き刺さり連鎖爆発を起こす。これはプラネットシエルの弊害とも言える部分である。プラネットシエルは他種の落下物、あるいは邪魔な部品を即座に始末する装備が常時起動しておりこれによる外敵センサーに引つかかったのは皮肉な事に自らの一部であった。外敵だと判断したプラネットシエルの防衛システムが砲塔を出現させ間断のない攻撃を加えている。それを目にして人々が震撼した。

「おい、システムエラーか？」「いや、これはテロだ」

誰かの発したテロという声にまさかと不安が伝播する。その時、街頭モニターの一つに砂嵐が走った。異常を異常として認め始めた人々の合間を縫うようにモニターに表示されたのは赤色の旗だった。ちようど卵の殻に亀裂の走った図柄が表示され人々は理解する。これは反プラネットシエル計画団体によるものだ。

『聡明なる諸君。ぶぎげんよう。我々ハンプティダンプティはこの狂った社会秩序に亀裂を走らせるべく、今日も活動を行った。君達の頭上を覆っている無知蒙昧の殻を今日も破ったのだ。君達はそろそろ自覚するべきである。覆われている殻の正体は安全を保障するものとは程遠い、それこそ害悪の象徴なのだ』

声紋は操作されており男のものなのか女のものなのか判然としない。だがそれが自分達の生活を脅かすものである事だけははっきりしていた。

『ハンプティダンプティは君達を救うために活動しているのである。それが理解出来る者のみが終末において生き残り、この偽りの殻の外へと脱出する事の出来るであろう』

武装隊が出撃する。銀色の外殻に覆われた空を空中機動形態で飛行するのはベータの編隊であった。円形の反重力装置と重火器を下腹部に備えたベータがテロ組織を追うべく出撃したのだ。人々は安

堵し元の生活に戻っていく。それを遮るかのように声は続けた。

『無知蒙昧なまま死ぬか、それとも生きるか、君達は選ぶといい。それこそが真に生きるといふ事なのだから』

その言葉を潮にして通信は途切れた。

「ジン隊長、今日も素晴らしい演説でした」

拍手を送る恰幅のいい男の声に振り返ったのは痩せぎすの男だった。眼だけは妙に炯々としてまるで昆虫か何かのようである。長身だがそれを精悍と呼ぶのはどこか違う。むしろ後ろめたさを感じさせる風貌の男はマイクを傍に控えている部下に渡した。

「オレの通信は」

「迎られませんよ。いくらベータ部隊とはいえ、飛んでいるだけです」

恰幅のいい男は肩を揺らして笑う。思いもしないだろう。テロ組織の隊長格がこの国で最も富める男に匿われているなど。彼を匿っている中年男性は視線を振り向けた。

「それにしても見事な演説。民衆の心を射止めるようでしたな、ジン隊長」

賞賛にも男は答えない。頑として口を閉ざしているように映った。男は気に食わないのか話題を逸らす。

「ハンプティダンプティ、随分と大きくなりました。反プラネットシエル計画を扇動する団体がここまで大きくなれたのは誰のお陰でしょうかね」

暗に自分の利権をちらつかせるとようやく男は口を開いた。

「感謝しております」

まるで心にも思っていないような声音だ。死人の出す声に聞こえた。男は背筋を走る寒気を覚えながらも、「なに」と応ずる。

「ジン・ハヤト。あなたがハンプティダンプティのボスに相応しいのは全て了承しておりますから」

「……お前のほうが偉いような言い草だ」

当然だろう、という言葉を読み込んで男はジン・ハヤトという男を観察する。見れば見るほどにこの男には掴みどころがない。痩せぎすで長身。街ですれ違えばそれだけの印象に違いないのに凝視すればするほどに深淵を覗いているかのような薄気味悪さがある。相手が目を向けていないのに観察されているかのようなようだった。灰色のコートを身に纏っており、今時それは目立つと忠告したがハヤトは改めようとしなかった。

「その、コートをお預かりしましょうか」

これ、と自分の部下に命じてコートを預からせようとする。するとハヤトは目にも留まらぬ速度で蹴りを放った。部下が吹っ飛ばされ鼻血をぶちまける。高級な絨毯が血に濡れた。

「何度も言ったはずだが？ オレに触るなと」

忠告を無視したのは自分のほうだ。男は背筋が震え出すのを隠しつつ、「失礼」と返す。

「何分、コートを預からぬほうが失礼だと思ひまして」

「このコートも、身につけているもの一つ取ってしてみても、オレの物だ。他の誰にも渡さん」

プライドの塊め、と胸中に毒づく。この男の極めて高い身体能力さえなければ今頃は周囲の部下達で羽交い絞めにして札束で頬を叩いてやるものを。だが周囲の部下達も震え上がっていた。その中にはハヤト直属の部下もいるのだが彼らさえもハヤトの暴力に恐怖している。まるで御し切れないとでも言うように。

「失礼しました。では今回の成功報酬ですが」

謝礼をちらつかせるとハヤトは顎を突き出して、「奴にくれてやれ」と部下の一人を示した。突然の事だったのだろう。部下も狼狽する。

「は、ハヤト様。俺がもらってもよろしいんで？」

「構わん。好きに使え」

薄汚いハヤトの部下がこちらへと歩み寄ってくる。体臭に鼻が曲がりそうだった。ハヤトは部下をどう扱っているのだ。

「これだ」

謝礼の入ったカードを与える。部下はよだれを垂らしてカードを懐に入れた。何とも金汚い。

「今回、プラネットシエルのシステムを逆手に取った戦法、どう編み出されたんで？ 是非とも聞かせていただきたいものです」

その言葉にハヤトは、「なんて事はない」と応ずる。

「白血球が正常な細胞を攻撃してしまう事があるように、プラネットシエルにも同じものだと感じただけだ。思い付きだ。他意はない」

この男はだから読めないのだ、と歯噛みする。絶対に自分の秘密は明かささない。他人に戦術の一つを取ってしてみても自分の所有物だと言つてのける。スポンサーを買って出ているのだ。これ以上の証拠を得なければ元も取れない。

「例えばどのような？」

質問するとハヤトはぎょろりと睨んだ。それだけで身が竦み上がるようだった。この男とすれ違う程度ならば分かるまい、遠目でも分かるまい、だが眼を見れば分かる。狂犬だ。この男は狂犬そのものなのだ。血に飢えた狂犬にゆるりと質問するなど愚の骨頂であった。

「聞きたいのか？」

「……いえ、失礼」

男は質問を飲み込む。何か一つでも言ってしまうばこの男の前では引きずり倒されて頭蓋に穴が開くまで痛めつけられる末路しか思い浮かばない。

「それがいい、賢明、という奴だ」

ハヤトは先ほど吹き飛ばした自分の部下の首根っこを引っ掴む。部下が自分に助けを求めた。だが顔を伏せて首を振る。もうお前はハヤトのおもちやだ。せめて気が済むまでなぶられてくれ。

同じ人間でありながらこうも力関係に愕然とする。金や権力の問

題ではない。純粋な暴力の前では札束も、金塊もまるで無力。ましてやコネで築き上げてきた地位など一瞬で塵芥だろう。男は一つだけ質問する。それさえも禁に触れかねないと思いつながら。

「次の攻撃目標は？」

ハヤトは足を止めて振り返らずに答えた。

「この国で最も裕福なる者と、プラネットシエルを推し進める本体に仕掛ける」

その言葉に男は困惑した。まさか、という思いに口走る。

「本体……、まさかサオトメ研究所に？」

ハヤトは肩越しに睨みつけた。たったそれだけの動作だ。だといふのに男は心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥った。

「いえ、その……」

「何か、問題でもあるのか？」

大有りである。自分はサオトメ研究所へと資金提供している。それはもちろん反プラネットシエルを掲げる彼らには教えていない。自分の側近でさえも知らない情報だ。だがこの世の中裏の顔を持たぬほうがおかしい。サオトメ研究所を切るか、それとも反政府団体を切るか。

「これからの事」

だからハヤトの声音にはびくついた。これからの、と繰り返す。

「何でございましょう？」

「オレ達への資金提供、きつちりと頼む。まさかサオトメ研究所に喧嘩を売るからと言って、ここで怖気づく輩では」

男はふるふると首を横に振った。ハヤトは口角を吊り上げる。

「よおく、分かった」

そう告げてハヤトは部屋を去った。ようやく、と言った様子で男は椅子に腰かける。まだ四十に差し掛かったばかりだがハヤトの前では十も二十も年老いた。

「あの狂犬め。いつか恩を仇で返すな」

男はリモコンを取り出す。そのボタンを押すと先ほどのカードに仕込んだ爆弾が二十分後には爆発する仕組みだ。金を手に入れよう

としたハヤトを上手く爆死させられるはずだろう。

「悪く思うなよ、ジン・ハヤト。全てはお前が悪いのだからな。サオトメ研究所への離反など知れば私は国家反逆罪だ。そのような罪で捕まるよりかは、君らを切るよ。それが賢いのだからな」

部下を呼び出して命ずる。車を回せ、と。男はエレベーターで降りてリムジンに飛び乗った。この非常事態をサオトメ研究所に告げ口すれば自分はむしろ褒められてしかるべきだ。国の救世主だとおだてられるかもしれない。

「あの狂犬の下につくくらいならば、私は賢い道を選ぶ」

男はふうと息をついてふとリムジンの床に落ちているものを目に留めた。部下は車の掃除も怠っているのか。ハヤトの前で溜まったストレスを発散するべく男はそれを手に取って部下に忠言する。

「おい！ 掃除もろくに出来んのか、このスカタンが！」

その時、フロントミラー越しに部下が男の拾ったものを見て慄いた。指差されて男はそれをよく見る。拾ったのは先ほどハヤトに与えたはずのブラックカードだった。その表面が赤く点滅している。爆弾が起爆している証拠だった。

「なっ、まさか——！」

その先の言葉は爆発の衝撃と破壊に遮られた。

第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ 2」

空を飛ぶベータの編隊を視界に入れる。ハヤトは夢見るように呟いた。

「空を飛ぶってのはいい」

だがその下には足蹴にされたスポンサーの部下がいる。顔の原型が分からぬほどに痛めつけられ出血していない箇所のほうが少なかった。

「ゆ、許して……」

「おっと、まだ喉を潰していなかったか。喉ってのはなあ。くるっとしていてなあ」

靴先が男の喉を弄ぶように向けられる。慄いた男の喉をつんと突いてやった。それだけで男は失禁する。

「漏らしやがった」

部下達が一斉に笑う。ハヤトも笑っていたが引きつったような笑い方だった。一瞬、真顔になって空を舞うベータをもう一度目線で追う。

「綺麗だよなあ」

そう呟いた瞬間、男の喉を踏み潰した。声にならない悲鳴が上がる。部下達が嘸し立てるように盛り上がったがハヤトはそれを一睨みに制した。途端に押し黙る。

「オレは、ただ銀色の殻が空を覆っているのが許せないだけなんだよ」

部下達は何も答えない。ハヤトは、「おい返事」と急かす。

「そ、そうですね」

答えたのは先ほど成金からカードを受け取った部下だ。金汚い部下の世事にハヤトは、「銀色の殻で覆われた空ってのは醜い」と歌うように告げる。

「そ、そうですね……」

「だがそれより醜いのはー！」

突然に張り上げられた声に部下達がびくつく。ハヤトはため息を

漏らした。

「金で醜く肥やされた生き様って奴だ、なア！ お前！」

ハヤトは部下の首筋を掴んで顔を引き寄せる。醜く歪んだ顔で部下が呻いた。

「く、苦しいです……」

「苦しい？ 苦しいってのは何だか分かるか？ 泥水をすすする事？

それとも市民登録されない事？ この社会で孤立する事？ 全てがノンだ！」

ハヤトの指が鋭く突きを放つ。部下の目が抉られて眼窩からはみ出していた。

「目だ」

もう片方の目も抉り取る。目から血を垂らした部下へと追い討ちをかけた。

「耳だ、鼻！」

両手を鎌のように使い耳を削ぎ落とし、最後に鼻をもぎ取った。ほとんど顔のパーツが取れてしまった部下の首を絞める。

ボキリ、と鈍い音が響く。部下は首の骨が折られたのか既に死んでいた。

「またおもちゃを探さないとなア」

ハヤトの声に部下の一人が、「あの」と声にする。ハヤトは懐から煙草を取り出した。すかさずその部下が火を点ける。

「何だ、言ってみろ」

「その、本当にサオトメ研究所に仕掛けるんで？」

「オレが、今まで冗談を言った事があるか？」

ハヤトの声に、「滅相もない」と部下は震えた。

「ただ、あの研究所も相当ヤバイって噂でさあ。裏で人体実験や機械工学に手を出しているって。プラネットシエルだけの研究所じゃないのは暗黙の了解って奴で……」

「んな事は最初から分かってんだよ」

ハヤトの声が拍子抜けだったのか部下は、「へっ？」と声にする。ハヤトは紫煙をくゆらせて空を仰いだ。

「プラネットシエルだけの研究所じゃねえ。絶対に裏がある」

「ハヤト様は、それを暴こうって言うんですね？」

逸った部下の声にハヤトは煙草を口から離してピンと弾く。その煙草が地面に落ちる前に放たれた蹴りが部下の顔にめり込んだ。鼻血を噴き出しながら部下が仰け反って倒れる。

それと煙草が地面に落ちたのがようやく同時だった。

「違う。理由が知りたいか？」

ハヤトは今しがた蹴りを放った部下に歩み寄りその顔に一発、拳を打ち込んだ。部下が呻く。

「おもちゃが欲しいんだよ。そのためさ。他に何かある？」

ハヤトの言葉に部下達が竦み上がった。本当にそれだけなのだ、とこの瞬間、部下達は理解する。

「新しいおもちゃ、それも一撃じゃ壊れないようなタフな奴さ。そいつが欲しい。お前らみたいな人間じゃ飽きちまう。女も一度抱いたら壊れちまうようなやわなのばかりだ。へし折っても、ぶち込んで、何にも感じられねえ、イケねえ連中ばかりだって言っているんだよ」

ハヤトの言葉に部下達は、「了解しました」と告げる。

「ハヤト様がそう仰るのなら」

「分かっているじゃねえか」

ハヤトは新しく煙草を吸おうとして箱の底を叩いたがもうなかった。

「お前の煙草を貸せ」

指された部下が震えながらハヤトへと歩み寄る。そつと煙草を差し出すとハヤトは手に取りながら尋ねる。

「お前、名前なんてんだ？」

突然の質問にその部下は自分が見初められたと思ったのだろう。馬鹿正直に答えようとしてその舌をハヤトが掴んだ。一瞬である。口を開いたその一瞬のうちにハヤトは部下の舌を指で摘んだ。

「今夜はお前で遊んでやろう。来い！ お前ら！ 遊んでいる間は」
隊に染み渡った不文律に彼らは一様に口にする。

「邪魔はしない、ですね」

「分かってんじゃないかねえか」

ハヤトは舌を摘んだ部下を布で仕切られた部屋の向こう側へと連れて行く。部下達はそこから直立不動で動けなかった。自分の仲間が切り裂かれ、無残に殺されて翌日には河川を転がるであろう事はいかしく容易に想像出来た。

第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ 3」

駆け抜ける速度で、というような生易しきはない。

全てを凌駕する。速度という領域から外れた、最早怨念の塊を背負っているかのようだ。駆けているのは足ではない。だが真つ先に踏み出すのは足だった。ボディブローを受けたわけでもないのに膝が笑う。臓腑にダメージが来るのは意外と最後で、降りる時が最もきつい。

それらが身体を染み渡ったのはこの一週間あまりだった。たった一週間。それだけでゲットマシンの凄まじさを知るのは充分だ。イーグル号のコックピットに収まったりリョウマはこのマシンの赤が伊達ではない事を思い知る。あれは血の赤だ。今まで吸ってきた血をこの機械は覚えているのだ。サオトメの通信網が鼓膜を震わせる。『今だ！ やれ、ゲッターチェンジだ』

最初、この声さえも聞こえなかった。一度目、二度目はただ単にゲットマシンの機動力を思い知るだけだったが三度目ともなればリョウマにも聞こえるようになった。もう何十回と重ねただろう。ゲットマシンに響くサオトメの声も馴染んできた。

「簡単に、言ってくれませ……」

全身を軋ませるGでレバーを引く事すら儘ならない。レバーは最初に触れた時、何故かぬめり気があった。あれは人間の肉なのだ、と何度も乗るうちに身体が認識した。このゲットマシンが乗り捨てていった、人間の肉をレバーだけが覚えている。奇妙だったがそれだけの人々がこのマシンに執念を燃やし、魂を持っていかれたという事なのだろう。

「ゲッター、チェンジ……」

声紋認証とレバーの動作でゲッターチェンジは成される。まず声を震わせる事が困難であったがリョウマはそれだけは出来るようになっていた。ベータの空中変形などままごとだ、と言い放ったサオトメの真意が今ならば分かる。このマシンに比すればどのような暴れ馬も所詮は練習台だろう。

レバーを思い切り引きイーグル号が可変するのが計器に映されて伝わってきた。まず制動のブースターがかかる。この時の急制動でほとんどの人間は心肺機能がおじゃんになるだろう。リヨウマは奥歯を噛んでぐつと耐える。

イーグル号の鋭角的なフォルムが反転し機首を上部にそびえさせ両翼を畳んで速度を殺す。コックピットは自動的に移動し、適した形を見つけ出すのだがこの時の操縦桿の移動でリヨウマは肩から引き千切られるかと思った。アームレイカーが無理やり戦闘機の形態から人型に合わせたものになるため中に収まっている人間の事などお構いなしなのだ。

リヨウマはアームレイカーの身勝手を、自らの筋力で抑える。アームレイカーが一瞬だけ止まり、その瞬時にリヨウマは手を持ち替えた。それだけで随分と違う。

「チエンジー・ゲッターー！」

その声に後から続いてきた二機の戦闘機も可変する。白い戦闘機はイーグル号の推進剤へと真正面から突っ込んでくる。ジャガー号と名付けられているらしいがパイロットからしてみれば堪ったものではないだろう。戦闘機にむぎむぎ突っ込んで戦死、という結果になりかねない。

まさしく犬死に。

その事からメカニック達が密かにゲッターの変形合体で死ぬ事を「ハジをかく」と揶揄しているのを聞いた事がある。なるほど。確かに飛行している戦闘機に突っ込むのは恥以外の何者でもない。

リヨウマの号令でジャガー号がイーグル号に接続する。その際、推進剤は最小になる。

だがその弱点を突かれれば元も子もない。最小、と言っても通常の戦闘機の通常速度に匹敵するのでは有視界戦闘を行っているパイロットへの精神的負荷ははかり知れない。

リヨウマはジャガー号が接続したのを確認して最後の機体、黄色い寸胴の戦闘機に目を走らせた。ベアー号と名付けられた機体は実のところ最も凶暴である。何せゲッターロボの脚部に相当する機体。

脚部、という事は最後に接続するという事を意味し、頭部に相当するゲットマシンに搭乗するパイロットは二機分の重量と集中力を要求される。

もちろん、イーグル号単体に比べれば推力は落ちている。なのでベアー号との接続時が最も危険度が高い。敵襲に遭えばまずお終いだ。リヨウマはわざと推力を上げた。ベアー号が引き離されまいと追いつがってくる。唇を舐めて呟いた。

「来い、来い！ 来い、来い！」

何度もベータ部隊に居た頃にそらんじた言葉を発して自らを鼓舞する。ベアー号はその呼びかけに応じるように二機へと接続した。三機が一体になった時、合体シークエンスが最終段階を迎える。ジャガー号から細分化されたマイクロマシンが放たれると同時にゲッターの剥き出しの腕が伸びた。それを覆うマイクロマシンの装甲は赤と白の混合だ。剥き出しの機械部分にはエネルギーパーティションが走っており緑色のゲッター線の血潮を滾らせる。

両腕が揃い、リヨウマは今度ベアー号へと命じた。脚部装甲が展開されゲットマシン三機同時に急制動がかけられる。最後の仕上げだ。ゲッターチェンジが成されるかに思われたが赤い警告アラートが視界を塗り潰す。

「何だ？」

ジャガー号とベアー号は何ともない。だが問題のブロックはイーグル号だった。最後の最後、完全変形合体の段階において安全装置がかかったのである。リヨウマは舌打ちを漏らして口走る。

「またか！」

途端、緩やかにGが消滅していく。コックピットにはエアバックが展開され少しずつ衝撃を減衰していった。血液の急下降に暗転しかけるがリヨウマは持ち直す術を覚えた。一瞬だけ脳内に回っている血を踏ん張って止めてやれば暗転せずに済むのだ。

力技には違いなかったがこれだけのモンスターマシンに力技以外で立ち向かうなど不可能だった。ジャガー号、ベアー号の分離がモニターで伝えられる。耳朵を打ったのは明瞭な女の声だった。

『お疲れ様です、リヨウマさん』

このサオトメ研究所の頭脳、AIのミチルの声だ。リヨウマはようやく口中に感覚が戻ってきたのを確認するために声を出す。

「また安全装置か？」

『ええ。やはりゲッターへの変形合体には最終安全装置が弊害になるようです。それもこれも、全ては空席であるジャガー号、ベアー号の操縦を補うためなのですが……』

ミチルが濁す。リヨウマは計器の伝える情報を見ずに口にする。

「やつぱり、他の二機に誰も乗っていないのが問題なんだろうな」

コックピットがメカニックの手によって開けられる。リヨウマのイーグル号は実際に空を飛んでいたのではない。サオトメ研究所内のシミュレーションで飛行訓練を行っていたのだ。イーグル号の失敗を関知されてまたしてもネフリムに寝首を掻かれては堪らないというサオトメの提案だった。

「大丈夫ですか？ リヨウマさん」

「少しは慣れてきた。だがやつぱりゲッターチェンジの瞬間は眩暈がする」

リヨウマの感想にメカニックが笑った。

「そりやそうでしょう。何分、今はイーグル号単騎でのオペレーションを遂行するっていう無茶なんですから」

イーグル号に取り付いたメカニック達と共に白衣の研究者も見られる。リヨウマの視線に気づいたのか彼らはばつが悪そうにした。元々は自分のせいで死んだタツヒトの同僚だ。いい気はしないのだろう。リヨウマもヘルメットを担いで視線を逸らす。

「おれがこれを持っているのも何だか女々しいもんだ」

リヨウマは左腕につけた腕時計型の端末に声をかける。タツヒトの遺品であった。サオトメがリヨウマに持っているのと命じたのだ。リヨウマもそれは了承した。命を散らした誇り高い男を忘れるわけにはいかない。

『しかし、やはりイーグル号単騎オペレーションの成功率は五パーセントを切りますね。試算以上です』

ミチルの感想にリヨウマは言ってやった。

「さつさとおれよりも頑丈な奴を見つけて来い。そうじゃねえといつまで経つても張子の虎だ」

『リヨウマさんもやはりそれはお望みではない？』

「たりめえだろ。こいつがむぎむぎ腐っていくのを見ていられるかよ」

男として。何よりも自分に託したタツヒトの魂までもイーグル号と共に消え行くのは我慢ならない。時間が解決してくれる事でもなく、リヨウマはメカニックに向き直った。

「頼む！ てめえらの力を貸してくれ！ イーグル号を、ゲッターを一日でも早く使えるように！」

他人に頭を下げた事などベータ部隊でもなかった。だがリヨウマはこうして毎回シミュレーションの後にメカニックに頭を下げる事を欠かさない。有事にゲッターが使えない事こそが最も恐れるべき事態だからだ。

「やめてくださいよ、リヨウマさん。こつちなんてパイロットのいない状態を今まで何度も経験している。パイロットがいるだけありがたいんです」

メカニックの言葉は何よりも沁みた。リヨウマをタツヒトを殺した怨敵ではなく、あくまでゲッターを動かせるパイロットとして扱ってくれている。

「頼むぜ」

そう言い置いてリヨウマはその場を立ち去った。ミチルに、「次のシミュレーションは？」と尋ねる。

『十時間後ですが……、あまり根を詰めないほうがいいですよ。やはり三機三人、揃わなければゲッターは』

「てめえがそんな弱気でどうする？ まったく、女の声のAIってのは性格まで女々しいのかよ」

これでは先が思いやられる。リヨウマは自身を乗せているイーグル号へと一瞥を投げる。

最早ベータではない。あれが自分の棺おけだ。リヨウマはそうと

決めた男の眼差しを注いだ。

「そう、か。やはり、ゲッターチェンジの最終段階で問題が発生するか」

サオトメは深く椅子に腰かける。データを何度試算してもやはり最終段階での問題は拭えなかった。

『イーグル号単騎でのオペレーションに切り替えますか？』

ミチルの声にサオトメは首を横に振る。

「いいや、なればこそ、三機の合体にこだわらねばならんのだ。確かにイーグル号単騎のオペレーションにすれば成功率は上がるかもしれない。だがな、それは最早ゲッターとは呼ばん！ ゲッターロボは！ 三機によるコンビネーションを主軸に置いた超兵器。その強みを殺すなど最終手段でしかない」

『……ですがリョウマさんでも、今のところ一度としてゲッター1へのチェンジは成せていません』

サオトメは沈黙を挟む。ミチルのデータは絶対だ。間違いはない。だがそれならば何故、ゲッターは三機の意味がある。イーグル号に収まるリョウマだけの意思では駄目だ。それ以外の人間も組み込まなければゲッターロボとしての完成は見ない。

「三者三様、ゲッターの基本理念を覆す事は、さしものリョウマだとしても出来んか……」

『やはり適合者をまた探すほかないのでしょうか？ ですが博士の一

番の助手であったタツヒトさんは……』

濁すミチルへとサオトメは言い放つ。

「たとえば茨の道であろうとも、ワシはリヨウマとゲッターさえあればよいのだ。だがその道に、新しい息吹も必要かもしれないな」

新たなパイロットの選出。だが研究所内では最早不可能だ。リヨウマの身体能力がずば抜けているからこそ可能だったイーグル号の操縦。それと同質、あるいはそれ以上を望むなど不可能に近いだろう。

リヨウマはベータの操縦技術があったから慣れが早い。だがあれは天性のものに違いないのだ。他の人間にリヨウマと同じ期間を設けみっちり研修したところで無駄なのは目に見えている。自分はベータでの経験は全て忘れろ、と言い放ったがリヨウマはまだベータ部隊であった頃の矜持と理念を忘れられていない様子だ。

皮肉な事にそれがリヨウマと一般人を隔てる違いでもある。戦闘訓練を積んだ人間とそうでない人間では野生の猛獣と飼い慣らされた家畜ほどの差がある。リヨウマのあれは剥き出しの野生だ。だからこそゲッターについて来られている。リヨウマほどの素質を人間に望むのはやはり高望みだろうか。

『博士、リヨウマさんはよくやっています。それを、お褒めになられてはいかがですか？』

ミチルの提案にサオトメは鼻を鳴らす。

「褒める、だと？ 馬鹿を言うな。ゲッターチェンジに一度として成功していないのに奴を褒めるのか？ それこそうぬぼらせるだけだ。ワシは奴が一度でもゲッターチェンジを果たせば賞賛を送ろう。だが今のところ、リヨウマでさえもゲッターを御せていないのだ」

致命的であった。ゲッターロボを動かすにはやはり三人必要。しかも即席の三人では意味がない。リヨウマと同じか、あるいはそれ以上の人材。それがなければゲッター1はおろかプランにあるゲッター2、ゲッター3への変形合体も成せない。

『リヨウマさん一人ではゲッター三形態の一つも扱えないのでしょうか』

ミチルの懸念にサオトメは沈黙を返す。リヨウマと同じかあるいはそれ以上。体力が勝っている必要はない。何かが尖っていればいいのだ。それが執念であれ、野望であれ関係がない。リヨウマよりも勝っていればいいのは体力や筋力ではなく精神的な部分であった。

ゲットマシンの機動に耐え得るのは真の意味で体力面ではない。超高速で移動するゲットマシンを最後に御するのは実のところ精神力である。

計器が見えずとも、己の本能で変形のタイミングをはかり、レバーを引いてやればいいのだ。だがそれを自分以外にどう伝えればよいのだろうか。自分とタツヒトは、それを理解していた。最早高齢の自分に代わり、タツヒトならばあるいは、と感じる。暴れ馬のゲッターとはいえ、リヨウマの力技とタツヒトの愛情があれば言う事を聞いたのかもしれない。しかしもうタツヒトは死んだのだ。いつまでも死者にすぎるのはみつともない。何よりも自分から切り捨てた犠牲である。

「ゲッターを動かせる適合者を、もう一度募るほかあるまいか……」

またしても地道な作業だな、とサオトメは胸中にひとりごちる。今度はタツヒトのような協力者はいない。本当に一人きりでやらねばならないのだ。その疲労感がサオトメに押し寄せてきた。タツヒトがいなくなつて十年は年老いた気分だ。

『その事ですが、第十三次プラネットシエル計画の会合が開かれる手はずとなっております』

スケジュールを読み上げるミチルの声に、休む事も出来ないか、とサオトメはデータに目を通した。その中に要注意団体と名指しで挙がっている団体名があった。

「ハンプティダンプティ？ 何だこれは？」

『ご存じないのですか。我が国で反プラネットシエルを掲げている団体ですよ。ハンプティダンプティ。卵の殻の割れる童謡にちなんでいます』

「王様も誰も、卵を元には戻せない、か」

呟いてそのリーダーと思しき人物を捉えた写真に目をやった。サ

オトメはその顔立ちを見た瞬間、肌が粟立った。思わず立ち上がり、「こいつは……」と声にする。

『ハンプティダンプティのリーダーと思われる男です。年齢も国籍も不明。ただ一つ明らかなのは名前だけです』

「その名は？」

サオトメは口角を吊り上げる。これは愉悦だ。リョウマを見つけた時と同じ。本能的な部分がこの男を必要としている。

『ジン・ハヤト。それがこの男の名前です』

「ジン・ハヤト、か。なるほど。興味深い」

サオトメは椅子に腰かけてデータを漁り始めた。ミチルが尋ねる。

『博士、何を……？』

「見て分らんか？ この男のデータを集めている。お前も手伝え。大至急だ」

『相手はテロ団体ですよ？』

「この男の眼だ」

唐突な言葉にミチルは狼狽しているようだった。

『何です？』

「狂気に走った眼は毎日のように鏡で拝んでおるよ。ワシと同じ眼をしとる」

ならばこの男は、自分と同質かそれ以上の執念を持っている可能性があるという事だ。もしそうならば、と思うとぞくぞくする。

『博士。これは過ぎた言葉かもしれませんがこの男は危険です。ゲッターのパイロットに選出しようなど、考えないほうが』

「ミチル。ワシが自身に隷属する者だけをゲッターのパイロットに据えると思っているのか。そのような価値基準でワシがパイロット選出を行っているか？」

『……違うのですか？』

「逆だ！ ワシは、自らの首筋を搔つ切ろうとするような、無頼の輩こそ、ゲッターに相応しいと考えている！ ワシを殺せるような凶暴な人間だ。そいつこそがゲッターを、ひいてはこのサオトメの下につく事になるのだ！」

愉悅にサオトメは笑みを浮かべる。AIであるミチルでさえもその笑みの意味に驚嘆したのが分かった。

『博士……、あなたの命はあなただけのものでは』

「そういう意味ではないよ、ミチル。これは、人間にしか分からぬ業だ」

自分を殺せるほどの人間でなければゲッターの闇に吞まれてしまっただけだ。人間を超えなければ、ゲッターは認めない。ミチルは、『不可能です』と返す。

『自分が殺される事まで想像するなど』

そこではたとサオトメはキーボードを叩く手を止める。人工知能ミチル。このサオトメ研究所の頭脳。だが……。

『博士?』

その沈黙と挙動の静止に戸惑ったのだろう。サオトメは再びハヤトの情報を集め始めた。

「……何でもない。つい昔を、思い出してしまっただけの話だ」

第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ 4」

何度目かの悪夢でリョウマはベッドから跳ね起きた。荒い呼吸を吐いて額の汗を拭う。もう何日もまともに眠れていない。

『リョウマさん。やはり、ゲッターの負荷が』

ベッドの傍にあった端末からミチルの声がある。リョウマは、「かもしんねえな」と強がった。

『今ならば、博士に申請すればベータ部隊に戻れます。もしかしたら、ですけれど』

「無理だな。あのジジイがせっかく掴んだチャンスを逃すわけねえ。それにおれも託されちまっているんだからな」

『タツヒトさんの事ならば、あなたの気に病む事では』

「気に病むとか、病まねえとかじゃなく、これはケジメだ」

発した言葉の意味が分からないのかミチルがおうむ返しにする。

『ケジメ？』

「そう、男にしか分からねえもんさ。あいつの魂が、おれを安息に殺してくれもしねえ。きつと最も酷い死に方だろうぜ、おれは。タツヒトは、一番尊い死に方が出来たんだ。あのゲッターって言う鬼の腹でな。だっていうのに、ゲッターはおれには心を開いてはくれないらしい」

タツヒトの怨念でも宿っているのかもしれないな、とらしくない感傷に浸る。ならば最終安全装置で常に拒み続けるのもある意味頷ける。

『ゲッター側に問題があるのでしよう。今、メカニックと相談して改善要求をしています』

そういえば、とリョウマはミチルの声がある端末に目を向けた。

「お前はサオトメ研究所の頭脳なんだよな？」

『ええ。そうです』

「おれと話しているお前と、メカニックと話しているお前がいるのか？」

『それどころか博士にデータを送っている私と今も防衛網を走らせて』

いる私もいます。ゲッターを管理している私も』

「こんがらがっちゃまいそうだな」

『意外と快適ですよ？ 自分を何個にも切り分けるのは』

「出来そうにないな」

少なくとも人間のうちは。リヨウマは拳を握り締める。覚えず力が籠っていた。どうしてチェンジ出来ない。

何が拒んでいる？ リヨウマは直感的にただ最終安全装置が降りないだけではない事を感じていた。

最終安全装置はパイロットの生存を第一に考え出されたものだ。だというのに今まで死者を何人も出してきたのはおかしい。矛盾している。リヨウマは最終安全装置が自分を試しているのではないかと考えていた。だがこの思考が正しければ、ゲッターはどこまで人間を弄べば気が済むのだ。

怒りに今度ははらわたが煮えくり返りそうだった。タツヒトを殺した、他のパイロットも。それらの怨念かあるいは靈魂が語りかけてくるのだ。お前もこちらに來い、と。ゲッターに乗る頻度が高くなればなるほど、その悪夢を見る事が多くなった。死者が手招いている。ゲッターに乗れ。ゲッターに乗って醜く死ぬ。ゲッターに乗って人間の尊厳を叩き潰される。

「……ベータがよちよち歩きの赤ん坊相手だっって言われても文句言えねえな。あれは少なくとも安全だった」

マシンに精神を持って行かれるなど一週間前のリヨウマならば考えもしなかった事だ。だがあのマシンだけは違う。血液の一本一本に染み渡り、神経を冒すあの機械群は。鬼を成すあの機動兵器は。

『リヨウマさん。降りる事は、いつでも出来ます』

ミチルの提案は意外だった。この研究所のAIにしては温情のある言い草だ。

「意外だな。てめえはジジイの側なんだと思っていたが」

『私は究極的にはこの研究所を守る役目ですが、ゲッターの悪夢を見るほどに精神を病んだ人間を何人も見えています。だからこそ、ゲッターに呑まれようとしている人間を放ってはおけないんです』

「ありがてえ話だが、聞かなかった事にする」

リヨウマの言葉にミチルは驚愕の声を出す。

『何故です？ ゲッターから降りる事を躊躇う事なんて』

「躊躇うとすりや、おれはまだ一度としてゲッターでネフィリムに勝っていない事だ」

リヨウマの言葉の意味が分からないのだろう。ミチルは疑問の間を置いた。

「ゲッターを使いこなせていない。ゲッターにさえも変形出来ていないんだからな」

『それはこちらの情報不足で……』

「それだけじゃねえのさ。ゲッターは、何かを待っている。待つてその間におれを鍛えているんだ。ゲッターって言う暴れ馬を乗りこなせるまでに。何を待っているのか」

リヨウマはベッドに寝転がった。

「おれには分からねえけれど」

ゲッターの待つている時までには何かが起こるのだろうか。それこそ馬鹿な考えだと感じる。サオトメに感化でもされたのか。

『……不思議な宿縁ですね。博士も、同じような事を』

「おれがああジジイと？ 冗談きついで、ミチル——」

その時、激震がリヨウマの部屋を揺さぶった。瞬く間に警報が鳴り響く。耐震構造であり、ネフィリムの一撃にも耐え得る研究所そのものが揺さぶられている。リヨウマは飛び起きてパイロットスーツではなく普段着に着替える。腕時計型の端末を左手首につけて部屋を出た。

「何が起こったって言うんだ！」

この研究所がちよつとやそつとで壊れないのは先の戦闘でも明らかである。だが研究所は地響きを立てている。まさか、という予感が突き立った。その時、が来たと言うのか。

「ネフィリムか？」

自然と足はイーグル号の格納庫へと向かっていた。その途中すれ違ったメカニックを捕まえる。

「おい！ どうした？」

「分かりません！ ただこの研究所に爆撃を仕掛けているようなのですが……」

「爆撃？ そんなもん、前見せたバリヤーでどうにかすればいいだろうが」

リヨウマの考えにメカニックは頭を振る。

「いえ、あのバリヤー、実は致命的な欠陥がありました」

メカニックの口から語られたのはバリヤーの性質だったが小難しい理屈は自分には性に合わない。手短に答えを聞き出そうと肩を揺さぶった。

「つまり、バリヤーの展開口に人が立っていると何も出来ないんです！ バリヤーで一般人や関係者を両断してしまつては元も子もないですからね」

展開口に人が立つ。それだけでバリヤーが無効化されるというのか。リヨウマはその戦法を使おうとする相手を頭に思い浮かべようとする。

「……レプリカント」

「可能性としては、あり得ますが……」

濁したメカニックを他所にリヨウマは駆け出した。メカニックがその背中に声を投げる。

「リヨウマさん！ どこへ」

「レプリカント野郎だつてんなら、入ってくるのは決まってる！」

廊下を人々とは逆走する形で走るリヨウマにミチルが声をかける。

『リヨウマさん！ どこへ行くつて言うんです？』

「この研究所で最も警備と装備が手薄な場所を、おれは知っている」

その言葉にはミチルでさえも驚愕した様子だった。

『ないですよ。そんな場所』

「あるんだよ。前回ベータで出た時、カタパルトハッチが開きつ放しになっていた。そこからならば入れるはずなんだ」

つまりベータ格納庫。その場所こそがサオトメ研究所のアキレス腱であった。だが、とミチルは逡巡する。

『でも、そんなところから入るなんて。だって間違えればベータが飛び出して粉々ですよ?』

「だから粉々になっても入ってやろうって奴なんじゃねえかって話だよ」

それがレプリカントならばまさしく、であった。ミチルもリヨウマの考えを読み取ったらしい。『熱源反応を探ります!』と声を張り上げた。

「入ってくるとしたら来やがれ。お礼参りで行こうじゃねえか」

リヨウマは拳を握り締めた。

第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ 5」

爆撃機は一昨日死んだ成金から買い上げたものだ。

ベータとは違い全翼型の三角形の爆撃機はどここの国のものなのかは分からないようになっていた。ちょうど国家を示す場所がマスクングされているのだ。もちろん出所を明かさなためだろうがハヤトからしてみればそれもどうでもいい事柄の一つだった。

「ハヤトさん。その、バリヤーを無効化するために張った連中とは」「連絡はまだ取れている。どうやらサオトメ研究所は関係者の線も消せていないらしいな。手ぬるい。どこまでも手ぬるい」

ハヤトはアサルトライフルを小脇にして侵入口を目指した。この研究所で唯一常に開いているのは戦闘機のカタパルトハッチだけだ。「でもあんな場所……。もし戦闘機でも出てくれば俺ら木っ端微塵ですぜ」

部下の声にハヤトは、「その時はその時だ」と応じてワイヤーの強度を確かめた。ワイヤーで屋上から降下しカタパルトハッチより侵入する。

第一班がまずは潜入し、その次に第二班である自分達が入る手はずだった。もちろん第一班を用意したのは先に部下が提言した戦闘機の飛び出す可能性を考慮に入れての事だ。ハヤトの言う通りに動く第一班はPMC崩れの傭兵達だった。全員成金の金で買ったのだ。あのカードは時限爆弾であったが、それまでにカードのIDを別口座に移ししつかりと金はいたっていた。

「傭兵つてのはオレはお天道様の次に信用出来る。絶対に命令した仕事はこなすからだ」

第一班が手馴れた様子でカタパルトハッチに取り付き銃を突き出してから仲間に潜入のサインを送った。ハヤトはまずは高みの見物だ、とその様子を見守る。カタパルトの向こうで銃声が響いた。何人か死んだか、あるいは殺されたか。

銃声が止む前にハヤトは動き出した。それを部下が制する。

「ハヤトさん！ まだ銃声が！」

「馬鹿野郎。だからこそなんだよ。混戦になれば、オレ達が本命だと連中には分からんだろうが」

ハヤトはそれも狙いのうちだった。傭兵との混戦で何人死んだだろう。それを考えるだけで恍惚状態になる。血と硝煙の匂い。堪らなく自分を狂わせてくれる。

ハヤト達第二班はカタパルトハッチよりサオトメ研究所に入る。予想していたのは傭兵達の圧勝か、それとも渾然一体となった戦場の地獄絵図のどちらかであったが、ハヤトの目に映ったのは一機のベータがメカニックや研究員達を守り圧勝している様子であった。

ベータは携行火器を用いて傭兵達を蹴散らしていく。もちろんベータかあるいは戦闘機による迎撃行為は想定していた。そこまで考えなしのハヤトではない。しかし傭兵達が圧倒されるなど誰が予想出来ようか。ハヤトは素早く隔壁の傍の壁に隠れた。ベータの機銃掃射が遅れて入ってきた部下達を抹殺していく。ハヤトはベータに乗り込んでいるパイロットがただの素人ではない事を見抜いた。「戦い慣れてやがる……！」

侵入口はここからしかない。バリアーの生成が部下によって止められており爆撃が依然として続いているが内部に入れないのでは研究施設を攻撃する事もましてや調べる事も出来ない。

『おあつらえ向きに出てきやがったな』

パイロットの肉声だろうか。ハヤトは高圧的な男の声に舌打ちをする。こうもしてやられて何も感じないハヤトではない。プライドの証のようにコートの襟を握り締めた。

何もかも自分のものだ。部下の命でさえも。自分だけが勝手をする事が出来る。自分だけが唯一無二なのだ。自分だけの――。

その尊厳は傷つけられ骸となって転がっている。今にも飛び出しかねなかつたがぐつと理性で抑えた。今飛び出してもただの的だ。

『ボスはそうやって高みの見物かよ。言っておくが、お仲間の命はためえのもんじゃねえぞ』

その言葉はハヤトの矜持に傷をつけるには充分だった。誰も、神でさえもハヤトにその言葉は吐けるものはいなかったというのに。

次の瞬間、ハヤトはアサルトライフルを手に駆け出していた。無論、ベータの照準がこちらを向く。だがハヤトは寸分の狂いもなく銃口をベータの銃口に合わせた。掃射するがそれはほとんど精密射撃に近い。ハヤトの目論見通り、一拍速かったこちらの銃弾がベータの保持する携行火器を内部から破裂させた。

パイロットはそれに気づいていないらしい。突然目詰まりしたとでも思っているのか何度も銃を振っている。それこそが最大の好機だった。ハヤトは素早くベータの懐へと潜り込む。データ通りならばベータには近接戦闘火器はない。直接ハヤトを殺すにはナイフを反対側の手首から取り出すほかないのだが、その場合、随分とロスが発生する。

パイロットがハヤトの動きに気づいて近接戦闘に持ち替える前に、ハヤトはベータの下腹に向かって掃射を行った。無論、何も考えずに撃ったのではなく全てベータの弱点とされる精密機器の接合部だった。ショートの火花が散りベータが瞬く間に無力化される。

『どうなってるんだ！』

パイロットの悲鳴にハヤトは最後の仕上げだとコックピットへと手をついた。ベータのコックピットブロックは有視界戦闘においても死角。この状況でメインカメラを切る馬鹿でもあるまい。

ハヤトは腰に提げたナイフを手にして刃を舐める。これで目標を取り逃がしたと思っているパイロットに一杯食わせてやる。コックピットハッチを開くためにハヤトはパネルへと手を伸ばした。その時である。コックピットハッチが蒸気を噴出して射出された。恐らく最悪の事態を想定したのだろう。ハヤトは吹き飛ばされる形になったがそれでも当初の目的は果たした。

「何だっつてんだ、一体」

ベータのコックピットから出てきたのは凶悪な顔をした男だった。これがベータのパイロット？ とハヤトは疑問視する。そこいらの囚人か何かだと言われても納得が行く。

「何だ、てめえ」

ガンを飛ばす相手はまさしくチンピラのそれであつたがその物腰

から素人でないのは察しがついた。ハヤトはナイフを手に唇を舐める。

「このサオトメ研究所の秘密、もらい受けに来た」

「そいつは難儀なこったな。レプリカント野郎……！」

怒りを滲ませた相手の声にハヤトは、「偽人類」とせせら笑う。

「オレは偽人類ではない。反政府組織、ハンプティダンプティのリーダーだ」

「ハープティだか何だかは知らねえが、どこの頭だつて言つても、腕が立たなきやお終いよ」

どうやら相手は直感的に戦闘に慣れているだけの馬鹿だと判じる。直感で戦っている間なら自分は負ける気がしない。

ハヤトは一気に肉迫した。相手も生身、ならば動きの素早いほうの勝ちだ。上段から打ち下ろしたナイフの一撃を相手は腕を盾にして止める。まさか腕一本犠牲にするつもりか。自分ならば腕を切り落とす事など動作もない。だが相手は距離を詰めたかと思うとハヤトの横っ腹に蹴りを放った。臓腑がダメージを訴える。だがこれしき、意識も飛ばない。クスリよりも軽い。

「効かねえな……。下手なモルヒネよりもよっぽどマツサージだぜ」

「怪物野郎が！」

放たれた声にハヤトはナイフに力を込める。だが相手の蹴りはただ闇雲にハヤトへとダメージを与えるものではなかった。

接近戦がまずいと知ったのかハヤトを引き剥がすように今度は蹴りが放たれた。だがそれを察知出来ぬ自分ではない。すぐさまナイフを手離し、相手の蹴りに使った足を逆に蹴つてやって距離を取った。再び中距離線になったが今度はハヤトの判断のほうが速い。即座に拳銃を所持し相手の額へと照準する。

勝つた、と感じたがその直後に相手は飛び退いていた。確実に撃ち抜いたと感じたのに相手はまるで予知でもしたかのように跳躍していた。その動きは本能に刻まれたものらしい。動いてから、「撃ちやがった！」と喚いた。これでは猿を相手にしているようなものだ。

「やれやれ。これでは獣だな」

「上等。獸同士の食い合いと行こうぜ」

相手が構えを取る。訓練されたものだと感じつつハヤトはナイフを上段に蛇のように腕をくねらせた。これは我流だ。だがこの構えで負けた事はない。突きを放つ。無論、相手の反応速度ならばかわしてくるだろう。それこそが狙いだ。ハヤトは影を思わせる無音の動きを見せた。相手には視認すら出来まい。その証拠に、「消えた？」と相手は首を巡らせている。今こそ相手の真裏にいるというのに。その隙だらけの首に、取った、と確信する。

その瞬間、ハヤトの神経を震わせたのは経験による第六感であった。慌てて飛び退く。ハヤトと相手の合間を縫うように銃弾が放たれた。待機中のベータの携行火器が火を噴いて自分を狙ったのだ。あまりにも殺気に乏しい攻撃に素人か、と感じたが声の主に目を瞪る。

『リヨウマさん！ 大丈夫ですか！』

「女の、声……」

「ミチル！」

リヨウマ、と呼ばれた男は今しがたハヤトの接近に気づいたらしい。やはりこいつは本能的だと思いつつハヤトはこの状況では動きようのない事に気づく。リヨウマに見張られ、ベータの銃口が自分を見据えている。どうすれば、と視線を走らせていると声が響き渡った。

「そこまでだ、馬鹿共め」

その声の主に二人して振り返った。白衣を纏った矮躯の老人が威風堂々とハヤトを睨み据えている。作戦前の示し合わせのデータの中にその顔は見た事があった。

「サオトメ博士……」

だがまさか、対象が自分から現れるとは思ってもみない。ハヤトの驚きを他所にサオトメは確信めいた口調でハヤトへと声をかける。

「その動き、リヨウマと同等かそれ以上だろう。お前は理性で戦いをやるタイプだ。リヨウマとはある意味では正反対だな」

自分の戦闘スタンスを見抜かれハヤトはぴくりと眉を上げる。ど

うやらこのサオトメという研究者、ただの隠居者ではないらしい。

「……オレの事を調べたな？」

「お互い様だろうて。お前もワシの事を調べたな？ 襲撃先に見合う相手かどうか。バリアーの位置に人間を配置し、爆撃でベータや戦闘機の動きを制する。これらは全て理性で建てられた計画だ。決してその場凌ぎではない」

「ジジイ！ こいつ、バリアーの位置に人なんざ！」

糾弾するリヨウマにサオトメは、「だろうな」と冷静だった。

「バリアーを制するには最も相応しい対処法だ。だがな、ジン・ハヤト。こうは考えなかったか？」

サオトメの取り出したのはリモコンである。まさか、と背筋が凍りついた。それを悟ったようにサオトメが笑みを刻む。

「相手が自分を上回る、人でなしであるという事は」

ボタンが押されると爆撃の揺れが収まった。リヨウマが首を巡らせて声を張る。

「何だ？ 爆撃機がどっか行っちゃったのか？」

「そうではない。リヨウマ。確かにバリアーの前に人が立てばセーフティがかかる。だがそれを無視すれば何て事はない」

サオトメの非人道的なやり口によくやくリヨウマは気づいたらしい。先ほどまで自分と戦っていたのもなんのその、今度はサオトメへと飛びかかった。

「てめえ！ やっぱりおれは、てめえを最初に殺すべきだったぜ！」

リヨウマの手刀がサオトメを射抜こうとする。サオトメも口角を吊り上げた。

「今さらに気づいたか。馬鹿者め」

その言葉を制するように木霊したのは警鐘だった。全員が赤いランプの灯った格納庫の天井を見やる。

「またテロリストか？」

しかし発せられたアナウンスは全くの予想外だった。

『ワームホール発生！ ネフィリム、来ます！』

「ネフィリムだと？」

ハヤトからすればどうしてという一事だ。ネフィリムはプラネットシエルの外殻に現れるはず。どうしてサオトメ研究所を襲う？

「こんな時にー！」

舌打ちを漏らしたりリヨウマがサオトメを睨み据える。

「てめえを許したわけじゃねえ」

「許しなど」

鼻を鳴らしたサオトメはリヨウマから視線を外しハヤトへと声を振り向けた。

「どうする？ お前達の革命は潰え、ここで死ぬか？」

挑発的な物言いの老人にハヤトはまさかと思いつつもネフィリムという脅威に対しては全くの素人の自分を自覚した。どうしてだか知らないがこの老人はネフィリムの発生まで視野に入れてここに佇んでいる気がしたのだ。

「恐らくは数が揃った事を悟られたな。リヨウマ！ 奴が来るぞ」

「そのためのゲッターだろうが」

「……ゲッター？」

聞いた事もない単語にハヤトは面食らう。サオトメはハヤトを見据え言い放った。

「革命や反政府にうつつを抜かすのは勝手だが、どうせならもつと面白いシヨウに参加してみないか？ ジン・ハヤト。国民や個人の命など小さい小さい、それこそ人類規模の盤面に挑戦しないかと、ワシは提案しとるのだ」

ハヤトにはわけが分からない。だがリヨウマは言わん事を察した様子だ。

「ジジイ！ まさかてめえ、このイカれたテロリストをゲッターに乗せるってのか！」

「何か不都合かね？」

「不都合も何も！」

リヨウマはハヤトを指差す。その眼には敵意が滲んでいる。

「こいつは研究所に潜入してきたテロリストだ！ そんな奴をゲッターみたいなもんに乗せて大丈夫なのかよ」

「心配あるまい。既に鼓動が高鳴っておるだろう？ ジン・ハヤトよ」
サオトメの見透かしたような声に息を詰まらせる。その通りだった。何が起るのかはまるで分からないというのに脈動がある。リヨウマほどの怪人物が恐れているのも原因の一つだった。一体、野獣が忌避するものとは何なのか。ハヤトの中の知的好奇心がゲッターを求めている。

「ついて来い。なに、また一人、地獄への咎人が増えただけだ」

第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ 6」

イーグル号、ジャガー号、ベアー号はそれぞれ並行してカタパルトに格納されており、三機が一度に発進出来るように既にメカニックが取り付いている。整備を終えたメカニックがリヨウマへと声を振り向けた。

「リヨウマさん。イーグル号のチェック行っておきました。……その方は？」

「線の切れたテロリストだよ」

リヨウマの言葉を冗談だと感じたのかメカニックは微笑む。

「ジャガー号にはハヤトに乗ってもらおう」

「操縦訓練も受けていない奴を乗せられるのかよ」

「心配あるまい。ハヤト、乗りながら操縦桿を握るくらいは出来るな」
ぎよろりと睨んだサオトメにリヨウマはとことん本気なのだと思いついた。サオトメはハヤトを何故だか買っている。ハヤトが素直に頷くとも思えなかったがハヤトはゲットマシンを見つめたまま放心していた。

「……何だこれは。見た事もないマシンだ」

「これこそがゲッターだ」

サオトメの返答にハヤトが唾を飲み下す。ゲッターと呟いた男の眼は期待と不安に渦巻いていた。リヨウマは、「おれは御免だぜ！」と口にする。

「こんな奴と二人で地獄に堕ちるなんてな」

「安心せい。ベアー号にはワシが乗る」

思わぬ言葉だった。腕時計型の端末から声が走る。

『博士！ ですが博士の身体では』

「この研究所で最もゲッターを理解している人間が乗るのは何の不都合もあるまい。なに、ずっとパイロットに居座ろうというのではない。しかしワシは自らの肉体でもって知りたいのだよ。ゲッターの誕生！ その瞬間を！」

どうやら狂った科学者であるのは相変わらずらしい。リヨウマは、

「途中で死ぬんじゃねえぞ」と言いやった。

「そうなるとベアー号が空席になるからな」

「ワシが死ねば自動操縦に切り替えさせる。それくらいの準備はしてあるわ」

サオトメはパイロットスーツを着込みヘルメットを被る。リヨウマは普段着である事に気づいた。

「おれはどうすりゃいい?」

「時間もない。なに、リヨウマ。お前の肉体は飛び抜けている。生身でやつても上手く行くのならばこれから先どのような逆境にも耐え抜くだろう」

要は生身で戦えと。リヨウマは口角を吊り上げて身震いした。

「……冗談きついで、ジジイ」

「ハヤトはこれを被れ」

サオトメの放ったのはヘルメットだった。バイタルサインなどをモニターするヘルメットでもしもの時にはハヤトを電流で昏倒させる事も出来る。やはり布石を打たないほどの老人は馬鹿ではない。

「この、ゲッターに乗せられるのか?」

「ゲッターに乗るのは線の切れた人間くらいがちょうどいい」

サオトメの言葉を潮にリヨウマはタラップを駆け上がった。イーグル号のコックピットの周囲にいるメカニックが散り散りになる。サムズアップを寄越すメカニック達にリヨウマもそれを返した。

「さて、どこまでおれの言う事を聞いてくれるか? ゲッターよ」

イーグル号を起動させリヨウマは回路を開く。通信システム、及びゲッターへの可変プログラムをイーグル号優先に変更、ネフィリム迎撃システム、ゲッターロボのOSが読み込まれディスプレイに有視界戦闘モードが映し出された。

発進位置に入りリヨウマは肩口まで上がっていたアームレイカーに手を入れる。アームレイカーの重みを感じ取りつつリヨウマの指紋、静脈を確認したシステムが開きゲッターに張り巡らされた幾重ものパスコードを入力していく。

「発進準備完了、イーグル号、ナガレ・リヨウマ」

『ベアー号、サオトメ。こちらも発進準備完了だ。ジャガー号のシステムはアクティブにし、ハヤトはアームレイカーに手を入れておけ。折らぬようにな』

それはアームレイカーが折れないように、ではなくハヤトの腕が折れないように、であった。リヨウマはせいぜい意識を飛ばさない事だ、と笑みの形に刻んだ顔を撫でる。ここにはタツヒトを含め数多の犠牲が成り立っている。その犠牲を決して無駄にしない。リヨウマは深呼吸を一度してから腹腔に力を入れた。

「行くぜ！」

ゲットマシンが発進する。推進剤が焚かれ一気にGが押し寄せた。だがこのようなものは前座にもならない。ゲッターチェンジが成功するか否かなのだ。

空へと飛び出したイーグル号の有視界戦闘画面に捉えたのはネフリムの巨躯だった。前回と同じ、人型タイプ。システムが「オベリスク型」の判定をする。その左腕がなかった。まさしく前回のネフリムが攻撃してきたのだ。リヨウマはこうも早く因縁が返せるとは思いもしなかった。

「……見てろよ。タツヒト。借りは返す」

ネフリムの眼窩が赤く煌く。リヨウマは即座にアームレイカーを引き、イーグル号が空中機動をする。ビームが放たれたがサオトメ研究所は先んじて張っていたバリアーによって無事だった。

「これ以上、好きにはさせねえ！ 各機、ゲッターチェンジだ！」

メインレバーを引き、ゲッターチェンジを声紋認証させる。ジャガー号とベアー号が合体軌道に入った。鼓動が早鐘を打つ。落ち着け、と自分に言い聞かせるも何度も失敗してきた手前、平静でいられるわけがなかった。

「チェンジ、ゲッター」

イーグル号が主翼を畳み合体軌道に入ったジャガー号を包み込むように動く。機首が天上を向き、コックピットが自動的に移動した。ジャガー号からは悲鳴が漏れ聞こえる。

『い、嫌だ！ 降りしてくれえ！』

「今さら泣き言言ってじゃねえ！」

こちらとて初めての三人での合体だ。成功する確率は極めて低い。イーグル号が推進力を落としジャガー号がイーグル号の接合部へと突っ込む。ジャガー号の合体が確認されてからベアー号がジャガー号へと合体軌道でタイミングを合わせた。さすがはサオトメだ。タイミングに関しては申し分ない。だがこれからである。三機が合わさってから、最終安全装置が解除されるまでがゲッターの合体変形の如何であった。

ジャガー号のシステムがイーグル号の主翼から必要なパーツへとアクセスする。主翼から運ばれたのはゲッターそのもののメイン推進力となるウイングであった。ジャガー号から発生した両腕がマイクロマシンの赤い装甲版を形成させ瞬時に展開される。ベアー号も脚部を完成させた。後はイーグル号が最終的に変形すればゲッター1へのチェンジは果たされる事になるのだがここで警報が鳴り響いた。

「何だ？」

『最終安全装置に異常発生！ リヨウマ、お前のイーグルだ』

サオトメの声にリヨウマはイーグル号のアームレイカーへと力を込める。だが赤く染まったイーグル号のブロックは次々とアクセス権を拒否し先ほどまでリンクされていたジャガー号やベアー号にも影響していく。

『やはり正規のパイロットでなければ完全合体は不可能なのか……』

サオトメの呻きにそれだけではない、と感じていた。イーグル号だけが拒絶している。

これは怨念だ。

今までイーグル号で死してきた人々の靈魂がゲッターを完成させまいと取り憑いている。それを振り解くには自分が覚悟するほかなかった。

全てを投げ打つてまでもゲッターに乗るのか、乗らないのか。中途半端は判断を鈍らせる。リヨウマは呼吸が荒くなるのを感じた。視界も暗転しかけている。指先の末端神経が痺れこのままでは空中分

解もあり得た。耳朶を打つたのは様々な声音だった。

——ゲッターに乗れ。乗って死ね。惨たらしく死ね。醜く死ね。ゲッターチェンジを果たす事なく、この悪魔の腹の中で死ぬがいい。リヨウマはそれらの怨念の言葉を一喝する。怨嗟の響きも、死人の手招きも関係がなかった。

「……喧しいぞ、亡霊共。ゲッターで死ねだと？ 生憎、もう棺おけはここだって決めてんだよ。だからよ！」

リヨウマはレバーを思い切り引いた。加速度がかかりイーグル号のみならず全機体に過負荷がかかる。リヨウマは速度で全ての因縁を飛ばし切るつもりだった。

今までの事もこれからの事も、全て突っ切ってまで戦え。

「亡霊共！ おれ達を呪いたかつたらこの速度の向こう側までついて来るんだな！ チェンジ！ ゲッター！」

最終安全装置が解除されレッドゾーンに突入していたシステムがオールグリーンとなる。

ゲッターの頭部を象徴する機首が割れ、一对の角を顕現させた。亀甲型のエネルギーパーティションと顎の部分についた冷却装置が作動してゲッター線の混じった熱風を噴き出す。顔面の完成と共にウイングが両腕の側面に接合された。三機が加速度を伴いながら雲の合間に入っていく。

次の瞬間、空が雷撃で割れた。

円形に空いた空に佇むのは両腕を組んだ赤い羅刹の姿である。ジャガー号から伸びた幽鬼のように白い腕にまるで鉄甲のように赤い鎧がついている。全身これ武器とでも言うような威容に大気が震え次元が恐れ戦いた。

その名前は——。

「チェンジ！ ゲッター！」

リヨウマの声が轟き、ゲッターへのチェンジが果たされた事を宣言する。ゲッターは黄色い眼窩でネフィリムを睥睨した。ネフィリムオベリスク型に比すれば羽虫に等しい大きさがそれでも今までのようなただの羽虫でない事は大地のうねりが証明している。

ゲッターの生誕を祝するよう天地が鳴動した。

『これが、ゲッター……』

『そうだ、これこそが……』

「ゲッターロボだ！」

第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ 7」

三人の声が相乗しウイングを展開させたゲッター1がネフィリムへと特攻する。その速度はまさしく神速。ネフィリムが抵抗する前にゲッター1の放った拳がネフィリムの腹腔を捉えた。その一撃で空気が割れる。巨体のネフィリムが人のそうするように後ずさった。

「こんなもんじゃねえぞ……。タツヒトと、他の亡霊共の恨みはな！」

リヨウマの声にゲッター1は顎に備え付けられた冷却炉から熱風を噴き出して左肩のウイングへと手を伸ばす。ウイングを形成していた皮膜が瞬時に消滅し、残ったのはウイングの骨の部分だった。掴んだウイングはそのまま武器となる。骨の部位は持ち手となり、根元の部分にはエネルギーの収束装置があった。その部分へと緑色のゲッター線が収束し斧の形状を成した。

「ゲッターエナジートマホーク！」

ゲッター線の貯蔵量が示され五パーセントを使用しトマホークのエネルギーが顕現した。ゲッター1はトマホークを振り回し正眼に構える。ネフィリムが眼窩を赤く染めた。

『ビームが来るぞ！』

「しやらくせえんだよ！」

リヨウマはアームレイカーを引く。ゲッター1が両腕を振るい上げ、緑色の発振した刃を打ち下ろした。ビームが断ち切られ、赤い光線はゲッターの遙か後ろの雲を叩きつける。

ネフィリムが硬直していた。直後、激震と共にその身体が両断される。衝撃波は樹海にも及び数キロ圏内が振るったトマホークの攻撃の余波を受けた。風圧がゲッター1の赤い身体を叩く。ネフィリムは甲高い断末魔を上げながら内側へと収縮する。

「放散爆発だ！」

慌ててゲッター1を下がらせる。赤い放散爆発の規模は今まで知っていた霧型や実態型よりも広がった。だがそれを抑制するように緑色の光の檻が拡散する。結果として放散爆発の規模は最小限に抑えられた。リヨウマは瞠目する。

『これも、ゲッターでネフィリムを倒す一つの要因だ。ゲッター線ならばネフィリムの放散爆発を極めて小さい規模に抑えられる』

サオトメの言葉にゲッターの力を思い知る。振るったトマホークの刃が霧散し、ゲッターはウイングとして左肩に収納する。骨格から蝙蝠のそのような皮膜が形成され、ゲッターの飛行を安定させた。

「……タツヒト。借りは返したぜ」

いや、これからだ、トリヨウマは考える。ネフィリムとレプリカントの根絶。それこそがタツヒトの、ひいては今まで散っていった者達への手向けへととなると。

『よし、研究所に戻るぞ』

サオトメの声は震えている。自分が予想したよりもゲッターの性能が高かったからかもしれない。それとも身体にがたが生じているのか。どちらにせよ、このまま研究所に戻るのはいらない。

「よし、ゲッターのまま戻るぞ。飛行は出来るだけ安全運転で——」

その言葉を遮ったのは突然の分離信号だった。それが走ると共にイーグル号、ジャガー号、ベアー号がそれぞれ独立機動する。リヨウマはわけも分からず空域に投げ出された。イーグル号の機動を押さえ、樹海に墜落しないようにするのが精一杯だった。

「何が起った!」

考えつくよりも先に新たな信号が発信される。それは合体信号であった。まさか、トリヨウマは感じる。自分は間違えてまたしてもゲッターへの合体信号など出したのだろうか、と。だが自分ほどのボタンにも触れた形跡はない。アームレイカーもおかしな方向に触れている事もない。

「おい! ジジイか? 勝手にゲッターチェンジなんてするなつて」

『違う……。ワシは何もしておらん』

サオトメの声に、だったら誰が、と声を返しかけてその可能性に思い至った。しかしその時には既に全機が合体軌道に入っている。ジャガー号が機首を上げて先導しその次にベアー号、脚部にイーグル号の順番だった。

リヨウマはアームレイカーを必死に引いて抵抗しようとするも既に成された合体軌道は解けば逆に危うい。ベアー号がジャガー号へと接続する。寸胴なベアー号はそのままジャガー号の白い機体の上に覆い被さる形となり背面リュックサックの推進剤タンクを形作つた。イーグル号はそのまま二機と接合し、両翼が畳み込まれて内部ウイングが変形し脚部を形成する。着地したその姿はゲッター1ではない。白を基調とし、赤い脚部のそれは簡素なアーム型の細腕を持っていた。ゲッター1とはシルエットも異なり、瘦躯である。ロケット型の頭部から射る光の眼光が投げられている。

「ゲッター……。ゲッター2だと……」

リヨウマの声に呼応したようにゲッター2は駆け出した。リヨウマはサオトメへと通信を繋ぐ。何が起こっているのかを明確にする必要があった。

「おい、ジジイ！ これ、あのテロリストがやったのか？」

『……信じ難いがそうに違いない。ジン・ハヤトはワシが思っていたよりもゲッターとの適合率が高かったようだ。まさか一度の騎乗でゲットマシンの特性を理解し、ゲッター2への変形合体を遂げるとは』

笑みの形に吊り上げたサオトメだったが額に汗の玉が浮いており限界なのが窺えた。ゲッター2は何をを目指しているのか、とリヨウマは進行方向を見やる。その先にはサオトメ研究所があった。

「まさか、研究所を襲おうってのか」

自分の仲間がやられた仕返しか、とリヨウマは感じたが直後に耳朶を打った通信の声にそうではないと思ひ知らされる。

『オレの、オレのおもちやだ！ オレの都合のいい、オレの暴力に耐えられるおもちやが！ こんな場所にあったなんて！』

どうやらハヤトはゲッターの力に呑まれているようだ。それとも元々の凶暴性が発露したのか。リヨウマはどちらにせよハヤトを止めねば研究所が無茶苦茶になる未来が見えた。

「……冗談じゃねえぞ。これ以上、テロリストに好きにさせるかってんだ！」

『リヨウマ……。コックピットハッチがある。そこまで行けるか？』
サオトメの言葉にリヨウマは目を見開く。

「馬鹿言ってるじゃねえぞ、ジジイ！ 単純に歩くだけでもどれだけの距離があると思ってるんだ！ それにイーグル号は一番下、脚部だぞ！ そんな状態から頭部のジャガー号を止めるなんざ……。電流は？ ヘルメットの電流はどうなった？」

『既に流しました……。ですが、ジン・ハヤトの脳波も脈拍も全く止まる様子はありません』

ミチルの声に、そうだろうと感じている部分もある。ハヤトは自分と組み合ってもまだ余裕のある様子だった。そんな人間に電流など痛くも痒くもなからう。

「どうするんだ！ このままじゃ」

その時、右腕のアームが動いた。細くなっているアームの先端から緑色のエネルギーを凝縮した武器が生成される。渦巻き、ちょうどドリルの形状を成した。

「ゲッターエナジードリル……。おいおい、武器までアクティブになっっているのかよ。ミチル！ そっちのシステムから武器管制システムに入れないのか！」

『やっています！ ですがリアルタイムでこちらの動きが阻害されておりジャガー号は完全にスタンドアローンの状態です！』

ミチルの悲鳴じみた声にハヤトがやっているのだ、という悪寒が走った。リアルタイムでシステムの書き換えをしつつゲッターを動かすなど正気の沙汰ではない。だがハヤトならば出来る。その確信がある。

『リヨウマ……。もうお前がやるほか打つ手はないようだ』

サオトメは必死で笑みを作っているが限界なのは見るも明らかだった。唇の端から血を滴らせておりこのままではサオトメも死んでしまう。

「おれがやるしか、ねえってのか……」

リヨウマはコックピットハッチを開いた。脚部状態のイーグル号は常に脚を動かしており、細かい砂利や石が散弾のように飛んでく

る。避けている暇はない。せめて頭部に当たってくれな、と願うだけだった。リヨウマは無理やりよじ登る。当然の事ながら稼動状態のゲッターをよじ登るなど通常は不可能だ。だがリヨウマも振り落とされないように必死だった。ベアー号に収まったサオトメの助力は期待出来まい。ちようど腹部に差し掛かったところでゲッターエナジードリルが撃ち出された。ドリルそのものを射出武器として用いたのである。緑色のドリルはバリアーに突き刺さったかと思うとその皮膜を干渉して消し去った。

『バリアー消滅！』の報が耳に届く。

『まさか、ゲッターエネルギーはバリアーを霧散させる効果もあるとは』

辛うじて意識を保っているサオトメの声にリヨウマは急がねば、と機械の出っ張りに手をかける。ゲッター2はそうでなくとも凹凸の少ない機体だ。だから少ない出っ張りを利用するには苦労と焦燥が滲んだ。もしハヤトに勘付かれれば自分はゲッター線の武装の前に消し炭になるだろう。

「……ふぎげんな。まだ一回目の合体成功だぞ。メカニックの連中も労わっていないし、何よりも亡霊共は納得しめエ」

いやサオトメ研究所の崩壊はむしろ亡霊が率先しているのかもしれない。そのような考えが浮かんだがリヨウマは必死で振り落とされないようにジャガー号のコックピットへと至る。通常の飛行形態ならば有視界戦闘だが合体時には自動的にコックピットが移動する。なのでリヨウマはわざわざゲッター2の首の後ろへと回った。首の裏にはコックピットシステムのパネルがある。パネルを開きパスコードを打ち込んだ。直後、蒸気を柵引かせてコックピットブロックが射出される。狂気の笑いを浮かべたハヤトが振り返ったのと、リヨウマが突っ込んだのは同時だった。

「よう」

拳と挨拶が同時に出る。リヨウマの拳が背後の無防備なハヤトのヘルメットを叩き割った。ハヤトはそのままコックピットへと突っ伏す。リヨウマはシステムへと手を伸ばした。推進剤の逆噴射と

アームレイカーを押さええて脚部の稼動を止める。緊急停止ボタンを押して祈った。

「止まれエー！」

ゲッター2がドリルを振り上げた形で静止する。そのドリルの切っ先がサオトメ研究所にかかる寸前であった。リヨウマは呼吸を荒くする。通信がようやく繋がり、ミチルの声が響いた。

『と、止まった……』

リヨウマは伝い落ちる汗を拭いながらゲッターというマシンの恐ろしさを改めて思い知る。この機体は自分達人類の、完全なる味方でもなければ従属でもないのだという事を。

第二話 「出撃指令！ ゲッターロボ 8」

投獄されたハヤトの処遇についてはサオトメが一任する事になった。

だがサオトメ自身も内臓に相当なダメージを負っておりすぐに復帰する事は無理だという。研究所を襲ってきたゲッターの威容に恐れを成したのか、メカニックも研究員も初陣を飾った割には無口であった。黙々とゲッター2の分離作業をするメカニックとデータを取る研究員を横目に見ながらリヨウマは確信を得る。

これだけは確かなのだというのは、ゲッターはネフィリムを倒せる。充分に対抗策となるのだ。リヨウマは左手首につけた端末をさすった。

「タツヒト。てめえの理想通りかは分からねえ。それに亡霊共が許しちやくれねえのもある。だがな、ゲッターは勝てるぜ。ネフィリムと偽人類共に」

それだけあればいい。自分にはそれだけで。

瞼を上げると時刻が表示されていた。惑星の公転とその速度が依然変わっていない事を彼は悟る。

だがそれは同時にこの惑星が何一つ変わっていない事。自分の役目が何一つ代わり映えのない事を示していた。ため息をつくときとコックピット内で白く変わった。どうやら空調が切れていたようだ。自分の眠っている間は出来るだけ機体を温存しておく。その判断に間違いはないのだ、と感じつつも凍死など真つ平御免だと設定を変え

た。

「奴は、ノエル、地上はどうなった？」

システムの一つが浮かび上がり表示時刻からつい昨日の事であるのが分かった。カメラの捉えた動画は荒々しいがネフィリムが赤い機体によって両断されたのを映し出している。広がる緑色の光。ゲッター線の光だ。彼はそれを見据えて目を細める。

「生きていたのか」

彼は画面をさすってネフィリムを圧倒した赤い機体を睨む。肩の裏から蝙蝠のような翼を生やし、赤い鬼の威容を持つ機体。間違いない。あれは――。

「ゲッターロボだ」

時刻を合わせ彼は思う。こんなに早く、いやこんなに待って訪れたのか。

「ノエル。現在地を表示」

システムが復旧しコックピット内が光で満たされる。次々とバツクアップデータと外周カメラが蘇ってゆき彼は今自分がどこにいるのかを自覚した。衛星軌道上に位置する人工衛星の一つに自分この機体は取り付いていた。

すつかり錆び付いたレバーを引くと機体が軋みを上げる。人工衛星の上に佇んでいたのは漆黒の鬼であった。身体中に赤い鉱石が付着しており粒子を発生させる。赤い輝きが灯った鬼からは生気とも知れないものが感じられた。眼窩が黄色く光り、生きているのだ、と示す。

「行こうか、ノエル。そろそろだろう」

漆黒の鬼の機体は眼下に広がる惑星を睨みつけた。

第三話 「月世界の咆哮 1」

『月面テラフォーミング計画とは、八十年前より立案された月面を人類の棲める土地にするという一大計画の一つです。未来を担う計画としてプラネットシエルと同時に計画されましたが二つの計画には大きな齟齬がありました。あるいは埋めようのない溝といえますか』

ミチルの説明を薄暗いブリーフィングルームで聞いているのはそれぞれが複雑な心境を洩面として作り出した男達だった。

ハヤトはゲッター2を動かした功績を認められ同席している。もつとも、この研究所内でハヤトの行動制限をつけるべき、だという話が持ち上がったのは遅くなかった。

ハヤトがゲッター2を単独で動かし暴走させた。その事件は研究所内を震撼させ、メカニック研究者共々、ハヤトの全権停止及びパイロットとしての素質なしと認められたのだらう。

あらゆるシステムでハヤトの介入を拒んだ。ハヤトにだけ残飯があてがわれたり、あるいはハヤトにだけ入れない部屋があったりときまざまな嫌がらせの類だ。だがハヤトはそれらを軽くいなした。

残飯を食し、入れない場所には早々に諦めて自身の独房に大人しく戻っていくのだ。それらの行動を裏があると考える人間と、あるいはリョウマが殴り倒したお陰で心を入れ換えたのだと考える人間と真つ二つに別れたが、それらを統括したのはサオトメの鶴の一声だった。

「ジン・ハヤトを正式にゲッターロボのパイロットとする」

その御触れに無論、全員が反論した。ハヤトを擁護するつもりはないとはいえ革命軍を率いていた凶暴性を危惧したのである。しかしサオトメは決断を覆さない。

「決まった事だ」の一点張りで他のゲッターのメカニックが降りようとしたりストライキを起こそうとしたりしたものならば容赦なく研究所より追放した。研究員もメカニックもサオトメが怖くて何も出来ない。ハヤトはこの状況に増長するかに思われたが存外に大人しく受け容れた。

「それで、オレの部屋はまだこの牢獄なのか？」

ハヤトがパイロットの指令を受け容れた時、まず聞いたのはそれだった。サオトメは口角を吊り上げて言い放ったという。

「安心せい。もう残飯を漁る事もないし、お前が入りたがっていたメインブロックへのアクセス権もある」

ちらつかせたのはIDカードだ。サオトメ研究所のどこでも通過出来るパスにハヤトは容易く了承した。

「いいだろう。ゲッターとやらのパイロットをやればいいのだな」

ハヤトがパイロットになる、という伝令はメカニックや研究員を伝わった。元反政府組織のリーダーだ。いつ反逆ののろしを上げてもおかしくはない。緊張が走ったがリヨウマはその抑止力となる事を強く誓った。メカニックや研究員の人々へと約束したのだ。

「ハヤトが暴れば自分が今度こそ迷わず殺す」と。その一言で大抵のメカニックや研究員は丸め込めた。イーグル号を乗りこなしたリヨウマを研究所の人々は買ってくれている。

それだけの人望をハヤトなどを庇い立てするために使うのは惜しい、という声もあったがリヨウマは、「構わねえさ」と応じた。

「なにせゲッターが動かなけりゃ、おれ達は仲良くあの世に行くんだからな」

研究所の擁する戦力は固定砲台とバリアー、それにベータ改八式が六機とゲッターロボ一機。一国と充分に渡り合える戦力であったが相手取るのは国ではなくネフィリムという巨大兵器と偽人類——レプリカントである。

ネフィリムを倒すにはゲッターの力は欠かせない。

リヨウマはサオトメに条件を言いつけた。

ハヤトを擁するのなら、これを呑んでもらう。でなければゲッターを降りると。

サオトメはリヨウマの条件を容易く受け容れた。その証拠が今、ハヤトの首に取り付けられている首輪である。

常に心拍、脈拍、脳波をモニターしており暴走状態に陥った場合でもミチルのアクセス権限で即座に起動出来る小型爆弾だ。

いくらハヤトが小賢しくとも決して外す事の出来ない、言うなれば孫悟空の頭の輪である。ハヤトが反逆を企てようものならば即座に首がはねられる。その処遇にようやく、と言った様子で研究所の人々は納得した。今、ブリーフィングルームにいるハヤトは首にはめられた輪を物ともしていないようだった。

「それで、その月面に何故、オレ達が行かねばならない？」

当の目的をミチルに問い質す。常時のハヤトは落ち着き払っており、自分と敵対したような狂気は見られなかった。しかし油断させるためかもしれないと気が気でない。ミチルも少しばかり気後れ気味に応ずる。

『テラフオーミングされた理由としては、月面において観測される人類の進化を促す実験のためです』

「オレが聞いているのは、何故そんな場所にゲッターで？ という話だが」

ハヤトの本質を突いてくる声音にミチルは声を詰まらせる。どうやら一杯食わされた身としてはハヤトに心を許したくないらしい。リヨウマが代わりに尋ねてやった。

「何でゲッターなんだ？ 他の、たとえばロケットとか、機動兵器じゃ行けねえのか？」

リヨウマの質問にようやくミチルは答える。

『いいえ。いまやベータでも宇宙機動用のものはありますし、それに気密もしっかりしているので改八式でも充分ではあります』

「では何故、ベータを使わずゲッターなんだ？ その場合、研究所の守りが手薄になるぞ」

リヨウマも疑問視していた部分だが研究所を襲撃した張本人がよく言う、と感じた。その見解はミチルも同じのようで、『……研究所を襲撃したくせに』と呟いた。

「聞こえているぞ、システムAI」

ハヤトは「ミチル」とは呼ばずに「システムAI」で通している。ミチルもハヤトに名を呼ばれる事は嫌っているようだった。

「今回、ゲッターを使う事は大いに意味のある事だ」

その声に二人して振り向く。サオトメが椅子に腰かけながら手元のパネルを操作する。するとブリーフィングルームの大型の画面に今次作戦の概要が呼び出された。「ゲッターロボによる宇宙活動の可能性」とある。つまるところゲッターが宇宙でも活動出来るかどうかを今回試そうというのだ。

「今までは何で試さなかったんだ？」

「イーグル号に乗れる人員がそもそもいなかった上に、まずゲッターチェンジが成功したのが先刻だ。ゲッターは元々、宇宙開発用に造られた分野を流用したものだからな」

初耳であったがミチルが補足する。

『ゲッターロボは、元々宇宙開発用に使われていたメインフレームを流用し、戦闘用に作り変えたものです。その際、三機の合体システムが考案されましたがそれがゲッターロボとして活動する事への弊害に繋がったのは皮肉としか言いようがありませんね』

「なんて事はない。科学者が弄れるからと言って弄った結果、元通りにならなかった。パズルと同じだな」

ハヤトの結論にミチルとリヨウマは反発しようとしたが当のサオトメは、「その通りだ」と認めた。

「だがゲッターを三位一体の機体にしたのは結果的に成功だった。ただの宇宙開発用の機体ならばネフィリムに遠く及ばないはずだからな」

どうしてゲッターは三つのゲットマシンを使うのか。そういえば一度も聞いていなかった。だが今さら聞くのも憚られる。

「ネフィリムが出たらどうする？ この試験中に出る可能性はあるのだろうか。システムAI、試算を」

ハヤトの命令口調にミチルは、『リヨウマさんも知りたいですか？』と尋ねた。どうやらここでハヤトの命令では動く気がないらしい。「おれ達が留守の間に寝込みを襲われたんじや堪らないからな」

『ネフィリムの出現率は霧型も含めて二割を切っています』

その結論にはリヨウマも瞠目した。どうしてそこまで確率が低くなっているのだろう。

「なるほど。前回のゲッターの活躍、あれを見越しての行動か」

ハヤトは得心したようだがリョウマには分からない。ミチルは、『元々、ネフィリムがプラネットシエル内部に出現する事自体稀なんです』と説明する。

『リョウマさんはベータ部隊でしたから、ネフィリムの出現が常時だったので麻痺している部分もあるんだと思います。ネフィリムは、通常、我々の生活域に現れる事ありません』

「だがレプリカントは？ 奴らならあり得るぜ」

「レプリカントには独特の生態電磁波がある」

そう口火を切ったのはサオトメだ。パネルを操作してスクリーンに呼び出したのはレプリカントが発しているという電磁波の周期である。それを辿れば偽人類か人類かの区別はつくというのか。

「何で今までこれ出さなかったんだよ」

「我々もゲッターを追い求めるために自らの首を絞めていたのだ。メカニックにいつでもモニター出来るなどと言ってしまえばいくらでもゲッター計画に遅延が生じる可能性があった」

「そんな不真面目な奴らじゃねえよ」

見てきたから分かる。メカニックも研究員も真面目に取り組んでいる。だがその感情論を突き崩したのはハヤトだ。

「どうだかな。人間、余裕があると隙が生まれるものだ。今までのメカニックや研究員の躍進はゲッターがなければ人類が減ぶという危惧からしてのものだった。博士の判断は間違っちゃいない」

今度はサオトメの肩を持つのか。リョウマは鼻を鳴らす。

「で？ そいつでモニターすればどんだけの範囲が分かるんだ？」

『研究所を含む半径七キロはカバー出来ます。バリヤーの範囲外で言えば一キロ弱』

「迎撃には充分だ。レプリカントには銃も効く。早期発見すれば我々でもカバー出来る」

サオトメとミチルの声にリョウマは不貞腐れる。

「何だよ。ゲッター要らねえじゃんか」

「ネフィリムを呼ばれればゲッターの出番だ。所詮は偽人類相手の白

兵戦が有利だという事だけ。特にオベリスク型はな。未だにベータでは撃墜成績がないのだから」

オベリスク型の戦闘データを基にシミュレータが稼動していた。ベータのパイロットやリヨウマもそれで挑戦したがやはりベータでは遠く及ばなかった。どれだけ上手く立ち回っても相手の性能に凌駕される。ベータでは懐に入っても装甲版に亀裂すら入れられなかった。

「じゃあやっぱりゲッターを出すのは危険なんじゃ」

「いいや、今回、月面にゲッターを出せというのはワシの本意ではない。実のところ不明瞭な金の動きを表面化させろという国のお達しであつてな」

サオトメはため息をつく。そういう政の矢面に立つのはサオトメの役目だった。

「ゲッターを今まで極秘裏に開発していたのが国の逆鱗に触れたらしい。月面で、他の国の研究者にデータを取らせろとの事だ」

「何で月面なんだよ。出向けばいいじゃねえか」
「馬鹿なのか、お前は」

ハヤトの声にリヨウマは凄んだ。

「んだと、てめえ」

「他国にゲッターが降り立てば、それこそ鹵獲に晒される危険性がある。それだけデリケートな問題なんだ。かといって他の地域にネフィルムが出れば出動せざるを得ない。その場合、領海侵犯や領空侵犯の責任を誰が取る？ 全て博士が負わねばならないのだ」

つまりゲッターでも不用意に他国には渡れない、という事なのか。リヨウマが確認の視線を送ると、「悔しいがな」とサオトメはこぼした。

「まだ、この島国で建造されたゲッターに不信感を抱く国も少なからずいる。ネフィルムへの唯一の対抗策、と言っても所詮はオベリスク型を一体葬ったのみ。そのオベリスク型もこの研究所を標的にしかしていないところを見ると自作自演、と勘繰られてもおかしくはないのだよ」

そこまで他国の目は厳しいのか。リヨウマは、「おれ達に言ってくれりやいいだろ」と反論する。

「ゲッターでネフィリムを倒せるって事を目の前で証明してやらあ」「だがそこに都合よくオベリスク型が現れれば、それこそ自作自演の線を濃厚にする。逆にネフィリムが出現しなければゲッターはウドの大木。どちらにせよ不利にしか働かない」

ハヤトの声に言い返せない自分かもどかしい。サオトメは、「だからこそその月面なのだ」と声にした。

「それが分からねえ。何で月面なんだ」

「宇宙は、誰のものでもない。その程度、ガキでも知っている」

ハヤトの嘆息混じりの声にリヨウマは息巻いた。

「んだと！ おれがガキ以下だつて言うのか！」

「ある一面では間違つてはいまい」

一触即発の空気にサオトメが制した。

「やめい！ 今は、お前らがいがみ合っている場合ではなからう！」

リヨウマは引き下がったがハヤトは呟いた。「ここまで馬鹿だとは思わなかったな」

「てめえ！ 馬鹿つて——」

「リヨウマ！ せっかくゲッターが稼働出来るようになったから回ってきたチャンスなのだ。棒に振る事は許さんぞ」

チャンス、という言葉にリヨウマは疑問符を浮かべる。ハヤトがやれやれとでも言うように頭を振って説明を始めた。

「月面ならば、今のところどの国の領地でもないのだ。だからこそゲッターを安全に降り立たせられる唯一の土地でもある。それに宇宙に適応出来るかどうかを試すチャンス。言うなれば「一石二鳥だ」

つまりサオトメはそれさえも視野に入れて今までの話をして来たというのか。リヨウマの理解が追いついたのを察して、「まったく」とサオトメは愚痴る。

「お前は本能的な部分は天才的だが、ある一面では愚鈍が過ぎるな」

ぐうの音も出ない。サオトメはパネルを動かして月面のどこに降り立つべきかをモニターする。

「月面のテラフォーミングされたこの場所ならば適地だろう。ちょうどそこが大国同士の話し合いでも合意を得た」

示されたのは七十五番管区と名付けられた月面の一部だった。リヨウマはその月面に広がる緑地に首をひねる。

「何で月面に緑が？」

「テラフォーミングされた、と言っただろう。七十五番管区はちょうど我が国の調査団が最初に派遣された場所でもある。標準言語は日本語だし、ある程度お前らでも通用するだろう」

所縁のある場所、という事か。リヨウマの得心にハヤトが口を挟む。

「しかし、だとすれば我が国はどこまでゲッターを侮っているのか。いくら月面とはいえ、一応は所有区だ。ゲッターという機体の特性も、ある面では危険性も分かっているのにここを指定してくるのは」

「まあ、考えあつての事だろうな」

ハヤトとサオトメの間に無言の了承が降り立った。リヨウマは二人の顔を交互に見比べる。ハヤトが口元に手をやった。

「まさか、博士。あんたはそれすらも試そうというのか」

「七十五番管区の情報はハンプティダンプティのリーダーだったジン・ハヤトには釈迦に説法だろう。分かっているな。奴らが来るという可能性を視野に入れろ」

「……薙ぎ払っても？」

「その場合、恐らく最も相応しい結果が待っているだろう」

二人の会話の糸口が分からない。何を言い争っているのか。あるいは言い争ってなどいないのか。リヨウマが目を白黒させているとハヤトは、「部屋に戻る」と踵を返す。リヨウマはその背中に呼びかけた。

「待てよ、ハヤト！ てめえ、何を示し合わせて」

「馬鹿に言っても通じんし、どうせ時間の無駄だ。案ずるより産むがやすし、という」

ハヤトが扉を潜り抜けていく。リヨウマはサオトメへと向き直つ

た。

「月面に行け、それだけでいいんだな？」

「そうだが、何か他に質問が？」

「あいつ、ジン・ハヤトを野放しにしているのか、って話だ」

リヨウマの言葉に、「そんな事か」とサオトメは気にも留めていないようであった。思わず声を荒らげる。

「そんな事？ ジジイ！ あんたにとってはその様な事でも、研究所の奴らがどれほど気に病んでいるのか、分からないのか！」

「では何か、ワシが殊勝な態度を取り、ハヤトも反省の色を見せ、さらに言えばあやつをゲッターから降ろせ、と？」

極端だがリヨウマの要求はそうだった。首肯すると、「それこそ馬鹿な」とサオトメは立ち上がった。

「せっかくゲッターが稼働可能になったのに、また元の木阿弥に戻すつもりか？ いいか？ 前回のオベリスク型ネフィリム。決して一人では倒せなかった事はお前自身が、もっともよく分かっているはずだ！」

サオトメの言葉にリヨウマは言い返せない。自分一人では恐らくネフィリムは倒せなかったし、ゲッター1への合体も成せなかった。

「でも、何だってあいつにこだわるんだ」

「お前が何度やっても安全装置の働いたゲッターを奴は一度の実戦で乗りこなした。お前とハヤトではベクトルが違う」

「ベクトル……」

サオトメの説明にリヨウマは困惑する。確かに自分とは違う種類の人間だというのは分かるが。

「そりゃ、そりは合わねえだろうけれど」

「そういう意味じゃない。お前は本能でゲッターを動かす。だから操縦センスはピカイチだ。だが足りないのは考えて行動するという事。たとえばお前が銃で狙われたとしよう。相手の銃口が見えているのならば？」

「……飛び退って避ける」

「だが飛び退る方向は？ その次の行動のための布石は？ お前は何

も考えずに戦う。だからこそ強い。しかしハヤトは真逆だ。銃口が自分を向いたのならば、あいつは本体を狙って動く事を第一に掲げる。飛び退るとすれば風向き、あるいは相手からの視野や次の動き、全てを直感ではなく計算で読み取るのだ。お前が本能ならば奴は理性」

「理性……。それがゲッターには必要だったのか？」

「本能と本能が同じ機体に乗リ合わせても食い合うだけよ。ワシはな、リヨウマ。本能と理性は合わせ鏡でありながらも、お互いの長所を伸ばし合わせる事の出来る理想像だと考えている」

つまり自分とハヤトの関係が理想だと。リヨウマは唾を吐いた。

「何のつもりだ？」

「反吐が出るってんだ。あんなクソテロリストとおれが、理想像だった？ 冗談にももうちよつとマシな言い方ってもんがあるんだよ」

リヨウマはブリーフィングルームを後にする。その背中に、「後ほどミチルを通じて作戦開始時間を送る」と声がかかった。片手を上げてそれを受け取るもリヨウマは納得が行かなかった。

自分と、あの狂気の殺人鬼が理想系など。その苛立ちにロッカーを思い切り蹴りつけた。ひん曲がったロッカーにリヨウマは視線を落とすとした。

第三話 「月世界の咆哮 2」

ふう、と息をつく。

サオトメは椅子に深く腰かけて先ほどまでの緊張をやり過ぎず。自分も老いたな、と感じ始めていた。リヨウマとハヤト、剥き出しの若さと野生にこっちが中てられそうだ。サオトメは月面の三次元地図に視線をやって顎に手を添える。こわい顎鬚をさすり、「今の月面状況では」と声にする。感知したミチルが、『はい』と返事した。

「やはり七十五番管区が適切なのだが、七十五番にはいい噂は聞かないな」

『ええ。地上の、ハンプティダンプティほどではありませんが反政府組織が活動しているとか。名称は“月の般若”と言われてます』

月の般若。

この名称とそれに付随する噂話は数多いもののその実態は不明。七十五番管区以外では被害が少ないためにほとんど黙殺の状態だ。月面は誰のものでもない。どの国の所有物でもないが、同時に何が蔓延っているもおおしくはなかった。サオトメは七十五番管区の拡大図を目にする。

「島国の地形をそのまま月面に移したような地形だな。山麓地帯が多いようだ」

『最もテラフォーミングが困難と言われていた地形をあてがわれたものですからね。だからこそ我が国の技術者は努力したわけですが。地形的にはかつての北陸部を模しています』

「広さでは我が国最大を誇った地区の模倣図か。ここにゲッターをやる事は国の上層部との取り決めだからな。ゲッターがネフィリムに有効だと分かった以上、ある程度のデータは取らせろ、との事だ。全く、今まで政を任せてきたくせに、変なところは出しやばるのだから困る」

『それがこの国の体制ですからね』

皮肉めいた声音になったミチルにサオトメは笑みを浮かべた。この作戦がうまくいけばゲッターを大々的に認めさせるいい口実にな

る。国際的にどの国家も保有していない場所での戦果は同時にどの国にも知らしめる事となるだろう。ゲッターの強大さと、その能力を。

「今の状態のゲッターチームは不完全だ。だからこそ、月への派遣を命じた」

『博士……、まさか月での』

ミチルの言葉をサオトメは手で制する。

「言わんでいい。だが上手くいけばこの惑星上では得がたいものを手に入れられる」

それこそ月でしか得られないものだ。その愉悦にサオトメは口元を緩める。

『宇宙でのゲッターの活動領域は未知数です。飛行可能ですが、そもそも宇宙での実戦経験なんて』

「あるはずがなからう。ネフィリムは月には一度として現れていない」

『分かっているやっていますか？』

ベータも便宜上、無重力戦闘が可能だという事だけだ。実際に無重力で戦闘など誰がやるものか。

「それこそ大陸間戦争でも起きん限りはベータの空間戦闘能力が活きる事はないだろう。その点、ワシはベータにも期待している」

ベータが空間戦闘で使えるとなれば対ネフィリム用に使える装備も増えてくる。その分、サオトメ研究所の特需が増えるという事だ。そうなれば国家はサオトメ研究所を不要だとして切り捨てる事は出来ない。

『……ゲッターの出勤を認めさせるためにそこまでするのですか？』

ミチルの疑念にサオトメは答える。

「これほどの条件をクリア出来ねば、ゲッターによるネフィリム迎撃に様々な支障を来たす事となる。なに、ワシからすればこの程度、赤子の手をひねるようなものだ」

『ですが、リョウマさんとジン・ハヤトに関して言えば』

濁したミチルの心象も分かる。自分の事をシステムAIだと罵ら

れば苛立ちもするだろう。

「いずれ、どちらもどちらが欠けてもゲッターの起動には不可欠だと感じるようになる。なればこそその三人乗り。本能と理性、今はその二つがあればいい」

イーグル号を本能で操るリヨウマとジャガー号を理性で操るハヤト。この両者は対立しているように思えて実のところ必要不可欠な要素なのだ。

『本能と理性、ですか。でもだったなら何でもう一人なんですか？』

だって、人間は本能と理性で成り立っているじゃないですか。ゲッターも』

「いいや、ゲッターには本能と理性だけでは足りんよ」

ペアー号を自動操縦にすればある意味事足りたように感じられるだろう。本能と理性を併せ持ったマシンとして。しかしサオトメの理論では一つ決定的に足りなかった。

「言ったろう？ ワシの寝首を搔くような人材が必要なのだと。リヨウマも、ハヤトも、ワシをある意味では殺しかねん奴らだが、恐れるべきはあのような奴らではない。あいつらは執念と義務感で乗るだろう。ゲッターに取り憑かれているのだ。ワシと同じようにな」

サオトメは月の三次元地図を眺めつつフツと口元に笑みを宿す。その意味をミチルが問いかけた。

『博士、何でなんです？ あのハヤトが来てから、博士は嬉しそうです』

「嬉しそう？ そう見えるか？」

『あの、ジン・ハヤトに何を見出しているんですか？ リヨウマさんがかわいそうですよ。あの人は、人一倍にこの研究所の人達の事を考えて。タツヒトさんに関しても……』

「奴はタツヒトの信念を受け継いでおる。だからこそ強い。だがそれが同時に脆さに繋がりがねん。ハヤトは必要不可欠な人材だ。奴はその証拠にここ数日、妙な企てを仕掛けておった」

『妙な企て？』

胡乱そうな言葉にサオトメは手元の資料を差し出してやる。ミチ

ルの目と同期しているカメラがそれを捉えた。

『博士……！　これは……』

「そうだと。奴は獄中でこれを編み出したのだ」

書類は全て黒ずんだ墨で書かれている。

否、真実それは墨ではない。凝り固まっているが、それは血だった。血痕で書かれた書類だ。

そこには精巧なサオトメ研究所の見取り図と、どこから侵入すれば容易く破壊出来るのか、籠絡出来るのか、というロジックが書かれていた。管理システムであるミチルを完全に出し抜いたこの偉業。さしものミチルでもまさか血文字で書かれるとは思ってもみなかったのだろう。震撼したのがサオトメにも伝わった。

『……即座にジン・ハヤトの抹殺を』

「待てい。ミチル、その必要はない。ワシは、これを見て、真実嬉しかったのだ。何せ、これは奴が首輪をつけられてからワシに差し出したものなのだからな」

その事実にもミチルが息を呑んだのが分かった。どうして敵であるサオトメにわざわざこの要塞クラスの研究所を壊す術を与えたのか。それが理解出来ないのだろう。

『……何で、博士に』

「ワシはな、ハヤトがこれを考え出したのがとても興味深いと考えておる。何故ならば、奴には獄中生活が待っていたはずなのだ。食べ物もろくに与えられず、しかも往復したのはせいぜい牢獄から廊下の数十メートル。だというのに、奴はこの精巧な地図を作り出した。ワシに差し出したのはそれだけの能力がある、と認めさせるためだろう」
『だからどうして？　こんなもの、ジン・ハヤトの危険性を高めさせるだけでしよう？』

「危険？　確かにある種の劇薬ではあろう。だがな、毒を食らわば皿までという。ハヤトがこれを作り出した、という事はゲッターの構造も、奴はあの一瞬で読み取ったという証明であるのだ。恐らく奴は今度ゲッターに乗れば、リヨウマよりも上手く扱うだろう。それこそ理性で、な」

リヨウマはベータに搭乗経験があるからその癖をまだ引きずっている。逆に言えばそれも強みなのだが、サオトメは宣言した。ベータでの経験は全て忘れろ、と。リヨウマはまだ本質的に獣に成り切れていないのだ。だからこそゲッターには三人目が必要だと考える要因でもある。

『それこそ強大じゃないですか。リヨウマさんだって黙っちゃいませんよ』

「あれは本能でハヤトの危険性を感じとるよ。だがワシには言わんとて。奴はワシも恨んでおるからな。誰にも頼らず一人でゲッターを動かす心積もりなのは今までのシミュレーション結果からも明らかだろう」

『それは……』とミチルが口ごもる。一度イーグル号だけのオペレーションを推奨したミチルからすれば痛いところを突かれた結果だろう。サオトメは椅子を回転させスクリーンに目をやって呟く。

「イーグル号だけのオペレーション。お前達はワシに進言したな？　だがワシは応じなかった。その結果、ハヤトという異分子が現れた。だからワシは待つ事にしたのだよ。三人目の適合者を」

『待つ、と言っても本当に待つわけではないのでしょうか』

「その通りだ。迎えに行く」

サオトメは月の三次元図に手を翳した。まるで月を手中に入れようかとするような所業だった。

「ワシの思う通りに今のところ物事が動いておる。このままならば偽人類共を出し抜けるだろう」

『しかし、それが正しいとは……』

ミチルの声音には不安が漂っている。サオトメが正体不明の魔人に見えているのかもしれない。悪魔を御するのに魔人程度で足りるのならば喜んでこの身を差し出そう。

「ハヤトはワシに挑戦しろと言っているのだ。ならば年老いたこの身を差し出さんでどうする？」

『この間ゲッターの過負荷に耐えられなかったばかりじゃないですか』

「そうだとも。だからこそ、ワシの戦場はここだ」

サオトメが顎でしゃくつたのはブリーフィングルームだ。ミチルはわけが分からないのか、『どういう』と口ごもる。

「事なのか。それはな、各人に適材適所があるようにワシにはここで奴らと戦えという事なのだ。ゲッターで共に戦う事は出来んが、ここならば負けんよ」

不敵な笑みを浮かべたサオトメは書類を裏返す。そこには血の筆跡でこう書かれていた。

「深淵を覗く時、深淵もまたこちらを覗いているのだ」と。

第三話 「月世界の咆哮 3」

「おい！ 待ちやがれ！」

叫びかけたリヨウマの声は廊下に響き渡る。ハヤトは自分が呼ばれたと思っていないのか悠々と歩いていった。

「待って言ってんだ！ このテロリストが！」

そこまで言っただけでようやく自分の事だと理解したらしいハヤトはゆっくりと振り返る。

「何だ、リヨウマ。博士の前で論破されたのがそんなに悔しいのか？」

「違う！ てめえ、勝手に出歩ける身分だと思ってるのかよ」

指差すとハヤトは口元を緩めた。

「おかしいな、それは。お前が掛け合ってメカニックやら研究員共を納得させたのだろう。オレに首輪をつける、という条件で。知っていないぞ、爆弾付きなんだってな。まあ順当だろう。獣の考えた方策にしては悪くない」

その言葉にリヨウマは怒気を露にする。

「んだと、てめえ……」

「怒ったか？ 自分の手柄を、さもオレのもののように言った事がか？ それともオレが博士と何かを企てている事を察知したか？」

「物分りがいいじゃねえか。そうだよ、ジジイとてめえが何を企てているんだか知らねえが、月までの片道切符は御免だぜ」

ゲッターに爆弾を積んでいるようなものだ。またしても途中でチェンジされれば今度は命に関わる。だがリヨウマの懸念をハヤトは笑い飛ばした。

「おいおい、意外に小さいな、ナガレ・リヨウマ。もつと破天荒な奴だと思っていたが。ノミの心臓か？」

リヨウマの神経を逆撫でするには充分な言葉である。しかしリヨウマは必死に拳を握り締めて抑えた。

「ゲッターはなア、てめえの勝手でどうこうしていいもんじゃねえ。もうたくさんの人間の魂を吸っちゃまってんだよ。おれはそれを目の

当たりにした。そいつらがおれ達を地獄へと送り込もうとしているのも」

「なるほど。ゲッターに怨念か。鬼か悪魔かを想起させる姿には相応しいな」

リョウマは今にも掴みかかりそうだったが必死に堪える。

「……余裕ぶっこいてんじゃねえ。お前がそうしていられるのはたかさんの人間の助力あつての事なんだぞ」

「何だ、リョウマ。恩着せがましいな。女々しいぞ。オレに、わざわざ礼を言わせたいのか？ お前のお陰でお天道様を歩けている、だからすまないありがとうとでも？ 馬鹿馬鹿しいな」

鼻で笑ったハヤトにリョウマの怒りの沸点が超えた。飛びかかったリョウマが拳を振り上げる。しかしハヤトは必要最低限の動きでかわしていく。

「なるほど、博士の言う通りだな。お前は本能、オレは理性。そいつはピッタリだ。何せ」

拳をハヤトが受け止める。どうしてだか強い力で握られたわけでもないのに拳がまるで動かなかつた。

「理性つてのは本能を抑え込むためにある。オレとお前の相性なんぞ、最初っから試算するまでもないな」

「水と油だ」

言い放ったリョウマの凄味にもハヤトは屈しない。それどころか笑みを浮かべた。

「分かってるじゃないか。だが足りないな。ナガレ・リョウマ。もつと強い男だと思ひ込んでいたぞ。買い被り過ぎたか？」

「てめえ……！」

蹴りを放つがその時にはハヤトは飛び退って離脱していた。もう戦う気はないらしい。戦意が凧いでいる。

「やめておけ。これから宇宙に行くんだ。お互いに無用の生傷は命取りになるぞ」

背中を向けた相手に飛び掛るほど無法者ではない。リョウマは内心食いかかりかねない野生を胸の内で見える。

「……一つ、教える。てめえとジジイは、何を考えている？」

「それこそ、聞かぬが仏だ。知っているか、ナガレ・リヨウマ。悪人が何で死後を恐れずに悪に染まれるか」

肩越しに振り向いた視線にはまだ拭い切れていない狂気があった。ざわりと身体が総毛立つ。

「それは地獄に落とされる事を知らないからだ。地獄がどれほど恐ろしいのかもな。悪徳は、さらに深い悪の前ではまるで無為になる」

そう言い置いてハヤトは去っていった。向かう先は自室だろう。ハヤトには既に専用の個室があてがわれている。皮肉なのはそれらを用意するために奔走したのが自分だという事だ。無意味なトラブルを避けるために動いた自分の行いが全て無駄だと言われているように身体の中を抑えようのない怒りが燻った。

「チクシヨウが！」

拳を壁に放つ。壁に拳がめり込み亀裂が走った。

『リヨウマさん……』

ミチルの声だ。リヨウマを慮っているのだろう。だから今の攻防に口出しをしなかった。ミチルの権限ならば首輪の爆弾を引っ張り出す事も出来たろうに。男同士の会話に入るべきではないと本能的に悟ったのだろう。

「分かってんよ、ミチル……。タツヒトや他のパイロットは、こんな事のために死んだんじゃないやねえ。だからゲッターに乗れるおれやハヤトがいかに重要なのかって事はな」

必死に自分を繋ぎ止めるようにリヨウマは繰り返す。分かっている。タツヒトを含む犠牲は、全てゲッターという存在のためだ。その狂気に吞まれてはならない。

「怒りを発散させるのは簡単だ。だが怒りを鎮め、相手を思う気持ちにするってのは難しいな」

『リヨウマさんは十分にジン・ハヤトの事を考えていますよ。それに研究所のみんなの事まで』

「いいや、まだまだだ。考えていたら、あいつに突っかかりしねえよ」

リヨウマは踵を返した。自室へと戻ろうとする。

『でもチェンジ出来るようになったのは大きいですよ。それはリヨウマさんが頑張ったから』

「おれが、か。でもジジイやハヤトはそう考えちやいないだろうな」

サオトメは最初からゲッターを合体変形が可能なマシンとして設計し、そのためのパーツだとしか思っていないだろう。自分もハヤトも、運命を狂わされたパーツの一つなのだ。

『博士には博士のお考えが』

「分かってる。だからもう突つかからねえ。何よりも、おれ一人の考えで動いちゃ暴走を招くだけだ」

その言葉にはミチルが声を響かせる。

『違います！ 暴走したのはジン・ハヤトのせいだ』

「気持ち嬉しいが初出撃でやっちゃまったのは消せねえ。最後まで気を抜いちゃいけないっての身に沁みたよ」

ミチルもそれ以上の言葉はないようだった。リヨウマは考える。自分は本能だ、とサオトメにもハヤトにも告げられた。本能に「考える」という行為は無駄なのだろうか。ただ闇雲に、獣のように立ち向かうしか出来ないのだろうか。

十時間後の発進までリヨウマは安心して眠れる気がしなかった。

第三話 「月世界の咆哮 4」

発射台は花卉の威容を持つサオトメ研究所の内観を射抜くように備え付けられている。

ちょうど花卉の中央が縦に開き、内部から赤いゲッター1の姿を覗かせた。晴天の日差しが降り注ぎリヨウマは視界に僅かなフィルムターをかける。ゲッター1の背筋にはロケットが装備されていた。赤い流麗な機体に無骨な灰色のロケットは不釣り合いだ。

「リヨウマさん。こいつは脱出速度に達して大気圏を出たらウイングで切って捨ててください。勝手に燃え尽きますから」

メカニツクの説明にリヨウマはコックピットから応じる。パイロットスーツの気密を確かめ、何度も手を開いたり閉じたりした。

「気密状態は正常のはずです。ヘルメットも特注にしておきました」

「このマスク、やっぱり取れねえよな?」

「苦しかったら取ってもいいですよ。リヨウマさんほど頑丈なら耐えられるでしょ」

メカニツクの冗談めかした声にリヨウマは首を掻っ切る真似をする。

「冗談キツイぜ。さしものおれでも大気圏突破は初めてだよ」

「リヨウマさんならベータでも単独飛行しそうですね」

リヨウマは微笑みながら中天を仰ぐ。既に先遣隊が月周回軌道に入っているはずだ。その先遣隊はこの国の機動部隊であり、もしかするとタツマのベータ部隊かもしれない。もしかすると、先遣隊の情報って」

「こっちは入ってきませんよ。なに、相手も見張っているだけです。こっちは威圧するぐらいの気持ちでいきましょう」

そうか、とリヨウマは頷く。タツマであるかもしれない、という不安を拭う事は出来ないが、そうでない事を願うほかない。このような再会など願ひ下げだった。

『リヨウマ。何をお喋りしとる』

サオトメの顔が映し出されメカニツク達が、「やべっ」と蜘蛛の子を

散らしたように逃げ去る。

「みんなジジイが怖いんだと」

冗談めかすとサオトメは真剣な声になった。

『言っておくが大気圏突破はゲッターとはいえ並大抵ではない。何度も味わって堪えるものか。ワシは政治的手段でこのような暴挙を二度とないようにする。ゲッターに傷一つつけるなよ』

老人の忠告にリョウマは、「分かっているっての」と聞き飽きた体で返す。

『博士。僅かに、だがジャガー号の挙動にモーメントがかかる。これでは大気圏突破と同時に腕が動かない、という事があり得る』

口を差し挟んだのはハヤトだった。リョウマ含め、メカニックはいい顔をしない。もしかすると意図的にハヤトに嫌がらせをしたのかもしれないなかった。

『メカニックに伝えよう。ハヤト、ジャガー号はゲッター1の胴体だ。そいつが動かんとなれば作戦に支障を来たす。チエックは念入りにしろ』

『了解』とハヤトが通話を切る。リョウマは足を組んでぼやいた。

「日ごろの行いだっつうの」

『聞こえているぞ、リョウマ』

思わぬところからハヤトの声がしてリョウマは首を引つまませた。

『常に通信を同期しておくとか作戦前に博士が言ったはずだが』

リョウマは舌打ちを漏らして悪びれもしない。

「小言も漏らせねえのかよ」

『大気圏突破までは一蓮托生だ。イーグル号にもし、妙な動きがあれば、即座にオープンゲットしてオレだけでも帰還する』

オープンゲット、とは分離変形の略語であった。その声紋がシグナルとして了承されるとボタンやレバー操作よりも優先して分離変形が行われる。

「おれだけ大気圏外に飛ばされるってわけか」

笑ってみせるがハヤトの声は真剣味を帯びている。

『最終手段としてはある、という事を頭に刻み付けておけ』

リヨウマは見えていないのをいい事に舌を出した。ハヤトはジャガー号のチェックに戻る。再びコックピットを覗き込んできたのはメカニツクの一人だった。

「おい、どうした？」

「いや、あのとても個人的な趣味なので余裕がなければいいんですが」
遠慮するメカニツクにリヨウマは促す。

「話せよ。おれでやれるならやってやるから」

「これをお願い出来るかな？」

差し出されたのはカメラだった。片手でも充分に使い回しが取れる小型だ。

「これが？」

「宇宙からこの惑星を撮ってくれないか？ 一枚でいいから」

メカニツクの興味だろう。取り下げようとしたのをリヨウマはカメラを掲げて一枚撮ってやった。

「いいぜ。おれで出来るんならやっておく。楽しみにしとけよ」

照れ笑いを浮かべてメカニツクが去っていく。『ジャガー号、点検終了』の号令が響いた。次いで『ベアー号、点検終了後、自動操縦に切り替えます』とオペレーターの声が続く。

「イーグル号、最終点検を」

リヨウマはアームレイカーを掴んでイーグル号の点検を済ませる。計器に狂いがないか、イーグル号はゲッター1の頭部であるためにオペレーションが取れているかなど三十項目を確認する。

「えつと……、よし、大体オーケー」

『大体では困るのだ。リヨウマ』

サオトメの小言が漏れ聞こえリヨウマは嘆息を漏らす。

「分かってんよ。きつちり三十項目チェックするっての」

『リヨウマ。もう聞いたかもしれんが月面に降り立った時、まず留意すべきは重力だ』

サオトメの言葉にリヨウマはチェック欄から顔を上げる。

「六分の1Gか」

月面は惑星表面の重力の六分の1しかない。つまり地上で戦うの

とはわけが違うのだという事だ。だがネフィリムが出現した事のない月面での戦闘など想定していなかった。

「どうせネフィリムもレプリカント野郎も出ないんだろ？」

『念には念を入れる、と言っておるのだ。六分の一G下ではゲッター線がどのような変化を及ぼすのかまるで想像出来ん』

「んだよ、ゲッターEトマホーク一つ振るうのにも齟齬が発生するってのか？」

『可能性としてはあり得るのだ。元々は宇宙開発用とはいえ無重力と空間戦闘というのは感覚を麻痺させる』

「確かにベータ部隊にいた時もわざわざ宇宙に出向いて戦う事までは訓練されなかったな」

そもそもがあり得ないからだ。プラネットシエル外殻に出現するネフィリムに対して宇宙戦闘の訓練など。

『無意味と断じるな。全ての可能性を考慮せよ。でなければ、やられるのはこちらだ』

サオトメの言葉尻には先ほどより妙な感覚を受ける。まるで襲撃を受ける事を予知しているかのごとくだ。

「ジジイ、あんた、何か確信でもあるのか？」

『いや。作業に戻れ』

簡素な言葉で返されてリヨウマは疑念を深める事となった。サオトメは何かを隠している。それはハヤトにも繋がる秘密かもしれない。

「イーグル号、最終確認完了」

リヨウマは無線に吹き込んでオペレーターの声聞く。

『ゲッター1。発射、五分前です』

『ゲッター1についているロケットそのものはこちらで自動制御しますから、特別な操縦は必要ありません。強いて言えば、耐えてください』

メカニックの説明にリヨウマは口元を緩める。つまりこの発射に一番の問題は人体が耐えられるかどうか。

「皮肉だな。この間まで一番の問題見だったゲッターよりも、今度は

パイロットかい」

カウントダウンが始まる。十秒前、と刻み始めたカウントにミチルの声が混じった。

『リヨウマさん。私のシステム権限では衛星軌道までしか補助出来ません。なので月面では』

「向こうさんのシステムがお相手だろ。ジジイから聞いたよ」

『本当に、申し訳ないです……』

人間のようには謝ってみせるミチルにリヨウマは、「どうって事ねえって」と軽口を返す。

「いつまでもお前の補助輪付きじゃねえんだから。向こうさんのシステムがお前ほど優秀かどうかは分からんが、まあ出来るだけ優秀なのを願うまでだ」

カウントがゼロを刻み、ロケットが噴射する。幾重にも衝撃が重なりコックピットに重力が押し掛かった。臓腑に刻み付けられるのは惑星の重力の網だ。それらを切り裂いてゲッター1の赤い身体をロケットが覆っている。剥離したロケット部品が第一次機動を補助し、続いてアナウンスが響く。

『第二次機動、重力圏内を抜けます』

真つ赤な機体がさらに赤く染まる。無骨なロケット部品が何重にも繋がったリンクによって順番に外れてゆき遂にはゲッター1とその背面にある推進剤のみになった。円筒型の推進剤が重力の手から逃れるのを助ける。ミチルの声が響いた。

『ゲッター1、重力を抜けました。衛星軌道に入ります』

「オーライ。ここまでの水先案内人、ご苦労だったな、ミチル」

『いえ。リヨウマさんもお気をつけて』

ここから先はミチルのシステム補助がない。ある意味では不安だった。今までゲッターと自分を支えてくれたミチルの助けがないという事はゲッターと自分、それにハヤトの判断が何よりも優先される。

アームレイカーを引きゲッターウイングの稼動を確かめる。ウイングが稼動して皮膜を形成して開き、ロケットとの接合部を解除し

た。切り離された円筒状のロケットが重力圏に落ちていく。リヨウマは股の下が寒々しくなるのを感じた。落下すればすぐさま重力の虜だ。ゲッターは大気圏突入に耐えられるのか。脱出が可能でも再突入が可能なのは机上の空論でしかない。

『ナガレさん、ベータ宇宙機動部隊、援護に参りました』

気が付くとベータの編隊がゲッターを囲んでいる。先んじて宇宙に上がっていたベータ改八式の部隊だ。その中にはリヨウマが直接指導した者もあり、お互いに信頼があつた。

「おう。月まで頼むぜ」

『ゲッターが上がって来た時、ひやっとしましたよ。この機体は宇宙でも健在なのだ』

宇宙空間で待っていたベータ編隊からしてみれば涼しい顔で上がって来たゲッターは畏怖の対象だろう。リヨウマは一応、無線に吹き込む。

「お前らの中に、タツマ、つてのは」

『いいえ、いませんが……』

「そう、か」

安堵半分、肩透かし半分だった。タツマともし出会ったとして、何を話すべきなのだろう。自分はゲッターを選んだ、と言えればいいのだろうか。

『女々しい考えをしているんじゃないぞ、リヨウマ』

そんなリヨウマの思案を他所にハヤトの声は冷たい。

「んだよ、別にいいじゃねえか。古巣なんだからよ」

『そういう感傷は真つ先に捨てるんだな。月面に辿り着く時には一切の情は捨てる』

やはりハヤトはサオトメと何かしら示し合わせている風である。

リヨウマは目を細めて、「おい」と声にする。

「てめえとジジイ、何企んでるんだ？ 共謀しておれを陥れようってのか？」

『陥れる？ 馬鹿を言え。ゲッター1の状態でお前を陥れるなどすれば、オレとて危険だ』

暗にゲッター2ならば自分を見捨てられる、とでも言っているようなものだ。リヨウマは鼻を鳴らす。

「月にはレプリカントもいねえし、ネフィリムも出ねえはず。何を恐れてやがる?」

『馬鹿には言っても分からんだろう』

その言葉に食いかかろうとすると新たなシステム反応がリンクを求めてきた。了承したのはハヤトだ。

『こちらサオトメ研究所より出撃したゲッターロボである。貴君のシステムを許可する』

「おい、勝手な真似を——」

『認証感謝する。こちらは月面統括軍のシステムAI、ルナである』

ルナと名乗ったシステムAIの振る舞いはミチルのような人間味はなく、ただの機械音声だった。

「システムAI、って言ってもピンきりなんだな」

酸素供給マスクをずらして備え付けられている水分補給のカプセルにストローを刺す。ルナは応じるような声も出さない。

『月面統括軍は、我々を歓迎してくれている、と見ていいのか?』

ハヤトの質問にルナは、『愚問である』と応じた。

『月面は、誰のものでもない、惑星国家にその権限はないのだから』

小難しい理屈はハヤトとAIに任せるとしよう。リヨウマはメカニックとの約束通りカメラを構えた。全天候スクリーンをアクティブにして振り返る。惑星は半分が銀色の皮膜に包まれている。プラネットシエルの産物だろう。青い惑星、という昔ながらのイメージはほとんど払拭され、今や無骨な殻に覆われた惑星はどこか他人行儀だ。

写真を撮影していると、『レンダリングビーム照射、来ます』と耳朶を打つ声があった。リヨウマが視線を振り向けると人工衛星から赤いレーザーが照射される。『害はありません』とリヨウマの思考を読み取ったようにルナが答える。

『レンダリングビームによって月面に来るのに相応しいかどうかを判定しているのです』

「どういう判定基準だよ」

『病原菌を持ち込んでいないか、あるいは危険物ではないか、など全部で三百を超える項目を瞬時に判定します』

危険物、という言葉にリヨウマはこのゲッターを月面に持ち込む事は危険視されないのだろうかと感じた。ゲッター線という謎のエネルギーで動く機械である。しかしそのような懸念は全く無視されてレンダリングビームの照射を何度も受けた。

「これ、いつ終わるんだ？」

『月面に着くまでに三十機の人工衛星がある。そいつらにいちいち検査されるんだ』

「尻の穴まで見られている気分だな」

レンダリングビームの幕を受けつつリヨウマはその視界に月面の平野が大写しになったのを確認する。

「……何だありゃ」

リヨウマの予感していた月面とは荒涼とした大地が広がっているイメージであった。だが実際に目にした月面には緑地が広がっており山脈地帯には木々さえも確認出来る。

『テラフォーミングされた月面には充分に酸素もある。今では第二の故郷さ』

ハヤトの声にリヨウマは感心して眺める。月面はもう前人未踏の場所ではないのだ。

「どころどころ禿げている場所もあるっちゃあるが、もうほとんど地上と変わらねえな」

『テラフォーミングが開始されたのが八十年も前だ。それまでも細々と月面開発は行われていた。今となっっちゃ住めない場所のほうが少ない』

そのようなものなのか、とリヨウマが感じているとベータ部隊の人々の通信が入ってきた。

『七十五番管区まで誘導する。こちらの指示に従って欲しい』

ベータが先行しゲッターがそれを追う形となった。空中機動形態を取っているベータにゲッターが大人しく追従しているのは親鳥の

飛行を真似る小鳥のようだ。

「七十五番つてのは……、あそこか」

リヨウマの視界に飛び込んできたのは広大な山脈地帯と同じくらいに広がっている樹海である。どこか地上のサオトメ研究所にも似た地帯にリヨウマは質問する。

「どこで降りるんだ？」

『今、月面当局に問い合わせ……』

そこから先の言葉を遮ったのは悲鳴だった。何が起こったのか、最初リヨウマには理解出来なかった。突然、先行していたベータの一機が傾いだのだ。当然、操縦ミスを疑う。

「どうした？ 慣れないのは分かるが」

『違う！ 攻撃だ！』

攻撃？ その言葉にリヨウマが疑問符を浮かべている間にも先ほどのベータが揺らぎ携行火器が火を噴いた。しかしその対象を捉える事が出来ない。ベータの機体が突然に弾け飛んだ。上空からの何かしらの力によって月面へと叩きつけられる。ベータは樹海に墜落して黒煙を上げた。その段になってようやく攻撃というのが真実味を帯びてくる。

「どこからだ？」

視線を巡らせている間にももう一機のベータが月面から攻撃を受けたらしい。急に制動をかけたかと思うと一気に後部へと飛び退っていく。

「実体弾？ ミサイルは見えねえし……」

ミサイルならば肉眼で捉えられないのはおかしい。ただ火器にしては静かであった。宇宙空間なのだから音がない、と言われてしまえばそこまでだが火線も見えない火器など存在するのだろうか。

「おい！ システムAI！ 攻撃を受けている。そっちで援護出来ないのか？」

『無理ですね。なにせ』

警告が鳴り響きリヨウマの視界に飛び込んできたのはシステムエラーの文字列だった。ハヤトが声にする。

『ハッキングだ。月面連中、どうやら読み通りゲッターをただ眺めるだけってわけじゃない腹積もりらしい』

ハヤトは知っていたのかすぐさま対応する。だがリヨウマには分からない事らだらけだ。どうしてハッキングを受けねばならない。ゲッターが降り立てばいいだけではないのか。

「おい、ハヤト！ どういう事なんだよ！」

『最初から月面に降り立て、つてのは罠だったって事だ』

「何だと」

その言葉を裏付けるように先ほど急制動をかけたベータが高度を落として墜落する。またしても黒煙が上がりリヨウマはうろたえた。

「何だつてんだ……。まさかレプリカント野郎が……！」

『いいえ。レプリカントではありません』

ルナの声にリヨウマは戦慄した。レプリカントではない。ならば誰が、ゲッターを封じ込めようというのか。

その時機体表面に衝撃が見舞った。リヨウマは外周カメラでそれを確認する。

瞬間、視界に入ったものに戦慄が走った。そこにいたのは――。

「人？ 人間だったのか？」

唐笠を被った人間が何の装備もなくゲッターの機体表面に取り付いている。そのような事が出来るはずがないのだが素手でゲッターの接合部を引き剥がそうとしているようだった。

「どうすれば……！」

『簡単だ』

ハヤトの声が響くと同時にジャガー号へと動きの権限が委譲されゲッター1の腕が人を払い除けた。その動きにリヨウマは目を見開く。

『こうすれば、人間程度ならば払える』

「ハヤト、てめえ！」

リヨウマは怒声を張り上げた。今の動作で人が死んだのではないか。ゲッターで人殺しをするために月面に降り立つわけではない。しかしハヤトは冷静に、『気を抜くな』と返す。

『すぐにまた、登ってくる。それに払い落とした、というのは誤りだった。こいつ……』

その声の意味するところをリヨウマはすぐさま理解する。払い落としたはずの人影はゲッターの指に食らい付いている。どう考えても常人のそれではない。

「レプリカントか！」

ならば話が早い、トリヨウマは人影を払い落とそうとするも人影は素早く反対側の腕へと回った。相当な速度が出ているはずだが人影は物ともせずゲッターの手首から這い登ってくる。リヨウマは気味の悪さを感じた。

「何だ……、こいつ」

レプリカントでもこれほどまでに執着性があつただろうか。リヨウマは人影を拡大する。唐笠を被った僧兵のような佇まいであつた。宇宙で活動するために必要な宇宙服やパイロットスーツでさえも身につけていない。袈裟姿のそれにリヨウマはどうなっているのか分からない。

「おい、坊主が取り付いている！ ハヤト、そっちでどうにか出来ねえのか！」

『普段は嫌っているくせに、いざとなれば人頼みか』

嫌みつたらしい声音も今は頓着している場合ではない。

「だがよ！ こいつはまともな神経の人間じゃねえぜ！」

『そうだな。まともではない。こいつら人類ではないのだから』

「……やっぱりレプリカント——」

その声を遮つたのは月面から射出された物体だった。ゲッターの腹部を捉えた一撃は実体弾のそれよりも鋭い。ゲッターがよろめくほどの速度の物量だった。

「今の、弾丸か？」

しかし被弾警報も鳴らない。リヨウマは今しがた被弾したはずの箇所を見やる。怖気が走った。

そこにいたのは唐笠を被った人間であつたからだ。察するに今の攻撃、質量弾頭ではなくこの人物が何らかの射出台からゲッターに体

当たりしてきたのだ。ただの人間の体当たりがゲッターにダメージを及ぼせるはずがない。リヨウマは最早、それが人ではないのだと断じた。

「しつこいぜー。ゲッタービーム！」

ゲッター線貯蔵量を十パーセント使用し緑色のエネルギーが胸部へと収束する。渦巻いたそのエネルギーが鋭く光ったかと思うとピンク色に変化して照射される。

ゲッター線を使用した純粹なる攻撃エネルギーの放射。それこそがゲッタービームだ。ゲッタービームによって人影が塵芥と化す。当然の事ながら腹部周辺に取り付いていた人影は消滅した。だがそれを契機としたようにルナの声が響き渡った。

『月面で攻撃を確認。一斉報復を仕掛けます』

「何だって？」

確認する前に樹海の中から数十人は下らない同じ袈裟姿の僧兵が射出されミサイルのようにゲッターへと飛びかかる。ミサイルならば蹴散らせたがそれが人間の姿をしている事にリヨウマの判断は一瞬遅れた。その遅れを縫うように相手の攻撃は間断なくゲッターの装甲を叩いていく。本来ならば恐れるはずもない人間の膂力でゲッターのそこらかしこに黄色い警告が表示された。

「馬鹿な！ ゲッターの装甲版を、こいつら素手で引き剥がしているってのか！」

『そのような。やはり居たか。ルナリアン！』

忌々しげに放たれた言葉にリヨウマが意味を問い返す前に人々の一斉に放った蹴りでゲッターの機体が軋みそのまま樹海へと没した。

「ルナリアン……、だと」

痺れるアームレイカーを握った手の感触を確かめつつリヨウマはゲッターを立ち上がらせようとするとが大質量がそれを制した。人間の質量にゲッターの膂力が負けるはずがないのだが押さえつけられており身動きが取れない。

『大人しくしてもらいますよ』

ルナの声にリヨウマは睨む。

「騙したな……」

『人聞きが悪い。我々は最初からゲッターの鹵獲こそが目的であった』

その時、画面に表示されたのは見た事のないシンボルであった。三日月を模した凶柄を赤い矢の凶柄が貫いている。

『我らルナリアンに栄光あれ』

第三話 「月世界の咆哮 5」

ハヤトを呼び出したのはサオトメであった。恐らくたった数日で正確な研究所の地図を作り出した自分の手腕に恐れを成したか、あるいは追放かのどちらかだと感じていた。だからこそ、放たれた言葉は意外としか言いようのなかった。

「ジン・ハヤト。正式に、お前をゲッターのパイロットに迎え入れたい」

「その根拠は何だ？」

物怖じせずに言い返すハヤトにサオトメは口角を吊り上げる。

「お前ならばワシと同じ目線でゲッターを見つめる事の出来る。言つたろう？ お前は理性で戦うタイプだと」

「博士、あんたがゲッターに乗ればいい」

「出来るのならばそうしとるわ。だがな、この老いぼれの身体は許しちゃくれんのだよ」

執務机に差し出されたのはサオトメの検査結果であった。どうやら読み取るにサオトメはもう二度とゲッターには乗れないようだ。

「一度乗っただけでこの有様よ。ゲッターとは、真に相応しい乗り手以外を拒むのだ」

「あんたならば自分の身体を改造してでもゲッターに乗りそうなものだが」

ハヤトの皮肉にサオトメはフツと口元を緩めた。

「出来るのならばな。だが今の技術でゲッターに精神面でも体力面でも補えるだけの身体を作るのには、人間の素体を捨てねばならん。ワシは、そこまで、肉体的にも人でなしになるつもりはない」

充分に人でなしの眼をしている人間の言葉とも思えない。ハヤトは、「だからオレ、というわけか」と結論付ける。

「自分の代わりの人間を見つけて乗せる。サオトメ博士、あんたはオレの調べよりも随分とロマンチストのようだ」

「何とでも言うがいい。ワシはゲッター稼動さえ果たせばいいのだ」

「どうやらサオトメに挑発の類は無意味らしい。ハヤトは話題を切り替える。」

「オレが乗るとして、まだ一人分、空席があるが?」

「その事と、次の作戦についてお前に妙案を仰ぎたくってな」

「どうやらサオトメはもう三人目の適合者について目星をつけているようだった。ハヤトはちらと監視カメラを一瞥する。」

「安心せい。ミチルのアクセス権限を今だけ封じてある。お前は、ミチルを通じてリヨウマにこの事が伝わるのを恐れているのだろう」

「さしものハヤトでもこの老人の頭の巡りの早さには舌を巻く。自分の考えの二手三手先を読んでいると言っても差し支えない。」

「で? オレをパイロットに仕立て上げてどうする? 二人ではゲッターの能力の三分の二。つまり完全稼動には至らない」

「完全稼動せずとも出来る任務だ。我が国より要請が下った。前回のゲッターの功績を見られていたらしい。ゲッターを寄越せ、と暗に告げてきた」

「だろうな。あれほどに強力な機動兵器を個人研究所にくれてやるのは惜しいだろう」

「ワシは拒否した。その代わり、どの国の機関でも第三者を貫かざるを得ない場所ならば、という条件付きにゲッターの明示を提案した」
「どの国でも所有していない地区など、この惑星にあったか? プラネットシエル外殻でさえも一応は国有地だ。いちいち領空権が発生するが」

「プラネットシエルではないよ。どの国でも絶対に国有地出来ない場所ならば構わないとワシは告げたのだ」

「ハヤトはピンと来た。」

「宇宙、か」

「サオトメは指を鳴らしそれが正解である事を告げる。」

「宇宙空間ならば、どの国も所有出来まい」

「だが、宇宙でゲッターの性能を示せ、というのは無理な判断だ。ゲッターの真価は戦闘時に発揮される。ネフィリムの出現を確認出来ない宇宙空間では逆に反感を買うぞ。それこそ、とんちだとな」

ハヤトの言葉にサオトメは、「厳密には」と立ち上がった。

「宇宙空間ではなく、ある場所に降り立たせる事で合意させた」

「どこだ？ 人工衛星は国の所有物だ」

「月面だよ」

一瞬慄いたものの納得出来る答えではあった。

「……なるほどな。月面ならば誰のものでもない、か。どこに降り立たせる？ 場所によっては月面でも諜報機関が張っている」

「七十五番管区だ」

その番号を聞いてハヤトは瞬時にその場所の情報を呼び出す。脳裏に浮かんだのは七十五番管区の悪評であった。

「七十五番……。確か月面の研究施設があったな」

「理解が早くて助かる。リヨウマになど教えれば、一から百まで言わねばならぬのでな」

「その研究施設を共謀して、ゲッターを見せた、という証明にするつもりか？ 出来レースで納得する国かね、ここが」

「七十五番管区の真の噂を、お前とて知らないようだな」

サオトメの背中にハヤトは真偽の疑わしい噂話を投げかける。

「月面に、いいや宇宙に特化した強化人間の開発。そしてその兵器化。一部の噂ではルナリアンだと名乗っているそうだが」

その言葉にサオトメは満足したように呻った。

「その通り。ルナリアン、という組織が実在する」

ハヤトでさえもその言葉には驚愕を露にする。噂話だ、と切り捨てられてもおかしくはなかった。

「三面ゴシップが好みそんな話だが」

「月面を管理しているのはそのルナリアン共だ。月の研究施設の上げる成果をまずはそいつらが享受する。生体組織の改造、及び強化人間の生成」

「違法だが」

「構いはしないだろう。何せ、どこの国にも属さない場所なのだから」
法律も関係はなし、か。ハヤトは顎に手を添えて考え込む。

「そのルナリアンのいる無法地帯に、オレ達を送り込んでどうするっ

て言うんだ？ 連中のご機嫌伺いでもするか？」

「ルナリアンは一種の反感星団体とも言えなくない。プラネットシエルに、お前達以上に反感を持ってしている事だろう」

「故郷を穢す不届き者、か」

あるいはそれ以上の感情を持っているのかもしれない。彼らは惑星外からプラネットシエルを観察し続けたのだ。惑星を覆う銀色の皮膜に一番に敏感な種族の恐れがある。

「行き過ぎた思想はほとんど暴走と同じだ。彼らはこちらからゲッターを寄越せば、必ず奪還作戦を取ってくるだろう。ゲッターを盾にプラネットシエル中止を訴えるかもしれない」

そうなれば相手の思う壺だ。どうするつもりなのか、ハヤトは尋ねていた。

「ならばゲッターを素直に寄越すのは馬鹿馬鹿しいと思うが」

「いや、この機を逃せば我が国からの支援も断ち切れ完全にサオトメ研究所は資金提供がなくなる。そうなれば一番に枯渇するのはゲッターの部品もだが、資源がなければ研究は続けられない。なればこそ、ゲッターは派遣すべきなのだ」

「矛盾しているように感じる。ゲッターを見世物にしたいのか？」

ゲッターロボの覇権争いが続けばネフィリム討伐にも支障が出る。見世物などサオトメが最も忌避している事だろう。

「だがその能力の誇示はせねばならんだ」

サオトメの口調には苦々しいものがあつた。政治の矢面に立たねばならぬ苦勞。それまでこの老人はどうやってゲッターの開発と政を分けていたのだろうか。

「では、どうする？ 手始めに堅牢なプラネットシエル外殻をゲッターの武装で破壊でもしてみるか？」

ハヤトの言葉にサオトメは口角を吊り上げた。冗談だと通じたらしい。

「お前は別にプラネットシエル破壊活動にこだわる必要もないのだろう？」

サオトメの言葉にハヤトは、「知らんな」と肯定でも否定でもない立

場を貫いたが実際は見透かされているのかもしれない。自分がより強く立ち回れる場所ならばいちいち思想に頓着はしていない事を。プラネットシエルは分かりやすい権力と思想の誇示だった。だからこそ噛み付けば最も輝いていられたのもある。

「分かつておろうて。お前は、ゲッターの強さとその危険性を何よりも理解しているはずだ」

「買い被るな。オレとて一度乗っただけだ」

「一度乗れば、もう二度目はない、と言われればお前は全力で抵抗するだろう。ゲッターの魅力に取り憑かれた人間の眼を、もうしとる」

ハヤトはサオトメを睨みつける。だがサオトメは涼しい様子だ。実際、自分がいくら言葉を弄そうが本音の部分ではゲッターを知りたいたいという欲求を見透かされているのだろう。

「……で？ そのルナリアンの待つ月面に降り立って、何がしたい？ ゲッターの武装でルナリアンを虐殺でもするか？ なるほど、力の誇示にはなる」

サオトメは笑い飛ばした。「それもいいな」とこの老人ならばやりかねない。

「だが、もっと相応しいのはゲッターで連中を殺すのではない。地獄に墮とすのだ。我々と同じようにな。月の連中には地獄を見てもらう」

それは単純にゲッター兵器で殺せよりもなお恐ろしい命令であろう。ゲッターの見せる地獄。それは惑星が襲われているネフィリムの危険性とレプリカントの懐疑地獄でもあろう。

「月にいる連中は腑抜けている。だからゲッターで一喝してやるとでも？」

「ある意味では正しいな」

サオトメは向き直りハヤトに命令する。

「よいか？ ゲッターで月面に行く。これは決定事項だ。だがそれよりも重要視すべきなのは、ゲッターの力を最大限に利用するための手段が月面にしかない事なのだ」

「月面まで、わざわざスカウトしに行くってわけかい」

覚えず口元が緩む。しかしサオトメは一笑すらしない。本気でそれを検討しているのだ。

「ルナリアンにもはぐれ者はおろう」

「そんな小さい可能性に賭けてどうする？ あんたの事だ。既にある程度の当たりはつけているのだろう？」

サオトメはその時になってようやく不敵に笑んだ。何かを約束しているかのように月の三次元図に手を翳す。

「お前らはただ月に行け。ただリヨウマには教えるなよ。奴の事だ。ワシに否が応でも理由を聞き出しに来る」

「そういう性格だからな」

「ハヤトよ！ 月での交渉はお前に一任する。腐っても反政府組織のリーダーだった男だ。交渉術はお手の物だろう？」

リヨウマには強硬手段、自分には交渉を求めているわけか。食えない老人だとハヤトは再認識する。

「分かった。今は、あんたの側につく。そのほうが面白い目を見れそうだ」

サオトメは背中を向けて窓の外を見やる。上弦の月が浮かんでいた。これからあの場所に行くのはにわかには想像出来ない。

「一つ、あんたに聞きたい」

「何だ？」

ハヤトはかねてより持っていた疑問をぶつけた。

「ゲッターとは何だ？ それにプラネットシエルは、どうしてこうも強行される？ まるで焦っているかのように映るぜ」

サオトメは肩越しの視線をハヤトに振り向けた後、「やがて分かる」と語った。

「プラネットシエルも、ゲッターも、ある一面では我々の反抗の形であり、同時に諦めの形でもあるのだ」

「諦め、だと？」

反抗は分かる。ネフィリムとレプリカントへの反抗。だが諦めとは。サオトメの背中を睨み据えるがそれ以上の情報は得られそうになかった。

「今は、それで納得しておこう」

だがあくまで今は、だ。いずれはゲッターの秘密も、プラネットシエルの真意にも触れなければならぬ。それは自分の役目だとハヤトは感じていた。

第三話 「月世界の咆哮 6」

「どうなってやがる！」

コックピットハッチを開けて怒鳴りつけたリヨウマへと組み付いてきたのは数人の僧兵であった。三人がかりでようやくリヨウマが拘束される。地上では三人程度で組み付かれる鍛え方をしているつもりはなかった。数十人でも相手取れる自信があったのに相手の膂力は常人のそれではない。

「レプリカント野郎か……」

背の高い僧兵二人は真空の只中でありながら言葉を交わした。

「おい、こいつ何て言った？」

「知らん。俺達はこのつを運べと命じられているだけだ」

七十五番管区は我が国のものだと言ったとサオトメが告げていたのを思い出す。確かに言葉は理解出来たがまずどうやって月面で音声による会話を行っているのか。

「てめえら……」

マスクの内側でリヨウマは呻る。僧兵はリヨウマを後ろ手に拘束して立ち上がらせる。

「立て。こちら第七機動隊。未確認の機体からパイロットを拿捕。これからどう致しましょう？」

どこかと通信しているのだ。通信先の声が漏れ聞こえてきた。

『その男は特一級対象だ。独房に、いいや、あの男の部屋に連れて行け』

「了解」と僧兵が応じリヨウマを歩かせる。六分の一の重力のせいで妙に身体が浮かんだが僧兵達は慣れているのかほとんど地面から足を離さない。ジャガー号のコックピットも開きハヤトが出てきたのを肩越しに見やる。ハヤトは何らかの言葉を僧兵と交わしリヨウマとは別方向に歩いていった。

「……何だっつてんだ、あいつ」

僧兵による拘束を受けていないところをみると何らかの打ち合わせ

せがあつたのか。勘繰っていると急に重力区に連れて行かれた。六倍の重力にリヨウマの筋肉と骨が軋む。だが僧兵達はころつとしていた。

重力区で逆に上手く歩けないリヨウマを先導する僧兵が徐々に暗い場所へと歩んでいく。カプセルが廊下の両脇に並んでおり内部には全裸の人間が入っていた。

「おいおい、怪物の万国博覧会か？」

怪物、という言葉にぎよろりと僧兵が振り返る。リヨウマがその眼差しの意味を窺う前に鳩尾へと鋭い一撃が食い込んだ。鍛え上げた自分ですら膝を折るほどの一撃が臓腑に刻み付けられる。

「言葉に気をつける、野蛮な地上人め。彼らは目覚めの時を待っている同胞だ」

「同胞……。てめえらみたいなのが大勢いるってのか」

僧兵がリヨウマの顎を蹴りつける。一度体感シミュレーターでベータのメインアームと腕相撲をした事があるがそれ以上の力だ。意識が飛びそうになる。

「おい、こいつをあの男の牢獄にやるんだよな」

僧兵の一人の声に前を行く一人が頷く。

「嫌なんだよなあ。あれの近くに行くのは」

「仕方なからう。この地下に封じ込めておくしかなかった化け物だ」

リヨウマはほとんど消えそうな意識の中でそれらを聞く。化け物、牢獄、という言葉が意味を成す前にエレベーターに乗り付けられ気が付いた時には牢獄へと入れられていた。立ち上がって抵抗しようとするも身体に力が入らない。どうやら軽い脳震とうを起こしているらしかった。

「くっそ……。月面人が……。馬鹿力してやがる」

左手首に巻いた端末に呼びかけるがミチルは応じない。やはり衛星軌道以上ではミチルとの交信も出来ない。この状態でどうしろと言うのか。このままでは死を待っただけである。

その時、暗闇の奥で何かが身じろぎした。リヨウマは反射的に構える。

「何だ？　そういや化け物って……」

呻り声が聞こえてきた。巨体で自分の倍ほどはある。

「おいおい、グリズリーでも飼ってんのか？　月で熊を飼うなんざ笑えねえよ」

熊と戦った事はないが剥き出しの野生に今の状態で勝てるかどうか分からない。しかしリヨウマは虚勢を張った。相手が何者であろうと、このままむぎむぎと死んで堪るか。

すると相手の態度が変わった。呻り声は質問へとなる。

「……人か？」

こつちが聞きたかったがリヨウマは、「あん？」とガンを飛ばす。

「おれは人間だが」

「人間、そうか人間がここに放り込まれたのか」

相手の声はまさしく人間のそれである。リヨウマが胡乱そうにしているどぬつと暗闇から顔を出してきた。思わず息を呑む。自分の倍はある身長に体格だった。それに比して相手の態度は謙虚そのものであった。

「人間じゃないか。それもルナリアンじゃないな。どこで人工培養された？」

人工培養、という言葉にリヨウマは眉をひそめる。

「おれは真正銘、地上人だつての」

「地上？　あの惑星の、地上から来たって言うのか？」

巨体が指差す。目を凝らせばガラス窓がありそこから惑星が覗いていた。

「ああ、そう。あつから来たんだが」

「すごいな！　お前！　あんな遠いところから人が来れるんだなあ！」

素直な関心の声が牢獄を震わせる。リヨウマは鼓膜がキーンとなったのを感じた。

「でけえ、でけえっててめえの声！　なんだ、喋り慣れてねえのか？」

「おお！　悪い悪い！　百年ほど一人だったものだからつい、な」

「百年……？」

リヨウマは相手の顔を窺う。少し太り気味だが顔立ちには皺も見られないし年老いている風でもない。リヨウマの視線に気づいたのか、「ルナリアンは長寿でな」と答えた。

「大体二十歳前後の見た目で成長が、いや老化が止まる。そういう風に出てくるんだ」

ルナリアン、という言葉にリヨウマはシステムAIの宣言を思い返す。

「そういう風な事、言っている奴がいたな。しかし月に人が住んでいるとは……」

「何を言っている？ 八十年前にはテラフォーミングの最終段階に至っただろう」

「ああ、ジジイがそんな事言ってたっけ。でも、それじゃおかしくねえか？ お前、百年って」

「俺は最初期に作られたファーストナンバーのルナリアンだからな。ファーストナンバーで処刑されていないのは、俺だけだろう」

大男の声にリヨウマは顎に手を添えて思案する。処刑、などという奇怪な言葉が飛び出した。

「どういう事なのか、ちよつと説明してもらえると助かる」

リヨウマは腰を据えた。相手も座り込んで、「いいぞ」と応ずる。

「話すのは大歓迎だ」

「てめえ、名前は？」

相手はにやりと口角を吊り上げて笑った。

「トモエ・ムサシ。日系ルナリアンだ」

第三話 「月世界の咆哮 7」

「ルナリアンの設備というのは、随分と進歩しているんですね」

ハヤトはまずそう口火を切った。前に行く僧兵達が、「ここ八十年の事だ」と答える。

「野蛮な地上人のような暴挙には出ない。我々は独自のシステムを持っている」

「それは見れば分かります。私はそれ以上を知りたい」

ハヤトの声音に気をよくしたのか僧兵は上機嫌だった。

「地上人は野蛮だとずっと教えられていたが、あんたは分を分かっている様子だ」

「月のほうが先進的なのは火を見るよりも明らかですから」

もつとも、自分の放っているおべっかがここまで通用するおつむだという事は、月の連中の底も知れたというものだ。ハヤトは胸中に御する事の出来る奴ら、だと判定した。

「こつちだ」

僧兵二人が扉の前で立ち止まる。ハヤトだけ扉の向こうに通された。どうやら地上でも月でも、自分を偉く見せようという人間の魂胆は同じらしい。ちょうど惑星が望める角度で窓が設えてあり、数々の豪華な品々に囲まれているのは白衣の男であった。見た目の年齢は自分とさして変わらないように見える。相手は威厳たつぷりに咳払いして歩み寄ってきた。身長はゆうに二倍はある。ルナリアンは皆背が高い。これは低重力下だからだと思われた。

「ジン・ハヤト、だな？」

聞かれてハヤトは、「ええ」と答える。男は友好的な笑みを刻んだ。

「ルナリアンの拠点管理を任されているタチバナだ」

タチバナはほとんど見下ろす格好でハヤトに手を差し出した。手もグローブのように大きい。握り潰されはしないだろうが、ハヤトは警戒を走らせた。タチバナは口元に笑みを浮かべる。

「安心してください。握り潰しはしません」

ハヤトはそれでも警戒を解かず握手は控えた。タチバナは搬入口

より運ばれてくるゲッターを見やる。ゲッターは懸架用のトラック数台に乗せられて月面基地へと搬入されている。

「ベーター二機を落とすのは惜しかったかもしれない。今の人類の底が知れたというのに」

タチバナの言葉にハヤトは、「それは残念な事をしましたね」と他人行儀だ。タチバナはハヤトを見やり、「そういう態度を取れる人間は珍しい」と評する。

「同族をやられて顔色一つ変えぬとは」

「生憎、同族殺しを何度も重ねてきたクチでね。もうそういうのは麻痺しちまった」

ハヤトの言葉を冗談と受け取ったのかあるいは本音だとしても恐れるほどではないと判じたのかタチバナは、「面白い」と呟く。

「我らルナリアンの事、どのように地上に伝わっているのかな？」

「月での偉大な種族だと」

ここはせいぜい持ち上げておく事だ。そうしなければ情報も盗み取れない。タチバナはその回答に満足したらしい。

「結構。地上人はいつまであの星にしがみついているのか。オマケにあのような兵器を造り上げて。我々への宣戦布告だと取られてもおかしくはない」

「ゲッターが、珍しいですか？」

「珍しいも何も」

タチバナはボタンを一つ押す。するとAIの声が響いた。

『我々の有する人工衛星のレンジリングビームでも解析不能と出ました。ほとんどが意味不明のブラックボックスであると。あれは何です？ ジン・ハヤト』

確かルナと名乗ったAIであったか。どうやらAIの質はサオトメ研究所のほうが上のようだ。

「私達も分かっています。分かんずに乗せられているのです」

ハヤトの言葉に興味を示したのかタチバナは椅子を一つしやくつた。

「かけたまえ」

ハヤトは椅子に座りタチバナも執務机の奥に腰かけた。

「どういう意味なのか」

「ネフィリム、という存在をご存知か？」

タチバナは目をAIに走らせる。AIはデータベースを漁っているようだった。

『そのような名前の物体は存在しません』

「地上では日常茶飯事だね。そういう怪物が出現する。我々はレプリカントという脅威に晒されており、その副産物がネフィリムだ」

その段に至って、「ああ」とようやくタチバナが理解した。

「レプリカント。そういえばあったな。今は、もう人類との勢力基盤は変わったか。まさか三百年前には隆盛を築いたレプリカントが敵呼ばわりされているとは」

タチバナの発した声にハヤトは面食らう。その返答は想定外だった。

「いや、レプリカントは、今も昔も敵のままだが」

その言葉に奇怪に感じたのは向こうも同じのようで事実関係をすり合わせる。

「待つて欲しい。レプリカントは人類の敵で、三百年前にはもう彼らの優位は変わらなかった。それはずっと月面から観測し続けてきた我々が証明している」

ハヤトの脳内がこんがらがってきた。だが順序立てて整理する。

「いや、待つて欲しい。レプリカントは敵であり、人類の脅威なのだと、我々は認識しているのだが」

タチバナは怪訝そうな顔をする。ハヤトの言葉をまるで信じていない。

「……どういう事なのだか、説明してもらわねばならないようだな」

ハヤトは立ち上がっていた。タチバナは、「いや、間違っているのはそちらだろう」と譲らない。

「レプリカントはもう人類に成り代わっているはずだ。だって三百年前にはもう」

「三百年前によくやく第一号が観測された生命体だぞ。そんなはずが

あるか！」

怒声にタチバナは、どういう事だ、とAIに囁きかける。ルナはシステム音声で答えた。

『地上でレプリカントと人類の勢力争いが行われたのはもう三百年も前の事です。だから今さらネフイリム云々というのが全く理解出来ないというので』

「そんな馬鹿な！」

ハヤトは机を叩く。タチバナが瞠目した。

「ジン・ハヤト。貴君はルナリアンとの協定を結びに来たのではないのか？ そのような態度」

「確かに協定は結びに来た。だが齟齬があるようだ。今すぐ調べ直して欲しい」

「と、言われても、事実関係は変わるまい」

タチバナは譲る気がない。ハヤトはカードを切る事にした。

「六分の一Gに耐える肉体を持つ強化人間」

ハヤトの言葉にタチバナの顔が強張った。構わず続ける。

「随分と無茶な研究もあったものだ。六分の一に耐えるためあなた方は自らの肉体を強化し、最早レプリカント以上の脅威となった」

「……何を言っているのか、全く」

しらばつくれるタチバナにハヤトは懐からリモコンを取り出す。

「それは？」とタチバナが聞いた。

「あなた方との交渉のつもりだったが、どうやらあなた方は歴史認識を誤った道を踏み外した種族らしい。悪いがゲッターの性能をお披露目するために、犠牲になってもらう」

その言葉の意味するところを理解したのかタチバナの表情が凍りついた。タチバナは静かに問い質す。

「自爆装置か？ あるいはゲッターの起動ボタン」

「察しがいいのはお互い様だな。ゲッター線でせっかく築いた王国を穢されたくなければ、こちらの要求を呑んでもらおう」

タチバナは顎をさすって考え込む。どうやらハヤトも自分とルナリアンとの間には何らかの行き違いが発生しているらしいと察知し

た。

「考え直せないだろうか。月の居住地域を追われて、地上になど今さら戻れん」

「強化人間共ならばなおさらだろうな。今やレプリカントの脅威と貴様らは大して変わらん」

「だからレプリカントというのが分からんと言うのだ。今さら偽人類云々の話をされても——」

その言葉の先を遮ったのは警報であった。ハヤトは赤色光に塗り固められた室内で首を巡らせる。タチバナが素早く無線を取った。

「何事か」

『ワームホールが発生しました。宇宙空間にです。現在、接近してくる熱源を関知』

「物体の詳細は？」

『依然、不明！』

オペレーターの声にタチバナはハヤトを睨み据える。

「何を連れて来た？」

寝耳に水であった。新たな第三勢力の脅威にハヤトですら困惑する。

「待て。地上のサオトメ研究所と交信し、対策を……」

「何を連れて来たと聞いておるのだ！ この野蛮人共が！」

タチバナの丸太のように太い腕がハヤトの首根っこを掴もうと迫る。ハヤトは危機回避神経を走らせタチバナの上を跳躍する。タチバナの勢い余った攻撃が椅子や機器を薙ぎ倒した。やはりこの男そのものも強化人間。ハヤトは腰に装備していた銃を取り出した。

「どうやら交渉は決裂のようだ」

「そうみたいだが、その前に聞かせろ。ゲッターロボとは、何なのだ。レンドリングビームでも解析出来ない存在。我々は出来る事ならば無傷で手に入れたい」

「まだそちらに分のあるような言い草だが」

銃口を突きつけられてその落ち着きようは常軌を逸している。タチバナは構えを取った。右手を突き出し、左手を二の腕に添えてい

る。見た事のない流派だ。

「六分の一G殺法」

その言葉が消えるか消えないかの刹那にタチバナの姿が瞬時に移動した。何だ、とハヤトが身構えた時、タチバナの身体が大写しになる。瞬間移動と見紛うほどの移動方法。ハヤトは咄嗟に防御の姿勢を取ったがそれでも減衰し切れない攻撃力に吹き飛んだ。仰向けに倒れ臓腑のダメージを確かめる。タチバナはもう一度右腕を突き出した構えを取った。

「六分の一G殺法。どうやら月面で編み出された技らしいな。そいつでゲッターを圧倒したのか」

僧兵達が使っていた見た事のない武術。それこそが六分の一G殺法に違いない。ハヤトは口元の血を拭ってタチバナを見据える。タチバナは既に臨戦態勢だ。

「そうだ。どうする？ 地上人。我らの要求を呑むか、それとも益のない平行線の話題を続けて困り果てるか」

「どちらも、お断りだな！」

突き上げた銃口が火を噴きタチバナを捉えようとするがタチバナはまたしても瞬時の移動で回避していた。銃弾よりも速いだと？

とハヤトが瞠目すると鳩尾へと攻撃が叩き込まれる。掌底の一撃にハヤトは肺の中の空気が一気に押し出されたのを察知した。

今度はメインフレームに叩きつけられ背筋に鈍い痛みが走る。タチバナはそれこそ圧倒的な鬼のようにハヤトの命を狙っていた。

「どうやら地上人は随分と弱くなったようだ」

手刀が形作られる。その膂力からしてみればそれこそ真剣と何一つ変わらない一撃を約束するだろう。ハヤトは舌打ちを漏らしてリモコンを突き出す。

「ゲッターとやら、ここまで助けが来るかね？」

「さあな。だがオレは、今も昔も、信じているのは自分の力だけだ！」

ボタンを押し込むと搬送されていたゲッター1が窓の外でオープンゲットする。ジャガー号が真っ直ぐにこちらへと突っ込んできた。ハヤトは首筋をさする。首輪が輝いていた。

「こいつには予めオレの脳波を感知する状態にしておいた。研究所の連中はオレを制するために首輪がつけられたと思込んでいるだろうが、実際にはゲッターという力を味方につけたのは、このオレだ」
ジャガー号の推進力で部屋が熱線に晒される。タチバナはしかし慌てる事もない。

「馬鹿め！ この部屋が崩れ去ろうと我らルナリアンは宇宙空間での活動が出来る！」

真空に耐えられないのはむしろこちらだと言いたげだった。だがハヤトとてそれを計算に入れていないわけではない。

「真空には耐えられるだろうさ。しかしゲッターの本気には耐えられるか？」

脳波でジャガー号に促す。ゲッター1を形成していた状態の腕が飛び出しタチバナを引っ掴んだ。タチバナは完全に不意をつかれた様子でゲッターに組み伏せられる。

「数人の僧兵相手ならばゲッターでも対処不能だろう。だが一人ならば、対応可能だったな。ジャガー号、押さえつけておけ。後は……」

異常を聞きつけた僧兵が飛び込んでくる。ハヤトは迷わずに相手の眉間に銃弾を放ち、隙だらけのルナリアン二人が倒れる。跳躍し、ジャガー号のコックピットに乗り込んだ。その通信が拾い上げたのはルナリアン達の悲鳴だった。

『おい！ 接近してくる熱源反応、レンジリングビームを照射する暇さえも与えないぞ！』

『こいつは地上人の兵器じゃないのか？ レンジリングビームを反射して、いやエネルギーに転じて反撃してくる！』

この状態で月に援軍が向かってくるとは考え辛い。ハヤトは最もあり得る可能性を視野に入れた。

「まさかレプリカント？ ネフィリムだって言うのか」

ジャガー号を発進させ、ハヤトはイーグル号とベアー号を追従させる。自動操縦だが月面の六分の一Gが幸いした。地上のような過負荷に晒される事はない。ハヤトはレバーを引いて宣言する。

「チェンジ！ ゲッター2！」

ジャガー号が機首を上空に向け、ベアー号、イーグル号の順に接合されていく。ジャガー号のロケット型の頭部がスライドして開き、内部に鋭い眼光を備えたデュアルアイを顕現させた。細腕のアームが伸長し、ベアー号の有する推進剤のタンクが火を噴いて姿勢を制御する。ハヤトは向かってくるという正体不明の物体を最大望遠に捉えた。

身体をくねらせて向かってくるのは四角い箱の連なりで形成された蛇だ。頭部の意匠はオベリスク型のそれと同じであるが蛇のように細長い。あるいは龍か、とハヤトは結論付ける。

「新しいネフィリム……。どうしてこんなところに」

ネフィリムの出現例は月面にはなかったはずだ。ハヤトは先制攻撃を仕掛けるためにゲッター2を推進させた。それよりも早く出撃したのは自らを射出器で飛び出させたルナリアンの僧兵達だ。彼らは無謀にも生身でネフィリムに立ち向かおうとしている。

「馬鹿な。生身でネフィリムを倒せるはずがない」

僧兵達の蹴りや拳がネフィリムを打ち据えるものの、ネフィリムはそれらの物理攻撃を身体の反対側から放出した。攻撃は極小の粒子となって宙を舞う。ネフィリムが僧兵を相手にするまでもなく箱から放出された赤い光が僧兵達を薙ぎ払っていく。

「どうやらこのネフィリムは受けた攻撃を反射する性質を持つらしい。厄介な、とハヤトは歯噛みした。

「ゲッターの武装も通用するかどうか……。やってみるほかないが」

ハヤトはゲッター2をネフィリムと相対させる。どうやら月の戦力はルナリアン一点張りで機動兵器は存在しないらしい。僧兵達が困り果てたように月面で立ち尽くしている。

「ゲッターエナジードリル！」

細腕のアームの先端から緑色の粒子で形成されたドリルが発振される。どこから攻撃すればこのネフィリムを狙える、と考えている間にもネフィリムは頭部の眼窩を輝かせた。

「まずい、と脊髄反射的にハヤトはゲッター2を駆け抜けさせる。先ほどまでゲッター2のいた空間を狙ったビームが射抜いた。」

「このネフィリム、やっぱりゲッター狙いか」

呻いてハヤトは下段から突き上げるようにドリルを撃ち込んだ。ゲッターエナジードリル。その威力は、とはかっていると箱型の身体の一部が赤く輝く。いち早く離脱するとやはり反射攻撃が待っていた。赤い光が箱の一面と同じ質量で反射され月面基地を破壊する。「こいつ、やはり基本は反射攻撃！ ゲッターEドリル一つならば反射できるだろうが、これならばどうだ」

アームの先端がペンチ型に変形し、それぞれの筒先から二本のドリルが発生する。

「ダブルゲッターEドリル！」

二本のドリルを片腕に発振させながらゲッター2が残像を刻みネフィリムの背後を取る。機動性はこちらのほうが有利だ。ならば後は攻撃面で勝ればいい。ハヤトはドリルを発生させたままゲッター2をきりもみ運動させた。竜巻が発生しゲッター2そのものが粒子の暴風を帯びてネフィリムへと突進する。

「ドリルトルネード！」

ネフィリムの身体をゲッター2が貫く。箱の一つを破碎した。これで蛇のネフィリムは行動不能になるかと思われたが、ネフィリムは破碎された身体の一部を挟み込み、何と破碎部分を修復するでもなく、身体を短縮させて破壊そのものをなかつた事にした。その挙動にはさしものハヤトも瞠目する。

「全身を隈なく潰さない限りは無敵か……！」

蛇のネフィリムが鎌首をもたげゲッター2を狙う。ビーム自体の速度はゲッター2でいなせるもののやはり出力不足であった。ゲッターが本来の力を発揮していない。自分がメインのゲッター2でさえもその能力は三分の一以下だ。

「……不本意だが、リヨウマともう一人必要だと言うのは本当のようだな」

ならばリヨウマを探さねば。ハヤトはゲッター2を月面基地へと走らせた。

第三話 「月世界の咆哮 8」

「……とまあ、ここまでが俺達ルナリアンの成り立ちだ」

ムサシの語ったルナリアンという存在にリヨウマは驚嘆する。六分の一Gに耐えるために強化人間を生産し続けている。それはまさしくレプリカント以上の脅威であった。

「マジかよ……。月には大変な奴らが棲んでいるんだな」

サオトメは知っていたのか？ その疑問が鎌首をもたげてくる。知っていてゲッターを派遣したのはどう考えも不自然だ。ゲッター鹵獲のチャンスを与えたようなものである。

「そういや、何でてめえはここにいるんだ？ ルナリアンってのは仲良しこよしじゃねえのかよ」

「俺はタブーを犯してな」

ムサシの言葉にリヨウマは眉根を寄せる。

「タブー？」

「青く輝く星に憧れたのさ」

それは自分達の地上の事だろう。リヨウマは尋ねていた。

「何でそれがタブーなんだ？」

「地上人は野蛮だと教わってきた。だから地上に憧れる事そのものが罪だと。実際、俺はルナリアンの中でもちよつと異質というのか、力が人一倍あるものだから覇権争いに支障を来すと考えられたんだろうな。実際、俺には権力なんて興味がなかったわけだが、一度暴れ出すと誰も手に負えないもんだから、閉じ込めておく事になったのさ」

「理不尽じゃねえか。てめえ自身が悪いわけじゃない」

罪と言っても地上に憧れた、それだけだ。リヨウマは提案した。

「地上に、行かねえか？」

だがムサシは頭を振る。

「いや、行く方法がないんだ。ルナリアンは身体強化がしてあるから重力には耐えられるだろう。しかし機械文明がな、全く進歩していない。ロケットもないんだ。月だけの自給自足が成り立ってからここ

百数年は地上との交信も絶っている。俺個人じゃどうしようもない」「なに、おれ達だっつてここまで来たんだ。行く方法はいくらでもある。何ならゲッターを使ってもいい」

「ゲッター？」

ムサシが首を傾げる。ゲッターの説明をするべきか、と悩んでいると激震が監房を揺さぶった。リヨウマは浮かび上がる。ムサシが手を出して天井に当たる前に止めてくれた。

「何が起こってるんだ？」

ムサシもこのような状況には慣れていないらしい。リヨウマはハヤトか、と察知した。

「どうやらゲッターで暴れ回っているようだぜ」

ルナリアンとの交渉が決裂したか。あるいはゲッターを使わざるを得ない状況に追い込まれたか。僧兵達が戸惑っているのをリヨウマは読み取った。

「ムサシ。ここから出ねえか？」

その言葉にムサシは、だが、と濁す。

「俺は重罪なんだ。地上への憧れを捨てなければ」

「もうそんな事頓着している場合でもなさそうだぜ。この月面基地そのものがなくなれば、タブーもクソもねえだろ」

リヨウマの言葉にムサシは口元を綻ばせた。

「不思議だな。お前の言うゲッターとやらと地上に、またしても興味が出てきた。百年間で断ち切ったと思われた雑念が」

ムサシの顔立ちが変わってきた。これはまだ戦う意気のある男の顔だ。

「面白え。行くぞ、ムサシ！」

リヨウマの号令に、応、とムサシが扉に向けて突進する。扉が容易く破碎され周囲を見渡した。僧兵達は今の扉に挟まれて気絶したようだ。

「呆気ねえな。ムサシ、いつでも脱獄出来たんじゃねえのか？」

「かもな」とムサシは周囲に視線を配っている。ムサシの巨体では目立つ。リヨウマは迅速な判断を仰いだ。

「どこから月面に出られる?」

「こつちだ」

ムサシの向かった先には僧兵達が待ち構えていた。やべえ、とリヨウマが及び腰になるもムサシは既に闘争本能が呼び覚まされた獣であった。雄叫びを上げて僧兵達を薙ぎ倒す。一撃であった。ゲッターを苦戦させた僧兵をムサシは一撃で倒す。

「嘘だろ……」

もしかすると自分とはんでもない化け物を解き放ったのかもしれない。そのような懸念を無視してムサシは月面上を目指す。リヨウマもそれに追いつがった。

一面がガラス張りされたチューブ状の通路から望めたのは宇宙空間の常闇であったが、その一部が光ったかと思うと瞬く間に赤い爆発の光が月面基地を飲み込んでいく。減光されない暴風のような光の渦にリヨウマもムサシも腕を翳して防御した。

「何てえ、光だ」

ずっと独房にいたムサシからしてみれば網膜の裏を刺激する光だろう。リヨウマはその光の元が何なのかを瞬時に理解した。

「ネフィリム……。何で月面に」

それを裏付けるように天上に出現したのは箱を連ねたような蛇型のネフィリムだった。リヨウマは歯噛みする。ゲッターがあれば、今すぐに叩き落してやるのに。

その時、僧兵達が前の通路から出現しリヨウマ達を認めた。

「な、何で外に出ている!」

僧兵達が構えを取る前にムサシが構えた。右腕を前に突き出し、左手を二の腕に添える。

「六分の一G殺法……。一の陣!」

ムサシの姿が掻き消えた。あれほどの巨体がどこへ、と首を巡らせる前にムサシは中空に躍り出ていた。跳躍、それも生半可な距離ではない。瞬時に僧兵達の背後へと回ったムサシが連中を薙ぎ払って風圧で吹き飛ばす。

「大雪山、おろし!」

ムサシに投げ飛ばされた僧兵達は次々に気を失っていった。リヨウマは口笛を吹く。

「こいつはすげえ、百人力だぜ」

ムサシはそのまま通路を突き進むもうとする。その時リヨウマの視界に映ったのは見知った機影だった。

「ゲッター2？ 誰が動かしてやがるんだ？」

ゲッター2がネフィリムのビームを回避しつつ攻撃の機会を窺っている。問うまでもなくハヤトの独断だろう。リヨウマは拳を握り締めた。理念もなく、ただ闇雲にゲッターを動かしているのが許せない。

「ハヤト！ てめえ、勝手にゲッターを——」

その声が聞こえたのか、はたまた偶然かゲッター2はビームを避け切れずによりめいた。そのまま月面基地へと墜落する。強化ガラスの通路が吹き飛び、真空に晒された空間から空気が抜け出て僧兵達が宇宙に投げ出された。リヨウマも飛ばされそうになるがそれを抑えたのはムサシだ。リヨウマの手を掴み、何と自分の足で立っている。

「あれが、ゲッターか」

ムサシの声は弾んでいた。リヨウマは、「ああ」と口角を吊り上げる。

「どうだ？ ムサシ。あれに乗って、地上に行こうぜ」

「あの面構え、俺は気に入ったア！」

ムサシが身体を丸めて宇宙空間に飛び出す。その行動は予想外であった。リヨウマも当然、投げ出される覚悟であったがムサシは六分の一Gを知り尽くし、ちょうどゲッターのいる地点まで跳躍しただけのようだった。リヨウマは辛うじてゲッターのコックピットパネルに触れてハッチを開ける。コックピットに収まってからムサシに命じた。

「てめえはベアー号だ。こっちからハッチは開ける。空気圧は」

「問題ない。俺の身体はどんな逆境でも耐えられる」

その自信は間違いない。リヨウマのアクセスでベアー号のハッチが開きムサシが収まったのを確認した。

『……リヨウマ。お前、何をした？』

「てめえこそ、勝手にゲッター乗り回してやられてんじや世話アねえな。なに、サオトメのジジイが気に入るかどうかは分からねえけれど、揃えてやったぜ！」

ゲッター2がにわかには起き上がる。ネフィリムの眼窩が煌いた。

「やべえ！ ビームだ」

『ゲッター2ならー！』

ゲッター2が弾かれたように動き、ビームを回避する。だが髪の毛一本ほどの回避速度なのはリヨウマでも窺い知れた。

「てめえ一人でゲッター動かして疲れてやんのかよ」

『黙って、いろ……。どれだけ人が苦勞したと……』

息の上がつているハヤトに、「そうかい」とリヨウマはアームレイカーに手を突っ込んだ。

「だったら代わってやんよ！」

分離プログラムが走り、オープンゲットする。直後、ネフィリムのビームが先ほどまでゲッターのいた場所を貫いた。

『おい！ リヨウマ！ 一人は素人なんだぞ！ こんな状態でオープンゲットしたところで』

ベアー号が無茶苦茶な機動をしている。リヨウマはベアー号をイーグル号で誘導してやった。

「ムサシ！ やたらめったらボタンを触る必要はねえ！ アームレイカーに手だけ突っ込んでろ！」

『こ、ことうか？』

ルナリアンは機械に疎い。ムサシの太い腕がアームレイカーを破壊してしまわないだろうかという懸念はあったがリヨウマはそれだけを命じて合体軌道に移った。

「行くぜ、チエンジ！ ゲッター1！」

レバーを引き、合体する。イーグル号が両翼を畳み、ジャガー号が接合する。ベアー号が遅れて合体し両足を展開させた。両腕が引き出され、最後に亀甲型の顔面が展開される。一对の角が突き出し顎の冷却口からゲッター線の余剰エネルギーと蒸気が噴き出した。

ゲッター1が顕現し、緑色のエネルギーパーテーションが今までにない光を帯びる。力の滾りにゲッターそのものが震えているかのようだ。

『ゲッター線貯蔵量が前回の比じゃない……。エネルギー量八十パーセント？　こんなの、シミュレーションでもなかったぞ』

「そうさ！　こいつが」

リョウマの叫びを邪魔するようにネフィリムがビームを一射する。しかしゲッター1はウイングをトマホークに変えてビームを切り裂いていた。

「ゲッター！　ゲッターロボだ！」

第三話 「月世界の咆哮 9」

ゲッターエナジートマホークがゲッター線を収束させ、刃を出現させる。

三人を乗せたゲッター1はそれこそ神速を超えるやも知れぬ速度で突っ切った。蛇のネフィリムへとトマホークの一撃が食い込む。取った！ とリヨウマは確信したが蛇のネフィリムの身体の一部が赤く発光した。

『いかん！』

ゲッター1が弾かれたように機動する。先ほどまでゲッターのいた場所へと面の一撃が返って来た。箱の一面がそのまま攻撃範囲になっっており月面基地が圧搾される。

「今のは……」

『気をつけろ、リヨウマ！ こいつは攻撃を反射する』

生半可な攻撃は通用しないというわけか。リヨウマは、「ならよー」とトマホークを仕舞い、エネルギーを充填させる。エネルギーパージェクションが胸部へと集中し、緑色のゲッター線が瞬時にピンク色へと移り変わった。

「ゲッター、ビーム！」

ゲッタービームの光条がネフィリムを突き破ろうとする。今度こそ破壊した感触があつたがネフィリムはゲッタービームを吸収した。「何？」

即座にゲッター1を跳躍させる。何故ならば瞬間的に相当量のエネルギーが反射され月面を焼け野原にしたからだ。

「こいつあ、まずいぜ……」

『迂闊に攻撃は出来ん！ ルナリアンとはいえ、一方的に蹂躞する事となる』

「だったらどうしろって言うんだ？ トマホークも効かねえ、ゲッタービームも！ 打つ手なしかよ……」

アームレイカーの拳を握り締める。今のゲッターの武装では反射攻撃に有効な手段は打てない。せめてミチルのバックアップがあれ

ば、と感じた脳裏に突き刺さったのはムサシの声だった。

『なあ、このゲッター。二形態にしかねないのか?』

『何を呑気な事を』

ムサシの落ち着き払った声にハヤトが苛立ちをぶつける。リョウマはそこで閃いた。

『ゲッターは……、もう一形態ある……』

リョウマの考えを読み取ったのかハヤトが、『無茶だ!』と叫ぶ。

『ゲッター3は今までオペレーションのした事のない機体。それをどこにも知れぬ馬の骨に』

『馬の骨で悪かったな!』

二人の言い合いを他所にリョウマは可能性を見ていた。もしかしたら——。そう感じた時にはムサシに尋ねていた。

『ルナリアンは機械には疎いんだな?』

『あ、ああ。機械ってもんはてんで』

『なら、アームレイカーをてめえがそうするように動かせ。そして声を上げて叫べ。そうすりやゲッターの声紋認証システムが勝手に適切な動きを選択してくれる』

『おい! マジにやるっていうのか!』

ハヤトの悲鳴めいた声に、「うるせえぞ、ハヤト」と返す。

「てめえだつて勝手にゲッター2を動かしてたろうが。ルナリアンのパイロット。面白くねえか?」

『よく分かんが、俺が率先して動かせばいいんだな?』

『ああ! その判断で結構だぜ! オープンゲット!』

三機に分離しハヤトが舌打ちを漏らす。

『どうなっても知らんぞ』

『死なばもろともよ! チェンジ! ゲッター3!』

イーグル号とジャガー号が連結し、キャタピラの下半身を形成する。イーグル号はバックパックへと変形を遂げ、ウイングは二門の砲台となった。その状態の二機へと上空よりベアー号が突っ込んでくる。雄叫びを上げつつムサシの乗るベアー号が二機に合体し月面へと叩きつけられた。

粉塵が舞い散りゲッターを隠す。ネフィリムがゲッターを狙ってビームを放った。だがその攻撃は伸ばされた丸太のような太い腕で弾かれる。ビームそのものを掴んで弾き落としたその姿が粉塵を裂いて出現した。

今までのようなスマートな体躯のゲッターではない。

キャタピラを装備し、動きは他の二機に遠く及ばない印象を受ける。まるで丸まった僧侶だ。両腕にはスリットが入っており、他の二機よりも長く太い。シルエットは寸胴であったが全ての力を物理攻撃に蓄えているのが全身にある冷却装置から噴出する蒸気が物語っていた。

『これが、ゲッター3……』

ハヤトの声にリヨウマは尋ねる。

「行けるか？ ムサシ」

『こいつを、俺の動き通りにやればいいんだな？』

「ああ、てめえの六分の一G殺法、叩き込んでやれ」

応、とムサシが答え、ゲッター3が砂礫を踏み潰してネフィリムを見据える。饅頭のような頭部は攻撃的とは言い難い。ネフィリムは眼窩を煌かせビームを放出する。ゲッター3は当然のように回避出来なかった。

しかし回避出来ない、のではない。正確に言えば、回避という必要性がなかった。ゲッター3はその有り余る膂力を活かし、ビームを素手で弾き落としたのだ。搭乗しているリヨウマでさえも驚愕する。ゲッター3は砂煙を巻き上げてネフィリムの直下に至った。

『六分の一G殺法、三の陣……。旋風、針鼠！』

その言葉に呼応し、ゲッター3の機体から飛び出したのは幾百のミサイル弾頭だった。それらが幾何学の軌道を描きネフィリムへと突き刺さる。ネフィリムは全身を攻撃されたものだからどこから反射すればいいのか分からないのかあらぬ方向に反射攻撃を放った。

「見えていない？」

その仮説にムサシが、『だったら！』とゲッター3の攻撃を叩き込む。今度は腕を大きく引き込み相手へと突きのポーズを取った。瞬

間、ゲッター3の腕が伸長しネフィリムへと拳を見舞う。

「六分の一G殺法、六の陣……。月面割り！」

ネフィリムが大きく身体を仰け反らせた。ゲッター3の攻撃力はリョウマ達の想定を大きく超えていた。よろめいたネフィリムへとゲッター3はとどめの一撃を放とうとする。両腕が伸びて網のようにネフィリムを包み込む。ネフィリムは反射攻撃を仕掛けようとするが全身を押し包む圧力に亀裂が走った。

「六分の一G殺法、一の陣……。奥義！」

網のようにネフィリムを捕らえていた腕の力が放出されネフィリムが晒されたのはゲッター3の巻き起こす暴風の圏内であった。ネフィリムの身体に幾重もの亀裂が走る。ゲッター3は腕の圧力を解放し、その脅力を投げ飛ばしに全て割いているのだ。

「大・雪・山、おろし！」

ネフィリムが物理攻撃の嵐で内部より罅割れる。月面の衛星軌道でネフィリムが甲高い断末魔を上げた。瞬間、放散爆発が発し月面を赤い光が染め上げる。伸縮した腕が元の長さに戻っていく。

『これが、三人揃ったゲッターの、力の本懐……。』

ハヤトの眩きにリョウマも放心状態だった。まさかここまでとは。技を放ったムサシでさえも狼狽している。

『こんな威力だとは……。すごい代物だな』

ゲッター3が放散爆発の痕を眺めている。リョウマは確信する。

「勝てるぜ。これならば、ゲッターはネフィリムとレプリカント野郎にな」

『やれやれ。いい手土産が出来たというわけか。……。あるいはこれも博士の思惑通りか……。』

ハヤトの眩きを聞き返す前にムサシが声にする。

『おお、青い惑星だ！』

感嘆した声音にリョウマは微笑んだ。

「ああ、帰るとするか」

『そうはいきません』

遮ったのは月面のAIの声だ。冷徹な声と共に僧兵達がゲッター

を取り囲む。どうやら月面から逃がすつもりはないようだ。リヨウマは困惑する。

『どうするんだよ。こいつら蹴散らして帰るか?』

『いいや。あくまで話し合いと行こう。お前ら、これが見えているか?』

ハヤトの声にゲッターの装甲版の隙間から出てきたのは一人のルナリアンである。小さなアームがその男を掴んだ。

『よくもまあ、ゲッターの無茶苦茶な変形合体にも耐えられるもんだ。ボスの命と引き換えにオレ達を見逃す、つてのはどうだい?』

どうやらハヤトは脱出も視野に入れて戦っていたらしい。恐れ入る、とリヨウマは感じた。ルナは、『……卑怯な真似を』と返す。

『ルナリアン云々に関するスキャンダルは公にしない。あんたらは今まで通り月で平和に過ごせ。オレ達は帰る。それで手を打たないか?』

「悪党だぜ」

リヨウマの声にハヤトは返す。

『いつから正義の味方になったんだ?』

『違う、とリヨウマはコックピットでふんぞり返った。』

「で? どうするよ、月面人さんら」

ルナは判断を渋っている。ネフィリムの思わぬ出現があつたもののこれでゲッターの力は示せた。もう月には用済みだ。

『ルナリアンは、地上人などに屈しない——』

その宣言が放たれた瞬間であつた。衛星軌道上から光条が一射され月面基地を攻撃した。システムA Iの中枢であつたろう月面基地が次々と爆発の光に晒されていく。当然、ルナリアン達も無事では済むまい。リヨウマは今の光の元を探そうとカメラを巡らせる。

「誰だ!」

『リヨウマ! オープンゲットだ!』

ハヤトの声が弾けた途端、三機が強制分離する。直後、先ほどまでゲッター3のいた地表をビームが射抜いた。リヨウマはイーグル号に収まったままクレーターの出来た月面を見やる。

「何てえ、威力だ……」

まさかまたしてもネフィリムか。そう感じたりヨウマの思考に水を差すように接近警報が鳴り響く。

イーグル号を慌てて機動させりヨウマはそれを避けた。その視界に映ったのは長大な槍であった。中心部分が角ばって膨れ上がっているが槍の一撃は月面に突き刺さったかと思うと拡散した光線が基地を薙ぎ払っていく。当然展開していたルナリアンは全滅だった。りヨウマはその様子をイーグル号から眺め眼を戦慄させる。

「何を……、何をやってんだ……」

『虐殺、それも一方的な……』

ハヤトがりヨウマの思考を代弁する。りヨウマは奥歯を噛み締めた。いくらルナリアンから仕掛けてきたとはいえ、このような事を望んではいなかった。

「……ハヤト、ムサシ。ゲッター1にチェンジだ」

『だが、敵の正体も分からずに——』

「チェンジしろ！」

遮ってりヨウマは言い放つ。その声には怒気が含まれていた。

「まともな神経じゃねえぜ……。こんな野郎を、許して堪るか！」

合体軌道に入る。イーグル号が両翼を畳み、ジャガー号が腕を展開し、脚部がベアー号によって形成される。

「チェンジ！ ゲッター1！」

ゲッター1にチェンジした瞬間、大出力のビームが発射された。即座に回避させるも月面に多大な被害が出る。通信網を震わせたのはルナの断末魔であった。

『こんな……。ルナリアンは滅びないはずなのに……』

『……いつはひでえ……』

ムサシの声音には自分の故郷が焼かれている感情もあったのだろう。りヨウマはビームの発射源へとゲッター1を走らせた。ゲッター1の拳が突き出される。先制攻撃だと判じていたりヨウマだが上回ったのは相手の反応速度だった。こちらと相対する鏡のように拳が放たれる。ゲッター1のアイカメラにその姿が大写しになった。

三人とも息を呑む。

『こいつは……』

『黒い……鬼……』

そう言うほかない。相手の姿は一对の角を持った漆黒の鬼であった。黄色い眼窩が射る光を灯し力でゲッター1を圧倒する。ゲッター1は翼で制動をかけて月面に着地した。

既に炎がそこらかしこで上がっている月面が相手の姿を照らし出す。常闇に染まるようにして鬼が腕を組んで空中に佇んでいた。

目を凝らせば鬼の体表には無数の赤い鉱石があり、粒子を柵引かせている。発光する赤い石は鎧めいていた。

「漆黒の、ゲッター……だと」

ゲッター1がその姿を再認識する。リヨウマは記憶の奥底にある黒い鬼の姿がそれと同期するのを感じ取った。似ている、いやそれそのものか。漆黒のゲッターは炎を噴き出す月面とそれに抱かれているゲッター1を睥睨している。

爆発の連鎖が戦いのゴングを鳴らしていた。

第四話 「鎧悪鬼 1」

放たれたのは赤い光条。

それと交差するようにピンク色の瞬きが常闇を貫いた。互いに譲らぬ光線の放ち合いと共に接近するのは合わせ鏡のように同じ姿であった。一方は赤い鬼。一方は漆黒の鬼。

双方ともに拳を突き出して宇宙空間を駆け抜けた。拳がぶつかり合うと宇宙が鳴動する。本来、空気も何もない闇の中に叫びが木霊した。素粒子のレベルで震え出す空間に赤い鬼に収まった三人の男がそれぞれに声を発する。

『リョウマ！ こいつ、パワーが伊達じゃないぞ！』

ジャガー号に収まっているハヤトからしてみれば、そのパワーがそのまま機体を伝ってコックピットへと衝撃波を向かわせる。赤い鬼——ゲッター1はしかしハヤトの言葉に頓着する様子はない。

頭部に収まる男の声と思考に支配され、今もまた怒りの鉄拳を漆黒の鬼へと放った。漆黒の鬼はそれこそ神速にも等しい速度で掻き消える。どこへ、と首を巡らせるゲッター1もリョウマも遅い。

直上に現れた、という接近警報ですらその姿を認識するのが遅延したほどだ。機械でも視認出来ない黒い鬼はゲッター1を足蹴にした。ゲッターがそのまま月面に突っ伏す。

黒い鬼は手を開いた。すると月面に突き刺さっていた長大なトマホークが回転してその手へと収まる。リョウマは警報と赤色光に塗り固められたコックピットの中で顔を上げる。黒い鬼の手には罪人の首を狩る斧がある。だが斧ならばこちらも持っていた。即座に呼び出す。

「ゲッター！ E、トマホーク！」

ウイングを構築していた左側のトマホークを握ってゲッターが真上にいる敵に向けて薙ぎ払った。その時にはもう、敵は離れている。ゲッターが軋みを上げながら斧を構えた死神を見据えた。

『ありや、何だ……。リョウマ。あれもゲッターなのか？』

ペアー号からのムサシの声にリヨウマは頭を振る。あれは、そう、幼少期に行き遭った黒い鬼、その姿に他ならない。ならば何故、月面の人々を虐殺した？ どうして自分達を襲う？

リヨウマは思わず問いかけていた。

「お前は、何なんだ？」

当然の事ながら黒いゲッターもその主も答えない。身体を回転させて竜巻を作り出し、そこから縫うようにゲッタービームを螺旋放射する。ゲッター1は月面を蹴りつけて離脱した。クレーターが空きその威力を思い知らせる。

『何て、無茶苦茶な……』

思わず息を詰まらせたハヤトの気持ちも分かる。あの威力はこちらのゲッタービームの数倍はあるだろう。それを連射など正気の沙汰ではない。

「サオトメのジジイの差し金か？ どちらにせよ、このまま帰すと思うな！」

ゲッター1が羽ばたき、ゲッターEトマホークの緑色の粒子刃が黒いゲッターを切り裂こうと迫る。しかし黒いゲッターは紙一重で回避していた。その判断に一切の鈍りはない。まるでそうと確定させられた行動を起こしているかのようだ。

リヨウマがその動きに反応する前に黒いゲッターの肘打ちがゲッター1の背骨を打ち据えた。ゲッター1はまたしても不格好に月面を転がった。それを制御したのはリヨウマではなくジャガー号のハヤトの補助操縦であった。

『リヨウマ！ 余計な相手に敵愾心を作るな！ オレ達の目的はルナリアンの排除、それにゲッター3のパイロットの保護にあった。その目的は果たされ、ネフィリムを倒せる事も証明出来た。それでいいじゃないか！』

しかし納得出来るはずもない。このような裏切り紛いの事など。リヨウマはそれこそ噛み付く勢いで吼える。

「ふざけんな！ 月面人だって殺される覚悟があったってんならそれでいいさ。だがな！ あれはそういうんじゃない。戦争ですらない、

虐殺だ。そんな事を、おれ達は宇宙に来てまで容認しようつてのか！
冗談じゃねえ！」

ゲッターEトマホークの刃がリヨウマの戦意を受けたようにさらに鋭く輝く。粒子の変異にハヤトも戸惑っているようだった。

『この、粒子量は……』

「降りてきやがれ！ 黒いゲッター！ この、ナガレ・リヨウマが相手になってやる！」

ゲッター1が上空の黒いゲッターを指差す。その姿、佇みよう、まさしくゲッター。それもゲッター1の生き写しだ。しかしゲッター1と違うのはその身体中に虫食いのように赤い鉱石が出現している事である。鉱石を纏った相手は鎧のように堅牢に映る。鉱石を輝かせたかと思うとその姿が赤い残像を残して消え去った。リヨウマは咄嗟に反応する。ゲッターEトマホークが捉えた射程には黒いゲッターの頭部があった。

取った、とリヨウマの確信を縫うように黒いゲッターの腕が伸びる。黒いゲッターはトマホークを用いず、格闘戦を仕掛けてきた。ゲッター1の頭部を黒いゲッターが握り潰そうとする。過負荷のアラムが鳴り響き、ゲッター1、イーグル号に激震が走った。

『リヨウマ！ イーグル号がもう！』

「ぎげんな！ この射程なら外さねえぞ。ゲッター、ビーム！」

ゲッタービームの光条が月面を焼き尽くしていく。既に爆発で焼け爛れたようになっていいる月面に黒い焦げ痕が残った。しかし当の目標であった黒いゲッターはいない。どこへ、という思考を挟む前に背後からの衝撃にゲッターがよろめく。

『こいつ！ ゲッターの間を知り尽くしているのか？』

ハヤトの声に応ずる間もなく大写しになったのは相手のトマホークの刃だった。赤い粒子が刃を顕現させ、凶暴に輝く。

「やべえー！」

咄嗟の動物的本能か。あるいはイーグル号に少しでも慣れていたお陰か。リヨウマはオープンゲットの指令を出す事に成功した。分離した三機がそれぞれ黒いゲッターを見下ろして円弧を描く。

『リヨウマ！ 深追いするな。もうゲッターじゃ……』

「ゲッターじゃなけりや、何が奴を裁くつて言うんだ！」

そうとも。誰も裁けやしない。ゲッターでなければ。自分でなければ誰が奴を倒す？ リヨウマは衝き動かされるようにゲッターチェンジを口にした。それを制したのはハヤトである。

『……分からず屋が』

口走った瞬間、強制的にチェンジさせられたのはゲッター2であった。ゲッター2が高速に身を浸しぐんぐんと月面の重力から離れていく。敵前逃亡の動きにリヨウマは困惑した。

「何やってやがる！ ハヤト！ また暴走させているのか？」

『違う！ 今はゲッターが無事に地球に帰還する事だけを考えろ。いか？ ようやく揃ったゲッターパイロットをみすみす殺してしまえば、それこそ名折れだ！』

ハヤトの言い分も分かる。しかしリヨウマは曲げられない。

「馬鹿言うな！ 敵を前にして背中を向けるなんざ、男のする事じゃねえ！」

リヨウマはレバーを引いて分離しようとするもジャガー号からの強制ロックによって分離不可能であった。

「ハヤト！」

忌々しげな声にハヤトは、『生かすためだ』と答える。

『ゲッターの生還こそが急務である。それも分からないのか？』

頭に血が上っている。そのせいだ。しかしそれだけでもない。あの因縁のゲッターは、黒い鬼は自分が倒せなければならぬのだ。脳裏を突き抜ける本能にリヨウマは従った。

「あいつだけは！ おれは、あいつだけは！」

イーグル号の急制動ブースターによる逆噴射にゲッター2の瘦躯が立ち止まる。ハヤトはジャガー号からの通信を弾かせた。

『リヨウマ……！ 今は生き残る事を考えろ！』

「うるせえ！ てめえに指図される覚えはないんだよ！」

『何、仲違いしてるんだ！ このままじゃ機体が分解するぞ！』

ムサシの悲鳴が響く前にリヨウマを含め三人の肌を粟立たせるプ

レッシュヤーの波があった。三人はそれぞれの本能に従い、分離軌道を行う。先ほどまでゲッター2の胴があった場所を光条が射抜いた。

迷いのない殺意。それを三人ともが思い知る。相手は、ゲッターであろうが何であろうが抹殺するつもりだ。リョウマは再び腹に力を入れる。

「……ハヤト。これで分かったらう。あれは、生易しく帰還なんて許してくれめえよ」

ハヤトも実感したのだろう。ゲッター2の俊足で逃げ帰ろうともきつと、足の一本や二本は犠牲にせざるを得ないと。その時、パイロットがどうなるのか。考えるだにおぞましい。

『……だが、リョウマ。勝つ手段なんて』

「おれなら！ ゲッター1なら！」

声にした勢いでイーグル号とジャガー号、ベアー号が合体し赤いゲッター1を顕現させる。そのままの噴射の勢いを借りてゲッター1は黒いゲッターへと猪突した。黒いゲッターは斧を振り回しゲッター1の攻撃を回避しようとする。ゲッターの拳がかろうとした瞬間、リョウマが命じていた。

「オープン、ゲット！」

腕が霧散し、マイクロマシンの表皮だけを相手の斧が切り裂く。三機のゲットマシンが斧を振るい落とした黒いゲッターの背後で上下逆さまの形で合体し、再びゲッター1の姿を現した。

「これで不意をついた！」

宇宙空間ならではの戦い方だ。リョウマはゲッターEトマホークを掴み取り、今度こそ黒いゲッターの胴を割ったかに思われた。

しかし、それを阻んだのは何より意外なものだった。

「赤い、石が……」

黒いゲッターを蝕んでいるようにも映る赤い鉱石。その強度がゲッター1のEトマホークのパワーを凌駕している。その証拠に黒いゲッターの装甲には傷一つない。赤い鉱石が犠牲になって罅割れた程度だ。

『何てエ、硬さ……』

ハヤトの眩きが消える前に、黒いゲッターの蹴りがゲッター1の腹腔を捉える。軋む一撃にコックピットを含むゲッター1の中心軸が震えた。微弱な振動ならば掻き消せるオートバランスサーも働かずリヨウマ達はコックピットの壁面に身体を押し付けた。

重力の負荷などほとんどかからないはずの宇宙開発用、などという謳い文句が嘘のようにゲッター1がなぶられる。

リヨウマは舌打ち混じりにEトマホークを振り回す。しかし適当に薙ぎ払った一閃は虚しく空を穿つ。黒いゲッターはたたらを踏むような無様な真似はしない。月面を軽やかに蹴って躍り上がるや否や鋭く放たれたのはまたしても旋風のようなゲッタービームの嵐だった。赤い光線が月面に突き刺さる。

「野郎……！　かく乱戦術なんて」

『いや、違う』

確信を持って放たれたムサシの声の真偽を確かめる前にその言葉の意味がリヨウマ自身の衝撃を伴って認識させられた。黒いゲッターは常にこちらの上を取るように攻撃してくる。それはゲッター1の特性を殺す行動だ。リヨウマは直感する。この敵は、ゲッターを知っている。自分達以上に。

『信じられない……。まるでこちらの、ゲッターの種が割れているような挙動で』

ハヤトも感じ取ったのだろう。あるいは自分よりも先に関知していたのかもしれない。

「どうやれば、敵の猛攻を抜けられる？」

『リヨウマ、抜けるなんて考えるな』

ハヤトの声にリヨウマは心を掻き乱される。

「てめえ、まだそんな弱音を――」

『抜けるんじゃない。やるんなら、相手も貫け』

強い語調にリヨウマはハヤトも諦めていないのだと窺い知れた。この黒いゲッターを出来れば倒したい。だが圧倒的勝利は不可能だと判じている。ならば――。

「死なば、諸共よー」

リヨウマはゲッター1へと機動を命じる。ゲッター1は機動力を活かして踊り上がるとEトマホークを打ち下ろした。当然、黒いゲッターはトマホークで打ち返してくる。しかしそれこそが好機。

「潜り込めるー!」

Eトマホークを犠牲にしてゲッター1は黒いゲッターへとタックルをかました。黒いゲッターの挙動に初めて恐れのようなものが宿る。リヨウマは口角を吊り上げた。

「怖がつているな? おれもこうまでぶるつちまう瞬間はア!」

スラスターを最大限まで開き、出力値の閾値を越えた設定へと移行させる。それと共にレバーを押し出した。

「生まれて初めてだぜー!」

リヨウマの雄叫びを聞き届けたゲッター1が緑色の推進剤の光を焚いてそのまま月の重力圏から離れていく。瞬く間に襲われたのは惑星の重力だ。その虜となった黒いゲッターとゲッター1が炎熱の膜に押し包まれる。このままでは自由落下は免れまい。

「二矢報いたー!」

リヨウマの勝利宣言をしかし、黒いゲッターは聞き届けない。

トマホークを握っていない手を開いたかと思うと手首の裏から飛び出したのは鋭い針だった。何だ、と思う前にその針をゲッター1のアイカメラへと突き刺す。イーグル号のカメラが同期して損傷し砂嵐を発生させた。

やられたのは右眼らしい。右側のアイカメラが動かなくなっている。リヨウマはサブカメラへと移行せずにメインカメラのまま黒いゲッターを押し込もうとした。ゲッター1が腕を突き出して黒いゲッターを相打ちに持ち込もうとするも、黒いゲッターは右眼を潰した直後よりゲッター1の背後を取ろうとしていた。身体を回転させ竜巻さながらにゲッター1を突き放す。

リヨウマが持ち直す前に放たれたのは旋風のゲッタービームである。当然の事ながらゲッター1は距離を取る形となった。黒いゲッターはトマホークを突き上げる。赤い粒子の刃が煌き、ゲッター1の右腕を叩き落した。切り裂かれた断面から茶色の機械油が飛び出し

瞬く間に機関出力が落ちていく。リヨウマは必死にレバーを引き、ゲッター1を鼓舞しようとした。だが言う事を聞かない機械は既に臨界点を迎えていた。ハヤトがそれをいち早く察知する。

『リヨウマ。……どうやらここまでらしい。帰還のためにゲッター1を最低限の出力に制限する。このまま何としても地上に帰らなければならぬ。これ以上のダメージはあっちゃいけないんだ』

ハヤトの声にもリヨウマは必死に策を巡らせようとする。アラートの警告を無視しあらゆる制御盤を引っくり返してでも黒いゲッターを倒さなければならない。その一事に脳内が支配されている。

『ぎげんな……。奴を倒さなければ、地上だって月面の二の舞にならないとも限らないんだ。ここで、ゲッターとおれが！』

右腕の稼動状況を確認してからリヨウマは左腕に全ての権限を移行しようとする。しかし左腕もまた、活動限界を迎えていた。黒いゲッターの放った針が左腕に突き刺さっているのだ。そこから毒素のようなものが漏れ出し、左腕が麻痺していた。

『リヨウマ。分かっていると思うが、もうゲッター1は戦えない。両腕をやられているんだ。この状況で、どう足掻いても……』

ハヤトの言葉は分かる。ゲッター1は両腕が使えなければほとんど無意味だ。リヨウマはコンソールを叩きつけて歯噛みした。

「チクシヨウ……。こんなところで、おれは、おれは……」

黒いゲッターがゲッター1を、リヨウマを睥睨する。リヨウマは睨み返して叫んだ。

「ゲッター、ビーム！」

ほとんど悪あがきに等しいゲッタービームが放たれたが黒いゲッターは射程から逃れ、ゲッター1を背後から蹴りつける。ゲッター1を押し包んだのは大気圏の熱と重力であった。このまま燃えつきかねない。

『大気圏帰還モードに移行する。リヨウマ、とベアー号のルナリアン。それぞれ大気圏に対応するモードに変更するんだ。ゲッター1ならばウイングを主展開すれば帰還は果たせる』

「冗談じゃねえ、おれはまだ――」

『まだ分からないのか！ リヨウマ！ オレ達は負けたんだ！』

ハヤトの言葉にリヨウマはハツとする。黒いゲッターはもう襲つてこない。大気圏突入能力を持つていないのか。あるいはもう追う必要さえもないと判断したのか。リヨウマは苦渋と雪辱に拳を握り締める。

「……了解した」

ボタンを押すと大気圏突入用のエアバックが展開され、ゲッター1はウイングを盾にして大気熱を逃がしていく。間もなく暗れてきた視界には銀色の皮膜が入ってきた。プラネットシエルの外殻へとゲッター1が墜落する。

ほとんど飛翔能力の奪われたゲッター1では軟着陸は不可能だった。ようやく地上の地を踏んだゲッターであつたがその戦果に苦いものが混じる。リヨウマはコックピットハッチを開くなり空を仰いだ。黒いゲッターの姿はないが、どこからか見ている。そのような気がしてならなかった。

第四話 「鎧悪鬼 2」

『——以上が、大気圏外で行われたゲッターの試運転の調査、及び月面での戦果です』

ミチルの声がブリーフィングルームに響き渡る。リョウマは壁に体重を預けて腕を組んでいた。ハヤトは、というとデータを処理しておりほとんどサオトメの側近と言っても差し支えない。一方、ムサシはどこか所在なさげである。自分がこの場所にいるのが心底、不思議でならないとも言おうように。それも当然か、とリョウマは納得する。つい数時間前まで絶対だと思われていたルナリアン達が全滅したとなればショックは大きいだろう。

「ゲッターの損傷状況は？」

すかさず尋ねたサオトメはこのような状況下でも抜かりない。ムサシからルナリアンの生体データを取っており並行してゲッターの損傷確認を行っているのだ。

『現在、損耗率60パーセント。使えるか、と言われれば厳しいですね。メカニック達が総出でも一日は出られません』

「二両日中はネフィリムが出ないのを祈るばかりだな」

ハヤトの皮肉めいた声音にリョウマはいちいち突つかかる事はなかった。こいつはこのような性格なのだ。月面での独断で充分にそれが窺い知れた。

「それよりも、だ。ゲッターのデータにもある。反射してくるネフィリムだが」

蛇の形状のネフィリムの画像データが呼び出される。リョウマは改めて手強い敵であった事を認識する。しかしムサシのお陰で難を逃れた。

「反射能力を持つ蛇型のネフィリム……。これより対象をイシユタル型と呼称し、このネフィリムが地上でも出現する可能性を視野に入れる」

イシユタル型と呼ばれたネフィリムはしかしゲッター3の活躍に

よって破壊された。ゲッター3の性能をリョウマもハヤトも少しばかり軽んじていた部分がある。

「ゲッター3の真骨頂は、重心が下腹部にあるという事だ。イシユタル型は細やかな攻撃や地に足のつかない攻撃はいなせるが、パワーを最大限まで出力したゲッター3の前では無力。ある意味、いいデータが取れたよ、トモエ・ムサシ君」

サオトメの賞賛をムサシは複雑そうな顔で受け止めた。この老人を信用するべきか否か、彼の中でも判断が鈍っているのだろう。

「問題は、博士。帰還を邪魔したあの黒いゲッターだ。あれはあなたの差し金じゃないのか？」

誰もが気になっていた質問であった。リョウマもじつとサオトメを見据える。この場で嘘を言えば少なくとも二体の狂犬が襲いかかるであろう。サオトメは嘆息をついた。

「ワシも知らんよ。あのような存在は。あれは」

ミチルが画像を呼び出す。粗いが、黒い鬼の姿が確認出来る。結晶を身体に宿しており光が赤く棚引いている。

「あのようなゲッターをワシは見た事もなければ聞いた事もない。逆にお前らに聞こう。あれは、何だと思った？」

逆質問にリョウマはたじろぐ。しかしハヤトは聞くべき事を決めていたようだ。

「ゲッターだ。しかも、我々の乗るゲッターよりも随分と性能が上の」

断じた声にリョウマは唾を飲み下す。サオトメは口角を吊り上げた。

「だから、ワシが裏切っていると、そう思ったわけだな？」

ハヤトの意思の代弁をするサオトメにリョウマは目線を向ける。サオトメは断言する。

「ゲッターは、完成品はお前らの乗っているあの一機のみ。それ以外は存在しない。それにゲッターのデータもその製造方法も秘中の秘。誰かがばら撒きでもしない限り、大国ですらその技術を吸い上げる事など出来ん」

つまり自分でもなければこの惑星の国家でもない。そう言いたい

のだろう。ハヤトは、「そうか」と退いた。それは意外である。ハヤトならばもつと食らいつくかと思っていたが。

「ゲッターが使えん以上、お前らはシミュレーターで腕を磨いてもらうか、それかせいぜい休んでもらうほかないな。月面から帰ってきたのだ。疲れもあろう」

言葉の表層に過ぎない賛辞を誰もまともに受け取ろうとしなかった。サオトメは黒いゲッターの画像を見やり口にする。

「現時点よりこの正体不明のゲッターを『ヨロイのゲッター』と呼称する。やれやれ、とんだ報告だな。月面で暴れるとは言ったが面倒を連れて来いとは言っていない」

サオトメからしてみれば、黒いゲッター——ヨロイのゲッターに関する事は寝耳に水だったのかもしれない。

それにしても、ヨロイ、とは。リョウマは改めて正体不明のゲッターを見やる。赤い鉱石を纏ったその姿は確かにヨロイに見えなくはない。

「状況報告は以上だ。トモエ・ムサシ君はワシと少し話してもらおう。ゲッターの三人目に相応しいかどうかを判断する、いわば面談だ」

ムサシが緊張した肩を強張らせた様子であった。しかし自分とハヤトに比べれば手ぬるい。自分は殺されかけたし、ハヤトは殺そうとしてきた人間である。

「まあ、せいぜい頑張りな」

ムサシの肩に手を置いてリョウマはブリーフィングルームを後にする。ゲッターはどうせ一両日中は出られない。ならば、と足が向かったのは格納庫であった。メカニックがリョウマを発見し、「まだですよ」と声にする。

「分かっつてんよ。そう簡単に直つたら苦労しないんだろ？」

「そもそも両腕がやられています。イーグル号単騎で出るのも無理ですって」

腕のオペレーションはイーグル号とジャガー号の本分だ。上半身を形成する二機に影響する時点でゲッターにはなれない。

「おれはこいつに乗りに来たんだ」

リヨウマが指差したのはベータであった。メカニックが怪訝そうな顔をする。

「ベータですか？　でもサオトメ博士からの許可も下りていませんよ？」

「そこいらを空中散歩。何だよ、散歩も自由じゃねえのか？」

「マーカーはつけさせてもらいますよ」

メカニックの言葉は当然と言えば当然だ。ゲッターの事を知っているリヨウマが離反すれば脅威になる。

「首輪つきでも、散歩くらいさせろつての」

リヨウマはベータに乗り込んで早速機動をかけた。取り付いたメカニックが、「どこへ行くんです？」と尋ねた。

「ちよつと気になる場所までな」

「外出先が分かっているのなら書面で」

「後で出すつて。どうせこの国の中じゃミチルの監視下だ。ミチルがいざという時は呼び出してくれるだろ」

それでメカニック達も納得したらしい。引き下がったメカニックを他所にリヨウマはベータを空中機動形態で発進させた。

「ナガレ・リヨウマ。ベータ改八式、発進する」

発進したベータに早速ミチルがリンクする。

『リヨウマさん。何を考えているんです？』

この非常時に、という小言が聞こえてきそうだ。リヨウマは、「ちよつと、な」と返す。

『リヨウマさんらしくないですよ。今回だってハヤトさんやムサシさんの報告を加味すれば、リヨウマさんには謹慎が降りても不思議じゃなかったんですから』

ヨロイのゲッターを前にして冷静でいられなかった事だろう。ムサシはともかくハヤトは真つ先に報告したに違いない。

「……ミチル。オフレコに出来るか？」

ミチルは常にサオトメ研究所とリンクしている。内緒話など不向きではあったが誰かに言わないと気が済まなかった。

『オフレコならば、この端末に』

腕時計型端末にミチルの声が移動する。リヨウマは呟いていた。

「おれは、あのヨロイのゲッターを見た事がある」

それにはミチルも息を呑んだ様子だ。リヨウマは付け加える。

「……気がするんだ。ガキの頃だったからよ、分からないが」

『あり得ないですよ。きつと試作型のゲッターと見間違えたんじゃない』

「それもないだろ。試作型って言ってもゲッターが完成したのはここ最近なんだろう？」

ライブラリでゲッターの完成時期がここ数年である事は既に知っている。ミチルは沈黙した。

「あのヨロイのゲッターが、おれを守ったんだ。鉄砲水からな」

『それこそ、あり得ませんよ。今回の報告を見る限り、ヨロイのゲッターは、こちらのゲッターに敵対しています。リヨウマさんが乗っているのを知っているのならば』

「どちらかがおかしい、か。おれも頭がおかしいって考えられたらいいかに楽かと思うよ」

しかし狂人を演じる事も出来ない。ヨロイのゲッターの目的とは何なのか。リヨウマはそれを知るためにヨロイのゲッターを以前見た河川敷へと向かおうとしていた。何か痕跡でもあるかもしれない、という賭けでもあった。

ベータならば研究所からでも現場には一時間足らずだ。訪れたリヨウマはベータを着陸させ、コックピットから降りる。河川敷の堤防は昔と変わったところはない。一度崩れたが何度か補強工事を受けた。

『これが、例の場所ですか？』

「そのはずなんだが」

歩いていてもヨロイのゲッターに繋がるような証拠はない。当然か、とリヨウマは判じる。もう十年ほど前なのだ。あれが夢でなかった、という保障もない。リヨウマは踵を返しかけた。この場所にこたわったところでヨロイのゲッターに関する証拠は見つかるとはいえない。

「……リヨウマ？」

その声にリヨウマは振り返る。その場所にいた人物にリヨウマは

眼を戦慄させる。

「タツマ……」

あの日以来、離れていたリヨウマの上司であり親友であった。タツマは信じられないものを見つけた目つきでリヨウマを見やる。

「お前、確か事故で死んだって聞いていたが……」

自分はどうやら社会的にはそういう立場にあるらしい。ここで真つ先に逃げる、という判断が働かなかったのはリヨウマの中に一抹の不安と後悔があったからだ。何も言わずに自分はゲッターに乗っている。それが不義理であると、どこか感じていた。

「幽霊、じゃないよな？」

「真つ昼間からそれはねえよ」

リヨウマの変わらぬ声音にタツマは笑いかける。だがリヨウマはどうするべきか決めあぐねていた。親友との再会。本来ならば喜ぶべきものだが、自分はもう元の鞘には戻れない。そのようなリヨウマの胸中を察したようにタツマは口にした。

「懐かしいな。昔、お前がここで事故に遭いかけた」

水難事故の事を言っているのだろう。まさしく自分はそれを調べに来た、とも言えない。

「リヨウマ。ベータで来たのか」

近くに停めてあったベータをタツマは顎で示す。リヨウマは、「地獄からの使者だと思ったか？」と冗談めかした。

「少しな」

タツマは答えつつ、リヨウマへと歩み寄る。リヨウマは今すぐにも振り切つて逃げるべきであった。しかしかつての親友に何も言わず帰る事も出来なかった。

「ちよつと、話せるか？」

その提案をリヨウマは突っぱねる事もしなかった。ただ首肯した。

第四話 「鎧悪鬼 3」

「トモエ・ムサシ。推定一〇四歳。体重一二〇キロ、身長二メートル五十センチ。コックピットに収まったのが奇跡的なほどの巨漢だな」

サオトメの評にムサシは戸惑っていた。リヨウマもハヤトも去り、自分だけが取り残されている。サオトメは、たとえば先ほどから送られてくるデータを目にしつつ、「面白い」としきりに口にする。

「あの、何が面白いんで？」

「ルナリアンが地球にすぐに適応出来た事だ。我々地上人は、ルナリアンの技術がここまで進歩しているとは思わなかった」

サオトメは素直に感心しているのだろうか。ムサシには分からぬ事だらけだ。

「ルナリアンの技術は月面でのみ育った技術ですから、その、俺のようなのも特殊ですし」

「そのようだ。お前はゲッターに一度乗り込んだだけでそれを直感的に把握した。ある意味で天才的でもある」

「いいえ、リヨウマがアームレイカーに手を突っ込んでいつものようにやれと教えてくれたので……」

「謙虚でもある。いい事だ」

サオトメの言葉には戸惑いつ放しである。ムサシはその巨漢が信じられないほどに縮こまり上がっていた。

「その……、ゲッターは、あれは何です？ 俺の六分の一G殺法を、まるで当たり前のように受け容れた」

それがまず信じ難い。ルナリアンと機械の相性は最悪だ。ルナリアンが唯一生み出した叡智が月面観察のAI「ルナ」であったがこの研究所の技術力に比すればルナなど兎戯に等しい。同じAIであるうミチルの何と人間らしい事か。

「それもそのはずだ。ゲッターはあらゆるパイロットを想定してある。当然、ルナリアンの事も調べさせてもらっていた」

サオトメの言葉にムサシはルナリアンでさえもパイロット候補で

あつた事に戦慄した。

「どうして。だって、月とこの惑星は交信を絶っていた」

「外面的に見れば、な。しかし一方的な観察は可能だったという事だ」
恐れ入る、とムサシは感じる。こちらがレンダリングビームで解析していたと思ひ込んでいたが逆であつた。相手側もこちらの技術を可能な限り使つていたので。ルナリアンの身体データが組み込まれたゲッターは、では改めて何なのか。問わずにいられない。

「し、しかし機械に疎い俺でも動かさせたあのゲッターというのは」

「今はまだ、知らないほうがいいかもしれんな」

暗にこれ以上の詮索は命を縮めると言われているようなものだ。ムサシは質問する権利がこの場では奪われている事を思ひ知る。

「で、どうかね？ トモエ・ムサシ君。君は、第三者としてゲッターに関わらない道もある。パイロットの適性も正直に言うると他の二人ほど高くはない。ゲッターに乗らない選択肢はあるが……」

「乗らない選択肢？ 冗談でしょう？」

ムサシは殺気を剥き出しにする。乗らない、乗らせないなどあり得なかつた。

「俺はゲッターに乗ります。岩にかじりついてでも」

「そこまで君を駆り立てる、動機を知りたいな」

ムサシは拳をぎゅつと握り締めた。

「俺は、地上に憧れた、咎人です。だから月で幽閉されるのは仕方がないと思つていた。罪を受け容れていたんです。ですがリョウマと出会つてその考えが少しばかり変わった。自分なんかでも戦つていいんだと思えた。でもそれが大きな理由じゃない、一番大きいのは、そうです、俺は同朋であるルナリアンを虐殺した、あのヨロイのゲッターをぶち殺したい」

それだけだつた。ヨロイのゲッターへの復讐。それさえ成せればいい。ムサシの返答が意外であつたのかサオトメは片方の眉を上げた。

「意外だな、君は幽閉されていたと聞くし、その理由がとても理不尽であつたともリョウマが言つていた。そうであつたのに、同朋意識が

？」

その質問は妥当だろう。自分は虐げられていたのだ。だがそれがイコール恨みではない。

「俺は、ルナリアンの秩序を愛していましたし、月が地上と同じくらいに美しいのだと信じていました。だからこそ、その月を灼熱地獄にした、あのヨロイのゲッターだけは、俺が……！」

怒りで思考が白熱化する。サオトメは自分の眼光を真正面から受けているはずなのだが、その口元は愉悦に緩んでいた。

「では君は、ゲッターに乗る、と？」

「いけませんか？」

「いいや。適任者は少ない。それにワシとて適合する人間を探すのは骨が折れていたところだ。渡りに船、というべきかな」

「……正直、リヨウマのようにネフィリムを憎んでいるわけでもなければ、ハヤトのようにゲッターに興味があるわけでもありません」

「それでいいのだ。いいや、違うな。それがいいのだ」

サオトメの納得は分からないが立ち上がったかと思うと手を差し出してきた。

「トモエ・ムサシ君。いいや、ムサシ。ようこそ、地獄へ」

地獄の番人の声音だった。差し出された手をムサシは握り返す。

サオトメは笑みを浮かべる。

「コックピットの拡張工事も依頼しておこう」

『博士。どうしてなんです？』

尋ねてきた声にサオトメは廊下を歩きながら返す。

「何がだ？」

『トモエ・ムサシの適合率。明かしていませんが、彼の適合率は二割を切っています。これではもしもの時に合体に支障を来たす場合が』

ムサシはゲッターに向いていない。だが向いていない事がイコー
ルパイロットに相応しくないわけではない。

「ミチル。ワシは以前、言っていたな。リョウマが本能ならば、ハヤトは理性なのだ」と

『仰っていましたね』

「では理性と本能の揃ったゲッターに必要な最後のパーツは、何だと思おう？」

その問いにミチルは悩みつつも答えを弾き出した。

『バランス、でしょうか？』

「その通り。リョウマが本能、ハヤトが理性、これは間違いのない事実。だが、剥き出しのその二つだけでは相反する存在よ。ゲッターを安定させるにはもう一つの要素が必要になってくる。それこそがバランス。言い換えれば天秤だ」

『天秤、ですか……』

「ムサシは天秤になり得る。何故ならば、彼は地上人ではない。レプリカントと人類の諍いなどまるで関係がないからだ。ネフィリムの被害を受けていない月面ならばネフィリムの事も知るまい。だといふのにどうして対ネフィリム決戦兵器であるゲッターロボに必要なと判じたか？ それは奴が究極的に他人であるからだ。他人であるからこそゲッターを操る二人のブレーキ役になる。これで、ワシの目的とするゲッターはほぼ八割方完成を見たと言ってもいい」

覚えぬ笑みがこぼれる。ゲッターは完成するであろう。問題なのはゲッターの未だ見せていない可能性と、その先の未来。ゲッターの最終目的を、リョウマはもちろんの事、ハヤトですらも知るまい。

『……博士。ですが今の状況では懸念事項が二つ』

「言ってみろ」

『ヨロイのゲッターです。あれは、どうなさいます？ 全くのイレ

ギユラーですが……』

サオトメは顎をさすった。ヨロイのゲッター。黒いゲッターロボ。どう考えもこの状況に混迷をもたらすだけだ。しかしある一面では役に立っている。

「ムサシの行動原理になっている。泳がせておけ。どうせ研究所を襲われればそれまでなのだ。出力値やゲッター線量は測れているか？」
『出力は、単純に機体を読み取っただけならばゲッター1の数倍、いいえ、本来の出力を隠しているとすれば数十倍でしょうか』

信じ難いが、事実として存在する以上、認めるほかない。

「ワシの造ったゲッター以外に、あれほどの完成度を誇るゲッターがいるとは」

『博士。本当に、ヨロイのゲッターとは無関係なので？』

人工知能ですら自分を疑うか。サオトメは立ち止まり、「お前がよく知っているだろう」と返す。

「完成したゲッターロボはあの一機のみ。あれ以外は、皆廃棄した」
『しかし、もしもの可能性ですが、廃棄したゲッターを誰かが再利用したのならば、それはあり得るのでは？』

「懸念事項、その二に繋がるわけか」

察したサオトメの声にミチルは返す。

『……ご存知でしたか』

「あれを解き放てばある程度までの真実には辿り着く。それは目に見えていたがもう、そこまで行っている、というわけか。月面から帰ってくるなり、仕事熱心な事だ」

皮肉気味に口にするミチルは慎重に声を発する。

『……笑い事ではありませんよ。対象——ジン・ハヤトは確実に真実に辿り着こうとしています。その時、もしリョウマさんやムサシさんまで敵になれば、滅びるのは博士のほうですよ』

「滅びるのは、か。ネフィルム打倒よりも先に己の心配をせねばならんとは」

サオトメは研究所の壁に埋め込まれているパネルを操作した。するとエレベーターが出現し階層表示を点滅させる。

「ミチル。今、ハヤトがいるところまで移動出来るな」

『出来ますが、鉢合わせですよ？　もし、ジン・ハヤトが敵意を持つていれば』

「その心配はない。奴は理性。狂犬だが存外に噛みついていい相手を中心得ているものよ」

サオトメの声にエレベーターが閉じて動き出す。ミチルが、『どうなっても知りませんよ』と呟いた。

第四話 「鎧悪鬼 4」

アクセス権限のあるカードキーを通し、ハヤトは隔壁の向こうを目指した。機密レベル3を示す青い隔壁を越えらるともう廃棄されたであろうブロックに辿り着く。コンソールが並んでおりハヤトは早速アクセスを試みた。起動させて記録を盗み見る。

「二年前……、これが最新か」

つまり二年前にこのブロックは隔離されたのだ。ハヤトは周囲を見渡してカメラがまだ生きている事を確認する。どうせあのシステムAIが覗き見しているに違いなかった。だがハヤトは躊躇わず機械を操作する。最大限まで遡れる記録を探った。

「十年前……。研究所創設時か。その時のメンバーの写真を……」

キーを打っているとふと手を止めた。写真に表示されたのはまだ年若いサオトメとその隣に二人の子供だ。一人は恐らくリヨウマの話にあったタツヒトだろう。長身で好青年の顔立ちであった。もう一人、隣にいたのだがブロックノイズが酷くて解析出来ない。

これは自力でこじ開けるほかなさそうであった。ハヤトはその写真を外部メモリに記録しさらに記録を閲覧する。ベータの開発にどうやらサオトメ研究所は噛んでいたらしい。という事はこの国の防衛のほとんどをサオトメ研究所が担っていたのだ。ベータ計画と並行してもう一つの計画が独自に遂行されていた。この頃はまだ「宇宙開発における人型兵器の研究」と銘打たれているがそれが何を意味しているのか、ハヤトには分かった。

「これが、ゲッターの素体か」

記録上では既に八年前にゲッターは素体が完成していたようである。機械の骨組みにゲッター線を通す研究が何度も行われていた。しかし幾度となく失敗。サオトメ研究所では足りないものがあつた。それは技術力と全研究を監視するデータの処理。つまりこの研究所だけではまかなえない技術と研究であつたという事になる。

「それがどうして、今のようにゲッターを独占出来るようになった？

このままでは国にその技術も利権も渡さざるを得ないはずだ」

だというのに、この一年後にはゲッター研究は完全に秘匿され表向きとしてベータの派遣を行うようになる。この時、ベータは既に円滑の段階に入っており、現行の七式のプロトタイプが既に開発されていた。

「ベータ計画もこの研究所が……。表向き、ベータの利益で成り立っていたわけか。だが裏ではゲッター計画が可能だった。それにプラネットシエルも。どうしてこの一研究機関にそこまで任せられた？ 何がこの国にそこまでの信頼度を持たせられている？」

ハヤトはキーを打っていたがやはり最大のところに至ると自分のアクセス権では足りない。今度は攻め方を変えてみた。プラネットシエル計画。その概要だ。

「惑星を強固な外殻で覆う事で脅威から守る……。表向きはそうだが裏はどうだ？」

だがプラネットシエルについて中間報告書は次々に出てくるもの。そのそもどうしてプラネットシエル遂行に至ったかは語られない。ハヤトは目頭を揉んだ。これではきりが無い。

「ネフィリムについては……」

ネフィリムの出現記録は十年前に遡っている。一度目のネフィリムは霧型でほとんど攻撃性能も今と変わらない。この時、自衛隊による迎撃が成功。それ以降、ネフィリムもレプリカントも表立つては出てこない。

「しかし、ベータは開発され、ゲッターという機体までも出てきた。何が、そこまでレプリカントとネフィリムを脅威に見せかけられた？」
「気になるかな？」

突然に振り向けられた声にハヤトは身構える。壁の一部が剥離しそこからサオトメが姿を現していた。まるで魔物だ。いつの間に壁に扉など出現したのか。

「魔物の巣窟に、オレは迷い込んだ事になるのかな」

「ハヤト。お前はワシと同じ眼をしておる。だからやる事が分かるぞ。目下のところ知りたいのはゲッターが何故開発されたのか。そして我がサオトメ研究所が何故、優位を保っているのか、であろう？」

「ならば話が早い。どうしてだ?」

「そう易々と教えられるものか」

サオトメの声音にハヤトは言い放つ。

「こっちはゲッターなんていうあなたの道楽に付き合っているんだ。だというのに真実も明かさなまま、オレはマシンに呑まれるのは御免だね」

ハヤトの言葉にサオトメは、「なるほど」と是を返す。

「確かにこちらとしてもお前達が真実を求めるのならば、それに対して教える義務があるという事か」

「ゲッターは、いいや、ゲッターだけではない。ベータでさえもこの研究所が造っていた。プラネットシエルも。この研究所に何故、そこまでの価値がある。誰がそこまで推進させた?」

ハヤトの考えでは何者かの助けがなければ不自然であった。しかしサオトメは鼻を鳴らす。

「誰もおらんよ。ワシに賛同する人間しか、おらん」

「そのようなはずがない。あんたは、何者かを政府の高官か何かに据えたはずだ。そうでなければ説明がつかない」

「権力の笠を借りて、ワシが成り上がったとでも?」

口元を緩めたサオトメにハヤトは断言する。

「そうとしか思えない」

「ワシも嘗められたものよ」

サオトメは隔壁に手を触れる。赤い隔壁でレベル4以上の権限を示していた。それ以上はハヤトの権限では進めない。

「ジン・ハヤト。お前の考えている事は分かる。あのヨロイのゲッターでさえも、このワシの所業だと思っておるな?」

「そうでなければこの世にゲッターが二体存在する事になり不都合が生まれると思うが」

サオトメは笑みを浮かべて、「不都合?」と返した。

「確かにワシ以外の人間がゲッターを造りだす事は不都合以外の何者でもないが、あのゲッターはワシとは無関係だよ」

「信じられない」

「だろうと思ったわ」

サオトメが懐から取り出したのはカードキーである。ハヤトはそれがレベル4以上の権限を持つキーであるのだと早々に理解した。

「……どういうつもりだ？」

「どういうつもりも何も、お前には真実を教えておこう。ワシと同じ求道者の眼をしておるのだから」

「ムサシとリヨウマには何も教えんつもりか？」

「ムサシは天秤。天秤には余計な知識は不要だ。ゲッターという機構を安定させるためにムサシは適任であった。そしてリヨウマ。ワシは奴こそが、ゲッターにとって必要不可欠なパーツであると考えている。本能を意味するリヨウマを抑えるのがお前の役目よ、ハヤト」

ハヤトは進み出て言い返す。

「オレは、いつからリヨウマのお守りになったんだ？」

「そう感じる必要はない。リヨウマはお前が思っているよりもずっと賢しい。本能で奴は倒すべき敵を見据える。ヨロイのゲッターを一番に敵視しているのも本能だろう」

カードキーが通され、認証パネルが光る。隔壁が重たい音を響かせながら開いていく。

「さて、ハヤト。ワシがこれから見せるのはあのヨロイのゲッターがこの研究所とは無関係である証だ」

「どうしてオレだけを信じ込ませようとする？ 他の二人への説明はいいのか？」

「奴らの存在理由は戦いの中にある。比して、お前の存在理由はそうではない。炎の中に身を投げ込むだけが戦いではないと理解しているはずだ」

サオトメの審美眼にハヤトは息を呑む。この老人は自分が何を考えているのかなどお見通しなのだろう。

隔壁の向こう側から漏れ出てきたのは緑色の粒子の光であった。蛍火のようなそれにハヤトは手を伸ばす。触れた途端、ぱつと弾けた。

「これは……」

「ついて来い。それがお前のためになろう」

ハヤトはメカニックからくすねてきたガイガーカウンターを取り出す。するとゲッター線の量が閾値を越えていた。隔壁の前に防護マスクがありハヤトは迷わずそれを手に取って取り付ける。サオトメが、「神経質だな」と口にした。

「オレはまだ死ぬつもりはないのでね」

サオトメはブリッジを下駄で歩いていく。ブリッジの下にあったのは機械の群れであった。上半身だけ、あるいは下半身だけ、腕や足が幾何学に飛び出しているものも多数ある。ハヤトはそれらが一樣に緑色の結晶体に包まれているのを発見した。

「まるで、ヨロイのゲッターと同じだ。結晶化現象が起きている」

「あの結晶はゲッター線が長い時間をかけて凝り固まったもの。放出されないゲッター線はこのように結晶化するのだと報告されている」

ハヤトはその発言でサオトメがヨロイのゲッターについてある程度知っているのだと確信する。

「博士、あんたやはり……」

「ヨロイのゲッターの結晶は、緑色だったかね？」

その質問にハヤトはたじろぐ。ヨロイのゲッターにこびりついていた結晶は赤であった。

「赤かった。だがあれもゲッター線ならば——」

「この研究所で発見されたゲッター線は緑色だ。粒子凝縮量の変異でピンク色には変化するものの、基本色は緑。だからあのヨロイのゲッターはこの研究所の代物ではない」

その段に至ってハヤトは眼下の機械の群れの意味するところが理解出来た。

「こいつらは、ゲッターだったのか……？」

「ゲッターであった成れの果て、いわば墓場だ」

「ゲッターの、墓場……」

機械部品や垣間見える装甲の形状から確かにゲッターの一部であった名残がある。しかしほとんど結晶化しており、再びゲッターとして再活動させる事は不可能に思えた。

「このゲッターはもう純粋にゲッター線のエネルギーと化している。エネルギーに一度転じたゲッターはもう二度とあの完成品のよ
うな形状には戻れない。つまりハヤト。お前が今考えているような、
墓場のゲッターを繋ぎ合わせる、という事も不可能なのだ」

サオトメはやはり自分の思考の先回りをしている。ハヤトは素直
に受け止めた。

「……確かにオレはパッチワークのようにこの墓場のゲッターロボを
繋ぎ合わせれば何者かがあのヨロイのゲッターを造れるのではないか、
と考えていた。しかし不可能なのはあれだけのゲッター線の再現。
それにただ単に結合しただけではこちらのゲッターを超える完成度
はあり得ない」

「分かっているではないか。そうとも、こちらの有するゲッターは完
全なのだ。敗北する要素はない。ネフィルムやレプリカント相手な
らば容易い」

「だが、ヨロイのゲッターはそうでない。博士、いい加減知っている
事を話してもらえるか？」

ヨロイのゲッターについて。それだけではない。ゲッターロボと
は、ゲッター線とは何なのか。ハヤトの質問に返ってきたのはミチル
の声だった。

『……やはり、ジン・ハヤト。あなたは危険です。これ以上、深層を暴
かせるわけにはいかない』

「システムAI風情が偉そうに。お前とて被造物だろう？ 人間様へ
の礼儀がなっていないな」

ハヤトの言葉にミチルは言い返そうとするがサオトメが手を上げ
て制した。

「言い合っても仕方あるまい。ハヤト、しかし物事には手順があつて
な。ワシがゲッターの秘密を洗いざらい喋れば、ではお前はワシのた
めに、ひいては人類のためにゲッターに乗るのか、と言えば違うだろ
う？」

食えない老人だ、とハヤトは毒づく。

自分はまだゲッターに乗ると確信を持って言えない。返答如何に

よってはこの場で――。ハヤトは懐にある拳銃を意識した。この老人を殺すのに銃弾一発で問題はない。だがそれ以上に問題なのはこの老人の有する知識だ。サオトメしか知らない事がまだ多い。このような状況で殺すのは得策ではない。その上、ゲッター以外ではネフィルムに対抗出来ない事も搭乗した自分ならば実感している。

人類の未来を取るか、それともこの世を地獄に染め上げようとする狂科学者の暴走を止めるか。どちらにせよ、この手にある拳銃だけで決めるのは早計であった。

「……ゲッターには次の適任者を、というわけではないだろうな」

「よく分かっている。それにお前とて、ゲッターに魅せられている部分はあろうか？」

壊れないおもちゃが欲しかった。ようやく手に入ったおもちゃを手離したくない。

「ゲッターは理想的だ。確かに、あんたの言う通り。オレのオーダーを全て満たしてくれる、稀有な存在である事に違いはない」

「ハヤトよ。ゲッターを壊す事も出来なければ、ここでワシを殺す事も出来まい。それはお前の運命がそうさせるのだ」

「運命？ 随分とロマンチストな事を言うのだな」

「ロマンチストでなければゲッターに人類の未来を託すまい」

サオトメは口角を吊り上げる。ロマンチストと言うよりかは悪魔の微笑だ。

「二三、聞きたい」

ゲッター線の舞う墓場の上でハヤトは問う。

「今、答えられる範囲ならば」

「ムサシの擁立は最初から計画に？」

「ルナリアンならば誰でもよかったのだがな。理想個体を連れてきてくれた事に感謝しよう」

「地上人ではいけなかったのか？」

「価値観の基準点が地上人では多かれ少なかれ同じだ。もうリョウマのような本能は要らないしお前のような理性も必要ない。欲しかったのは天秤だ。本能と理性の狭間で揺れ動く天秤。そう考えればム

サシはワシの思惑に沿うてくれている」

「ムサシのデータを見た」

ハヤトの言葉にサオトメは驚く事もない。当然だと言わんばかりであった。

「感想は？」

「適合率二割切り。オレやリヨウマに比べれば極端に低い。これでもゲッターに乗せるのか？」

ハヤトの疑問をサオトメは笑い飛ばす。「杞憂だ」と。

「杞憂？　こちらにしてみれば命がかかっているのだぞ」

「ムサシは最初からゲッター3を動かせた。ルナリアンに足りないのは脳みそよ。直感的判断力とその身に宿した技の数々はお前とリヨウマを上回る。ムサシには最低限の事としてベアー号の操縦さえ教えておけばよからう。それに機械との相性は悪いが、ゲッターはそういう類の代物ではない。身を任せる、という事がムサシは何よりも得意だ。ゲッター3のような直感的な機体を最初からポテンシャル八割越えて動かせたのは驚嘆に値する」

「適合率は低くとも、ゲッターの性能を引き出せる……」

「そうだ。ある意味、お前らとは真逆だな」

自分達はゲッターに適合しているからこそ動かせている。ルナリアンであるムサシにはベアー号の推進力の高さも無茶苦茶な機動力も恐らく耐えられる代物だ。必要なのはベアー号を動かせるだけの知識のみ。サオトメは最初から狙い澄ましたように理想個体を引き当てた事になる。

「ゲッターなどという魔物に魂を売り渡して、あんたは何がしたい？」

「魔物？　魔物とは恐れ入ったな。それを発明したワシは何だ？　冥

府の王か？」

冗談めかしたサオトメの声にハヤトは一笑もしない。サオトメは言い放つ。

「いいか？　悪魔を動かす貴様らは、言わば冥府の番人だ！　ゲッターを悪魔の機械だと誇るのなら、貴様達は既に魂までも売り渡したのだ！　冥界の河を渡る六文銭もない。貴様らは、着の身着のまま

ま、地獄へと流れ着いた漂流者だ！ もう戻れやしない。通常の人間には、な」

あれが悪魔の機械ならば、もう自分達は魂を売って戦っている事になる。ハヤトは眼下の死に絶えたゲッターが手を伸ばしているのを目にして考える。まるで地獄に落とされた罪人の末路だ。

あの廃棄されたゲッターのように、自分達も地獄に堕ちるのだろうか？ それこそ最後の最後にはゲッター線のみの存在となって、純粋なエネルギーの塊として戦う事になるのだろうか。

「ゲッターについて、もう一つ、聞きたい事が」

「何か」とサオトメは防護マスクを一切気にしない。この空間に慣れているのか。

「ゲッター線、その根源は何だ？ 三人揃った時、月面での戦闘で今までにないゲッター線量が観測された。オレとリョウマの時は五割にも満たなかったゲッター線が一気に八割越えだ。勘繰りたくもなる」
何か、ゲッターには秘密があるのではないか。ハヤトの言葉にサオトメが指を一本立てた。

「いい線についてはいる。確かに、ゲッターロボは三人集まってこそ、真価を發揮する。それはゲッター線とで例外ではない」

「ゲッター線は何故増幅したのか」

「単純な話よ。一人が増幅させられるゲッター線はたかが知れている。それを三人、つまり三倍に増長しただけの話」

「オレにはそう容易い話とも思えん」

つまりゲッターにただ乗ったからと言ってゲッター線の恩恵が得られるのならば何故今までのパイロット候補生達は死んできたのか。三人揃えばいいのならば、単純にどこからでも集めてくればいい。

ハヤトの真意を察したのかサオトメは目を細めた。

「なるほど。どうして貴様ら三人でなければならぬのか、という事か。今までのパイロットは何故失敗し、チェンジできえも出来なかったのか」

「イーグル号のログを閲覧した。あれは、何人食ってきた？」

イーグル号の機動力に耐え切れず何人もの候補生が死んできてい

る。それを知らぬ存ぜぬで通せる話ではない。サオトメは落ち着き
払って、「百人より先は」と笑みを浮かべた。

「あのゲッターは覚えておらんだろう」

怖気が走る。ゲッターはそれほどの人間を糧にして何をしようというのか。どのような扉を開こうというのか。

「イーグル号だけでも数百人。ジャガー号、ベアー号と合わせれば五百人超。……正直、何故計画が継続しているのか分からないほどの犠牲だ」

「誰もが本能的に感じているのだよ。ゲッターに関われば、それこそ末端のメカニックや研究員でも。ネフィリムと偽人類を殺せるのはゲッターだけだと」

それだけの使命感で何人もの殺人を容認してきたというのか。ハヤトは、「狂っているのではないか」と声にした。

「狂う？ その段階、最早八年前には過ぎたよ」

八年前。そういえばちょうどゲッター研究が暗礁に乗り上げた頃だ。あそこからどうやって持ち直した？ 何かがあつたはずだ。ハヤトは聞こうとしてゲッター線の値が上昇している事に気付いた。ガイガーカウンターの針が振り切れている。

「これは！ ゲッター線が」

「こいつらは聡い。それこそ死の気配にはな。来るか」

サオトメが天井を仰いだ途端、激震が研究所を揺さぶった。

第四話 「鎧悪鬼 5」

改八式は珍しいようでタツマはその内部構造を何度か目にしては子供のように目を輝かせていた。リヨウマは木陰で呼びかける。

「次期隊長機だ。すぐにベータ部隊でも使われるようになる」

「そうなのか……。リヨウマ、どうしてこの機体を？ お前は一体、何をやっているんだ？」

言えない事が多かった。ゲッターの事も、サオトメの事も。自分があの日、託された命も。

「……すまねえ。おれには言えない」

「いや、いいんだ。お前が生きていてくれただけでも。正直、前みたいにベータ部隊は活気がなくなつてな。霧型ネフィリムの出現例もほとんどなくなつた。ネフィリムは冬眠気に入ったのでは、という見方もあるくらいだ」

それはおかしい、とリヨウマは立ち上がった。ネフィリムは以前にも増してハイペースで出現しているというのに。

「揉み消されている……。？ だが何で……」

この国直属のベータ部隊にさえも明かせないネフィリムの進化。オベリスク型、イシユタル型の脅威。それは今すぐにでもベータ部隊に公表して応援を乞うべきではないのか。それとも、サオトメが意図的に排しているのか。

——何のために？

ネフィリムにやられれば全てが潰える。だというのに国の機関ですらネフィリムの出現を知らない。リヨウマはある推論に行き着いた。

「あのジジイ、まさか全てのネフィリムをゲッターで」

その言葉にタツマが首を傾げる。

「ゲッター？ 何だ、それは」

思わず口走ってしまった名前にリヨウマは口元を押さえるがタツマは歩み寄ってきた。

「それが、お前が今の所属を明かせない理由か？」

沈黙を是とするほかない。タツマは胸倉を掴んできた。親友の拳の一つくらい、もらっても仕方がないと感じている。自分は彼を騙し、欺いたのだから。だがタツマは殴りかかろうともしなかった。固めた拳を振るう先が分からない様子だ。

「……分かってきているさ。お前を殴ったところで、お前がベータ部隊に帰ってきてくれるわけじゃないって事くらい」

「……すまねえ」

「謝るなよ。お前は、今のほうがベータで燻っていた頃よりも生きていく感じがする。どこか詳しい事は聞けないだろうが、今を輝いている」

そうなのだろうか。リヨウマは自問する。ゲッターに乗り始めてから確かに必死だ。死が常に傍らにある。いつ命を落としてもおかしくはないが、それは命の輝きに繋がっているのだろうか。黙りこくっているとタツマが尋ねた。

「きつと、僕は燻っているのさ。お前とは違う。どこで、だろうな。空中変形が駄目だとか言っている辺り、まだまだなのかもな」

「それは違う。お前も、生きている。生きているんだ」

自分は地獄へと落とされた身。ゲッターと共に無間地獄を生き抜くしか今は方法がない。

「お前にしては殊勝な言葉だ」

タツマは手を差し出す。その意味をはかりかねてリヨウマは困惑した。

「場所は違えど、お前も、多分人類のためを思って戦っているのだと思う。詮索はしないし誰にも言わない。ただ敬意を表させてくれ。ナガレ・リヨウマという人間に」

それほど立派なものではない。隠し通さなければならぬ自分達は所詮穴倉の人間だ。

「おれは……」

その言葉を遮るように腕時計型端末から声が響き渡る。

『リヨウマさん！ ネフィリムが出現しました！』

「何だつて」

リヨウマは即座にミチルに問いかける。

「どこに？」

『研究所です。またしても研究所狙いで』

舌打ち混じりにリヨウマは駆け出す。その背中に声がかかった。

「リヨウマ！ ネフィリムって、僕のほうには全く……」

この状況そのものが不自然だろう。だがリヨウマは旧友の疑問に答えを返さなかった。

「タツマ。お前は地獄じゃない場所で生きろ。おれは、もう地獄行きだ。片道切符なんだよ。だから、おれは、ナガレ・リヨウマはもう、死んだと思ってくれ」

踵を返してベータに乗り込む。不安げな眼差しを送ってくる旧友を振り切るようにベータの推進剤が焚かれ、リヨウマは飛び出していた。

『リヨウマさん……。あの人、確かベータ部隊の……』

「何も言うな」

何も言わないでくれ。もう、振り切ると決めたのだから。ミチルはその沈黙を悟ったのかそれ以上詮索しなかった。

「ミチル、ネフィリムのタイプは？」

『オベリスク型です。でもどうして研究所ばかり……』

それはリヨウマからしてみても疑問だ。何故、プラネットシエルの他の地域を狙わないのか。今までは上空に出現する事の多かったネフィリムが形状を伴って研究所を狙う理由とは。

「どちらにせよ、おれは戦うしかねえ。研究所と繋げるか？」

『もう繋いでいます』

ミチルの声に次いで弾けたのはメカニックの声だった。

『リヨウマさん！ まだゲッターは万全とは言い難いですよ！ ゲッター1での戦いは少し無茶です！』

「無茶でも道理を蹴っ飛ばすしかねえだろ。発進準備は？」

『待っていたらネフィリムに狙い撃ちされるって、サオトメ博士はスクランブル要請をしています。ですが、こちらはリヨウマさんがいな

いと、と踏ん張っているところですが』

敵は待つてくれないだろう。リヨウマは決断した。

「イーグル号を自動操縦で出してくれ。ミチル、ランデブーポイントを計算。ベータの推進剤ギリギリまで速度を上げて何分で着く？」

『それでも三十分はかかります。安全装置が作動すればもつとかも』
「遅いな。十分で着く」

リヨウマはベータのエンジンを絞る。稼動域を超えたエンジンが過負荷を訴えアラートが鳴り響いた。

『空中分解しますよ！ リヨウマさん！』

「それでいいんだよ」

言い放ったリヨウマの声にメカニックもミチルも理解出来ないようだった。唇を舐めて一氣に大写しになったネフィリムの背中を見据える。

「来い、来い、来やがれ」

オベリスク型ネフィリムがリヨウマのベータに気付いて腕を振るう。思い切つてリヨウマは舵を切った。寸前のところで発振させられたビームがベータの反重力装置を掠める。「飛行継続不可能」の赤い警告をリヨウマは無視して樹海の上を突っ切った。

『リヨウマさん！ イーグル号が出ています！』

ミチルの声にリヨウマはイーグル号を仰いだ。赤い機影がジャガー号、ベアー号と共に空を舞っている。

「ランデブーポイントを指示！ イーグル号の自動操縦をおれのタイミングに合わせる」

『本気ですか？』

ミチルの悲鳴のような声にリヨウマは言い放つ。

「……本気じゃなきや、いつこんな事言うんだよ」

ランデブーまでの時間が新たにヘッドアップディスプレイに表示される。リヨウマは緊急脱出装置のレバーを引いた。改八式のコックピットハッチが射出され、剥き出しになったコックピットを空気圧がなぶる。リヨウマはコックピットが飛び出す前に空中へと自分の身体を投げ出した。

「頼むぜ、イーグル号」

そのような声音ですらすぐに掻き消えていく。計算が正しければ訪れるはずだ。リヨウマは落ち着いた心でそれを待った。墜落する、と思われた瞬間、目の前を横切ろうとしたのは赤い機体だ。コックピットハッチが開放されリヨウマはそこへと収まった。

コンマ一秒でもずればリヨウマの肉体は磨り潰されていたろう。リヨウマはコックピットに収まるや否やアームレイカーに手を突っ込んで制御を手動にする。

「待たせたな」

リヨウマの声にハヤトが応じる。

『どこで道草食っていたんだ？』

「ちよつと現世に戻っていたんだよ。ムサシ！ もう操縦は慣れたか？」

『ま、まだきついな。重力って奴は。だが、ある程度は安定させられる』

ベアー号が風に煽られる木の葉のように挙動が怪しい。ハヤトが息をつく。

『月の人間など、これだから連れてくるべきではなかった』

『何だと！』

食ってかかったムサシの声を聞き、リヨウマは口角を吊り上げる。

「食いかかるだけの余裕がありや上等！ 行くぜ！ チェンジ！」

合体軌道に入る。イーグル号がまず前に出て両翼を仕舞い込んだ。畳まれた両翼はそのままジャガー号へと接続され、ウイングを形成する。ジャガー号との接合に問題はない。後はムサシだ。ベアー号が少し遅れてジャガー号に合体しようとする。リヨウマは言っただけでやっ

「気にする事ねえぜ、ムサシ。むしろ、ケツの穴を掘ってやるつもりで突っ込んでやれ！」

ベアー号がジャガー号へと合体し、マイクロマシンで装甲が展開される。赤い腕とベアー号から両足が引き出され、最後にイーグル号の機首が二つに割れて一対の角を出現させた。亀甲型の頭部に火が灯

り、黄色い眼窩がネフィルムを睨む。緑色のエネルギーパーティションから光が生じ、顎の冷却装置から余剰ゲッター線と蒸気が柵引く。ゲッター1の姿が顕現した。

「ゲッター1！」

ゲッター1が両腕を振り翳す。しかし挙動が少し鈍かった。

『不完全なんですよ、修復が』

メカニツクの声にリヨウマは唇を舐める。

「どこまでやれるか、確かめるまでよ！」

ウイングを拡張させたゲッター1がネフィルムへと突っ込む。ネフィルムは狗のような頭部の眼窩を煌かせてビームを放射した。ゲッター1は回避しようとするがやはりリヨウマの想定速度よりも遅い。ビームが赤い装甲を叩いてゲッター1の速度に迷いが生ずる。

「チクショウ……、ゲッター1じゃきついかな」

その時ネフィルムの頭部が変形した。狗の形状であった頭部の口腔部が開いたかと思うとこれまでとは比べ物にならない赤いビームの光条が襲いかかる。リヨウマは反応が遅れた。ゲッター1も動きが鈍い。赤い光が視界を埋め尽くした。

第四話 「鎧悪鬼 6」

「ゲッターー！ シグナル消失！」

オペレーターの声にサオトメは眼前のモニターを見据えていた。ネフィリムの想定外の攻撃に全員がうろたえている。

「博士！ このままでは、ゲッターが！」

『ゲッターーのシグナル、ありません。パイロット三名の心拍、モニター不能！』

ミチルの声にもサオトメは動じない。

「続けさせろ」

『しかし！ 帰還させなければ！ あの状態のゲッターは不完全ですよ？！』

「ここで死ぬくらいならば死なせてやれ。地獄への片道切符を持った、三人、いいや三匹ならば、ここで死ぬような間抜けではあるまい」

サオトメの言葉に全員が返答出来なかった。今のゲッターに巨大ビームを回避する術はない。直前にオープンゲットした形跡もない。

「やはり、ゲッターでは……」

オペレーターの弱音を遮ったのは異音だった。ヘッドセットに耳を当ててオペレーターが声にする。

「これは、破碎音？ でもどこから？」

サオトメは笑みを刻んだ。

「何のためのゲッター2、ゲッター3だと思っている？ これこそが、ゲッターの真骨頂だ」

その言葉の直後、モニターに映し出されたのは地面を突き破ってネフィリムの直下に現れたゲッター2であった。ツインEドリルを展開し咄嗟に地面に潜ったのだ。

「でも、そんな状況判断……常人じゃ……」

オペレーターの声にサオトメは応じる。

「そう。常人ではない。奴らは最早、悪魔を使役する存在よ」

その言葉を裏付けるようにツインEドリルを発射させたゲッター

2がネフィリムから距離を取る。あのビームが発射された瞬間、こちらでもモニター出来ぬ速度で分離変形が成されたのだ。研究所の間は改めてゲッターの恐ろしさを思い知った。ゲッター2が戦場へと舞い戻りネフィリムを翻弄する。残像すら刻みながら機動するゲッター2へとネフィリムが幾何学のビームを放った。それぞれが偏向しゲッター2へと向かっていく。

「危ないー！」

張り上げられたオペレーターの声に被せられたのは雄々しき声だった。

『オープン、ゲット！』

まさしく三位一体。完全にタイミングを把握していなければ出来ない芸当である。ビームを直前で回避し敵の目を眩ませている。

「いつの間に、これほどまでの技能を……」

誰もが息を呑んでいた。ゲッターチームは月から帰ってきてまだ一日も経っていない。それなのにいつ、これほどまでのチームワークを習得した？

その疑問に答えるようにサオトメが口を開いていた。

「奴らは本能的に分かっておるのだ。あるいは直感的に、あるいは理性的に、自分がどう動くべきなのか、どう判じるべきなのか。三つの心は自ずと一つになる。それこそ、ワシが道を示すまでもない。ゲッターは完成を見るのだ」

その時こそ、とサオトメの弦きが続けられようとしたがその先を誰も聞き留められなかった。ゲッター2がEドリルを発振させネフィリムの背後に回ったからだ。あまりの高速度にモニターも追いつかない。それどころかゲッター線の閾値は今までの倍以上だ。

「何て速度……、それにゲッター線量も……」

あり得ないほどにゲッターが昂っている。それがオペレーター達でも分かった。今までゲッターは数多くの人間の命を吸ってきた。まるでその命を発露させているかのようにゲッターの進化は止め処ない。

ネフィリムが腕から小型ビームを照射しながら身体を折り曲げる。

マツハを超える腕の振り回しにゲッター2でさえもなぶられた。

「さしものゲッターでも、この速度では……」

ネフィリムオベリスク型はところどころがいちいち動くだけでも音速を超える。それほどの巨軀に対してゲッターは何と小さい事か。だが羽虫に等しいゲッターはオベリスク型の腕の薙ぎ払いを回避しその懐へと潜り込んだ。

ゲッター2がEドリルを突き出して声を張り上げる。

『ドリルハリケーン！』

Eドリルを先端としてゲッター2が螺旋を描いて回転し竜巻を形成する。ゲッター線による竜巻はすぐさま緑色の粒子を帯びて暴風の域に達した。荒れ狂う風がネフィリムの複合装甲を弾き飛ばしていく。

「これが……ゲッターの」

言いよんだ研究員の声をサオトメが引き継いだ。

「そうだ！　これがゲッターの力だ！」

第四話 「鎧悪鬼 7」

コックピットに収まるリヨウマは早々にゲッター1単騎での戦闘継続は不可能だと判じていた。そのためゲッター2でのオペレーションに切り替えたのだ。それを誰かが言い出したわけでもない。成り行きのままにゲッター2へとチェンジした。それこそが最善だと言うように。

「ハヤト。無茶してブルってんじゃねえのか？」

軽口を叩くとハヤトは言い返した。

『そっちこそ。ゲッター1では心許ない』

『お前ら、どっちの味方なんだ？』

戸惑うムサシの声ですら今は生きている証明だ。リヨウマは喉の奥から声を発する。

「行くぜ！ ハヤト！ ムサシ！」

『ああ！』

『お、応！』

二人の声にリヨウマはネフィリムを見やる。ネフィリムはドリルの攻撃によって複合装甲を剥がされているがまだ不完全だ。圧倒的な一撃が欲しい。リヨウマはハヤトへと命じる。

「ハヤト！ 上に躍り上がる事は出来るか？」

『誰にもを言っている』

ゲッター2がネフィリムのビームを回避してドリルを突き出す。上空から覆い被さるように差し出された掌はまるで釈迦の手だ。その手をドリルが突き破り、ゲッターは不遜の輩のように巨人の上を取った。

「オープンゲット！ 頼むぜ、ムサシ！」

『チェンジ、ゲッター3！』

ベアー号が機首を突き上げジャガー号、イーグル号の順番に接合していく。イーグル号が折れ曲がつて背面スラスタターへと変換しジャガー号は胴体部を形作った。空中で合体変形したゲッター3がその

まま速度を借りて両腕を引き伸ばす。網のように張られた両腕が瞬く間にネフィリムの頭部を絡め取った。落下の勢いを力にしてゲッター3の両腕が暴風を巻き起こす。

「六分の一G殺法、一の陣、奥義……。大雪山、おろし！」

月面で披露したのと同じ奥義をゲッター3が編み出す。ゲッター3のパワーは他の二機よりも遥かに上だ。たちまちネフィリムは頭部を引っぱがされてよろめく。大質量が樹海を踏み潰す。

ゲッター3が推進剤を焚きつつ軟着陸し全身からミサイル弾頭を出現させた。

「六分の一G殺法、三の陣、旋風、針鼠！」

一挙に弾き出されたミサイル群がネフィリムの身体へと突き刺さる。最早ほとんどの装甲が剥がれ落ちており胸部のコアが視界に入った。

「よし！これで奴は丸裸も同然だ！最後はおれがやるぜ！」

分離した三機へとほとんど滅茶苦茶な軌道を描いてビームが放たれる。ネフィリムはもう目が見えていないのかデタラメに攻撃を放っていた。

「こりやサオトメ研究所も危ねえな。さっさとケリをつける！チエンジ、ゲッターー！」

即座にゲッター1へと合体変形を果たした三機がゲッター線を胸部に溜め込む。緑色からさらに高出力のピンク色に変異したゲッター線が一挙に放たれた。

「ゲッター、ビーム！」

一条の光線がネフィリムの胴体部を貫く。コアさえも破碎してネフィリムが収縮すると、放散爆発が巻き起こった。

緑色の檻が爆発の規模を最小限に留める。リョウマはゲッターからそれを眺めていた。

「ざまあ、みやがれ」

『これが、ゲッターロボの』

『真の力、って奴か』

二人とも放心しているようである。しかしこれだけの能力があれ

ば百人力であった。

「勝てる。確信があるぜ。ネフィリム野郎に、おれ達は」

勝てる、ともう一度眩こうとしたその時である。接近警報が鳴り響き、リヨウマは咄嗟にゲッター1を後退させた。

先ほどまでゲッター1がいた空間を射抜いたのは一本の斧である。遙か上空から打ち下ろされたのであろう斧は波状の赤い光線を放ち樹海を次々と焼いていく。ゲッター1のアイカメラが上空を仰ぐ。その視界の先には両腕を組んだ黒い機体の姿があった。赤い鉱石が身体中に纏わりつき、光を棚引かせている。

「ヨロイのゲッター……」

リヨウマは因縁の名を紡ぐ。煮え湯を飲まされた忌々しい敵。ヨロイのゲッターは片手を開く。すると樹海に突き刺さったトマホークがヨロイのゲッターの手へと吸い込まれていった。

『何てこった……。手離してもすぐに呼び寄せられるとは』

ハヤトの声に恐れが宿る。リヨウマとてつい先刻やられたばかりだ。指先が無意識に震えていた。

「おれが、恐れている？」

もう片方の腕で震えを止めようとする。ヨロイのゲッターはトマホークの刃に赤い粒子を発振させる。その構えは戦闘のものであった。

「……上等」

『リヨウマ。待て。先走るな』

ハヤトの声にリヨウマは言いつける。

「構うもんか。リターンマッチと行こうぜ」

『待てと言うんだ！ 前回はシステムAIのサポートもなかったし、オレ達はほとんど孤軍奮闘の状態だった。だが今は違う。いいか？』

出来るだけ奴のデータを取るんだ』

「サオトメのジジイみたいな言い草だな」

反吐が出る、とリヨウマは言い捨てる。それでもハヤトは譲らない。

『これは好機なんだ。オレ達は奴とやり合って勝てる算段はないが、

負けない算段はある。今の状態のゲッター1ではどうせまともに打ち合えまい』

事実だ。リヨウマは苦渋に齒噛みする。ゲッター1の両腕は即席の状態で保たれているだけでトマホークを振るう事も出来ない。

「それでも！ 負けっ放しは性に合わねえ！」

『いいから聞け！ 奴は恐らく何らかの行動に出るはずだ。その時を見間違うな。オレ達は、奴を出来るだけこの空間から逃さないようにすればいい』

「それってつまり、ミチルや研究所の連中が勝てる状況を作り出してくれるって言いたいのか？」

ハヤトは息をつく。

『どうやらそれも分からぬほどに、頭に血が上っているわけじゃないらしいな』

大気圏で戦った時よりは幾分か冷静なつもりであった。あの時はミチルのサポートもなかったが今ならばミチルが相手のデータを取れる。リヨウマは呼吸を整えて次の一撃に備えた。

「来い、来い、来やがれ。てめえが動くほどにおれ達に優位になる」

しかしリヨウマの意図とは正反対にヨロイのゲッターはこちらを睥睨したまま動こうとしない。こちらの出方を窺っているのか。あるいはミチルの解析を恐れて下手な行動には出ないのか。

リヨウマは待つているだけは性に合わなかった。

「……やっぱり、何もせずに構えているだけなんざ」

ゲッター1が機動する。当然、ハヤトとムサシは困惑した。

『リヨウマ！ 動かないほうが有利だと分からないのか！』

「喧嘩つてのはな、動かないって言うのは間抜けか的だって言っているんだよ！」

ゲッター1が機動する。それに対して相手は黒い身体を回転させ竜巻じみたゲッター線の嵐を作り出して弾いた。

「それくらい！ 前回の戦いで割れてんだよ！」

ゲッター1はその隙に肉迫していた。拳を突き出しヨロイのゲッターへと叩き込もうとする。しかしそれを読んでいたかのように受

け止められた。リヨウマは目を見開く。ヨロイのゲッターの顔面がすぐ傍にあった。目を凝らせば造りはゲッター1に似ているようで随分と違う。冷却装置もなければエネルギーパーティションも亀甲型というよりもまるで歌舞伎俳優の化粧だ。赤いエネルギーの滾りが凄味を引き立たせている。

「こつちだつて、負けてられっか!」

エネルギーパーティションに火が灯りゲッター線が光を増幅していく。ハヤトがすぐさま気付いて声にした。

『リヨウマ! 何をやっている?』

「相手のほうがエネルギーでも何でも上。だつて言うんなら、飛び越えるまでよ!」

増幅されていくゲッター線の閾値にムサシでさえもうろたえた。

『リヨウマ! すごい勢いでゲッター線量が跳ね上がっていくが……、これは危ないんじゃないか?』

『ムサシの言うまでもない。これ以上は、ゲッター1そのものが持たんぞ!』

二人の警句をまるで無視してリヨウマはゲッターに命じる。

——血を滾らせる。その命を燃やせ。

「今が、その時だ!」

ゲッターのエネルギーパーティションが緑色の光を明滅させる。それと同期したようにヨロイのゲッターのエネルギーパーティションも明滅を始めた。そこで初めて相手がうろたえたのが分かる。リヨウマはその隙を逃さない。

「隙ありい!」

ゲッター1の放った拳がヨロイのゲッターの顔面にめり込む。やった! と感じたリヨウマの意識に水を差すようにヨロイのゲッターから無線が響いた。

『よもや、こつちまでとは……!』

一気に身体の熱が奪われたような感覚だ。リヨウマはその声の主に瞬時に恐れを抱いた。

どうしてなのだか分からない。リヨウマの中の何かが急激にしぼ

んでいく。指先の震えが止まらなかった。

「てめえは……」

そこから先の言葉を発する前にヨロイのゲッターが反撃のトマホークを薙ぎ払った。ゲッター1の胸部に鋭い傷口が刻まれ機械油が舞い散る。蹴りつけられたゲッター1が樹海へと墜落した。背骨を折るような一撃。鈍く響いた衝撃波に三人ともが呻く。

『……きついな』

『ああ、こりや目が回りそうだ』

リヨウマはその中で上空に佇むヨロイのゲッターを見据える。絶対者のように自分達を見下ろす視線。その中に僅かながら何者かの思惟を感じ取った。あのゲッターは中に誰かがいる。当たり前前的事だがこの時、リヨウマはようやく関知した。

「何者なんだ」

リヨウマの声に応じたのはトマホークの一撃であった。ゲッター1が瞬時に分離しその攻撃を回避する。完全にハヤト主導の分離変形であった。

『リヨウマ！ ぼさつとしている場合か！』

怒りの声にリヨウマはイーグル号のコックピットに収まったまま考えを巡らせる。どうして自分はここまで縮み上がっている？ 何が自分をそうさせた？

『聞いているのか！』

ハヤトの声にハツと我に帰る。リヨウマはすぐさま返す刀でトマホークが振るわれたのを目にした。発振された赤い刃が拡張し上空のゲットマシン三機を煽る。三人はそれぞれ暴風域へと突っ込んだかのような衝撃を受けた。

「こいつは……」

『恐れ入ったぜ。奴さん、ゲッター線兵器ならば攻撃範囲を伸ばせるのか』

『感心している場合か！ 空中分解するぞ！』

このままではゲットマシン程度の耐久は持たない。すぐさま合体しなければならなかった。ハヤトが主導してゲッター2への合体軌

道に入る。ジャガー号へとベアー号が接続し最後にイーグル号が脚部を形成すればいいのだがこの時、ヨロイのゲッターが狙ったのは誰よりも先にイーグル号であった。掻き消える速度でヨロイのゲッターが跳躍したかと思うとイーグル号の合体を阻止するように眼前に現れた。当然、リヨウマはうろたえて叫ぶ他ない。この時、搭載されている武器を使おうという意識はまるでなかった。

「衝突するー！」

ヨロイのゲッターが腕を突き出す。その時、横合いからビーム攻撃が見舞われた。ヨロイのゲッターが後退する。視線を投じるとベータ改八式部隊が攻撃を仕掛けていた。それだけではない。サオトメ研究所の砲台がヨロイのゲッターへと間断のない攻撃を仕掛けている。

『リヨウマ！ ハヤト、ムサシ！ 全員、生きていますか？』

サオトメの声にリヨウマはようやく返事が出来た。

「お、おお……」

生きている、と返せたのは二人だけでリヨウマはなかなか生存報告が出来ない。やきもきしたのかサオトメが声を張り上げる。

『リヨウマ！』

「……分かってんよ。生きてる、今のところは」

首も繋がっている。首筋をさすりながらそう感じた。

『博士！ このままではゲッターは不利だ』

ハヤトの悲鳴にサオトメは落ち着いて応ずる。

『今はもういい。充分にデータは取れた。解析に回そう。全機、帰還せよ』

『聞いていたな、リヨウマ。帰還軌道に入るぞ』

「だが、奴さんは……」

視線を振り向けると一瞬だけその黄色い眼窩がこちらを睨んだよ
うな気がしたが、迅速であった。ヨロイのゲッターはすぐさま上空へと帰っていく。

『何だったんだ……』

ムサシがようやくと言った様子で息をつく。リヨウマも今さらに

生きている感慨にふけた。

「二歩間違えれば、食われていたのはおれ達だ……」

その言葉を発すると震えが止まらない。あのゲッターは何なのだ。リヨウマの正体不明の恐れを知ってか知らずかハヤトが声にする。

『どちらにせよ、幸運にも生き永らえたのはオレ達のほうだな』

正面を切った戦いならば負けていた、とでも言いたげだ。しかし実際にそうであった。あのヨロイのゲッターに勝つにはまだ決定的に足りないものがある。それこそゲッターにも自分にも。

リヨウマはアームレイカーを握り締め口中に呟く。

「まだ、おれは弱いってのか……」

三機のゲットマシンが研究所へと帰還する。それをただ喜ぶだけの研究所の人々ではなかった。ネフィリム迎撃成功。それだけならばまだよかった。新たな脅威として出現したヨロイのゲッターの恐ろしさに誰もが言葉少なであった。

第四話 「鎧悪鬼 8」

『……以上がヨロイのゲッターに関するデータ報告書です』

ミチルの纏めたデータをサオトメは閲覧していた。膨大な資料に目頭を揉みながらサオトメは口を開く。

「これだけ資料が揃っていてもまだ……」

『はい。詳細は何も。ただゲッター線兵器である事だけは確実ですが……』

濁したミチルでさえも分かっているのだ。解析に回したのはいいものの実際理解出来たのはその数百分の一。純然たる事実として今のところ聳え立つのはただ一事。

「ゲッターでは敵わない、か」

『客観的事実を重ね合わせた結果です。しかし、私としても衝撃ですね。あれほどに完成されたと思っていたゲッターが』

「あのヨロイに比すればまるで赤子だ」

サオトメは手を組んでミチルへと言い放つ。

「ミチル。あのヨロイの機体、赤い鉱石が纏わりついていたがあれはやはり」

『ええ。博士の見立て通り、ゲッター線の鉱石でした。でも変ですよ。緑色からピンク色への変異は見られましたが赤への変異は今のところ見られないですし』

赤色のゲッター線鉱石そのものが奇妙である。この報告にサオトメはある種の確信を得ていた。

やはり、奴は――。

その時、部屋の扉が開いた。佇んでいたのはハヤトである。

『ジン・ハヤト……』

明らかな警戒色と嫌悪を剥き出しにするミチルに比べてサオトメは冷静だった。

「来たな」

「あんたが来いと命じた。解析も終わった頃だろう」

サオトメは鼻を鳴らし、「その結果も然り、であろう」と口にする。

「まあな。……重要な事は何も分からなかったに違いない」

それだけ分かっていればハヤトは自分の考えをトレースさせるのに充分だった。サオトメは早速ハヤトへと椅子をあてがう。ハヤトは遠慮なく座り込んだ。

「まず一つ。ヨロイのゲッターの放射するビームと兵器の基準。あれはゲッターと同質か？」

やはり確かめるべき手順を心得ている。サオトメは資料を差し出した。

「ここにある。ゲッター線に違いはないが、あれはこちらのゲッター線の数十倍は攻撃力がある」

資料を手にとったハヤトは素早く捲つて情報を読み取る。その中で矛盾点に気付いたらしい。

「あんたが言ったな？ この世にゲッターは一体だけだ」と

そのはずであった。しかし現にヨロイのゲッターは存在する。サオトメは言い方を改めなければならなかった。

「現存するゲッターロボは我らの保有する一機のみのはずであった。ならばあれは何者のものか？ 可能性としては一つ」

「レプリカント」

すぐさまハヤトは解答を導き出した。だがそれも弱い。

「ネフィリムが奴らの尖兵だ。だというのに、ゲッターロボを既に保有しているというのが筋の合わない話だ」

「奴らに純然たる攻撃兵器として有効なのがゲッター線であるのはシステムAIが導き出しているのだな？」

システムAIと呼ばれミチルは不本意そうだ。

『……ゲッター線がレプリカントとネフィリムに有効なのは間違いありません』

「オレはリヨウマとは違う。リヨウマのように勝てればいい、というだけの単細胞ではない」

ハヤトの言葉にミチルが反感を持った。

『……リヨウマさんを馬鹿にしているのですか？』

「尊敬はするまい。奴は剥き出しの本能だ。あれだけにゲッターを任

せればこのサオトメ研究所は早期に瓦解するぞ」

『そんな言い方……！ リヨウマさんは、あのイーグル号を支えているんです！ いわばゲッターチームの屋台骨。だというのに、あなただけではゲッターは扱えない、それを分かっている狼藉ですか』

「重々承知しているよ。月面でのオレ一人でのオペレーションでは限界があった。あの体力馬鹿と、月面人の力は必要不可欠だ」

ハヤトの声音にはただのパーツとして割り切っている節があった。その事にミチルは腹を立てているのだろう。今までどれだけの犠牲の上にゲッターが成り立っているのか知っているからだ。

『シン・ハヤト。あなたは後から来ておいしい汁をすすっているだけです。リヨウマさんがどれほど苦労したのか、それも知りもせず……』

「知る必要がない。リヨウマがいくら血の滲むような苦勞をしようが、あいつが汗みどろになろうがオレには」

まさしく自分以外は部品とと思っている声音にミチルはすかさず反論を挟む。

『そのような傲慢では、ゲッターは動きませんよ』

「精神論か。おい、博士。システムAIに精神論なんて吹き込んで流らんぞ」

顎を突き出して放たれた言葉にサオトメは苦笑する。

「全く、お前は。なかなか面白い事を言っているのける」

『博士？。これほど馬鹿にされて悔しくは』

「悔しくはないさ。何せ、言う通りなのだから。そしてワシがお前の立場でも同じ事を進言している事だろう。言いたい事は分かるぞ、ハヤト。もしもの時、自分一人のオペレーションに切り替えられないか？。そう言いに来たのだろうか？」

その言葉にミチルが声を詰まらせる。ハヤトは落ち着き払っていた。

「あんたには何でもお見通しか」

「今のままではリヨウマ主導のオペレーションだ。そうではなくお前が、言ってしまうえばイーグル号に収まりたいと言っている」

『そんなの、駄目に決まって——』

「システムAIが出しゃばるな」

ハヤトの声にミチルは怒気を露にする。

『リヨウマさんの努力を何だと思つて』

「それこそ知つた事ではないと言つているのだ。今日のように勝手に暴走されたのではこつちの身が持たんのぞな。安全装置としてオレは言いに來ただけだ」

恐らくミチルは許さないだろう。しかしこれも計算内だ。

「もしもの時、本当の窮地に陥つた時、ジャガー号を主導に出来るシステムを組み込めばいいのだろう?」

『博士? ですがこんな不遜な言い方を認めれば』

「認めれば、今までの犠牲は潰えるか? だがな、ミチル。結果論が全てなのだ。ゲッターを動かせるのはこの三人をおいて他にない。ならば最大限に意見を受け入れるのがワシのやり方だ」

『でも……』とまだミチルは認められていないようだ。サオトメは付け加えた。

「リヨウマを信用出来ない、というわけではあるまい。いや、逆だな。ハヤト。リヨウマを、あの男の危険性を、お前は何より分かっているからこのような賢しい真似に出るのだ」

『えっ』と呆氣に取られたミチルに対してハヤトは鼻を鳴らす。

「そこまで分かっているとは」

「リヨウマの適合率を改めて測つてみた。これが最新のデータだ」

差し出された資料にあるリヨウマの数値にハヤトは目に見えて狼狽した。

「適合率九割越え……。博士、あんた分かっているのか?」

その意味するところをサオトメは誰よりも受け容れた。

「当たり前だとも。リヨウマあつてのお前達だ。リヨウマがイーグル号に乗っているからこそ、これだけのポテンシャルが維持出来る。さて、ジン・ハヤト。それでもイーグル号に乗ると言い出すか? それとも大人しく引き下がるか」

完全に攻守が逆転した。ハヤトは資料の数値を何度も見やる。

「これはもう、ゲッターそのものと言っても過言じゃないぞ」

「そうだ。ワシは最初から考えは変わらん。リヨウマが！あの男がゲッターに乗ったその時より、未来が変わったのだ！ワシもお前も、全ての人類の未来がな！」

大仰な言い草に聞こえたかもしれないがハヤトはその意図を読み取ったらしい。

「……リヨウマあつてのゲッター。逆もまた真なり、か」

「分かっておるではないか」

「だが要求は通させてもらう」

ハヤトはここにきた目的を忘れてはいないようだ。サオトメもその事に関しては受け入れねばならんと感じていた。

「緊急安全装置であろう。よかろう。ジャガー号に取り付ける。それでジャガー号単騎でのオペレーションも可能だ」

『博士、ですがそれでは他の二人が……』

「不平等か？しかしどこかで天秤を振らねば本能と理性は大きく狂ってしまう。ムサシが適任かと思つたが、あいつは少々アレでな」
サオトメがこめかみを突く真似をする。ハヤトも同意見のようだった。

「確かに。月面人はまだ地上の政には慣れていない」

「だが戦闘において、リヨウマを上回る逸材はいまいて。今回のヨロイのゲッターの件でワシが最も危惧しておるのは、リヨウマの戦線離脱だ」

『そんな……！』とミチルが声を震わせるがハヤトは、「同じく、だ」と返す。

「ゲッターがレプリカントに敵う、ネフィリムを倒せるという理論だけで成り立っている男だ。ヨロイのゲッターとの敗北はオレ達の考えている以上にショックだろう」

『だったらフォローを入れるのがゲッターチームじゃ……』

ミチルの声にハヤトは鋭い一瞥をくれた。

「甘ったれるなよ、システムAI。いいか？痛い時に傷口を舐め合ってじゃれ付くのがオレ達の役割だと思つているのか？傷なん

「ていちいち癒している暇はない。奴自身が克服せねば」

「ハヤトの言う通りだ。慰めの言葉など奴は最も嫌うだろう。殊にそれがゲッターチームであってはな」

ハヤトは資料を手に、「それよりも」と促す。ここに連れて来た本来の目的をハヤトは切り出した。

「分かっておるよ。ゲッターについてだろう?」

「Eドリルで削岩した時、僅かだがゲッター反応炉の数値が上がった。地下に何がある?」

それを切り出すためにわざわざリョウマの話をした辺り、まだ情が抜け切れていないのだと感じる。サオトメはリモコンを取り出して扉を開いた。隔壁が何重にも展開されている。

「言っておくが、ここから先は真の地獄だ。それでも、お前は訪れるか?」

先導するサオトメの声にハヤトは言い放った。

「言ってくれるぜ、博士。あんたがオレ達を勧誘する時に言ったじゃないか。もう地獄への片道切符しかないのだと」

サオトメは口元に笑みを刻むとゆっくりと階段を降り始めた。緑色の粒子が舞い散って瞬く間に視界を覆っていく。ハヤトは躊躇するかに思われたがマスクなしで後に続いた。どうやら腹を決めてきたらしい。

「ゲッターのその先を、見せてもらう」

改めて言い放った声音にサオトメは微かに嗤った。

——もう戻れんぞ。

その声は隔壁の向こう側へと消えていった。

第五話 「咎人の声 1」

地獄への階段を踏み締める。

それだけ重みがあるのだと信じたかったが、ハヤトの足音の残響は存外になく、緑色に染まった壁は音を吸い込んでいく。

結晶化したゲッター線も頻度が激しくなってきた。ハヤトはゲッター線に対して既にマスクなど無意味だと感じていたためにマスクを放ってきたがこれだけ高密度のゲッター線の中顔色も変えずに進むのは困難だ。嫌でも額に汗が滲む。それに比して前を歩く老人は落ち着き払っていた。汗を掻く事もなければ、取り乱すわけでもない。この老人はまるで歩むのが当たり前だというように景色など無頓着に進んでいく。

「サオトメ博士。あんたはこの高密度のゲッター線、何とも思わないのか？」

思わず尋ねていたがサオトメの返答は素っ気ない。

「逆に問おうか。ゲッター炉心を積んでいるゲッターの完成品に乗り込んでいながら、今さら何を恐れているのだと」

「違う。ゲッター炉心を内蔵しているゲッターのほうが十分に危険だ。いつ融合爆発が起こらないとも限らない。」

「ゲッターは、この地獄の海から生まれたのか？」

人が海から産まれた神話があるようにゲッターはこれだけの高密度ゲッター線の海より出でた魔物だ。ゲッターがどのような神話を持っているのかは定かではないがその起源が人間と同じとは限らないであろう。

「ゲッターは、ゲッター線を発見したのは、星の綺麗な夜だった」

この老人にしてはロマンチストな出だしだ、とハヤトは感じていた。

「数ミリかあるいは微量でも無限にエネルギーを増やし続ける夢の熱源。ワシはこの光こそが世界を導くと感じてゲッター線と名付けた」

「世界を導く……。先導する、という意味でか」

「だが実際には、このゲッター線という発見は秘匿されねばならな

かった。どうしてか、それはお前の見ている光景が答えだ」

ゲッター線の結晶体。それに高密度のゲッター線の汚染地域。これらを見無視してゲッターの恩恵に与るといふのは無理な話だ。毒を食らわば皿まで。サオトメはしかし諦め切れなかったのだろう。夢の光源がどのように変異し人類に希望を与えるのか。ハヤトはこの老人が思っていたよりもずっとまともだったのではなからうかと感じられてきた。

「ゲッターをただ甘受するには、今の人類は神経質過ぎた」

ハヤトの結論にサオトメが含み笑いを返す。

「神経質、か。そう言われてしまえばそうかもしれないがワシは人類に高望みしていたのかも知れんな。これだけの発明と発見、喜ばぬ者などいないと。だが実際に巻き起こりかけたのは、この研究所を含む数キロ圏内のゲッター線による汚染地帯だ」

寝耳に水の言葉にハヤトは目を見開く。今さらに他ならなかったが口元を覆った。サオトメが笑みを浮かべる。

「呼吸程度でゲッター線の被爆を抑えられて。ゲッター線は生物の進化を促す夢の光源であるのと同時に、人類に新たなる脅威を見出させた。それこそが」

「レプリカント」

サオトメの言葉の後を引き継ぐ。ハヤトはその論法の行き着く先を見据える。

「ではレプリカントは、ゲッター線を発見したから現れた、というように聞こえるが」

「間違っではない。現にレプリカントとネフィルムに最も有効な手段は、ゲッター線の照射だ。今のところその兵器が実用化されているのはお前らの駆るゲッター以外にない」

あのゲッターが唯一の対抗手段。ハヤトはその言葉を噛み締めつつ返答の口を開く。

「だがゲッターは二機あった。ヨロイのゲッター。あれをどう説明する？」

「その事はワシも研究中だ。ミチルを含め、様々なシステムでアプ

ローチを仕掛けているがあのヨロイのゲッターがどこから来てどこへ行くのかは依然不明である」

「博士。オレは、あんたはある程度知っていてオレを地獄に落とすと言っているのだと思っていた」

何の確証もなく、このような危うい場所に連れて来られたのではハヤトは警戒する。サオトメは、「ワシについてくれば」と声にした。いやに反響して聞こえてくる。

「地獄の釜の底が見られる。それだけは確かだ」

黙ってついて来い、という事か。ハヤトは伸ばしかけた手を引つ込めた。懐には銃がありいつでもこの老人の額を射抜く覚悟があった。もしサオトメが自分を害そうとするのならばこちらにも考えがある。ゲッターを封印し、この地を永遠に消し去ればいい。しかしハヤトの思考に浮かんだ考えを読み取ったようにサオトメは口を開く。

「ハヤト。ところでお前は、ワシの寝首を搔けるだけの覚悟があるか？」

心臓が収縮した思いだった。まさか読まれているのか。しかし声に平静さを浮かべてハヤトは返す。

「さあな。だがあんたは最初に言った。寝首を搔けるだけの奴らを用意したと」

サオトメは不敵に笑む。

「その通り。もしもの時、己をも殺せる覚悟がなければ、ゲッターに乗る資格はない」

何を言っているのだ。ハヤトにも分からない。ただこの老人がもうろくしていて眩いている事だけではないのは分かる。

「己を殺す……、ゲッターに乗るために自分の意見を黙殺しろと言うのか」

「そうではないよ」

サオトメはタラップを降りていく。何度目の階段だ、とハヤトは眩暈を起こしそうになった。降りる度にゲッター線の濃度が上がっていく。ガイガーカウンターなど最早当てにならない。振り切れた針はほとんどエラーの表示だった。ハヤトはサオトメの背中に問いか

ける。

「もし、今の話、ヨロイのゲッターに繋がっているのならば、オレはやれる。ヨロイのゲッターにもし、自分の写し身がいたとしても殺せるだろう」

ハヤトの返答にサオトメは立ち止まって肩越しの目線を振り向ける。

「素晴らしいな、ジン・ハヤト」

まさしく逸材だと言わんばかりの声音だった。ハヤトはサオトメの目を睨み返す。

「ただし、博士。オレはあんたの操り人形じゃない。ヨロイのゲッターでさえもあんたの制御下にあるというのならば、オレは全力で戦い叩き潰すまでだ」

サオトメの思惑通りには動かない、という言葉に当の老人は微笑む。

「そうでなくってはな。リョウマではないが、ワシの思惑通りだけに動く人間などつまらなだけよ」

サオトメはさらに深く暗い奈落へと目線を投げた。ハヤトも立ち止まりその視線の先を見据える。シースルーのエレベーターがあった。結晶化が及んでいるが内部は無事らしい。サオトメはボタンを押して扉を開いた。

「こんな所にエレベーター？」

ハヤトの声にサオトメは、「なに」と言い返す。

「地獄は少しばかり便利になった、というわけだ」

エレベーターに乗り込めばそれはもう戻れない事を示しているのかもしれない。だがハヤトは決断する必要性があった。この老人の知っている事を全て搾り出さなければ、自分達は傀儡に過ぎないと。それだけは避けなければならなかった。

「いいだろう。地獄への切符はある」

ハヤトはエレベーターに乗り込む。いつでもサオトメを殺せるように後ろについた。サオトメは、というと何も反応を示さない。自分が殺されようとも知った事ではないという様子であった。

「ときに、ハヤト。ここから先の真相は、ミチルとワシ、そしてもう死んだワシの息子しか知らなかった」

「サオトメ・タツヒト。確かりヨウマが無茶をしたせいで死んだのだったな」

調べ上げていた。その上でこのような言い回しを使った。果たして今もサオトメはリヨウマを恨んでいるのか。だからゲッターに乗せようとしているのか。

「益のない問いだぞ、ハヤト」

そのような心中を悟ったようにサオトメの言葉には迷いが無い。

「タツヒトの死は必要な事象であった。リヨウマが戦いに赴くには一人や二人の犠牲では済まないと思っていたが、タツヒト一人の犠牲で済んでむしろ幸運であった」

何とこの狂科学者は自分の息子の死でさえもゲッターのために捧げられた犠牲だとたまった。ハヤトでさえも戦慄する。さすがにそこまで言い切れる人間はいないと感じていたのだ。

「二つだけ、ワシの意外であったとすれば」

サオトメの継いだ言葉にはほとんど感情の起伏がない。まるで当たり前の事実を反芻するかのよう。

「リヨウマが思いのほか、ゲッター乗るのに前向きになった事だな。あれは最後まで抗うかと思われたが、一人の犠牲が効いた証拠よ」

とんでもない悪魔が目の前にいた。ハヤトはここで拳銃を取り出すべきではないかと逡巡する。だがまだだ、と必死で抑えた。まだこの老人には語ってもらわねばならない真実がある。それを無視して殺す事は出来ない。

「存外に冷静だな、ハヤト。ここでワシを殺す、というのも選択肢であつたらうに」

「……悪いが感情と状況判断くらいは切り離す術を心得ている。今は、あんたを殺すべきではない」

「賢明だ」

表層にも思っていないような声音にハヤトは拳を握り締める。自分であつてもその犠牲には何かしら思うところがあるかもしれない。

しかし、サオトメは別格だ。ゲッターのため、という大義を背負えば全ての人類の運命でさえも掌の上で躍らせる事が出来る。

「聞きたい。リヨウマを、恨む気持ちは」

「恨む？ 面白い事を聞くのだな、ハヤトよ。リヨウマはゲッターの要だ。あれを愛おしく思う事はあっても、恨むなどあり得んな」

サオトメはリヨウマを要だと感じているのだ。それは自分への侮辱に繋がったがハヤトは別段取り乱さなかった。現にリヨウマがゲッターチームを引っ張っている。

「リヨウマ以外を、イーグル号に据える事を考えていないような言葉だ」

先ほどの交渉と矛盾する。サオトメはそれをすっかり覚えていたようで、「安心せい」と返した。

「ジャガー号に安全装置といざという時のための優先機構は取り付けておこう。必要だというのは今回のヨロイの一件で明らかだからな」

シースルーのエレベーターから望める景色には結晶化したゲッター線の塊がそこらかしこにあった。それだけではなく明らかにゲッターの腕らしきものが突き出している。顔だけになったゲッターを絡め取るようにゲッター線の結晶が浮き出していた。まさしく地獄絵図だ。

「着いたぞ」

サオトメの声にようやく降り切った事を確認する。扉が開くとやけに錆び付いた臭いが鼻をついた。

「錆び臭いな……。ここはどこなんだ？」

「サオトメ研究所最下層。地獄の釜の、言うなれば蓋だな」

周囲には澱んだ色の排水が流れ出ている。エレベーターを囲うように排水機構が発達していた。油が浮き立っており今も流れは止まらない。

「何があると言うんだ？」

「黙ってついて来るといい。ワシは地獄を見せるとお前らに言い放った。その地獄の一端がこれだ」

奥まった場所は暗がりではほとんど見えない。サオトメがリモコン

を手にしたかと思うとそのボタンが押されるのと同期して照明が点いた。突然の明かりに目が眩む。

その中に映し出されたのは巨人であった。思わず息を呑む。

鎖で繋がれた黒ずんだ巨人の姿があつた。項垂れており、両腕を縛られている。まさしく地獄の咎人の姿であるそれには見覚えがあつた。

「ゲッター……う？」

その一対の角を持つ威容と、亀甲型の顔面は確かにゲッターのものであつた。ゲッター1の形状を伴った姿の機械が鎖で封印されている。ハヤトはその姿に畏敬の念を抱いた。

「これは……ゲッター1じゃないのか？」

「よく見てみる。お前らの乗るゲッターとは細部が異なる」

言われてみれば自分達の駆っているゲッターとは違いどこか丸みを伴っている。アイカメラにも生氣はなく、まさしく沈黙していた。

「ゲッター。別系統のゲッターか」

ハヤトの言葉に冷静さが取り戻されてきたからだろう。サオトメは言い放った。

「これこそが最初期にゲッター線を通したゲッターロボ。通称、プロトゲッター」

第五話 「咎人の声 2」

プロトゲッターと名付けられた巨体はしかし、結晶化が進んでおりとてもではないが乗れそうにない。

「これが何の関係がある？ まさかヨロイの基がこれだとは言わないだろうな」

「そのような簡単な話ならば、ワシとて苦労せんわ」

サオトメは鼻を鳴らし、プロトゲッターへと歩み寄る。目を凝らせばプロトゲッターにはところどころ穴が開いており、その部位から機械油が噴出しているのが分かった。この空間を満たす錆び臭さと機械油の水はこれが原因なのだ。

「博士……、聞かせてもらおうか。このプロトゲッター。何のためにここに繋がれている？ 地獄の戒め、だとかそのような形容はなしで願いたい」

ハヤトの言葉にサオトメは語り始める。

「最初にこのゲッターを初期規格として提案したのは今は亡きとある研究者だった。ゲッター線を通し、このプロトゲッターは名実共に真のゲッターになるはずであった。だが研究は途中で失敗、ゲッターは無尽蔵にゲッター線を取り込みながら沈降した。その結果、ここまで堕ちてきたのだ」

その話に驚愕する。ここまでのシースルーエレベーターのメインシャフトはこのゲッターが開けてきたというのか。

「何て、無茶苦茶な……」

「だがゲッターに乗るお前らはさほど無茶苦茶な話だとも思うまい」

その通りであった。ゲッターに乗っていればさもありません。

「だが、このゲッターが沈降したとして、何故？ 理由は？」

「過剰ゲッター線による暴走、だとされているが詳しい事は今でも分からん。だからこそ、こいつを地獄の門番さながらに繋いでいるのだよ。これより下はまさしくゲッター線のるつぼだ」

サオトメが足を慣らす。この下がまだあるというのか。

「何故、追跡調査をしない？」

「誰も、このゲッター線の過密な場所に近づこうとは思わん。それに妙な噂話が先行してな」

「噂話？」

サオトメはハヤトへと振り返った。

「出るのだという。その研究者の亡霊が」

背筋を震わせたのは何もその話が恐怖を誘発したからではない。あり得る、とどこかで感じている自分自身に恐怖したのだ。

「……仮に出るとしても、このゲッターは今どういう状態なんだ？」

これが出撃してヨロイのゲッターになっているわけではないのだろう？」

「無論だ。こいつの制御システムは全てミチルが管理している。それに動かそうと思っても外側からの間接的なものでは不可能。やろうするのならば、コックピットに収まって稼働させるしかないのだが、誰も入りたがらない」

当たり前だ。このような因縁の機体を誰がこぞって動かしたがるだろう。

「つまり、完全な沈黙状態か？」

「動かせん事はないが、誰も動かしたがらないというだけだ。それにこれが出撃すればワシらとて気付く」

「ヨロイのゲッターとの関連性は……」

「今のところ皆無、だな」

ならば何故、この地獄の釜の底まで自分を案内したのか。その奇妙さが先に立つ。

「では、どうして自分が呼ばれたのか。そう考えるのは妥当だろう。ハヤト、この地獄を知っておけ」

思わぬ言葉にハヤトはうろたえた。

「どういう意味だ？」

「言葉通りだよ。地獄の門番を買って出ているこのゲッターの存在をお前は感知しておけ。それだけだ」

それだけのはずがあるまい。ハヤトは追及した。

「答えになっていないぞ！ 博士。このゲッターには秘密があるな？」

無論、サオトメならばそれくらいは秘匿していてもおかしくはない。だが返ってきたのは、「分からない」という意外の言葉だった。「分からない、って」

「分からないのだ。ワシも、ひよつとするとこのゲッターがまさしく亡霊のようにワシらの前に出てきて今のゲッターを阻んでいるのかもしれない、というオカルトめいたものに衝き動かされていた。ワシとて恐怖がある。だからお前を呼んでここまで来させたのかもしれない。それ以上に恐怖なのは、ワシはまだこのゲッターが恨みを伴っているのではないか、と感じているのだ」

「恨み、だと……」

「ヨロイのゲッターには実体がなく、もしかしたらこのプロトゲッターの恨みそのものではないかと」

サオトメの言葉をハヤトは一蹴する。

「馬鹿馬鹿しい。それでも研究者か、あんたは。あのゲッターには実体があった。そうでなければオレも、リョウマも敗れん」

「その通りだ。亡霊程度ならば、お前らは屈しないだろう。あのヨロイのゲッターには実体がある。それを確かめたくってワシはここまで来たのかもしれない」

案外、間違っていないのかもしれないとハヤトは感じ始めていた。このプロトゲッターの存在を知っていれば、誰もが確かめなくなる。この地獄の門番は今も動いていないのか。だが一人で見に行くには業が深かった。

「……案外、地獄への片道切符というのは容易いな」

そのような言葉さえも強がりであった。現にプロトゲッターはあなのだ。この地獄が継続している事はプロトゲッターの存在が何よりも証明していた。

「そう、だな。地獄は容易いものだと、いつでも思えばいいのだが」
濁した語尾にはサオトメ自身、このプロトゲッターを恐れる部分が

あるのかもしれない。今は亡き研究者の妄執。その取り憑いたゲッターには異様な迫力があつた。

「あのゲッターでさえも命を取り込んできた。だというのに、このゲッターは沈降したこのゲッター線で満たされた空間で、一人、ずっといたのか……」

まさしく執念の塊。ゲッター線という未知のエネルギーに夢を見出した者達の行き着く先の地獄であつた。

「ハヤトよ。これの存在だけは知られてはならない。殊にレプリカントには」

言いつけたサオトメの声音にはどこか切迫したものがあつた。まさか、とハヤトは口にする。

「次に、これが狙われるとでも？」

「分らんが、ゲッターという存在に対して、そろそろネフィリムでの力の一辺倒では敵わないと感じ始める頃合だ。レプリカント、あれの厄介なのはお前ならば知っているな？」

問われてハヤトは偽人類の特徴を口にする。

「外見的な見分けはつかない……」

「知らない人間ならば研究所には通さないシステムにはなっているが」

サオトメは再びプロトゲッターを見据える。研究所は堅牢でつける隙はないはずだ。そう信じたかったが、サオトメの声音にはそれだけで済むものか、という懸念もあつた。

果たしてゲッター奪取作戦程度で偽人類との攻防が収束するのか。その不安がハヤトにも伝播して思わずプロトゲッターの顔面を窺っていた。

黒ずんだゲッターは何の感情も浮かべず沈黙していた。

第五話 「咎人の声 3」

イーグル号が先行する。

赤い翼を展開させて風を切る赤い機影が空を引き裂いた。

最初は計器も見えず合体のタイミングも関知出来なかったが今ならば目を瞑っていても分かる。リヨウマは正確無比にチェンジを遂行する。イーグル号が制動をかけてジャガー号との接合を果たし、最後にベアー号が合体して脚部を展開、腕をマイクロマシンの装甲が補助、引き伸ばされた身体に畳まれた両翼からウイングが引き移されゲッター1への変形合体を果たした。リヨウマはミチルへと問いかける。

「ミチル。今のは？」

『合体完了まで三十秒とちよつと』

リヨウマは舌打ちをした。

「まだ遅いな」

『充分早くなりましたよ。最初のほうは一分を越えていた』

「でも、ヨロイの奴を倒すには、この程度じゃ足りねえ」

リヨウマはそのままゲッター1での最高速度を試そうとする。ゲッター1がウイングを展開して飛行形態になりシミュレートされた樹海を抜けていく。ブロックノイズが浮くほどの速度だったがそれでもヨロイのゲッターのやってのけた瞬間移動のような真似は出来ない。

リヨウマは歯噛みする。腹の底に押し掛かる重力だけのせいではない。これは苦渋だ。一度ならず二度も敗北した。それはリヨウマに思っていたよりも重く押し掛かっていた。タツヒトの託したゲッターロボ。その真価をまるで発揮出来ていない。リヨウマは急制動をかける。すると各部に支障が発生した。

『リヨウマさん！ さすがにこの速度では、本物のゲッターでは空中分解しますよ！』

メカニツクの声にリヨウマは、「本物なら、な」と言い含める。

リヨウマの用いているの仮想シミュレータであり、イーグル号の合
体シミュレートに使ったものをそのまま転用しているのである。

「だが実際のゲッターじゃ、この機動も儘ならんわけだ」

幾何学機動をかける。至るところから火が噴き出した、という警告
の旨が発せられる。

『リヨウマさん。何を焦っているのです？』

ミチルの声にリヨウマは、「焦りもする」と応ずる。シミュレーショ
ンの空はどこまでも青く、雲海が広がっていた。上空でゲッターを泳
がせる。しかしリヨウマの目には今にも落ちてくるであろうトマ
ホークの幻影が見えていた。ヨロイのゲッターの威容も網膜の裏に
ちらついて離れない。

「二体、あいつは何なんだ……」

一瞬だけ通信が繋がった時に感じた悪寒。その正体が知りたかつ
たのもある。ミチルへと解析を頼んでおいたがその時の通信はレ
コーダーに記録されていなかった。

「ジジイが意図的に消した可能性は？」

『ゼロではありませんが、博士としてヨロイのゲッターの正体は知りた
いはず。ログもないのは不自然です』

ミチルの言う通り、ログもなしに通話記録全てを消すのは納得いか
ない。リヨウマはゲッターの手を宙に漂わせる。即座に反転させて
上段に蹴りを放った。さらに返す刀でゲッターEトマホークを発振
させ振るい上げる。薙ぎ払い、打ち下ろす。それでも気は紛れなかつ
た。

何が、自分とヨロイのゲッターでは違う？

その隔絶を埋める術をリヨウマは知らなかった。戦えば分かるの
か、と感じていたがまだデータ不足でヨロイのゲッターのシミュレー
ションを展開出来ない。代わりに呼び出したのはネフィリムの戦闘
データだった。オベリスク型が出現し、両腕と両脚の付け根にある円
形の部位を弾き出す。

幾何学に動き出した自動砲台がゲッターを狙い澄ます。リヨウマ
は紙一重で回避させて一個、また一個と自動砲台を撃破していく。神

業だと研究員やメカニックは持て囃したがまだまだだ。まだ自分の理想通りにゲッターは動いてくれない。

手足のように、とはいかないのだ。自動砲台を潰すと今度はネフィリムが両腕を突き出す。大出力の砲門をゲッター1のまま回避行動に移った。当然の事ながら避け切れない飛散粒子がゲッターの装甲を叩きつける。

『装甲が持ちませんよ！』

ミチルの警告をリヨウマは雄叫びで掻き消した。Eトマホークを突き出しネフィリムの頭部にあるコアを叩き割る。ネフィリムが放散爆発しシミュレーションの終了を示した。

「何で終わった？」

「持たないからですよ。ゲッター1が」

メカニックの声にリヨウマは腕を組んでふんぞり返る。

「そんなもんかね。やわだな、ゲッターは」

「精密機械の塊ですから。一応は。これでも大分安定はしたんですがね」

シミュレーション結果が長細い紙の束となって出てくる。そこに暗号化されたゲッターの精密データがあるらしいがリヨウマにはちんぷんかんぷんだった。

「それを読んでも分からねえよ」

「そりやメカニック以外には明かせない情報ですから。これが漏れるだけでも国家機密ですよ」

そんなもんかね、とリヨウマはコックピットに体重を預けた。

「じゃあどうやって処理してんだ？」

「そりやシュレッダーにかけて、紙の一片すら残さないようにしています」

万全の態勢だったがリヨウマには不服であった。

「勿体なくねえか？」

「いいえ、データでは残りますし。この紙媒体は言うなれば二次記録です。データに書き込まれた事項を人の目で一度見なければなりませんから」

人の目を通してこそその信頼か。リヨウマはこのゲッターという未知の箱ですら、一応はこの国独自の目線が盛り込まれている事に感服する。

「律儀な事だな、おい」

「我々の仕事も決して無駄じゃないのは、リヨウマさんが毎回スコアを更新してくださいますから」

笑顔になったメカニックにリヨウマは、「スコアか……」と呟く。確かにシミュレーション上のネフィリムならば手早く倒せるようになった。オベリスク型が来てもイシユタル型が来ても負ける気がしない。しかし、それはいつでも勝てるという自負ではないのだ。

「シミュレーション上の話さ。おれが強くなったわけじゃねえ」

「リヨウマさんは充分ですよ。それに引きかえ、ハヤト……いいえ、ハヤトさんは」

どうやらメカニックや研究者の間ではまだハヤトを煙たく思っているらしく注意深く動向を見つめているようだった。リヨウマは手を払う。

「やめにしねえか？ おればっかり見てもらっても悪いぜ」

「でも……元々は敵だったんですよ？」

言われてしまえばその通りだ。信頼を一から築くのは不可能かもしれない。それでもリヨウマはハヤトを悪くは言えないのだ。

「……月面でも交渉の矢面に立ったのはハヤトだ。おれじゃ、まだ帰ってこれていないかもしれないねえしムサシみたいな逸材も手に入らなかったかもしれないねえ」

「ムサシさん、ですか。あの人もまた……」

濁したのはムサシの個人データを閲覧しての事だろう。ムサシはゲッター3での戦果はめざましいのだがそれは実戦での話。シミュレーションではからつきしなのである。しかもそれがチェンジしてからではなく、まさかのチェンジすらも出来ないという様ならばメカニックのため息も分かる。

「ムサシ本人だろうよ、一番にショックなのは」

ムサシとて自分に適性があればと思っっているに違いないのだ。機

械に疎いのはルナリアンの血の証。だがルナリアンは最早ムサシ一人になってしまった。絶対の孤独、というのには相手はいささか愚鈍が過ぎるが。

「ゲッター3、おれでも試せるのか？」

だからか、そのような事を聞いてしまった。メカニックは憚るように小声になる。

「出来ますけれど……」

「んだよ、何か言いたげだな」

「実はハヤト、さんも似たような事を仰っていたみたいで」

「ハヤトが？」

それには瞠目せざるを得ない。ハヤトが他のゲッターでのオペレーションを考えるような輩には見えないのもある。

「ムサシが、心配とかでか？」

ハヤトは未だにムサシの事を月面人と揶揄している。それでは確かに三位一体のオペレーションを懸念するのも理解出来た。だが放たれたのは意外の言葉だった。

「いいえ、ハヤトさんが主導権を握りたいと仰っていたのは、ゲッター1のオペレーションです」

「ゲッター1だと」

思わず声を荒らげる。メカニックが、「大声出さないでくださいよ」とよろめいた。

「我々だって何の事だかさっぱりなんですから。第一、ゲッター1はリョウマさんのでしょう、と言ったら、それは分かっているがと食い下がるんですもん。どうにも無下に出来ないと思って博士のほうを紹介したんです」

「ジジイとハヤトの野郎が、手を組んでいるってのか……」

「言い方は悪いですが、そう取られてもおかしくはないですね」

リョウマは顔を拭う。額に汗の玉が浮いていた。

「……悪い。一旦シミュレーションを終える。後の処理は」

「任せておいてください」とメカニックが胸元を叩いた。リョウマは安心してイーグル号から降りる。しかし胸中は穏やかではない。ハ

ヤトがゲッター3ではなくゲッター1の主導権を握ろうとしている。その事がリョウマに沈痛な気持ちを芽生えさせた。

ハヤトは自分を信用していない。

否、元よりハヤトは敵なのだ。敵であった相手がここまで歩み寄れた事でさえも奇跡に近い。だというのに、これ以上を望むのは高望みになるのだろうか。リョウマは腕時計型の端末へと声を吹き込んだ。「お前は、知っていたのか……」

ミチルはばつが悪そうな沈黙を挟んでから、『悪気はないんです』と答えた。自分以外は知っていたというのが余計に堪える。

「悪気はない、か。でもよ、おれからゲッター1取ったらどうなるって言うんだよ。サオトメのジジイもおれが本能だつて言い放っているんだろ？ だったら、おれには理屈じみた難しさのあるゲッター2は向かないのは分かるし、ゲッター3だつて適性はいまいちだ。どうするんだ？ おれをゲッターチームから外すか？」

『そんな馬鹿な事！』

ミチルが声を大にする。リョウマは、「しーっ」と唇の前に指を持ってきた。

「当の本人達に聞かれるわけにはいかないだろうが」

ミチルは少しばかり自重してから、『ですが』と声にする。

『リョウマさんがいなければ、ジン・ハヤトも、ムサシさんもゲッターチームには加わらなかつたでしょう。全ての始まりは、あなたなんです』

「そのそもそもはサオトメのジジイの思惑だ。どこまでおれ達を弄んでいるのかは分からないがな」

サオトメはどういった基準でこの三人に決めたのか。そもそもムサシにおいては自分が身勝手に連れ出した部分もある。

「三人揃わなきゃ、ゲッターのパワーは全く出ないのは実感しているぜ。でもよ、だからと言ってその辺の三人を頭数揃えればいいってんでもないんだろ？」

『そもそもゲッターはベクトルの違う三機への変形合体を可能にした機体。それぞれに乗るパイロットの気質が違ってくるは既に想定済

みでしょう』

「でも、ジジイがどこまで操っているのかは」

『そこまでは私でも……』

濁したミチルにリヨウマは、「悪いな」と言いやった。

「面倒事や愚痴ばかり聞かせて」

『いえ。パイロットのメンタルケアも私の仕事のうちですから』

「ついでにもう一つ、面倒を買って出てくれるか？」

ミチルは疑問符を浮かべるように「瞬だけ沈黙してから、『どうぞ』と声にする。

「ムサシ、あいつ、今どこにいるんだ？」

第五話 「咎人の声 4」

月光が降り注ぐ天窓が静かな時を刻んでいる。サオトメ研究所には珍しくこのようなデッドスペースでも呼ぶべき余計な建築物があるのを初めて知った。ミチルが解説する。

『元々、ゲッターで精神を病んだ人間が多かったもので、このような教会じみた場所を作りました。言うなれば病棟です』

「専門医とかはいたのか？」

『いいえ。全て、私が診断しましたが。全員に見られたのは強迫観念と何よりも恐怖です。強い恐怖心が彼らの心を占めて、雁字搦めにしていました』

「それほどまでにゲッターは魔物か」

その魔窟から少しでも離れようと試みた結果がこの教会。その奥まった本殿に身を縮こまらせているのは二メートルを越す巨躯だった。

ムサシが拝礼をしている。リヨウマは自然と声をかけるのが憚られた。ムサシの拜んでいるのは十字架である。僧兵は見たが、月面の人々はキリスト教徒なのだろうか。ようやく拝礼の手順が終わったと見るや、リヨウマは声をかけた。

「ムサシ。お前、この教会貸し切っているんだって？」

既に気配で悟っていたのだろう。ムサシはさして驚くでもなく、「よく来たな」と声にした。

「ミチルがな、てめえがここにいてるって教えてくれたのさ」

腕時計型の端末を指差すとムサシは感嘆した。

「そんな小さなものに機械が入っているのか？」

「おいおい、今さらだぜ。ゲッターで重力圏を抜けた事を忘れたのかよ」

「そりゃあ、そうなんだが、未だに信じられなくなっつてな。月面の叡智から離れて我が身があるというのが」

やはりムサシは気にしているのだろうか。リヨウマはそれとなく尋ねる。

「負い目、とか感じているんじゃないやねえだろうな」

「何に負い目を感じる必要が？」

ムサシは思っていたよりも愚鈍なのかわざわざ聞いてきた。リヨウマは椅子の一つに腰かけて、「同朋だよ」と口にする。

「てめえの言う、ルナリアン連中。……月面では悪い事をした。守れなかったな」

ムサシはしかし、沈痛なりヨウマに比べれば幾分か晴れ晴れとした顔立ちだった。

「ああ。だがそれを悔やんでも仕方あるまい」

「んだよ、意外にタフだな」

「女々しく泣いていたところで、死者は蘇らんし、俺はどうせ百年近く幽閉されてきた。誰が統治していて、誰がああ月面で暮らしていたかなど、まるで分からんのだ」

なるほど、とりヨウマは納得する。実際に月面の地を踏んでみた自分とは違い、ムサシは百年の孤独があつたのだ。

「……だが、それでも割り切れんものがあるのだな。俺は、こうして月光の照らし出す教会に居座っている辺り、存外に繊細なのかもしれない」

「繊細な奴はゲッターなんて乗れないぜ」

からかってやるとムサシは口元に笑みを浮かべた。

「分かっている。しかし、時折思うのだ。もし、俺がもっと強ければ、あの時、月面の被害を最小限に食い止められたのかもしれない」

「そりゃ、おれ達の責任でもある。事を荒らげたのはおれとハヤトだ」「それでも、さ。やっぱり拭えんものがあるのだな」

ムサシは巨体だから愚鈍に映るが実際には誰よりも孤独に耐え、誰よりもこの境遇が不幸なのかもしれない。ルナリアンは最早ムサシ一人。自分達は言ったところで人類規模だ。偽人類の脅威に脅かされているとはいえ同朋の一切いらない土地にいるわけではない。

「月は、綺麗に出ているな」

あの場所で虐殺が起きたなど信じられないほどに、月は静かに佇んでいる。ムサシは、「故郷の光だ」とまたしても拝み始めた。リヨウマ

は茶化してやる。

「てめえ、結局何教なんだよ」

「何を信奉するでもない。俺は、自分の故郷がよく見えるこの場所が好きなんだ。もし、少しでも機械と天上の見えない部屋に移り住んでしまえば、すぐにでも忘れてしまえばそれで、怖いのもある」

顔を伏せたムサシに言いやれる言葉は少ない。あの時、ヨロイのゲッターは何を目的にして月面を蹂躪したのか。自分の過去にも直結する因縁にリヨウマは拳を握り締めた。

「何者か分からない敵を制さねばならないのはこの地でも同じのようだな。偽人類とか言う」

サオトメから聞いたのだろう。リヨウマは、「どう思う?」と素直に感想を仰いだ。

「いいや、俺はまあ、信じられなくてもないが……。そもそも経緯とか、どういった存在が偽人類なんだ? 俺にはそれがよく分からん」
「どういったって……」

そこではたと気づく。偽人類、すなわちレプリカントを外見だけで判断する手段はないのだと。今までは所詮この国での防衛成績が意味を成していたので実際のレプリカントに行き遭って戦った、という人間は驚くほど少ないのだ。リヨウマは腰を据えて考え込む。

「……難しいな。ミチル、補足出来るか?」

こういつた時にミチルの頭脳は役に立つ。

『私もデータ上でしか語れませんが』

「構わない。俺は全く知らないも同然なのだ」

ムサシの声にミチルは咳払いを一つした。人間のするような所作にAIなのに、と思わず感じてしまう。

『そもそも偽人類が発見されたのが三百年前。その時、ある一人の研究者がこの惑星にはもう一種類、人類と異なる進化系統を辿っていないが人類とほとんど似通っている生命体がいると発言しました。レプリカント、という名前は往年のSF映画における人造人間の意ですがこの時偽物の人類を形容するのにこれ以上の適切な言葉はなかったのです。偽物、と前置きしましたが、実際のところレプリカントが通

常の活動をする際、明確にそうだとわかるのは攻撃時のみです。平常時では、誰がレプリカントなのかなど分かりません。これはリヨウマさん、ジン・ハヤトの侵入時にレプリカントだと思い込んでいた事で分かりますよね?』

ああ、とりヨウマは納得する。あの時、レプリカントの襲撃だと判じていたのは自分だけだ。誰にもそれを判断する術はなかったのである。

「となると、厄介な事にレプリカントってのが隣人の可能性もあるってわけなんだが」

リヨウマの懸念にミチルは応じた。

『ええ。その疑心暗鬼から、一時期は魔女狩りめいた事さえも公然と行われましたがある一つの出来事が決定的に変えました』

「ある一つの……」

「出来事、ってのは?」

促す二人にミチルは言い放つ。

「ネフィリムの出現です」

リヨウマは自分の持てる知識を総動員してネフィリムの初出現が何年前だったかを思い出そうとする。

「二十年前か?」

『プラネットシエルが持ち上がった当初ですから、ちょうどそのくらいですね。最初のネフィリムはベータ部隊が相手にしていた霧型と呼ばれる実体を持たないものと実態型と呼ばれる実体を持つもの二つがありました』

その説明にムサシは胡乱そうな目を向ける。

「それが、俺達の相手取っているオベリスク型や他のと何が違うんだ?」

『ちよつと待ってください。霧型は……』

腕時計型の端末から投射されたのは霧型ネフィリムの形状であった。二つの赤い目を有しておりその眉間の部分にコアがある。霧型の名前の通り、体表にはほとんど実体装甲は存在せず雷雲の形状だった。

『これが霧型ネフィリム。リヨウマさんはよく相手取ったはずですよね?』

「ああ。こいつが八割だ」

『通常火器が通じる上にこれそのものの攻撃力は実は驚くほど低いんです。それこそ正規採用されている各国の砲台や戦艦で事足りるほどに』

「実際、おれもベータで慣らし運転みたいなもんだったな。新しいベータが来りや、実戦でまず試す、つてのが通例だ」

「そうなのか?」

馬鹿正直に聞き返したムサシへとミチルは言い含める。

『リヨウマさんは例外ですよ。普通、霧型とはいえ、ネフィリムとの戦闘に慣らし運転なんてないんですから』

それこそタツマに口が酸っぱくなるほど言われていた事だ。リヨウマはけつと毒づく。

「大丈夫だったの。これの防衛成績はどの国でも八割越えだろ?」

『それは正しい情報ですね。確かに霧型の迎撃は驚くほど容易かつた。でもこれが現れた事で、レプリカントの脅威は実態を帯びてきたわけです』

その声音で分かった。ネフィリムという共通の敵が現れなければ、もしかしたら人類は人類同士で殺し合っていたかもしれないと言う事を。

「……月は長い事争いとは無関係ではあったが、それでも重力圏から来る脅威に備えて軍事増強を行っていたな」

ムサシの言葉に、『月面でそうなのですから地上ではもっとです』とミチルが答える。

『月面は長らく平和で、だからこそ中立地帯を守っていたのだと思います』

「中立ね。その割には僧兵共が戦いなれていた感があったが」

「六分の一G殺法は常に研鑽の日々を送っている。だからこそ、月面での訓練は常であったと考えられる」

つまり最初から重力圏より来る敵を想定しての動きであった、とい

うわけか。リヨウマは気に食わなかった。六分の一G殺法も充分に脅威ではある。

「あの僧兵共、絶対に不意打ち以外じゃ死ななかつただろうな」

「実際、どういふ歓迎が取られたのかは俺には分からんが、ゲッターと渡り合えるくらいではあつたはずだ」

ゲッタービームでようやく吹き飛んだ、と言えばムサシは驚くだろうか。だが今はそのような冗談すらも少しばかり気が引ける。

「実際、どうなんだよ？ てめえ、ゲッター3に乗った感想は」

そういえばごたごたで聞きそびれていた。ムサシは、「馴染む、な」と手を開いたり閉じたりする。

「馴染む？ 機械音痴のルナリアンが？」

「そりゃ機械には疎いし文明にも分からん部分が多いが、それでも俺のやり方を、なんていうか吸収してくれる感じではある」

ゲッターがそれだけ柔軟だという証だろうか。リヨウマなミチルに尋ねる。

「そもそもゲッター3は何を想定して作られたんだ？ 空戦のゲッター1だろ？ 地上戦のゲッター2だろ？」

指折り数えてみるもゲッター3が特別な状況が思い浮かばない。ミチルは、『残りがあるじゃないですか』と口にする。リヨウマは、まさか、と言っていた。

「海洋戦闘用、じゃないだろうな？」

『そのまさかですよ』

リヨウマは呆れて物が言えなくなった。その様子をムサシが怪訝そうに眺める。

「何でだ？ 海ならばあるだろう」

「馬鹿野郎。あんなもん、すぐにプラネットシエルで埋め立てられるさ。なくなりそうな海での戦闘を心配して造ったのかよ。そりゃ無駄遣いって奴だぜ」

リヨウマの苦言にミチルも、『詳細は省きますが』と言い返せないようだった。

『実際、高重力下での戦闘も出来るとの事ですし、何も海洋戦特化、と

「言わなくてもいいと思いますが」

「海での戦闘なんて滅多にない、どころかないだろ、この時代。何で三形態必要なのか、と思えばそんなもんかよ」

『いや、きつちり三形態でのメリットはあるんです』

ミチルの声にリヨウマは疑わしげな声を漏らす。

「本当かよ？」

『本当ですよ。研究中に起こった事なんですが、ゲッター線はそもそもゲッターロボ全域に行き渡ることはずありませんでした』

「それは、どうして？」

『分かりません。原因不明ですが何度も回路がショートを起こし、ゲッター線が回り切る前に焼き切れていたのです。そんな折、一度だけゲッター線の放出量を少なくして三分の一までカットした時がありました。すると全身にゲッター線が行き渡り、ようやくゲッターロボは完成を見たわけです』

おお、とムサシは感嘆するもリヨウマにはさっぱりだった。

「つまり？」

肩透かしを食らったようにミチルがうろたえる。

『つ、つまり、ゲットマシンを三分割、三機存在させるのはそういう理由もあるわけです。一形態だけではゲッター線は回り切りません。三形態揃って初めて、ゲッターとして存在出来るのです』

「なるほどなあ。三つの姿それぞれに意味があるわけか」

得心するムサシに比してリヨウマは冷静だった。

「でもよ、今はそうでもないんだろ？ だって最初、イーグル号しか出れ上がっていなかったじゃねえか」

最初に研究所を訪れた時、イーグル号のみの上半身しかなかった。その事に言及するとミチルは、『これも難しいのですが』と前置きする。

『ゲッターロボは逆算の技術なんです。素体が組み上がっていて、それを分解する形でいかに効率性を持たせ、さらに言えばそれだけでゲッター線兵器となり得るか。それを今度は突き詰めねばなりませんでした。その結果として戦闘機型の三機の合体システムが考案さ

れ、実際に分解してみるとこれがまた……。実は部品のほとんどが使
い物にならなかったのです』

「どうしてだよ?」

『ゲッター線の汚染によつてです』

汚染。そう聞くとリヨウマは赤い鉱石を纏わりつかせたヨロイの
ゲッターを思い出す。あの機体は汚染されていないのだろうか。見
た限りでは分離するように見えないがあれもゲッター線内蔵兵器だ
という。

「どういう事だ?」

興味を示したムサシにミチルは教鞭を振るつた。

『そもそもの素体が高濃度のゲッター線に何度も冒されていたせいで
部品としては使い物にならなくなりました。その時にもう一度分解
してやり直そうなんて事が簡単にまかり通るはずもなかった。実際、
今のゲッターに辿り着くまでに数十機の廃棄されたゲッターがあり
ます』

廃棄されたゲッターはどこへ行ったのだろうか。聞こうとしたが
それそのものがおぞましい質問だ。汚染されたゲッターをどこへ棄
てたのかなど。

「技術は失敗が付き物、か」

納得したムサシにミチルは言いやる。

『しかし完成品のゲッターロボまで辿り着けたのは僥倖なのです。だ
からゲッター1にも、2にも3にも意味があるのです』

「元々が三分の一のゲッター線しか通さないのが現状の兵器だつて事
だろ? だったら現行兵器を超える、それこそ新兵器を使おうつて気
にはならなかったのか?」

『何を仰います? ゲッターを構築するイーグル号、ジャガー号、ベ
アー号、どれを取つて試してみても最新鋭の兵器ですよ?』

確かに現状人類が耐えられるGではない。そういう点では最新鋭
だと言うのはあながち嘘でもないのだろう。

「なるほどなあ。ゲッター3にも意味があるつてわけか」

「おいおい、納得すんのかよ」

ムサシは呑気に聞き入っているがよくよく考えればおかしな話である。数十機は失敗したのにいきなり成功したような言い草だ。

「ミチル、今の話、決定的におかしいぜ。だってよ、分解してもう一回イーグル号とかから作り直したってんなら、どうやってゲッターの合体形態をシミュレーション出来た？ 完成した見本があったんじゃないのか？」

リヨウマの声にミチルは明らかに狼狽した。

『な、何を言うのですか！ ゲッターはたゆまぬ努力の賜物ですよ！』
AIが声を荒らげるなど正気の沙汰ではない。リヨウマは改めて口にする。

「でもよ、試作品もなしにいきなりおれ達の乗せられたゲッターが本物だったのは嘘くさいぜ？」

ミチルは声を詰まらせた。凶星らしい。リヨウマは深く聞こうと考えたがムサシが制止した。

「いいや、リヨウマ。もういいだろう」

「何でだよ？ 自分達の乗っているもんがどうやって造られたのかくらい聞いたってよかろうに」

「ミチルさんは言いたがってないんだ。それでいい」

「ミチル、さん？」

ムサシが真面目腐った顔で首肯する。リヨウマは笑い声を上げた。思わず、と言った様子で吹き出してしまう。ムサシは頑強な顔立ちで、「何が可笑しい？」と聞いてくるものだから余計に可笑しい。

「だって、てめえ……。AIつかまえてミチルさんはないだろ。さんは」

笑い転げるリヨウマを他所にムサシは、「女性にさんをつけるのは当然だ」と言い放つ。

「女性って。AIだぞ。月面にもいたろうが」

「あんなちやちなもんじゃないってのは俺でも分かるわ。ミチルさんは、まるで本当の女性のようだ」

頑として譲らないムサシにリヨウマは茶化した。

「さんだってよ、ミチル」

しかしミチルは応答しなかった。壊れたのか、と思つて端末を振る。

「おい、どうした、ミチル。聞いていなかったのか？」

ハッとミチルが我に帰ったように声を漏らした。リヨウマは怪訝そうにする。

「まさか、AIが聞き入っていたのか？」

『いえ、そんな……。私は研究所のAIですし』

しかし声は明らかに上ずっている。リヨウマは、「おかしなAIだな、おい」と言いやつた。

「照れてやんの」

指差すとミチルは鼻を鳴らした。

『もう！ 知りませんから！』

「ああ、分かった分かったつてミチルさん」

改めて声にしてやると笑いがこみ上げてくる。リヨウマのからかいをミチルは、『知りません！』と強情になつて跳ね返す。

「ミチルさんは尊いと思うがなあ」

ムサシの言葉も今は羞恥の対象のようだ。ミチルは、『ムサシさんも！』と怒鳴る。ムサシは目に見えてしよげた。

「何で俺も……」

「同罪だ、同罪。面白い事発見しやがつて」

こいつめ、と肘で小突き合う。ミチルは声を改めさせた。

『でも、まあ、ムサシさんが使えるというのならば、いいのでしょうか。ゲッター3』

その話に戻つてリヨウマは結局、試作型のゲッターに関しては何に巻かれた気分だった。

「応！ ゲッター3を男、トモエ・ムサシ！ 全力で動かすのみ！」

「そーいや、六分の一G殺法つて誰でも使えんのか？ 僧兵共は使つていたが」

誰でも習得出来るのならば自分でも、とリヨウマは感じていた。しかしムサシは頭を振る。

「いや、あれは月面での厳しい環境下で、自らを鍛える事を始めた先人

達の残した大いなる遺産。地上人では無理だな」

「IGに慣れちまってるからな。六分の一の武術が地上でも使えるって事は、地上だと六倍の威力ってわけか」

「単純計算だとな」

そう考えるとゲッター3の膂力は凄まじい。伊達に三形態存在するわけではないのかもしれない。

「なるほど、技のゲッター1、スピードのゲッター2、力のゲッター3と考えるといいかもしれん」

「それならば海洋戦闘用だと馬鹿にもされなさそうだ」

ムサシもこのなりで存外に根深いらしい。ゲッター3を海洋戦闘用だと馬鹿にしたのはしばらく尾を引きそうだ。

「で、話は戻るわけだが、リョウマ。結局、レプリカントを見分ける方法は」

「ない、というわけだな、ミチル」

確認するとミチルは、『そうですね』と応ずる。

『あるとすれば攻撃時、だけです。今のところは。発見して捕獲してもう少し詳細データが得られれば』

「おれなんかを捕まえるために二体分のDNAを使う必要なかったんじゃないねえのか？」

『リョウマさんは暴れ馬ですから、あれくらいがちようどいいでしょう』

こつちも尾を引きそうだ。リョウマは肩を竦めた。

「実際、レプリカントってどんなのなんだ？ 俺のイメージだとネフィリムに乗っているみたいなのなんだが……」

リョウマもネフィリムを動かしているのがレプリカントだと思い込んでいた。しかしミチルは訂正する。

『いいえ、ネフィリムそのものには恐らくレプリカントは乗っていないと思われまます』

意外外の事実のリョウマでさえも聞き返す。

「んだと？ じゃあ今までどうやって動かしてきたんだよ？」

『遠隔操縦、というのが有力な説ですね』

「遠隔……」

あれだけの兵器を遠隔で動かしていたというのか。それそのものが信じ難い。だが宇宙空間までレプリカントが追ってくるという凶を想像するよりかはまだマシであった。

「じゃあワームホールも？」

『座標軸を計算してレプリカントが送り込んできている、と考えるべきでしょう』

「だがどこから？」

この惑星上にレプリカントが安息出来る場所など存在しないはずだ。プラネットシエルのシステムが覆い尽し、レプリカントは動きさえも憚っているはずである。だからこそ、隣人に化けられているかもしれない、という可能性があったのだ。

『ネフィリムほどの質量を送り込めるのはこの惑星ではないですね。どこか別の時代、別の空間から……。あるいは……』

ミチルが言葉を濁す。リヨウマは端末を叩いていた。

「おい、寝てんのか？」

『寝ていませんよ！ ちょっと、妙な可能性を思い浮かべただけです』
おかしな話だ。システムAIが思い浮かべる、など。

「だが別の時代から送られてくるのだとすれば打つ手はないぞ」

根源を叩く、というのは難しそうだ。リヨウマは、「ワームホールの先には？」と聞いていた。

『無論、先遣隊のようなものは派遣しましたが。当然のように返事はありませんでしたね』

つまり目下のところレプリカントの所在地は不明。どこからネフィリムのような巨大な敵を送り込んでいるのかも分からない。

「何も分かっていないんだな、おれ達って」

改めて考えてみれば分からない事だらけ。自分達がいかに暗中模索の上に戦っているのかが分かる。

『バックアップもなければ本当にレプリカントの存在なんて誰一人として知らなかったかもしれない世の中です。記録が残るからこそ、今はレプリカント及びネフィリムを追えますが……』

「追えるったって、ワームホールの中に腕突っ込むなんて度胸はないしするつもりもないぜ」

ワームホールの先は本当の地獄に続いているのかもしれない。リョウマの予感にムサシが肩を震わせた。

「そりゃ、怖いな……」

これだけの大男が怖いなどというのはなかなか珍妙であったがムサシは百年余り牢獄の中での情報誌かないのだ。ほとんど子供と変わるまい。

「しかし、ゲッターというのはどこまで可能なんだか。どこから現れるのかも分からんレプリカントとネフィリム相手にこうまで立ち回れる。何かジジイなりに確信があってやっているんだろ？ 教えてくれよ」

『博士に聞いてくださいよ。私からはあまり言えませんし』

「何でだよ」

『記録が残るからです』

ミチルはあくまでシステムAI。記録、つまり会話ログは残っているのだ。いくらオフレコと言ったところでミチルに話した事はほとんどサオトメに筒抜けだと思っていたほうがいい。

「ジジイも面白い趣味してやがるな」

『その言葉も、記録に残りますよ』

「残しとけ。せいぜい、残り容量が心配にならないようにな」

リョウマが手を振っていないすとムサシは、「だが」と神妙な顔つきになった。

「先ほどまでの話が真実となるとレプリカント、よもやこの研究所に既に隠れ潜んでいるのかもしれないな」

「あり得ねえって」

「言い切れんだろう」

ムサシは既に気配の察知に神経を研ぎ澄ましているようだった。リョウマは肩を竦める。

「ならこの研究所で寝泊りしている間にでも寝首を掻くさ」

『リョウマさんの味方をするわけじゃありませんが、あまり気にして

も仕方がない事です。ただでさえ、この惑星には人が溢れているのに
疑心暗鬼になっても』

「研究所内だって馬鹿じゃないだろ。きっちりシステムぐらいは張り
巡らされているさ」

「だと、いいがな……」

ムサシはそう呟いたつきり、どこか緊張をはらませた面持ちを崩さ
なかつた。

第五話 「咎人の声」 5

ムサシを置いてリョウマは自室に戻った。結局、ムサシはあの教会から自分用にあてがわれた部屋には帰るつもりはないらしい。いや、ムサシの言い方を借りるならば、もう帰る場所などない、か。「ムサシ、ちよつと無理してんじゃねえか？」

腕時計型端末へと声をかけると、『そうですね』とミチルが応じる。『メンタルケアは必要なものですが、ルナリアンで百年規模の寿命を持つているムサシさんと対等に話せる人間はいないでしょうし』

百年の孤独。それを実際に理解するのは不可能だろう。

「ゲッターチームに亀裂が走りかねないな」

『リョウマさん、やっぱリゲッターチームの心配を？』

「たりめえだろ。ハヤトの野郎は勝手な事をするわ、ムサシは精神が磨耗するわじやいぎという時出れねえだろうが」

ゲッターは三人でこそ真価を発揮する。有事の際に戦えないのは話にならない。

『結局、リョウマさんもゲッターの心配ですか』

ミチルの含んだような声音にリョウマは声を振り向ける。

「んだよ、ミチル。おれも、つて事はまたハヤトか」

しまった、とでもいうようにミチルは声を詰まらせる。隠し事の苦手なAIだ。

「話せ」

有無を言わせぬリョウマの声音にミチルは早々に折れた。

『……博士と内密な話をしている様子でした。ログはありますが、話す権限はありません。つまりリョウマさんには閲覧許可が下りていないのです』

「つまり、知ってはいるが、おれには話せない、と解釈していいのか？」
『そう言われても仕方ありませんね……。私は所詮、この研究所のAIですし』

サオトメの都合の悪い事はもみ消せる、というわけだ。リョウマは鼻を鳴らす。

「いけすかねえ。やっぱり、ジジイとハヤトが企んでいるってわけか」
『詳しい事は全く話せませんが、リヨウマさんの害悪になる事ではありません』

「どうだか。今の発言だつて、ジジイに見張られているんだろ？」

ベッドに寝転がって端末を外す。すると小さく抗弁が返ってきた。

『……本心です』

「本心、ね。だがジジイとハヤトがやっている事を明かせない限り、おれに安息なんてねえよ」

ハヤトは今度こそ自分を更迭しようとも思っているのだろうか。あるいは別のパイロットの選出？ それともハヤトだけのためにゲッターの機能を拡張しろ、か？ どれにせよ、いい気はしなかった。ハヤトは自分とは違う。ゲッターに負い目は感じていない。あるいは宿命とも言うが。

掌へと視線を落とす。自分はタツヒトを、ゲッターの希望を奪ってしまった側の人間だ。だから贖罪をせねばならない。研究所の人々のため、あるいは人類のために。しかしハヤトやムサシには背負う事など何も無いのだ。

「……いや、ムサシはあるか」

ルナリアンを目の前で虐殺された恨み。ヨロイのゲッターをムサシは許すまい。リヨウマは自分の過去の景色にあるヨロイのゲッターの像を脳裏で結びつけた。あの時、ヨロイのゲッターは自分を助けたのだろうか。

あるいはただの偶然で？ どちらにせよ、一度ヨロイのゲッターと会っている事は言うべきではないだろう。サオトメの事だ。脳洗浄でもかけて全力で記憶を洗い出すに決まっている。実験動物のような真似は御免である。

『リヨウマさん。一つだけ、お教えしておかなければならない事が』
枕元のミチルが声にする。リヨウマは、「何だよ」と寝そべったまま問いかけた。

『前回、ヨロイのゲッターと戦われた際、検出されたデータの中でこれだけはリヨウマさんに教えておけと命じられた事があります。ゲッ

ター線の共鳴現象の事です』

「共鳴現象？」

胡乱そうにリヨウマは聞き返す。一体何の事を言っているのか。

『ゲッター線を炉心とする兵器同士が過度にエネルギーを高めて同じ反応を示した際、起こるとされる現象です。これを使ってゲッターの感知やゲットマシン同士でも位置関係が瞬時に分かる、という風に改良されているわけですが』

「まどろっこしいな。ハッキリ言えよ」

リヨウマの言葉にミチルは、『では』と佇まいを正す。

『ヨロイのゲッターとゲッター1、いいえこちら側のゲッターは共鳴現象を起こしました。これは即ち、それ相応までエネルギーが高められた、という事。実はこれは危険な現象でもあるのです』

「何でだよ。ゲットマシンの位置関係を判別するための機能じゃねえのか？」

『本来はゲッター線という純粋なエネルギーが巻き起こす自然現象。それがゲッター線兵器にも見られるという事は、純粋なエネルギーに転化しかけた、という意味でもあります。あのままヨロイのゲッターと戦い続けていれば、どろどろに融けていたかもしれないのです』

思わぬ言葉にリヨウマは起き上がった。ミチルは嘘をいつている風ではない。ゲッターの危険性についてリヨウマに語り聞かせているのだ。

「……つまりヨロイと戦い続けられれば、いずれ破滅だと？」

『そうは言っていません。もちろん、こちらでもゲッターの強化案は出し続けていますし、当初よりもゲッターその者は強固になりました。ですが共鳴現象は頭の隅に留めて置いてほしいのです。でなければ、巻き起こってからは遅いのですから』

ヨロイのゲッターと戦う弊害。ゲッター同士の戦闘などあつてはならないのかもしれない。

「それでも、あいつはムサシの仇だ。そんなもっておれの因縁でもある」

『リヨウマさん、無理やり正当化しようとしていませんか？ ヨロイ

のゲッターに何か深い理由でも……』

「ない。おれは、ただあいつが気に入らただけだ」

それだけに留めておこう。決して過去の因縁やヨロイのゲッターを見た時に感じた事など話すべきではない。リヨウマは眠りに入ろうとした。最近全身が強張ってばかりだ。ヨロイのゲッターが現れてからシミュレーションの日々。身体は疲れていたのか眠りを欲していた。程なく夢の舟をこぎ始めていた。

第五話 「咎人の声 6」

「イーグル号、前に計測した時よりも速度も反応も抜群だ」

眼鏡の研究員の声に返したのはその部下であった。

「イーグル号だけじゃありませんよ。この三機のゲットマシン。明らかに馴染んでいる。それぞれのパイロットの特性へと」

それまでは荒れくれ馬だったこの三機が揃いも揃って三人のパイロットそのもののような特性を出しているのはどうしてなのだろう。眼鏡の研究員はレンズを磨いて、「不思議なもんだな」と呟く。

「リヨウマさんが来てから、好転した事ばかりだ。もちろん、懸念事項もあるっちゃあるけれど」

「ヨロイですか？ 考えるだけ無駄ですよ。全く追えないんですから」

部下がコーヒーを差し出す。研究員はそれを手にして口に含んだ。

「計測装置、あるいはゲッター線感知をここまで広域に広げても全く気配すら追えないってのは、本当にゲッター線兵器なのか疑わしいな」

とは言ってもミチルの感知範囲は大気圏外までとはいかない。それならば前回月面での横暴を許す事もなかった。ミチルはプラネットシエルによって明らかに範囲は伸ばしつつもやはり空までとは容易くないようだ。

「プラネットシエルは所詮、地表を覆うものですか」

「かもしれないな。どちらにせよデータ上は喜ばしいんだが。ゲッター1での機動はここまで伸びるなんて思わなかった」

差し出したデータを読み取った部下が瞠目する。

「すごいですね……。想定は何倍ですか？」

「十倍は行っているよ。ただ博士の命令で、リヨウマさんに直接伝えるなどの事だ」

「どうしてですか？」

研究員は額の汗を拭いながら答える。

「どうしてか、ってのは下々には伝えられていない。ただリヨウマさ

んには言うな、の一点張りだ」

「無責任じゃないですか。戦っているのはリヨウマさんですよ。」

部下が唇を尖らせるも自分にはどうしようもない。研究員は廊下へと歩を進めた。部下がそのままついてくる。

「噂レベルだが」

廊下に出たのはこの話をするためでもあった。部下が耳をそばだてる。

「ハヤト、さんが絡んでいるって話だ」

「ジン・ハヤト、ですか」

「馬鹿。この研究所ではもうハヤトさんなんだよ。迂闊に呼び捨てなんてしてみろ。殺されるぞ」

「ま、まっさかー。いくら元ゲリラだからって殺しはしないでしよう」

部下の言葉に渋い顔を返す。

「ところが、そうでもないらしい。月面での戦闘ログを見たが、途中でハヤトさんの一人での操縦だ。つまりリヨウマさんを見捨てるつもりだった事が窺える」

部下は察したのか口元を押さえて聞き返す。

「……すると、リヨウマさんは何で生きて帰ってこれたんでしょう?」

「イレギュラーが発生したのか。分からんが、ハヤトさんは一人で逃げ帰るつもりだったとも言える。そこにヨロイが現れた。当然、リヨウマさんは徹底抗戦の構えだろうが、ハヤトさんの考えは違うさ」

「ハヤトさんは、ヨロイに因縁ありませんからね」

「リヨウマさんが一方的に敵視している感もあるが、ヨロイのゲッターはどちらにせよ脅威だよ。お前、地下のプロトゲッター、聞いた事くらいはあるだろ?」

秘中の秘の事柄にお互い声を潜める。

「噂の地獄の釜の番人ですか。聞いた事しかありませんよ」

「プロトゲッターの亡霊だって、知っている奴らの中では有名だよ」

「先輩、見たんですか?」

「馬鹿! 見れるわけないだろ。プロトゲッターの存在だって眉唾なんだ。だって言うのにそれがどうしてヨロイに繋がるってのか」

「じゃあ幽霊の話とかと同じじゃないですか」

おぞましい事だが研究所内では時折幽霊を見る人間がいた。だが別段珍しくない。ゲッター線に当てられた中毒者、と断じれば霊的存在への恐怖よりもゲッター線への恐怖が勝った。それに加え、ゲッター線が変異すればそういう現象も起こり得る事が証明されている。幽霊は最早研究所内ではありふれた噂の一つだった。

「ゲッターの亡霊な。死んだパイロットを見たなんてざらさ。一番性質が悪いのはタツヒトさんを見たって奴だよ」

タツヒトはゲッターのために殉じた最後の犠牲だ。それを無下にするなどあつてはならないのだが目撃例はあつた。

「リヨウマさんで止まったからよかったものの、おかしな事の連続ですからね。イーグル号の強制安全装置とか、諸々……」

「幽霊くらい信じててもバチは当たらなさそうだがな」

ハンカチを取り出して額を拭っていると廊下の奥からぬつと現れてきた人影があつた。その姿に部下が声を詰まらせたが研究員はすぐに誰だか判別した。

「ムサシさんに、ハヤトさんじゃないですか」

ムサシとハヤトが並んで歩いているのは珍しい。研究員は話の種にしようと考えた。

「どうしたんです？ ゲッターのシミュレーションでも？」

「ゲッター……」

ムサシは何やら虚ろな瞳で自分達を眺めている。その視線を払いのけて研究員はハヤトへと声をかけた。

「ハヤトさんは、博士と一緒にじゃなかったんで？」

「ゲッターは……」

次の瞬間、ハヤトが手を払った。その一動作で後ろの部下から悲鳴が発せられた。部下は腹部を引き裂かれその場に膝をつく。臓腑が漏れ出しており多量に出血していた。

「何を——」

理解の追いつかない頭へと追い討ちをかけるようにハヤトの手が伸縮した。刃の鋭さを帯びた手が部下の頭部を輪切りにする。その

時になって研究員は目の前のハヤトとムサシが尋常ではない事を悟った。

悲鳴を上げる前にムサシが両腕を振るい、腕を伸ばして網のように研究員を絡め取る。逃げようとした足が空を掻いた。

「お前の話にあった、プロトゲッターはどこだ？」

ハヤトの声に研究員は最早死体と化した部下を見やる。当然、死者は何も答えない。

「お前に聞いている！」

ハヤトの眼球が急に青白くなり研究員を映し出す鏡面になった。

「れ、レプリカント……」

「その名で呼ぶな！」

ムサシの放った攻撃で研究員はしこたまその身体を床に打ちつける。それだけで意識が飛びそうだった。

「おい、乱暴にするな。こいつから聞き出す」

ハヤトが歩み寄りその指先を舐めた。すると爪が割れて内部からネジ状の針が伸びた。

「いや、正確には違うな。こいつの脳に聞く」

直後、ハヤトが針を自分に向けて打ち下ろした。

第五話 「咎人の声 7」

発光現象が巻き起こったのは計測していた最中であった。ハヤトは計測器から目線を外し改めて眼前で巻き起こっているゲッター線の放出を確認する。

「この現象は……」

ハヤトの言葉尻を裂いたのは、「現れたか」というサオトメの声だった。サオトメは結晶体のサンプルで共鳴現象を突き詰めようとしていた。

「博士。何が来るといふんだ？」

「この発光状態ならば、恐らくはネフィリム……」

その言葉にすぐさまハヤトは駆け出そうとする。だが背中へと、「待て！」と声を放ったのは他でもないサオトメだった。

「ゲッターを出撃させねばならんのだろうか？」

当然の帰結にサオトメはそれでも待てと言った。

「この発光は、おかしい」

サオトメの言葉にハヤトは改めて発光現象を眺める。点滅しており光はごく僅かであった。

「これがどうした？」

「ネフィリムほどではないのかもしれない」

「どういう意味だ？」

はかりかねているとサオトメは命令を発する。

「分からんがリヨウマとムサシに伝令を。すぐさまゲッターの出撃準備にかかる。ハヤト、お前はここに残れ」

ミチルが了承すると研究所内に警鐘が木霊する。

「言っている事が矛盾しているぞ、博士。オレは残れ、だ」と

「そうだ。もう一つの可能性を考慮する」

サオトメは何を考えているのか。この時ばかりはハヤトにも分かりかねた。

「ゲッターが出なければ、やられるぞ」

「ただのオベリスク型ならばリヨウマとムサシだけでも充分よ。問題

なのはそれ以外の事だ」

「以外……。ネフィリム以外の脅威と言えばヨロイのゲッターぐらいだ」

「忘れてるな、ハヤトよ。ネフィリムを操っている根源を」

その言葉に、まさかとハヤトは総毛立つ。

「奴らが、直接来たど？」

枕元の端末が鳴り響きリヨウマにスクランブルを報せた。飛び起きたリヨウマはパイロットスーツを着込んで部屋を出る。左手に巻いた端末からミチルの声が発せられた。

『緊急指令です』

「ネフィリムか」

『いいえ。博士は、もっと別の脅威だと判定しています』

「ヨロイの野郎か！」

それならば、といきり立った自分を宥めるようにミチルは声にする。

『それならば、まだマシンなのですが……』

煮え切らない声にリヨウマは聞き返す時間も惜しい。すぐさまゲットマシンへと直通するパイプへと走り込もうとしたがそれを阻んだ影があつた。立ち止まってリヨウマは目にする。

顔を伏せたままの相手はリヨウマと同じパイロットスーツに身を包んでいる。顔は翳になっけてこの距離からでは見えない。

「何者だ？」

リヨウマの声に相手が顔を上げる。
思わず息を呑んだ。

相手の顔はのっぺらぼうであった。顔のパーツがない、という意味ではなく顔面そのものが透明で内部機構が透けている。透けた表皮の内側に巨大な眼球があった。リヨウマを見据えるその眼差しには観察するような慎重さがある。

「てめえ……何だっつんだ。一つ目小僧か？ 言っておくがゲッターに関わった手前、妖怪変化程度じゃ驚かねえぞ」

リヨウマは構えを取る。すると相手の姿が掻き消えた。瞬間移動と見紛うほどの移動速度で相手は手刀をリヨウマの首筋へと向けてくる。咄嗟に飛び退りリヨウマはその一撃を回避した。手刀、に見える相手の腕はまさしく刀の形状へと変異している。リヨウマはその現象を一度目にした事があった。

「レプリカント……」

「ナガレ・リヨウマだな？」

声音は驚くほどに澄んでいる。口も鼻もないのにどこから声を発生させているのだろう。

「おうよ。てめえ、ゲッター相手じゃ勝てないからって生身のおれを殺ろうってのか？」

一つ目のレプリカントはリヨウマを見据えた後、「なるほど」と呟く。

「お前のそれ、覚えたぞ」

その言葉が消える前に相手が踏み込む。リヨウマは上段の蹴りを放った。飛びかかってくる相手がちょうどぶち当たる。

「取った！」

しかしその声に冷水を浴びせるようにまたしても同じような声が発せられる。

「それも、覚えた」

今度は相手の行動に翻弄される番だった。突然に動きのベクトルが変わる。リヨウマの背後へと音もなく回ったかと思うと鋭い蹴りを放ってきた。避けた、と自分では思っていたが相手の踏み込みは先

ほどまでとは段違いだ。

素早く、その上こちらの回避する歩幅を熟知しているかのような動きだった。リヨウマは腹腔に蹴りを受けて吹っ飛ぶ。幸いにして受け身を取って持ち直す但其の顔面へとさらに拳が放たれた。リヨウマは咄嗟に切り返すように拳を放つ。

クロスカウンターが自分と相手を打ち据えた。

「何だっつてんだ……」

「それも、覚えた」

不気味に響く相手の声にリヨウマは聞き覚えがあつた。誰か、という具体名ではない。もつと身近で、いつも聞いている声である。

「その声……。そうだ、それおれの」

信じられない心地でリヨウマは口にする。

「おれそのものの、声だ」

最初は機械音声のようであつたレプリカントの声が自分の声と同質になっている。その事に戦慄する前にレプリカントは不気味に言い放つ。

「その恐怖も、覚えた」

リヨウマは確信する。このレプリカントは戦いながら記憶しているのだ。さながらレコードのように、自分の一挙一動を記録している。透明であつた相手の顔が徐々に鮮明になってきた。リヨウマはこれが夢か何かではないのか、と感じ始めていた。

なにせ、相手は自分の顔を模倣したのだ。粘土細工のように変形した相手の顔がまさしく「ナガレ・リヨウマ」の顔になる。

「何なんだ、てめえ！」

「何なんだ、てめえ」

抑揚がないがリヨウマの声そのもので、自分の顔と同じレプリカントが呟く。リヨウマはその嫌悪感に駆け出していた。相手へと回し蹴りを放とうとするがそれを予期したように腕で受け止められる。

「もう覚えている」

その言葉が消える前に放たれたカウンター攻撃でリヨウマは距離を開ける事となつた。正確にはリヨウマが吹き飛ばされる形で、であ

る。壁にしこたま身体を打ちつけ、リヨウマは呻いた。

「てめえ……」

「それも、覚えている」

跳躍した相手がとどめの飛び蹴りを放とうとする。リヨウマは咄嗟に避けようとしたが脳裏に浮かんだのは全く別の事柄であった。

激突の瞬間が訪れるはずであったが、リヨウマはその蹴りを甘んじて受け止めていた。腹部に鋭角的な痛みが走る。どうやら相手は爪先を刃に変異させていたらしい。めり込んだ痛みにも奥歯を噛み締めていなす。

「何だ、と……」

「てめえはおれの行動を予見している。今までので分かった。ならよ、絶対に予見出来ない動きをすればどうだよ？ おれは避けられない。これは想定外だろ？」

自分の顔を模倣していた相手の表皮が震える。リヨウマはその顔面へと渾身の一撃を叩き込んだ。模倣していた顔が崩れぐにやりとねじれる。

「腹の痛みと引き換え、つてのは割に合わん気がするが、真似されるのよりかはずつといいぜ」

リヨウマの声によくやく分け入る事が出来るようになったのか、

『このレプリカント』とミチルが声にする。

「おう。やってやったが」

『いえ、この一体だけじゃありません』

その声に反応する前にレプリカントは四足で立ち上がってリヨウマを威嚇する。

「死ぬよりも恐ろしい後悔を味わう事になる」

そう口にするや否や、相手は液状に溶け出した。リヨウマが狼狽しているミチルが声を張り上げる。

『この下は！ ゲットマシンの格納庫になっています！』

まさか、とリヨウマは総毛立った。

「最初っからおれと戦ったのは時間稼ぎ……」

だとすれば相手の目的はゲッターそのもの。リヨウマは格納庫へ

と駆け出していった。傷を心配するミチルに、「こんなもんは唾つけと
きや治る！」と言い放つ。

「今は、ゲッターだ！」

合流地点にいるのは自分だけだった。先ほどまで「ナガレ・リヨウ
マ」の模倣していたレプリカントは戸惑う。どうやら自分が一番に目
的を達成しそうである。その場合、取るべき行動は決まっていた。

「どこ見てやがる！ 偽人類野郎！」

罵声に視線を振り向けるとイーグル号のコックピットハッチから
飛び出した「ナガレ・リヨウマ」が銃口を向けていた。

「動けば撃つ」

その牽制にもレプリカントは動じない。状況を客観的に判断する。
「ここに至ったのはわたしだけのようだ。ならば、こうしよう」

直後に自分を三分割した。迷いはなかった。分割された箇所から
すぐさま再生されていく。イーグル号の上のリヨウマが戸惑いを浮
かべた。

「自分で自分を斬りやがった……」

違うな、とレプリカントは静かに嗤う。液状化したレプリカントは
さらに奥へと浸っていた。

『リヨウマさん！ 敵の目的が分かりました！ 敵はこのゲッターを
使おうというではありません！』

このゲッターではない？ リョウマは弾けたミチルの声に疑問を浮かべる。

「このゲッターじゃないって、じゃあどのゲッターだって言うんだ？ ゲッター線兵器はこいつしかないんだろ？」

『いえ、正しくは……』

濁したミチルの語尾を引き裂くように研究所が激震する。リョウマは思わずイーグル号の上でたたらを踏んだ。

「このままじゃまずいのは違いねえ。ゲッターを出すぞ！」

コックピットに収まりリョウマはジャガー号、ベアー号を自動操縦に切り替える。ミチルの補助もありほとんど数秒で果たされた。

『言っておきますが、内部からの襲撃に研究所は脆い……。それにも、連中の目的がアレならば……』

「アレアレって濁されていると気分が悪いんだよ。ゲッターはとりあえず渡すわけにはいかないだろうが。イーグル号、発進！」

イーグル号が推進剤を焚いて出撃する。それに続いてジャガー号、ベアー号も飛び出した。リョウマは改めてサオトメ研究所を視界に入れる。表立って襲撃があったようには見えない。

「レプリカント野郎だけで来ているってのか？ ネフィリムも連れずに」

『恐らくその必要はないのでしよう』

沈痛な声音のミチルに問い質す前にリョウマはゲッターチェンジを果たすべきだと判断した。

「ゲッター1だ。メカニック！ もう直っているな？」

『リョウマさん？ 出撃したんですか？』

寝ぼけ面を叩き起こされた形のメカニックの声にリョウマは言い返す。

「レプリカントに奪われるわけにはいかないだろうが」

『ですが、ハヤトさんとムサシさんは連絡が取れずじまいです。このままでは……』

分断が目的か。リョウマはレプリカントの目的を察知する。

「ゲッターに三人乗せない気か」

その直後、研究所から緑色の光の帯が持ち上がった。リョウマは瞠目する。光の帯が研究所を縦に貫いている。地下深くから巻き起こった光の瀑布にリョウマはうろたえた。

「何だ？ 何が起こった？」

通信先は砂嵐が巻き起こっている。リョウマは改めてミチルに問いかける。

「ミチル、もう守秘義務だとか言っている場合じゃねえぞ。ゲッター以外にゲッター線兵器があるんだな？」

ミチルは、『こうなってしまう』と声にする。

『恐らくレプリカントの目的はもう一つのゲッター。地獄の番人を呼び起こす事……』

「地獄の番人だと？」

その声に呼応するように光の帯が二つに割れて翼を形成する。イーグル号から望める景色一面がゲッター線の色に染まった。

「ゲッター線兵器が、もう一つ……」

三つの機影がアラートの網を刺激する。リョウマは咄嗟にイーグル号を回避運動に移らせた。先ほどまでイーグル号のいた空間を引き裂いたのは何と同じ赤い機体だった。

「イーグル号……」

簡素なものだがそれでもイーグル号と変わらないデザインの三角形の機体が先導している。それに続くのは機首の細いジャガー号と思しき白い機体と寸胴のベアー号に似た機体である。どれも黒ずん

ではいるが、基本色はゲットマシンのそれであった。

「どうなってやがる……。ゲッターは一機じゃ」

『地獄の番人が解き放たれたようですね……。あれこそがゲッターの始祖』

ミチルの声に三機が合体軌道に移る。赤い機体が制動用の推進剤をかけて白い機体と接合、その後黄色い機体が脚部を展開し合体する、という流れまでまるで同じだ。リョウマは自分達のゲッターの合体を傍から見せられている気分だった。合体したイーグル号の機首が弾き上がって一対の角を有する亀甲型の顔面が出現する。緑色のエネルギーパーティションが煌いた。簡素な姿だがそれは間違いのない。

「ゲッター……、ゲッター」

ゲッターにしか見えない機体が背面よりマントを展開する。マントがはためき揚力を手にした相手の機体は濁った黄色い眼窩を向けてきた。

『呪われた機体、プロトゲッター』

ミチルの声にプロトゲッターと呼ばれた機体が全身に滾るゲッター線を輝かせて咆哮する。その鳴き声は鬼のそれであった。

第五話 「咎人の声 8」

ムサシは真っ先にその気配に気付いていた。教会に入ってきた相手の足音の判別くらいはつく。

「誰だ？ 俺は、この研究所の人間の足音は全て記憶している。侵入者だな」

すぐさま判じたムサシは振り返らずに声だけ向ける。

「語らぬか？」

飛び掛って来るプレッシャーの圧にムサシは拳で応じた。六分の一G殺法が弾ける。

「三の陣、月面割り！」

ムサシの放った手刀が相手の頭部を断ち割った。その段階でムサシは驚愕に顔を塗り固める。

「俺、か……？」

向かってきた相手の顔も凶体もまさしく自分そのものであった。だがムサシはうろたえない。相手が敵であるというのはムサシの状況判断の神経が働いた。

「一の陣、大雪山、おろし！」

即座に攻撃に転じられたのはムサシが自分以外を信じていないためである。現れた敵に狼狽する時間よりも攻撃に割くほうが適切だと感じたのだ。

ムサシの放った投げによって頭頂部を割られたままの相手が不格好に教会を転がっていく。改めて顔を見やるとやはり自分のものであった。だが最早絶命しているらしい。

「……分からねえ。何で俺の顔なんだ？」

その時、懐に忍ばせておいた携行端末が鳴り響いた。ムサシは手に取って悪戦苦闘しながらようやく通話を繋ぐ。

「もしもし？」

『呑気だな、ムサシ。そちらにレプリカントが向かったと思うが』

ハヤトの声である。ムサシは転がった遺体を蹴った。

「これか？」

『どうやらお前はオレ達の思っている以上に愚鈍らしい。もう殺したな?』

「悪かったな。殺してまずかったか?」

『いや、それでいい。相手は溶けているか?』

ムサシは絶命したままの相手を観察する。

「溶けていないが」

『そうか。それはいいサンプルになる。ムサシ、お前は先に出払ったリョウマと合流しろ。このままでは』

その言葉が途切れたのは轟音によってであった。通信障害かと思われるほどの破碎音にムサシは顔をしかめる。

「おい! 何があった?」

それ以降、通信はなかった。だがムサシはハヤトの言葉通りの行動に出る事にした。

「ゲッターが、リョウマが出ているのか」

通信をするような余裕ではないがムサシのサポートをせねばただ殺されるだけだろう。

その考えからハヤトは通信を繋いだが既に一線交えた相手との戦闘で息が上がっていた。それを隠すのに精一杯で必要な事を伝えられたかどうかはわからない。ハヤトは視線を振り向ける。

「さて、お前だがレプリカント」

視線の先にはこの隔壁内部に入ってきた自分の似姿のレプリカントがいる。しかし既に心臓を撃ち抜かれており辛うじて生きている

状態であった。

「それは……」

「レプリカント処理の技術も上がっておるのでね」

歩み出たサオトメが補足する。ハヤトは先刻このレプリカントを撃ち抜いた拳銃を掲げた。

「レプリカントの生体反応を察知して自動でホーミングする小型ミ사일。それを組み込んだ銃とは恐れ入ったぜ」

「研究所の技術だ」とサオトメは結ぶ。レプリカント程度ならば遅れを取る事もないだろう。

「悪いが、レプリカント。オレの顔真似までして入ってきた苦労は察するが無駄足だったようだな」

もう一度、今度は頭蓋を割るために銃口を押し付けた。すると自分の姿を取ったレプリカントは肩を揺らして嗤い始めた。

「何が可笑しい?」

「この状況で、我々を出し抜いた、と思っっているだろうか?」

自分の顔のレプリカントは口元に笑みを浮かべてハヤトを見つめる。

「それこそが、驕りだと言っている」

その声の意味を判ずる前にサオトメが叫んだ。

「地下の階層のロックが次々に解除されているだど?」

システム音声でミチルが声にする。

『間違いありません! 最終隔壁までリョウマさんの姿をしたレプリカントが、浸透して……』

ハヤトはレプリカントへと屈み込んで尋ねた。

「まさか、囷か?」

「今頃気付いたのか」

迷いなく引き金を引きハヤトはレプリカントを処理する。脳しようを撒き散らしたレプリカントは間もなく溶け出した。

「博士、こいつらの真の目的は」

「プロトゲッターの奪取。リョウマを模したレプリカントの侵入を許すために他の二体が犠牲になったようだな」

理解の早いサオトメはそれ以上に危機感に気付いているはずだ。

「だとすればこの場所にいるのも……」

地獄の釜が開けばゲッター線に自分達は晒される事になる。ハヤトは駆け出していた。

「道連れは御免だ」

隔壁が閉まりサオトメが後に続いた直後、腹腔に響き渡ったのは衝撃波であった。隔壁が閉まる間際確かに目にした。あれはゲッター線の塊だ。それがメインシャフトを突き抜けて放出したのである。ハヤトは通信が全て駄目になっていいる事に気づく。

「これでは、リヨウマと連絡が取れない」

「リヨウマは出ているのだろう。ムサシも、ああ伝えれば出ているに違いない」

存外に事を俯瞰しているサオトメの冷静さにハヤトは胡乱な目を向ける。このプロトゲッター奪取作戦程度ならば既に想定済みだというように。

「ハヤト。ゲッターに向かえ」

「簡単に言ってくれる」

そう言い残してハヤトは部屋を飛び出した。その直前にサオトメが呟いた言葉が僅かに耳朶を打った。

「……だが、これもまた必要な戦いなのだ」

第五話 「咎人の声 9」

プロトゲッターに対抗するためにはゲッター1に合体するしかない。リヨウマはすぐさま合体軌道に入る。イーグル号のウイングがジャガー号に接合して畳み込まれ、ベアー号が脚部を展開する。

「チェンジ！ ゲッター1！」

ゲッター1へと変形合体を遂げたリヨウマは再び敵を見据えた。プロトゲッター。黒ずんでいるがゲッターとは遜色ない形状を取っている。リヨウマはミチルに尋ねた。

「あれ、レプリカントが一人で動かしているのか？」

『分かりません。ただレプリカントは多量のゲッター線を浴びているはず。普通ならば致死量ですよ』

それだけのゲッター線に晒されて何故生きているのか。そのほうが不思議であったが突き詰める間もなくプロトゲッターが肉迫する。ゲッター1が上を取ってウイングに手を伸ばした。

皮膜が仕舞い込まれゲッターEトマホークを形成する。発振したゲッター線の刃を振るい上げるとプロトゲッターは肩の部分から何かを取り出した。Eトマホークのエネルギー刃を受け止めたのは実体のある斧だ。二本の斧でプロトゲッターはEトマホークの刃を弾いた。

「トマホークだと？」

短いトマホークに違いない。片方を振るい上げてプロトゲッターが攻撃を仕掛けようとする。ゲッター1を咄嗟に飛び退らせたがリヨウマの鼓膜を震わせたのはいやに冷静な声だった。

『その動きはもう覚えている』

ハツとしたその時にはプロトゲッターが背後に回っていた。蹴りつけられゲッター1が弾け飛ぶ。Eトマホークを反射的に振るうが既にそこにはプロトゲッターの姿はない。どこへ、と首を巡らせると接近警報が轟いた。

「接近警報？」

『リヨウマさん、上です！』

ミチルの叫び声にリヨウマは瞬間的にゲッター1を下がらせる。先ほどまでゲッター1の頭部があつた空間を射抜いたのは一陣の風であつた。白い機体にリヨウマは瞠目する。

「ゲッター2だつて？」

ゲッター2にしか見えない相手はそのまま地表を抉り取る。左手にはドリルがあつた。実体のあるドリルの回転にリヨウマは呼吸を荒くする。僅かに巻き起こつた旋風がゲッター1の機体表面を叩いたらしい。戦闘継続に問題はないがそれでも髪の毛一本の差で攻撃を仕掛けられたのは怖気が走つた。

「おい、自動操縦にしちゃ、キレがよ過ぎねえか？」

ゲッター2になつたという事は分離合体できたと言う事。だが自動操縦の時に発生する誤差はこの程度で埋められるものではないはず。

『ナガレ・リヨウマ。我々は三人だ。比してお前は一人』

モニターに映つた人影にリヨウマは戦慄した。コックピットに一人ずつ、自分の姿のレプリカントが収まっているのである。そこで理解する。相手は自分三人分に相当する戦力だと。

「……何てこつた。レプリカントはおれの戦闘技能を覚えさせた奴を三人でゲッターを……」

『こつちは一人……。分が悪いのに違いありませんね』

ミチルの声にリヨウマは萎えかけた神経を叩き起こす。

「だが！ 年季つてもんがあらあ！」

ゲッター1がEトマホークを手にプロトゲッターへと飛びかかる。即座に分離したプロトゲッターに翻弄される形となつた。空中で合体を果たしたのはゲッター3の形状である。タンク形態の姿が大写しになつたかと思うと伸縮する両腕がゲッター1を締め付けた。

「ゲッター3のパワーか……」

悔つていた。アームレイカーを引いても押しでもまるでゲッター1は反応しない。このままでは押し潰される。

『我らはゲッターに選ばれた存在。プロトゲッターのゲッター線は心地よいほどだ』

通信網を震わせる声にリヨウマは歯噛みする。相手のほうがゲッターを操るのが上だというのが信じられない。

「てめえら……ゲッター線が弱点じゃねえのか？」

『ゲッター線？ それは我らに恩恵をもたらす事はあれど敵対する事はあり得ない』

どういう事だ？ 今まで相手はゲッター線兵器であるゲッターを恐れていたのではないのか。ネフィリムを倒せるのはゲッターだけだ。だということにこの付き纏う違和感は何だ。

「どういう、こった……」

スパークが散り、装甲版が持たない事を告げるアラートと赤色光に塗り固められる。ゲッター1では敵わないのは自明の理であったが他の形態では余計だろう。

『あの世で真実を知るんだな』

レプリカントの声にゲッター1が限界を迎えるかに思われた瞬間、声が弾けた。

『リヨウマー！』

声と共に出撃してきたのはベータである。ベータ改八式がミサイルを撃ち放って接近してきた。だがどこかおっかなびつくりの機動で安定していない。ミサイルは幸いにしてプロトゲッターをホーミングしたがそうでなければ自分がやられていた。照準もぶれているベータを操っている主をリヨウマは察知する。

「ムサシか？」

『ごちとら、危険運転だ！』

ベータがプロトゲッターへと猪突する。リヨウマはその瞬間、相手がオープンゲットしたのを感じて手を伸ばした。爆発の瞬間にムサシは脱出しており、生身の身体が宙を舞う。ゲッター1の手がその身体を受け止めた。

「無茶しやがって」

『無茶もしなければ敵わないのだろう。リヨウマ、敵もゲッターか？』

「ああ、みたいだな」

『ヨロイとの、関連は？』

ムサシの恨みの相手はヨロイのゲッターだ。リヨウマは、「分からねえ」と答える。

「だが、奴はおれ達の敵だ」

『それが分かれば充分だ』

ムサシのためにコックピットハッチを開けてやる。ベアー号のコックピットへとムサシが収まった。

先ほどまでと違う、というのが明らかに感じられる。プロトゲッターが腹部にゲッター線を充填した。シャッターが開き、照射装置よりピンク色のゲッタービームが放たれる。

樹海を焼いたゲッタービームの光条はしかしゲッターを捉えなかった。ゲッター1は明らかに回避行動が遅れていたがその速度でゲッタービームを凌駕していた。瞬時に飛び上がったゲッター1にレプリカント連中が口惜しそうにする。

『当たらなかったか。運のいい奴め』

「運？ 違うな」

リヨウマには確信があった。ゲッターがまるで違う。活き活きとしている。ムサシがベアー号に乗っただけなのにこの違いは何だ？

血が滾り、ゲッター線の力の発露に魂が揺さぶられる。

「行くぜ、ムサシ！」

『応！ チェンジ、ゲッター！』

再び放たれたゲッタービームを避けた三機のゲットマシンが上空で合体を遂げる。ベアー号が変形し頭部を形成する。イーグル号がそれに接合し胴体となり、最後にジャガー号がキャタピラを有する下半身となる。

『ゲッター3！』

当然の如くゲッター3は落下するがその際、プロトゲッターを巻き込んだ。網のように張り巡らされた両腕が瞬時にプロトゲッターの装甲を圧迫する。

「やっきの」

『お返しだ！ 大雪山おろし！』

暴風が巻き起こりプロトゲッターをなぶる。投げ出されたプロト

ゲッターに収まったレプリカントが呻いた。

『二人揃った程度では、プロトゲッターに勝てんわ!』

ゲッタービームが照射される。ムサシは背中を向けたまま命じる。
『オーブン、ゲット!』

分離した三機のゲットマシンが再び合体軌道に移ろうとする。それを制するようにプロトゲッターが駆け抜けた。

『させると思っっているのか?』

「しつげえな」

すると通信が開き、声が発せられる。

『……リヨウマ。聞こえているか? ゲッター』

「ハヤト? どこに」

通信位置を即座に特定する。研究所の屋上でハヤトが佇んでいる。

『来い!』

その声にリヨウマはフツと口元を緩める。

「おい、レプリカントさんよ。そっちは確かにおれが三人だ。割と無敵かもしれねえ」

『知れた事を!』

プロトゲッターがイーグル号に追いつこうとする。「でもよ」とリヨウマは呟いてアームレイカーを引いていた。

「こつちにはそつちよりも、線の切れた馬鹿が三人揃っているんでな!」

ジャガー号から伸びたアームがハヤトを引っ掴む。もう次の瞬間にはハヤトはコックピットに収まっていた。

『無茶をする』

「もうムサシに言われてんよ。行くぜ!」

イーグル号の両翼が可変し脚部へと変化する。ベアー号と合体を果たした二機がジャガー号を機軸として身を翻した。瞬間、プロトゲッターの手は何もない宙を掻く。

『どいへ……!』

「こつちだよ、阿呆が」

リヨウマの声と共に突入してきたゲッター2のアームがプロト

ゲッターの顔面を打ち据える。ゲッター2の動きをプロトゲッターは捉える事が出来ない。

『なんて速さ……』

『どうやら素人さんに、教え込まなくっちゃいけないようだな。このゲッターの性能つて奴を！』

ハヤトの声が弾け、ツインEドリルを展開した両腕からゲッター線の竜巻が放出される。プロトゲッターは風圧に煽られる形となって上空へと一気に巻き上げられた。

『この、力……』

『お前ら、ゲッターを使いこなせていないな。初歩の初歩だ。ゲッターは三人のパイロットで出来る。いくらリヨウマを三人分頭数揃えたところで意味のない事よ』

プロトゲッターが風圧に耐えかねて分離する。今度はゲッター3であったが、それよりも早くこちらもオープンゲットする。

『それよりも無意味な事は——』

プロトゲッターが変形合体を果たす前にプロトベアー号を掴んだ影があった。既にゲッター3へとチェンジを遂げたゲッターの両腕が伸縮して掴み上げている。

『悪いな。おれ達は目を瞑ってても合体出来るんだよ』

『そして技量不足だ。三の陣、旋風！ 針鼠！』

ミサイルを一斉掃射したゲッター3から逃れようとプロトゲッターがおっとり刀で変形する。

『ち、チェンジだ！ プロトゲッター1なら負けない！』

明らかにうろたえた様子のレプリカントにリヨウマはフツと口元に笑みを浮かべた。

『ゲッター1なら負けねえ、だど？』

こちらもオープンゲットして即座に合体軌道に入る。

『それはこっちも同じだ！ チェンジ、ゲッター1！』

プロトゲッターと並行する形でゲッター1へとチェンジを果たす。相手はまだイーグル号が接合していない。だがリヨウマはあえて待った。遅れて合体したプロトゲッターから通信が繋がる。

『何故、今攻撃しなかった？』

「弱い奴に教え込むためさ。正面切って言わなきゃ伝わらないだろう？」

『嘗めた真似を！ ゲッタービーム！』

ゲッター線を充填したプロトゲッターがゲッタービームを放つ。それに応じてゲッターもゲッタービームを放った。レプリカントが哄笑を上げる。

『プロトゲッターはゲッター線を吸い続けた魔物だぞ！ こちらのほうか、出力は上！』

しかしその言葉に対してゲッタービーム同士の間隙はプロトゲッターが押される形となった。レプリカントは困惑する。

『な、何故、敵わない？』

『決まってるア！ そつちとは！』

ビームを回避したプロトゲッターへと変形合体を果たしたゲッター2が突進する。Eドリルの旋風にプロトゲッターが成す術もなく煽られた。

『技量と！』

即座に分離し変形したゲッター3が両腕を伸ばしてプロトゲッターを投げ飛ばす。

『体力と！』

宙へと舞い上がったプロトゲッターを待っていたのは跳躍したゲッター1だった。振るい上げられたEトマホークが伸び上がる。

『実力が違うってなア！』

Eトマホークが打ち下ろされ、プロトゲッターは両断されたかに思われた。だがプロトゲッターは叩きのめされたものの両断は免れた形となった。最後のEトマホークが峰打ちであったらからだ。

『壊さないでください。これでいいんだろ、ミチル』

『はい。……しかし今回恐るべき結果でしたね。プロトゲッターにレプリカントが乗るなんて』

「教えてくれていたらもうちょっとマシな対応が出来たかもな」

恨み言を一つだけ呟く。ミチルは、『言えなかったんです……』と口

にした。

『博士の、権限で』

「サオトメのジジイか。あれはどこまで知ってやがったんだ？」

その疑問にミチルは答えなかった。代わりのように地平線から朝陽が昇ってくる。ゲッター1の赤い装甲が照らし出された。

「プロトゲッターが奪われたのは想定外ではあったが、こちらのゲッターが最早その力を超えている。それが分かっただけでも御の字だ」
サオトメは再び地獄の釜の底に収まったプロトゲッターを仰いでいた。内部にいたレプリカントは全員、Eトマホークを打ち下ろした時には圧死していたのだという。

「まだ貴様にはやってもらう事がある。地獄の番人の役が取れたと思
うな」

プロトゲッターは黒ずんだ顔を項垂れてサオトメの言葉に是を返しているようだった。

「しかしレプリカント。ここまでリョウマに吹き込んだとなると隠し
立てするのは限界かもしれないな」

サオトメの声にミチルが応ずる。

『リョウマさんも、ハヤトも既に気付き始めているようです。これが、
ただの生存競争ではない事に』

「ヨロイの出現が拍車をかけたか。だが、まあいい。いずれ知る事だ。
この世が既に地獄である事を」

サオトメは白衣を翻し、その場から立ち去った。

第六話 「異界奇譚 1」

赤い光条が走り、樹海を瞬く間に火の色に染める。

ゲッター1がその合間から縫うように飛行して出現した。赤い装甲にてらてらと炎が照り返している。

「野郎！ ネフィリムにこれ以上、好きにさせるか！」

リヨウマの声にゲッター1が目標へと視線を据えた。目標物は円柱の形状を伴った一つの樹木のような存在である。赤いコアが三つのくびれで分かれており、それぞれのコアを保護するための瞼のような装甲があった。ゲッター1が飛び上がりゲッター線を胸部へと充填する。余剰エネルギーがスパークし転化したゲッター線がピンク色の攻撃色に変じた。

「ゲッター、ビーム！」

放たれたゲッタービームは的確にコアを射抜く。しかし三つあるうちの一つを撃ち抜いてももう二つが健在ならばネフィリムが倒れる事はなかった。それどころか撃ち抜いたはずのコアが泡だつて再生してくる。

『リヨウマ！ 猪突戦闘だけでは今回のネフィリム、倒す事が出来ないぞ』

ハヤトの声にリヨウマは、「分かってんよ！」と言り返す。ミチルからの通信が繋がった。

『ネフィリムの新型、トータム型はコアが三つ並んでいる強敵。やはりコア三つを同時に破砕するか、あるいは再生前に全てのコアを破壊するしかなさそうです』

解析結果がそれならばその方法しかないだろう。リヨウマは、「どうする？」と声にした。

「ゲッター1じゃ厳しいか？」

『だからと言ってゲッター2でも再生前に全部破壊出来るほどの威力の技はないぞ』

『ゲッター3でもあのネフィリム、引っくり返せそうにない』

ムサシの弱音の原因はネフィリムの磐石な姿勢にあった。トータ

ム型は縦長で一見するとバランスが悪そうだが大地に根を張っている事で姿勢制御は完璧である。それどころか大地から少しずつ養分も吸収しているらしい。出現時よりも明らかに挙動が上がっていた。

コアから赤い光線が発射される。攻撃手段は瞼の装甲が開いた時にコアから照射される細いビームのみ。それだけならば恐るるに足らないのだが、樹海が少しずつ炎に飲まれ、このままでは消耗戦を続けるだけだった。

「研究所も危ねえ。ゲッターならば避けられる攻撃だが研究所がいつまでも耐えられる保障はねえぞ」

少しずつ射程を延ばしているネフィリムを倒さなければどちらにしろこちらの破滅だ。リヨウマは決断を迫られていた。

「ゲッターでやるつきやなさそうだが、ゲッターだけじゃ厳しいだろう」

『どうする？ 一回でコアを二つ以上破壊しなければ不利に転がるだけだぞ』

リヨウマはアームレイカーを引いた。ゲッターがEトマホークを顕現させネフィリムに向けて打ち下ろす。ネフィリムの装甲が容易く剥がれ落ちるがすぐに再生した。

「装甲自体は脆い。つけ入る隙は、ありそうだな」

唇を舐めるリヨウマにハヤトが提言する。

『リヨウマ。トマホークが効くのならば、あれを試す価値はありそうだ』

『あれ、つてのは？』

ムサシが寝耳の水の声を出す。リヨウマは何度かシミュレーションで試みた攻撃を今試す時だと判じた。

「やるか。よし、バックアップ頼むぜ！」

もう一方のウイングの皮膜も閉じ、骨張った持ち手を握り締めてゲッターが両腕にトマホークを保持する。

「行くぜ！ Eトマホーク、ブーメラーン！」

直後、トマホークの両端を接合させ、リヨウマは投げ飛ばした。発振したビーム刃が二つ重なる事によって相乗効果を生み出し、コアを

容易く引き裂いた。だがそれだけではネフィルムを活動不能には追い込めない。

『これだけじゃ……』

ミチルの声に、「まだだ！」とリヨウマが声を張り上げた。その瞬間、まさしくブーメランの勢いを借りて戻ってきたEトマホークが後ろからネフィルムのコアを引き裂いた。上部二つのコアが破壊されネフィルムから攻撃の勢いが削がれる。今だ、と三人ともが感じた。「トマホークを回収したらすぐに！」

『分かっている！ オープンゲット！』

ゲッター1が空中を駆け抜けトマホークをウイングに戻すや否や三機が分離した。最後の一つ、下部にあるコアから光線が放たれてゲットマシンを追いすがろうとするがそれよりも素早くジャガー号が機首となってゲッター2が顕現する。ゲッター2は右腕からEドリルを展開した。

『ゲッター、ツインEドリル！ 食らえ！ ゲッター2の速さなら』

ゲッター2が残像すら居残しながら空間を駆け抜ける。当然、最後のコアが悪足掻きのように光線を発射するがゲッター2の速度には遠く及ばない。Eドリルから竜巻が発生しゲッター線の皮膜そのものがゲッター2を保護しているのもあった。そのままゲッター2が最後のコアを射抜く。

甲高い鳴き声が迸りトテム型のネフィルムが内側から赤く輝いた。

「放散爆発が来るぞ！」

リヨウマの警告に、『分かっている』とハヤトが応じようとした。しかし、ゲッター2はいつまで経ってもその場から動こうとしない。ネフィルムを射抜いたまま硬直している。

「おい！ どうした？ ハヤト。ゲッター2を回避させろ！」

『分かっているんだが、何で……』

その言葉の先を示すようにゲッター2を絡め取っている存在が明らかになった。養分を大地から吸っていたのはただ単に頑丈になるためではない。内部より出でたのは植物の根であった。ゲッター2

に纏わりついて操縦系統を阻害する。

「植物の根？　こんなもん、引き裂いちまえよ！」

『やれるならやっっている。どうにもゲッター2の鈍い部分を狙っているらしい。動きが取れない』

言っている間にも放散爆発の赤い光が視界いっぱいに広がるようにしている。リヨウマはアームレイカーを引いた。

「オープンゲットだ！　今はこだわっている場合じゃねえ！」

放散爆発に飲み込まれる。リヨウマの焦燥に全員が応じたようだがそれでも植物の根がオープンゲットを邪魔する。

『駄目だ、リヨウマ。このタイミングでオープンゲットすれば、それこそ放散爆発の衝撃にゲットマシンが耐えられない』

「じゃあどうするってんだよ！　ゲッター2で受け切るってのか？」

『爆発する間にゲッター2で一気に引き裂く。それで行けるはずだ』

ハヤトの言葉にリヨウマは今にも膨れ上がりそうな爆発の光を目にする。

「おい、マジかよ。そんな賭けで」

『ゲッター2！　ドリルトルネードで一気に離脱する！』

ハヤトの声にゲッター2がツイーンEドリルを両腕に展開する。四つの竜巻が拡大し植物の根をようやく切り裂いた。

「これで——」

だがその時には、既に放散爆発の光が広がっていた。リヨウマが振り返った瞬間、その視界は赤い光の渦で埋め尽くされた。

「ゲッター。応答してください、ゲッター2!」

オペレーターの声にサオトメは放散爆発の巻き起こった地点へと目線を向ける。トーテム型ファイリムの迎撃には成功したもののゲッターの行方がようとして知れなかった。

「ゲッター2は？ 爆発を抜けるとか言っていたが」

「分かりません。全シグナル、ロスト。パイロットバイタル、ありません!」

そのようなはずはない。生きているのならばバイタルが確認出来るはずであるし、死んでいたとしてもゲッターですら確認出来ないなど。

「ミチル。ゲッターの位置は?」

『それが、放散爆発の際、時空の歪み、つまりワームホールが形成されたようです。今までのようにゲッター線が放散爆発を最小限の規模に抑えていたのが逆に仇となりました。ゲッターは恐らく放散爆発の向こう側へ行ったのだと推測されます』

「爆発の向こう側って……」

振り返ったオペレーターにサオトメは厳しい声音を向ける。

「続ける。何としてもゲッターを見つけ出すのだ」

はっ、とオペレーター達が忙しなく動く中でサオトメは一つの可能性を思い浮かべていた。

「……まさか、あちら側に行ったのではあるまいな?」

ミチルにしか聞こえない声音で尋ねる。ミチルは、『それこそあり得ません』と応じた。

「だがワームホールが開いていたのなら、あり得ない話でもあるまい。ゲッターを奴らに取られるわけにはいかん」

『ゲッターの性能からして、ワームホールを超える事は可能ですが、そうなると交信手段が……』

濁したミチルへとサオトメは言い放った。

「リョウマ、ハヤト、ムサシ。三匹は行ってしまったか。時空の果て、

第六話 「異界奇譚 2」

あまりにも静かであった。

放散爆発に巻き込まれたにしては衝撃波もまるで感じない。あるいは死とはこれほどまでの安息を与えるのかもしれない。もう自分は死んでいるのだ、と考えるほうがマシであった。だがそれを阻害したのは通信網だ。

『……聞こえているか？ リヨウマ』

その段になってリヨウマは自分がまだゲッターの中にいる事を確認する。アームレイカーを引くと同期したゲッターの一部が動いた。「おい、こりやあどうなっている？」

視界に入ってきたのは常闇である。まさか爆発に巻き込まれて一気に衛星軌道まで上がってしまったのか？ リヨウマの思案を他所に先に起きていたのだろうハヤトは、『計測済みだ』と答えた。

『どうやら惑星の衛星軌道らしい』

『……おい、マジかよ。冗談のつもりで考えていたんだが』

ゲッターの内部はセーフモードに入っておりモニターの類も一種類しか点いていない。リヨウマはセーフモードを解除しようとして、『やめておけ』とハヤトにいさめられた。

「何でだよ？」

『衛星軌道ならばまた帰らなければならない。燃料は温存しておくべきだ』

つまり暗い程度は我慢しろ、という事だ。リヨウマは肩を竦める。

「また大気圏か」

『二度目となるとさすがに参るな。だからと言って月面に助けを請うわけにもいくまい』

月面は全滅したはずだ。リヨウマは外周カメラの一つを月面に向けてみる。するとたちまち怪訝そうな顔になった。

「おい、人工衛星の数、少なくねえか？」

前回のレンジリングビームの照射用の人口衛星だけでも相当数

あつたが今は目視出来る範囲で二機あるかないか。リヨウマの疑念にハヤトは、『もしかしたら』と仮説を唱える。

『ヨロイとの戦闘で何個か壊れてしまったのかもしれない』

それならば納得出来る。リヨウマは現在のゲッターの形態を確認する。

「ゲッター2か。よく持ったな」

『ぎりぎりで放散爆発そのものの衝撃波からは抜け出せたらしい。装甲にもダメージは少ないからな。だが、その衝撃で衛星軌道に投げ出されたのは』

「完全に想定外、って奴だな」

後を引き継ぐと声が漏れ聞こえてきた。

『む……、生きているのか』

ムサシの声にリヨウマは、「やったな」と口にする。

「幸いにも三人とも生きている」

『ああ、ムサシ。聞こえているか？』

『お、おお。生きているのか？』

『全員な、悪運の強い奴らだ』

二人の通信を聞きながらリヨウマは機体制御のバランスを整える。宇宙空間となれば自然と機体の制御方法が異なっているはずだ。そこで異常に気付く。

「うん？ 何だこれ。位置情報がデタラメだな」

島国から脱したにしては自分達の位置がおかしい。見えているはずのプラネットシエル外殻が見えないのだ。

『反対側まで流されたのかもしれない』

『こんな短時間で？』

『どうだかな。オレ達の感覚では短時間だがゲッターはそれなりに損耗を受けていて流された可能性はあり得る』

損耗箇所の確認をハヤトは行っているらしい。リヨウマは、「とりあえず」とゲッター2の外周カメラを整える。すると惑星が大写しになった。青い惑星が浮かび上がっている。

「帰るとするか」

『ゲッター1が好ましい。チェンジするぞ』

「おう」と応じて分離しゲッター1へとチェンジを果たす。リヨウマは自ずと周囲に敵影がないか探していた。

『この宇宙空間、仕掛けようと思えば出来そうだが』

『余計な事を考えるな。一応は戦闘後なんだ』

ハヤトの言葉にリヨウマは肩の力を抜いた。今はとにかく帰還するべきだ。ゲッター1が大気圏突入用の装備を射出する。エアバツクに摩擦熱の赤い光が纏いついた。

「いい気分じゃねえな。股の下がひやつとする」

『そう何度も大気圏突入なんてして堪るか』

ハヤトの声にムサシが続ける。

『……なあ、おかしくないか?』

その疑問にリヨウマは、「何がだよ」と返していた。

『この位置関係じゃ、絶対に見えるはずなんだよ。俺は百年以上この惑星を見ているんだから』

「だから何がだつて言つてんだ」

『プラネットシエルだ。どうして全く見えない?』

「位置関係がずれたんだろ。知るかよ。帰投コースは?」

『無事に機能してくれている。ほら、見えてきたぞ』

島国が確認出来てリヨウマはホッと安堵する。実のところ少しばかりムサシの懸念も分かっていたのだ。無事に帰れるのならばそれに越した事はない。

「いずれにせよ、もう帰れるつてのは——」

そこから先の言葉を遮つたのは接近警報だった。ゲッター1へと襲いかかったのは光線である。赤い光条にリヨウマは咄嗟に回避していた。

『これは……!』

「まさか、ネフィリム? 待ち伏せか?」

拡大されたメインカメラの映像に映り込んだのはしかし、今までのネフィリムの姿ではなかった。

「あれは、ステルス機?」

全翼型の機体が編隊を組んでいる。リヨウマは思わず、「ペータか？」と呟いていた。だがその期待は淡く拭い去られる。全翼型の機体の上面に備え付けられている半球の赤い球は見覚えがあった。

『ネフィリムか……』

苦々しげに放たれたハヤトの声にリヨウマはステルス機でも何でもなく相手がネフィリムである事を確認する。だが、と抗弁を発していた。

「あんなネフィリム、見た事ねえぞ」

『新型の可能性がある。リヨウマ！ また来るぞ！』

ハヤトの警句にリヨウマはアームレイカーを引いていた。ビームが放たれゲッターを明らかに付け狙っている。ステルス機の形状を真似たネフィリムはそのまま上昇を続けた。どうやらこちらの高度に合わせようとしているらしい。

「野郎……。一難去って、って奴かよ」

全翼機の一つが機体を裏返す。すると機体の下腹部に収まっていたものが目に入った。リヨウマは瞠目する。それは明らかに人型の機体であったからだ。

「何だ、あれ……」

うろたえている間にも全翼機が変形し、人型の兵器が顕現する。翼を折り畳み高機動に適した形態へと変わった機体が最後の仕上げとでも言うように頭部を割れさせた。その姿は、まるで――。

『ゲッター……？』

ムサシの声にリヨウマの啞然としていた。相手は形状と色合いこそネフィリムのそれであるが、人型のシルエットはゲッターそのものである。違うのはアイカメラ部分が一つ目である事くらいだ。

「二つ目の、ゲッターだと！」

呻く間にも全翼機が上昇してゲッターを取り囲む。たちまち変形しそれぞれゲッター形態になって攻撃態勢に移る。

「どうなってんだー！」

ゲッター1を咄嗟に下降させた。すると先ほどまでゲッターのいた空間を射抜いたビームがあった。攻撃色そのものはネフィリムの

それであるが構え、そして攻撃方法はゲッター1のそれそのものであった。

「こいつら、前回の続きで真似して来てんのか？」

レプリカントがプロトゲッターを奪取してきた前回の作戦から学んで今度はゲッターそのものを模倣しようというのか。リヨウマの声音にハヤトが応じる。

『分からん。だが、相手は素人じゃないぞ』

それを証拠にすかさず変形したステルス型ゲッターは追撃の速度でゲッター1の腹部へと突っ込んできた。リヨウマは危うく機体を折り曲げられるかと思われるほどのGを腹腔に感じ取る。

「こいつ、道連れに自滅する気かよ！」

リヨウマはすかさずゲッター線を充填しピンク色の攻撃色に転じさせて放つ。

「ゲッター、ビーム！」

ゲッタービームがステルス型ゲッターを分解し塵芥と化す。それを目にした他の機体が僅かにうろたえた様子であった。リヨウマは即座に判断する。

「今だ！ この機を逃さずサオトメ研究所に戻るぞ！ ミチルのバツクアップもなしにこれは辛い！」

ハヤトとムサシの両名もそれには賛同らしい。

『サオトメ研究所、位置関係は真下だ！』

ハヤトの声にリヨウマは視線を据える。だがその瞬間、放たれたのは砲台による攻撃であった。突然の砲撃にゲッター1の右肩が直撃する。

「馬鹿な！ サオトメ研究所が何で！」

『よく見る！ リヨウマ、あれは……』

濁したムサシの声にリヨウマは映像を拡大する。その瞬間、砲撃された理由が分かった。

「サオトメ研究所が、ない……」

代わりに存在していたのはそれそのものがハリネズミのように武装を施された戦艦であった。陸地を這い進む戦艦の砲塔がゲッター

を捉えている。甲板には先ほどのステルス型ゲッターと同じものが数機発進準備しているのが確認出来る。

「おい、どうなってるんだ？ サオトメ研究所はどこに行った？」

うろたえるリヨウマに水を差すように背後から強襲してくる影があった。先ほどのステルス型の編隊の内何機かが追いつがってくる。リヨウマは咄嗟に判断する。

「オーブンゲッター！」

分離したゲットマシンの挙動にステルス型ゲッターは翻弄されているかのように一つ目を忙しく動かしている。イーグル号に収まったリヨウマは考えを巡らせた。

どうしてサオトメ研究所がない？ 位置関係は合っていると、ハヤトが言っていたはずだ。

「おい！ 研究所がねえだろうが！」

『そのはずはない。地軸、重力、加えて位置関係、全てを合致させた結果だぞ』

ハヤトとて叫び出したい気分だったに違いない。全てが合致しているはずの場所に何も無い。それどころか敵対する存在の拠点がある。

「……………どうなってやがる」

『どちらにせよ、ゲットマシンで逃げ切れる速度じゃないぞ、こいつら』

ムサシは必死に操縦している様子だ。一刻も早く振り切る必要に駆られていた。

「ゲッター2だ！ ハヤト！」

『分かっている。チェンジ、ゲッター！』

ジャガー号を先頭にしてベアー号、イーグル号が合体しゲッター2が顕現する。Eドリルを展開させゲッター2はステルス型ゲッターを振り切った。どうやら速度ではこちらが勝っているらしい。

「こいつら……………ネフィリムなのか、ゲッターなのか……………」

その判別がつかない。姿形は前時代的なステルス機。だが擁しているのはゲッターを模した人型。ただしコアがありその意匠はネ

フィルムにも通じるものがある。

『分からねえ。今、解析にかけたがアンノウンとある。所属不明機には違いないが』

濁したハヤトからは焦燥が滲み出ていた。自分達がいるのはどこだ？　ここは帰ってきたのではないのか？

『どうする？　戦うか？』

ムサシは一刻も早く逃げ出したいようだ。無理もない。月面から降り立ってネフィルムとの戦闘、そしてヨロイとの戦闘で敵を見出したかと思えば今度はわけの分からない戦場に駆り出されている。

『戦う事はない。リョウマ。分離変形して成層圏へ出る。一度退却するぞ』

ハヤトの言葉が信じられなかった。リョウマは聞き返す。

「退却？　何でおれ達が！」

『敵のほうが規模も戦力も上だ。そんな事くらい見れば分かるだろう』

ハヤトとて分からない状況に振り回されているのだ。リョウマは歯噛みして頷いた。

「分あったよ。オーブンゲット！」

分離した三機が再びゲッター1となり一気に上昇していく。雲を割り、成層圏に向かうゲッター1を取り残されたようにステルス型のゲッター達が仰いでいた。

第六話 「異界奇譚 3」

衛星軌道に戻ってくるのはめになるとは思っていなかった。

リヨウマは先ほどの戦闘が堪えたのか、言葉少なである。ムサシはどうするべきか分からないのだろう。こちらは何か余計な事を言う状況ではなかった。だがハヤトだけはこの状況の打開策を巡らせていた。ゲッター1は衛星軌道上を漂っている。敵機が追いついてくる様子はない。

「ここまで追ってこないだけなのか。あるいは追ってこれない事情があるのか」

呟いてハヤトは非常用の食料を確認する。三人が一週間はゲッターの中だけでも事足りる食料が備蓄されていた。水も充分ある。

「リヨウマ。聞こえるか」

通信を繋ぐと、『何だよ』という不機嫌そうな声が聞こえてきた。リヨウマは相手を駆逐する事しか考えられない。本能的に敵だと判じた相手には容赦はしない性格だ。だが今回、迷っているのが窺えた。それは相手の姿がゲッターに似ていた事も無関係ではないのだろう。

「一週間は衛星軌道上でも生き永らえられる」

『そいつは結構なこと』

「だが、それを超えればお終いだ。オレ達は出来るだけこの状況を正確に記録せねばならない」

『……何が言いたいんだよ?』

苛立たしげなリヨウマの声にハヤトは通信チャンネルを変える。

「ムサシ、聞こえるな?」

『どうした?』

「ゲッターチェンジだ。ゲッター3になる」

その決定にはさすがに面食らった様子で二人して声を荒らげた。

『てめえ、おかしくなったのか? この状況で鈍いゲッター3なんて』
『鈍い、つてのは遺憾だが、俺も納得出来ん。ゲッター3に宇宙空間でなったところで』

「宇宙空間だからだ。重力の力は働かない。元々海洋戦闘用に造られたゲッター3にしか出来ない芸当がある」

ハヤトの決定の意味が分からないのかムサシが尋ねる。

『何だよ?』

「まずはチェンジだ。敵は来ないだろう」

言葉の真意は分からないものの二人のパイロットはそれぞれ分離させて合体軌道に移った。ベアー号を主軸にイーグル号、ジャガー号の順に合体する。ゲッター3になったもののムサシはハヤトに尋ねていた。

『で? どうするんだ?』

「一番手が長いのがゲッター3だ。近場の衛星に気取られない距離から、腕を伸ばして取りつけ。こっちで通信チャンネルを合わせて相手の情報を得る」

ゲッター3が攻撃目的でチェンジしたのではないのだと悟ると、二人して脱力したようだった。

『んだよ、そんなつまらねえ事にゲッターを使うのか?』

「ゲットマシンでは至近距離まで近づかねばならない。ゲッター1や2では腕が短過ぎる。だがゲッター3ならば触れているのか分からない絶妙な力加減で衛星に触れられるだろう。通信衛星はあれだ」

ハヤトが指示するとムサシはどこか不満げな声を出す。

『俺のゲッター3はこんな役ばかりだ』

それでもゲッター3は指示通り腕を伸長させ、通信衛星へと触れた。その瞬間、様々なチャンネルがアクティブになる。ハヤトはゲットマシンの処理速度を信じてそれぞれの通信をさばいた。

『で? ハヤトよ。相手先の通信の言語がおれ達の共通言語とは限らないのだが』

「翻訳機を使えばいい。似ている言語だったならば変換する」

リョウマは気に食わないのか、けつと毒づいた。

『そうかい、そうかい。ハヤト。てめえは存外に肝が小せえな』

「相手をゲッター線で打ちのめすだけが戦闘ではないという事だ。何個か該当するチャンネルがあった。繋ぐぞ」

接続した瞬間、発せられたのは軍歌であった。ハヤトは目を見開く。リヨウマとムサシも言葉をなくしているようだった。

『おれ達の知っている言語、だが……』

『軍歌だな、こりゃ』

軍歌が流れる時代を計測しようとしたがゲットマシンだけの処理速度では限界が生じた。やはりゲッターだけで情報戦は不利か。

「まだ一日目だ。オレ達は、少しでもこの場所の特性を知っておく必要がある」

ハヤトの結論にリヨウマが、『そんな場合かねえ』と含んだ声を出す。

「どういう意味だ？」

『おれ達は放散爆発に巻き込まれてここに来た。おれ達の惑星に限りなく似ていて地軸も一致している。でも迎えたのはネフィリムとゲッターの相の子だ。これってつまり……』

「言いたい事は分かるが、今言っても始まるまい」

それでリヨウマの言葉を制する。ムサシは、『どういう意味だ？』と合点が行っていないようだ。分からないほうがいい。ハヤトは自分も考えていた仮説を呟く。当然、混乱を避けるために通信は切ってあった。

「こちら側の惑星、つまりオレ達がネフィリムと呼んでいる連中が棲んでいる惑星が別に存在するのなら、この場所こそが……」

眼下に広がる青い惑星はプラネットシエルの施されていない故郷に映ったが、数々の事象がそう容易くない事を証明している。ハヤトは年代測定法を用いる事にした。幸いにもゲッター単体で年代測定が可能である。ただし期間は一週間を要した。

「オレ達がくたばるのが先か、この星の秘密が割れるのが先か」

ハヤトはチューブから水分を補給しつつ諸々の機能を呼び出す。ゲッターが遭難した時のために航海日誌をつける機能があった。

「リヨウマは女々しいと笑うだろうな。だが、この記録がもしかしたら連中のベールを引っぺがす鍵になるかもしれない」

ハヤトは早速キーボードを取り出し、端子を繋げて航海日誌をつけ

始めた。自分達はまさしく異空間に漂着したのだ。ならば少しでも記録を残さねば。

「航海日誌一日目、正確な日付は不明。我々ゲッターチームはとある惑星に漂着した。ネフィリムの放散爆発に巻き込まれた結果と思われる……」

そこから先の文章をハヤトは淀みなく綴った。

第六話 「異界奇譚 4」

二日目はゲッターのコックピット内で二十四時間を計測し、定刻を見つけてハヤトは書き始めた。衛星軌道上からは変化は望めない。やはり一度地上に降りるべきなのだろうか。

『ハヤト。どうにかして地上の様子を観察出来ないもんか?』

「チャンネルを合わせて通信を拾っているが……」

一つの通信チャンネルが声を響かせる。どうやら何かしらの宣言を行っているようだった。

「翻訳するか?」

『やってみるつきやないだろ』

リヨウマの声に翻訳機が作動しその張りのあるバリトンを自分達の分かる言語へと変換する。

『我々は、何十年何百年と待った! 訪れるはずだ、福音の時が! 祝福されし使者が来る時、我らはゲッター線の導きによって——』

そこまで聞いてからリヨウマが口を開く。

『今、こいつゲッター線って言ったか?』

『俺も聞いた。ゲッター線って……』

「判断は早計だ」

二人して思案してもこの二人の考えの行き着く先は見えている。それよりも推理するのは自分の役目であった。

「ゲッター線、福音……。こいつらにとつてゲッターは有害ではない?」

浮かんだ推理に、だとすれば、とハヤトは次の考えに移る。

「この星に棲んでいるのはレプリカントではないのか?」

しかしだとすれば先刻襲ってきたネフィリムが説明のつかない事態になってしまう。ハヤトは、「今分かった事を列挙すると」と書き連ねた。

「相手はゲッターとネフィリムの間のような兵器を使っている。対象がレプリカントかどうかは不明。だが放散爆発の後に何らかの時空の齟齬が起きてこの場所へと放り込まれたのだと思われる。その推

測からしてネフィリムの棲み家であるのは確定であるが、それにしても相手がゲッターを追つても来ないのはおかしい」

一つの事実がもう一つを否定する形になっている。ハヤトは顔を拭つて、「いたちごっこだな」と呟く。

「オレ達が降りてむぎむぎ捕まるよりかはこうして衛星軌道に留まっているのが正解だと思うのだが、相手の出方も分からん。もしかすると相手はゲッターだと思っていないのかもしれない」

『思っていないって、そりやあないだろ。攻撃されたんだし』

「未確認の飛行物体が拠点に向けて真つ直ぐ降りてきたとしよう。それを、お前はどう感じる?」

ハヤトの逆質問にリヨウマは言葉を探していた。本能相手にいちいち質問して回るのも面倒なので答えを言つてやる。

「それはいわばアンノウンだ。迎撃するだろうか? 明確な敵意がないにせよ、こちらの持つ戦力に対応するのが普通だ」

『じゃあてめえは、あれが別にゲッターだからだとか、おれ達だから襲つてきたわけじゃないと?』

「一晩頭を冷やすとそういう考えも浮かんできた。連中はもしかするとゲッターを知らないのかもしれない」

『だが、疑問が残るぞ? 何で当の連中はゲッターみたいな兵器を使う? それもネフィリムと合わせたような』

ムサシの疑問には今の状態では答えようがない。相手は偶然ゲッターに似た兵器を使っているのかもしれないし、ネフィリムのような兵器がこの惑星でのスタンダードの可能性もある。

「こつちで言うところのベータが、先のステルス機なのかもしれない」
『じゃああれはベータだったのか?』

「迎撃用の機体というだけで、ベータそのものではない。ゲッターに似ている兵器も、然るべき進化の手順を踏めばどのような種族でも達する基準点だとすれば」

だとすれば、相手はレプリカントであるとは限らない。ハヤトは改めて惑星を視界に入れた。

『分からねえな。だとすりや、何で追つてこない? アンノウンなん

「だろ？ 攻撃するのが筋だぜ」

「専守防衛の精神ならば、わざわざ仕掛けてくる事はしない。むしろ、待っているのかもしれない」

『待っている？ 何をだ』

ハヤトは統合した情報を集めつつ一つの憶測を口にした。

「それこそ福音を、だろう」

第六話 「異界奇譚」 5

ゲッター3に攻撃してくる勢力は三日目になっても出現しない。

どうやら高高度戦闘に適したものを用意するのに時間がかかっているか、あるいは存在しないと思われる。ゲッター3は伸ばした腕から受信される音声を日々ハヤトのジャガー号へと優先して繋いでいた。リヨウマは聞いているだけで疲れるとの事で既に受信を諦めたようだ。ムサシも頭がこんがらがるというのでこちらからの情報しか与えていない。

コックピットの中でハヤトは息を殺しヘッドフォンから聞こえてくる音声に耳を傾けていた。

「地軸の安定性、及び座標の一致に関してはまだ情報不足だな。だが少しだけ分かった事がある。リヨウマ、聞いているか？」

『……んだよ、今寝てたんだぞ』

「一つだけ、決定的な事がある」

『何だ？ つまらなけりや聞かねえぞ』

「連中、戦争をしているようだ」

ハヤトの声にリヨウマが息を呑んだのが伝わった。そのままハヤトは続ける。

「大陸間戦争だ。どうにもオレ達の最初に降り立った島国は大国の一部であり、拠点でもあったらしい。あの島国にあるサオトメ研究所の位置に存在する戦争のための前線基地に飛び込んだわけだ。未確認機であるオレ達が。そりゃ、おっとり刀で返すのも分からなくはない」

『ちよつと待て！ 大陸間戦争だつて？ じゃあ何でネフィリムをこっちに送ってくるんだよ』

「言つたらう。相手がレプリカントだとは限らないと。もしかしたらレプリカントやオレ達の闘争とは全く別の次元の可能性もある」

『ここまで似ていて違う、つてのも腑に落ちねえな』

相手の科学技術も、ネフィリムに似た兵器の放った攻撃も解析に回

されていたがやはりゲッター内のコンピュータだけでは解析不可能なものが多い。ハヤトはせいぜい情報をたくさん持って帰ってシステムAIに判断してもらうしかあるまい、と考えていた。帰れば、の話であるが。

こちらの指定した時刻では深夜時間、動きがあつた。ハヤトは漏れ聞こえてくる音声に混じった僅かなノイズを聞き逃さない。反政府時代に培った神経がノイズの指向性を直感していた。

——これは暗号化通信だ。

すぐさまハヤトは暗号の解読に移る。どうやら一定周期のノイズはその時間分だけ巻き戻した情報を読み取れ、という事らしい。ハヤトは早速レコーダーに入っていた情報と音声を逆回しした。

「……我が国、発見せり。ゲッター線兵器、未確認……、三十六万光年向こうより、だと?」

途方もない情報にハヤトは額に手をやった。三十六万光年先のゲッター線兵器をわざわざ発見した、というのを暗号化せねばならない。その事実から逆算されし事柄は――。

「この惑星の人々はゲッター線兵器を知っている?」

その前提に立った時、ハヤトは自然と今まで謎であつた部分が拓けたような気がした。ゲッター線による福音。待ち望んでいる人々のメンタリテイ。ネフィリムとゲッターを合わせたような兵器の存在……。

「リョウマ。緊急発進をかける」

『進展でも?』

リヨウマはとつくに諦めているようだったがハヤトは違った。ただ自分達には出来る事があるはずなのだ。

「ゲッター1へとチェンジ。今度はあの戦艦へと特攻をかける」

その言葉にはさしものリヨウマとはいえ驚愕したに違いない。少しの沈黙の後に、『いや、でもよ』とうろたえた声が発せられた。

『あの戦艦に突っ込むなって言ったの、ためえじゃ……』

「連中の持つ情報を衛星軌道だけで受け取るには限界がある。なに、もう四日待った。相手側も準備が整っているはずだ」

『整っているって……、その根拠は？』

「大陸間戦争とゲッター線兵器。それに暗号化された情報にその尖兵たるゲッターに似た存在。恐らく、連中が待っているのは純粹なゲッター線兵器」

何を言っているのか分からないのだろう。リヨウマは、『ワケわかんねえ！』と呻いた。

「だろうな。オレも半信半疑だが」

三機を分離させると先ほどまで眠っていたのかムサシの操るベアー号の挙動が遅れていた。

「ムサシ、ゲッター1にチェンジだ」

『おつ、おう？ どういうこつた？』

「いいから、チェンジしろ」

有無を言わさぬハヤトの声音にリヨウマとムサシが従ってゲッター1へとチェンジを果たす。ゲッター1は四日前と同じように大気圏を突き破って降り立った。当然、相手からの迎撃が来ると思い込んでいたリヨウマは随分と肩肘を強張らせている。

「緊張を解け、リヨウマ。オレの考えでは攻撃は来ない」

『どうだか。おれはためえを全面的に信用しているわけじゃねえ』

リヨウマならばそう言うと思っていた。だがゲッター3のままでは大気圏を突破出来ない。ゲッター1になるのは必然であった。それに四日前と同じ形態でなければ意味がないかもしれない。

『おいでなすつた！』

リヨウマの声が弾け、ステルス型の機体が戦艦から跳ね上がってく

る。当然、リヨウマは戦闘神経を走らせようとしたがハヤトが制する。

「やめろ！ こつちからは攻撃の意思を出すな！」

『出すなって言っても、取り囲まれちまう！』

ステルス型の機体に変形しゲッターの姿を顕現させる。当然、攻撃はあるものだとリヨウマは感じていたのだろう。しかし、取り囲んだだけでどの機体からも攻撃は読み取れない。

『どうなってんだ……』

「やはりな。こつちの情報が行き渡っている証拠だ」

ゆつくりと降り立つように、と相手の機体が誘導する。リヨウマはほとんど狐につままれた様子でそれに従った。

『罨、って事は』

「あり得るが、ここで罨にはめるくらいならばあらゆる手段が残っている。この国はゲッターを受け容れる姿勢が出来た、という事だ」

釈然としないリヨウマは、けつと毒づく。

『何だかてめえの思惑通りみたいで気が乗らねえな』

「安心しろ。オレとてこの考えが合っているのかどうかの信憑性はない。ほとんどギャンブルだ」

戦艦の甲板へとゲッターが降り立つや否や青い光線が照射される。

リヨウマが身構えたが、「抑えろ！」とハヤトが声にする。

「オレ達で言うところのレンジングビームだ。攻撃性能はない」

その言葉通りに照射された装甲には傷が一切なかった。ほとんど原始本能の獣同然のリヨウマを飼い慣らし、ハヤトは通信を開く。

「チャンネルは、626だ」

広域通信チャンネルを開くと分け入ってきたのは今まで聞き馴染みのある声だった。

『来たか。ゲッターが』

その声の主のリヨウマも驚愕する。ハヤトも半ば予想出来ていたがすぐには信じられなかった。

『今の声……』

「ああ、恐らくは。出てくるぞ」

甲板に出てきた人々の中に明らかに異色な白衣の老人がいる。リヨウマは震える声でその名を口にした。

「サオトメの、ジジイ……?」

その姿はサオトメに瓜二つであったからだ。信じられないのはハヤトも同じであったが、ある程度心の準備が出来ていたお陰か、幾分か冷静だった。

「降りるぞ、リヨウマ」

『冗談。ゲッターから降りた途端に銃撃されるぞ』

「ではオレだけでも降りよう」

ハヤトはコックピットハッチを開ける。久方振りに外界の空気が肺に染み渡った。ゆっくりと降下するとサオトメの似姿の老人はゆっくりと歩み寄ってきた。下駄を履いているのも同じだ。

「よく来てくれた。ゲッターの使者だな?」

やはりサオトメそのものの声にハヤトは直感する。この戦艦も、ステルス型のゲッターも、製造したのはこの老人だと。

「こつちでははじめまして、でいいのかな」

ハヤトの声に相手は口角を吊り上げた。

「冷静だな。取り乱してもおかしくないのに」

「取り乱すよりかは、四日間かけてお前らがこちらの理解をしようとした、と思つたほうが建設的だ」

「よかろう。ついて来い。後の二人は」

「ゲッターの守りにつかせる。オレが言えばそう従うだろう」

「結構。他のゲッターステルス部隊にも達しておく」

ゲッターステルス。やはりゲッター線兵器なのだ、とハヤトは改めてその全容を眺めた。分離機能はどうやらオミットされているようであるが戦闘機としての質はこちらよりも上のようだ。

「どう呼べば?」

ハヤトの声に老人は振り返る。

「そちら側では、ワシは何と呼ばれていた?」

「サオトメ博士、と」

「ではワシもそう名乗ろう。早乙女だ」

老人の胸にはよく見れば名札があった。「早乙女」と書かれている。「久しく見なかったな。もう存在しない文字だ」

ハヤトとて文献資料でしか知らない。その文字との対面に感動している間もないのだろう。早乙女は来るように促す。

「ゲッターへ。そのまま待機」

ハヤトの命令でリヨウマが、『うーい』と返した。ムサシは状況が飲み込めていないらしい。ハヤトだけが戦艦の中に入る事を許された。内部には様々な精密機械が並んでいる。

「技術力だけ言えば、そちら側と対等か、それ以上だろう」

早乙女の声にハヤトは返していた。

「いつ頃から、ゲッターの建造を？」

早乙女が指差す。その先には初代ゲッターロボと思しき素体の写真があった。こちらで言うプロトゲッターの装甲を剥がしたような姿だ。

「ゲッター線がこちらで見つかったのはもう二十年は前の話だ」

「あんまりあちら側と変わらないな」

ハヤトの声に早乙女は、「落ち着いておるのだな」と声にする。

「叫び出したい気分だが、生憎オレが取り乱せば、後の二人が黙っていない」

ハヤトが肩を竦めると早乙女は振り返って両手を掲げる。

「このタワーの建造が始まったのがもう四十年ほど前。こちら側の主力兵器、ステルバーを改造しゲッター炉心を取り付けたのが最近の話だ」

よってゲッターステルスか。ようやく得心したハヤトはまず口火を切った。

「こちら側から、あちら側は見えているのか？」

「本来なら干渉も許されぬ領域よ。だが、ワシらは干渉しなければならなかった。近い未来に訪れる破滅を回避するために」

ハヤトは立ち止まり頭を振る。

「聞いているだけでは頭がパンクしそうだな。一つずつ、こちらの質問に答えてもらう」

早乙女は手招いて人影のないブロックへと誘導した。ここならば、とハヤトも腰に備えた拳銃を思考の隅に留める。

「レプリカント、とオレ達が呼んでいるのはあんたらだな？」

「そう呼ばれているのは知っておるが、好ましくない名前だ。その理由は」

「ある程度、推理はしてきた。あんたにはそれが合っているのかどうか、確認だけしてもらいたい」

ハヤトの声に早乙女はフツと口元に笑みを浮かべる。

「よかろう。答え合わせと行こうか」

第六話 「異界奇譚 6」

ゲッターステルス。

そう呼称された機体に挟まれる形でリヨウマの乗るゲッター1は立ち竦んでいた。一步でも動けば両側から締め上げられるだろう。しかしハヤトにだけ待遇がいいのは何故なのだろうか。コックピットでふんぞり返ったりリヨウマは文句を垂れる。

「……おかしいだろ。おれ達だってゲッターの一員だ。だって言うのに、ハヤトだけいい目を見やがって」

『俺は手間が省けていいと思うがな。なにせ、ここは知っているようで知っていない土地だ。俺だって混乱している』

それは自分も同じだ。周囲を見渡すほどに似ている事に気付く。樹海の中に聳え立つ塔のような戦艦。全身これ武器とでも言うようなハリネズミを思わせる機体。ハヤトは大陸間戦争だと言っていたがこれはそのための兵器なのだろうか。

「通信チャンネル、アクティブになっているんならこっちの声も聞かせられるよな？」

『何をする気だ？』

ムサシの懸念を他所にリヨウマは通信に割って入った。

「あーテストス。てめえら……あ、いや、あんた様方達は何者であるか？ オーバー？」

我ながら演技が下手である。しかし相手はこちらの通信チャンネルに合わせて律儀に返してきた。

『我々はゲッター線の恩恵を待つ者。この地にて待ち続ける事を宿命付けられた種族です』

リヨウマは顔をしかめる。相手はレプリカントでないのか。

「じゃあ、その、レプリカントじゃねえのか？」

『レプリカント？ それは被造物でしょう。幸いにしてその国家との戦争はこう着状態にあります』

相手の言わんとしている意味が分からない。リヨウマは一つずつ、

解きほぐす事にした。

「レプリカントは、いるんだな？」

『連中は数年前に我々を見限りました。そして自分だけの国家を作ろうとしたのです。偽人類との戦争は新たな局面に入り、我々は軍備増強を強いられました。その過程で手に入れたのがステルバーとゲッター炉心を繋げ強力な兵器とする技術。ゲッターの恩恵です』

相手の言葉は分かるものの言っている事はちんぷんかんぷんである。リヨウマは分かりやすい回答を求めていた。

「……えつと、つまりだ。てめえらレプリカントじゃねえのか？」

『我々は真人類。トゥルーヒューマンです』

新しく出てきた言葉にリヨウマは狼狽する。真人類など聞いた事がなかった。

「それは、つまり普通の人間、って事でオーケーか？」

『便宜上、普通というのがどの値を示すのかは謎ですが、それで結構です』

やり辛い事この上ない。普通の人間ならばもつと普通らしく喋ればいいものを。

「ゲッターの技術ってどこから仕入れたんだ？」

『三十六万光年先で戦い続けている前線基地から情報として送られてきました。この設計図通りに炉心を造れ、と。それがお前達を救うだろうと。三十六万光年先のギフトと言えば、我々では通じますが』

「おれには通じないんだよ。悪かったな。で？ どうしてそのゲッター炉心を造れっていうお告げが来たんだ？ その設計図通りに造れたってのもなかなか謎だけだよ」

『ゲッターの意思は全宇宙の総意。全てはゲッターの皇帝であるゲッターエンペラーの意思の下、統一されているのです』

新興宗教を聞かされている気分だった。リヨウマは手を払う。

「ゲッターエンペラー？ 何だそれ」

『ご存知ないのですか？ それで、どうしてこれほどまでに完璧なゲッター線兵器を？』

逆に聞かれても答えようがない。ゲッターを造ったのはサオトメ

だからだ。

「おれが知るかよ」

『……失礼ながらお名前は？』

その質問にリヨウマは怪訝そうな顔をして返す。

「あん？ リヨウマだ、ナガレ・リヨウマ」

その言葉を聞いた途端、通信チャンネルが開いている全通信網が一斉にざわめいた。

『ナガレ、だと？』、『あり得ない。その名前は……』、『だがゲッターの意思で統一されているのならば』、『博士は？ 博士は何と言っているんだ？』

喧しい声の数々にリヨウマは、「うるせえ！」と一喝する。

「人の名前にケチつけるんじゃない！」

しかしゲッターステルスに収まったパイロットは納得いかないらしい。

『その名前を名乗れるのは、何故なのです？ だって、その名は……』
それ以上は憚られるとでもいうようにゲッターステルスのパイロットは震え出した。リヨウマにはわけがわからない。

「勝手にざわめいて勝手にビビってんじゃないやねえよ。おれ達が悪い事したみたいじゃねえか」

ムサシはしかし、連中の様子を目ざとく観察していたらしい。リヨウマへと告げ口する。

『おい、あそこ。甲板の端のほう』

メインカメラからの映像が拡大される。リヨウマはその瞬間、心臓を鷲掴みにされた感覚に陥った。

「何で……」

視界に入った白衣の影は他でもない。自分が忘れるはずのない人物であった。思わずコックピットから飛び出して声を張り上げる。

「タツヒトー！」

リヨウマの声にその人物は視線を振り向ける。その顔は間違えようがない。サオトメ・タツヒト本人であった。だがタツヒトはどうして自分が呼ばれたのか判然としていないようだ。

「……失礼ながら、初対面のはずだが」

「んなわけがねえ。てめえが、何で生きている？」

タツヒトは仲間である研究員達に何事か耳打ちしている。まるで自分を無視した態度にリヨウマは苛立った。

「おい！ 無視してんじゃねえぞ！」

「初対面であるし、何よりもゲッター線兵器から出てきたお前を、見過ごせとは言われていない」

甲板に出てきた軍人達がアサルトライフルを構える。取り囲んでいるゲッターステルスも攻撃姿勢に移った。

「何のつもりだ……」

「牽制攻撃ならば許されている、と言っているんだ。今はお前達の仲間の一人が博士と話しているからこそ、恐らくはゲッターの意思で統一されているのだと推測される。だがそれを外れた行動は許されない」

「んだと……。てめえ！ 信念も何もかも！ 忘れやがったのか！」

リヨウマの張り上げた声にもタツヒトは冷たい眼差しを返すばかりである。

「分からない。何を言っているんだ？ やはり野蛮人か？」

タツヒトは背中を向けて何やら指示をしている。リヨウマが今にもコックピットから飛びかかろうとすると、『動くな！』とゲッターステルスが制した。

『撃てとは言われていない。だから動かないで欲しい』

「ぎけんな……。勝手な理屈押し付けやがって。ハヤトの奴もそうだ。自分で勝手に納得してやがる。おれは！ 一言だって納得してねえ！」

『動くなと言っている！』

ゲッターステルスが構えを取る。リヨウマは舌打ちを漏らした。

「とんだお笑い種だぜ。見知らぬ異郷の地で見知った人間に裏切られるってのはよオ！」

リヨウマの声をタツヒトは渋い顔をしていなし、「放っておけ」と言い放った。

「何も理解出来ないんだ。ゲッターの意思の偉大さも。それは何ももたらすのかも。引き上げてくれ」

タツヒトの命令で戦艦の陰から何かが巻き上げられる。リヨウマはそれを目にして絶句した。

それは先刻自分達が破壊したトーテム型ネフィリムの残骸そのものであったからだ。

「何でだ……。てめえら！ やっぱりレプリカントか！」

リヨウマの声にゲッターステルスのパイロットが、『落ち着け』と声を被せる。

『あれは我がほうの新型兵器だ。レプリカント打倒のために必要なもので実験中であって……』

「うるせえ！ もうてめえらの言う事なんて聞かねえぞ！」

リヨウマはコックピットに収まり、ゲッター1に機動をかける。ゲッター1の払った腕がゲッターステルスを下がらせた。

『何をする？ 貴公らは客人であろう！』

「客？ 悪いがこんな趣味の悪い星にお邪魔した覚えはねえなア！」

ウイングの皮膜が閉じてゲッターEトマホークを右手に保持する。明らかに攻撃に移ろうとしているゲッター1に相手は戸惑っているようだった。

『馬鹿な……。ゲッターの意思では分かり合えるはずなのに……』

「どこから仕入れた宗教だ？ おれ達や、お天道様も何もかも信じちゃいねえのよ！ てめえら全部、偽物だア！」

Eトマホークの刃が発振しゲッターステルスの機体表面を叩きつける。ゲッターステルスは手首から赤い剣を発生させてそれを弾いた。干渉したゲッター線のスパークに眼が眩む。だが慣れているのはこちらのほうであったらしい。リヨウマはゲッター1に踏み込ませて一気に薙ぎ払った。ゲッターステルスの右腕が両断される。うろたえた様子のゲッターステルスパイロットは、『どうしてだ……』と理解出来ないようだ。リヨウマはゲッター1にEトマホークを構えさせる。

「ゲッターの意思だあ？ そんなもん、知ったこっちゃねえのよ。て

めえらゲッターの下で仲良しこよしと言いたいんだろうが、生憎とレプリカントの知り合いはいないんでね」

ゲッターステルスが一斉に飛行する。上を取れば有利だと考えたのだろう。リョウマはゲッター1を駆け抜けさせる。ほとんど面食らっている相手に向けてEトマホークを振り下ろした。相手の反撃が鈍い。今が好機であった。

「こいつら、叩き切るぜー！」

その声にムサシが反論する。

『だがハヤトは待てと言っていたぞ』

「待て、だと？ おれ達や犬か？ 待てと言われて敵陣のど真ん中で悠長に待てるほど、馬鹿じゃねえつもりだよ」

『愚かな……。全てはゲッターの意思の下、統一されているのに』

ゲッターステルス部隊がゲッター1を取り囲み各々の武器を出す。引き出された赤い剣をそれぞれゲッター1に向けた。

『やはり、そちらはゲッターに選ばれていない様子だ』

「選ばれるだと？ んな事、最初から望んじやいねえ！」

叫んだ声が掻き消える前にゲッター1がEトマホークを突き出して一機へと猪突する。ゲッターステルスが剣で応戦した。

『ゲッターの意思を理解出来ないのならば、お前らは敵同然だ』

「敵で結構、好かれちゃ困るんでな！」

Eトマホークを薙ぎ払う。ゲッターステルスは対ゲッター用には出来ていないのかこちらのパワーよりも随分と低いようだ。

『全機、ゲッタービームを放て』

各機がゲッター線を充填する。赤いゲッター線の光がそれぞれの胸部に寄り集まり次の瞬間、ゲッター1に向けて放たれた。しかしリョウマはそれを避けようとしめない。それどころかゲッター1に命じたのは動くな、であった。

「そんなこけおどしー！」

ゲッター1が身を翻す。その動作で竜巻が発生しゲッター1へと攻撃されようとしていたゲッタービームが霧散する。

『ビームを……。弾いた？』

「この程度も出来ねえのかよ。腑抜け共め！」

ゲッター1が一機、また一機とゲッターステルスの羽根をもちでいく。連中がレプリカントならばこのやり方でいいはずだ。何よりもタツヒトの偽物を用意した事が許せない。それは自分とタツヒトの間にあつた漢の誓いを侮辱するものであつたからだ。

『馬鹿な……。どうして分からない？ ゲッターの意思を！ 理解しようともしない蛮族が！』

先に右腕を破砕してやったゲッターステルスが戦艦に取りついて攻撃指令を出そうとする。リヨウマはゲッター1を先行させ甲板へとほとんど飛び蹴りを放つ勢いで着地した。戦艦が傾ぎ、人々が悲鳴にまみれる。

「んなもん知るか！ 悪いがこの戦艦は厄介なんでね。牽制はさせてもらうぜ」

Eトマホークの刃を艦橋部分に向ける。人々の中にはタツヒトのレプリカントも混じっていた。

「何をやっているのか、分かっているのか？ ゲッターの意思を理解出来ぬ種族に、未来はないのだぞ」

タツヒトの姿形をしたレプリカントの喚きをリヨウマは無視する。

「だったら、その薄汚い擬態を解きやがれ！ レプリカント野郎が！」

リヨウマの罵声を人々が屈辱の表情を浮かべて受け止める。

『馬鹿を言え……。レプリカントとは、偽人類とは、こちらではなく……』

その時、不意に通信が入ってきた。切迫した声にリヨウマは耳を傾ける。どうやら広域通信らしい。甲板にいる人々もゲッターステルスもそれを聞いていた。

『何だつて？ 重量子ミサイルが発射された……。ここへ向かつて？』

要領を得ない言葉の数々にリヨウマが胡乱そうな目を向けているとハヤトが戦艦から飛び出してきた。

舌打ちを一つしてから、『動くな、と言つたはずだが』と声にする。

「うるせえ！ てめえ勝手におれ達が従うと思つているのか？」

『……まあいい。後で言いたい事は言ってやる。今は、早乙女博士』
やはりサオトメと寸分変わらぬ姿の人影が歩み出てくる。それもレプリカントに違いないとリヨウマはEトマホークを向けた。
「そいつも、レプリカントなんだろう！」

リヨウマの声にサオトメと思しき人影は肩を揺らして嗤った。

『げに恐ろしきは無知なる者だな。一つだけ、歴然とした事実だけを教える。数分前。この国に向けて敵性国家から重量子ミサイルが発射された。巨大な重力崩壊が巻き起こり、この場所が消滅する。地獄から消えるのも時間の問題であろう』

ゲッターステルスのパイロットや戦艦の乗組員達も震撼したようだった。タツヒトにしか見えない人物が、「しかし博士」と声にする。

「こちらには重量子ミサイルに対抗する手段がありません！」

ほとんど悲痛な叫びに近い声にも白衣の老人は淡々と応じる。

『いいや、希望は残っている。観測者だと信じて疑わなかったが、どうやらお前らはワシらの敵らしいな』

観測者、という言葉にリヨウマは不明な点を感じたが敵だというのはその通りだろう。

「ああ。てめえらみたいないかれた野郎をぶっ潰す」

リヨウマの声に白衣の老人はくっくっつと嗤う。その姿でさえもそっくりだ。

『なるほど。ならばその怒りの矛先が消えるのは不本意ではないのか？ 我々は恐らく滅びる。敵対国家の手によって。それが恐らくゲッターの伝えてきた滅びの時。我々がいくらゲッターの意思を継ぎ、この惑星を守ろうとも敵は何も分からずただ闇雲に突っ込んでくるのだ。そこでゲッターチームに提案したい。我らと共に、重量子ミサイルの着弾阻止を』

思わぬ言葉だった。リヨウマが瞠目しているとハヤトが声をかける。
『あんだ達はここで死ぬわけにはいかないのだな？』

どこか達観したような物言いにタツヒトの姿をした男が答える。

「もちろんだ！ ゲッターの意思が潰える！」

『ならば、リヨウマ。迷っている暇はないぞ。重量子ミサイルが目の前で暴発すれば、オレ達とて危うい』

究極的に利害の一致で戦おうというのか。リヨウマはそれでも納得出来ない。

「何でだよ……。こいつらが敵だろう?」

『分からないのか。真実を知ろうと思えば、ここで連中に死なれば迷惑なのはこっちも同じなんだ』

ハヤトだけ分かった風な口を利く。それが気に入らないが目の前で敵だと断じた連中が滅びるのはもつと胸糞が悪い。

「わあつたよー! ハヤト、乗れ!」

コックピットハッチを開いてゲッター1を屈ませる。ハヤトは最後に白衣の老人に向けて振り返った。

『最後に。オレの推測通りならばこの重量子ミサイルでの出来事こそが未来に影響を与える』

未来? 何を言っているのだ。リヨウマの思案を他所にどうやら白衣の老人は全てを悟っているらしい。

『そこまで分かっているながら、ここで重量子ミサイルの阻止に入る、そのころは何だ?』

ハヤトは呟いた。その言葉は聞き取れなかった。

『……なるほどな。抑止力か。だがそれが発生するのが今だとは限らんぞ』

『今でなくては、説明のつかない事が多い』

「だべってねえで早く乗れ!」

リヨウマの催促にハヤトがジャガー号へと収まる。ゲッター1が立ち上がるとゲッターステルス各機も発振準備にかかった。戦艦からの伝令が通信網を振るわせる。

『ゲッターステルス、全機発振準備!』

『タワーは全砲門開け! 何が何でも重量子ミサイルを爆発圏から遠ざけろ!』

リヨウマにはまるで分からない。何が起こり、何が起ころうとしているのか。これから先、どのようにこの惑星が変異するのか。

『リヨウマ。理解しようと思うな』

その様子を察したのかハヤトが通信を繋いだ。

「理解せずに戦えって?」

『重量子ミサイル爆発の阻止。今は、それだけでいい。その過程で何が起ころうとも、今はそれだけを考えていろ』

まるで何かが起こるような言い草だ。リヨウマは納得がいかなかったが今はハヤトの言葉を信じるほかない。

「行くぜ、ゲッター1! 出撃!」

ゲッター1がウイングを展開し他の機体より先んじて上昇する。ハヤトがリアルタイムで重量子ミサイルの弾道予測を送ってきた。

『タワ一の情報だ。恐らく間違いはない』

「間違っていたらお陀仏なんだろう? じゃあ間違えねえな」

『なあ、俺にはまだよく分からないんだが』

ムサシの声に自分とて分からないと叫び返したかったが今は状況を動かす事だけを考えるほうがよさそうだ。

ゲッターステルス部隊がゲッター1に追いついてくる。連中も弾道予測地点に機体を配置し、それぞれ防衛ラインを敷いているようだった。

「何機いやがるんだ……」

あの戦艦の中に数十機のゲッターステルスが内蔵されていた事になる。それでも物量で押されていれば負けていたのはこちらだ。

『リヨウマ! 弾道予測空域にゲッター1で飛ぶ! 用意はいいな?』

「もちろんだぜ! 飛べ、ゲッター1!」

ウイングを広げゲッター1が高機動形態に入る。重量子ミサイルだか何だか知らないが所詮は弾道兵器なのだ。ならば最新鋭のゲッターが勝てない道理はない。

「見えてきた!」

ゆっくりと煙を柵引かせながらミサイルが拡大された視野に入る。リヨウマは制動をかけてゲッター1に武器を構えさせる。

「ゲッタービームで撃ち落とすは危険だろ? Eトマホークで引き裂

く！」

右肩のウイングをトマホークに変異させEトマホークの刃を発振させたゲッター1が突っ込む。そのまま、ゲッター1の攻撃が重量子ミサイルを両断するかに思われた。

だが、それを阻んだ機影があった。リヨウマはEトマホークを掴んだその影に瞠目する。

黒い機体に、赤いエネルギーパーティションが映えている。悪魔の威容を持つ機体が黄色い眼窩でゲッター1を睨んだ。

見間違えようのない。それはまさしく――。

「ヨロイの、ゲッターだど？」

ヨロイのゲッターに違いないのだが、その体表には赤い鉱石は存在しない。純粹な形でゲッターに近い。

『こいつ、重量子ミサイルを守ったのか……』

ムサシの声にリヨウマは弾道予測がゲッターの試算を追い抜こうとしている事に気付く。

「させつか！ 追うぞ！」

ゲッター1が駆けようとするがその行く手をヨロイのゲッターが遮る。リヨウマは舌打ち混じりに呟く。

「……そうかよ。やっぱりてめえは、おれらの敵ってワケか！」

Eトマホークを顕現させてヨロイのゲッターに飛びかかる。相手は赤い刃を発振させてトマホークで打ち合った。火花が散り、成層圏で二体の機影がもつれ合う。

『リヨウマ……！ ヨロイに頓着するな』

ハヤトの警句にも耳を貸そうとしたがヨロイのゲッターは密着していて離れない。

「野郎が離れてくれねえんだよ！」

蹴りを放ったがヨロイのゲッターはそれをいなして拳を打ち込んできた。後ずさったゲッター1がゲッター線を充填する。攻撃色に転じたエネルギーが光条として放たれた。

「ゲッター、ビーム！」

ゲッタービームを受けてヨロイが後退する。どうやらこの状態の

ヨロイのゲッターは自分達の戦った時ほど強くないようだ。

「今だー！」

駆け抜けようとするのと今度は新たな接近警報に目を見開く。ゲッターステルスがヨロイのゲッターを守るように取り囲みゲッター1へと重火器を向けていた。

「……何でだ」

自分達は守ろうとして戦っているのに。通信を繋ぎリョウマは叫ぶ。

「何でだ！ てめえら！」

『福音はこちらであった。やはりお前らはゲッター線に選ばれなかった存在。ゲッターノエルは守らなければ。それがゲッター線を受け継ぐ者の宿命である』

「……よく分からねえが、敵対するって事なんだな？」

『リョウマ。頭を冷やせ！ 今は重量子ミサイルだ！』

『あんな規模のミサイルが爆発したんじゃ、この惑星もお終いだぞー！』
ハヤトとムサシの声にリョウマは辛うじて熱しかけた思考を抑える事が出来た。ゲッター1がウイングを拡張させてミサイルに追いつこうとする。だがどうしても埋めようのない速度の差があった。

「ゲッター1じゃ、追いつけねえ……」

『止むを得まい！ チェンジだ』

しかしそれは了承出来ない。今の速度で分離すれば機体が分解しかねない。

「こんな加速度でチェンジしたらおれらも無事じゃ済まねえぞ……！」

『最後の手段しかあるまい。ゲッター2にチェンジ後、Eドリル最大出力でミサイルを破壊する！』

どうやらそれに乗るしかないらしい。ゲッター1では出力の限界値に達していた。

「やるぞー！ 吐くなよ、ハヤト、ムサシ！」

分離した三機がすぐさま合体軌道に入る。ジャガー号を先頭としてベアー号、イーグル号が接合し最後にジャガー号に合体した瞬間、

ロケット型の頭部が引き出て鋭い双眸を湛えさせた。

『Eドリルハリケーン！ 最大出力！』

ゲッター線の皮膜を受けたゲッター2が音速をも超える速度でミサイルへと肉迫する。既に戦艦から弾丸が放たれておりミサイル迎撃のために動いていたがあまりにも鈍足であった。

ミサイルは真つ逆さまに戦艦へと向かっていく。ゲッター2のEドリルがミサイルに届くかに思われた刹那、何かがゲッター2に命中してその軌道を逸らした。

リヨウマは確かに目にする。戦艦の過剰な防衛攻撃が逆にゲッター2の進路を阻んだのだ。その一瞬が明暗を分けた。

重量子ミサイルが着弾した瞬間、音が消えた。

全ての音が消失し、光が弾け飛ぶ。戦艦はどうなったのか知れない。全て白色の向こう側へと持っていかれた。それはゲッターと同じであった。爆発の余波がゲッター2の装甲を叩きつけそのまま光の渦の中へと吸い込まれていく。

リヨウマは自分という存在でさえ振じれの中に引き込まれていくのを感じた。

光で染まる視界の中に黒点が映る。それはゲッターステルス全て破壊したヨロイのゲッターであった。衛星軌道からこちらを見ているのがどうしてだかこの時、リヨウマには分かった。

手を伸ばそうとする。その瞬間、感覚でさえも光が消し去った。

第六話 「異界奇譚 7」

通信網を震わせるのは雨のように間断のない声だった。呼びかけているのだ、と感じた時ようやくその輪郭が明らかになる。

『……さん、リヨウマさん！ ゲッター！ 応答してください！』

ミチルの声だ。リヨウマは手を伸ばしたままの姿勢でコックピットに収まっている事に気付いた。全ての通信機器がショートしており残っていたのは原始的な通信網だけである。ボタンを押してリヨウマは応じた。

『……こちら、ゲッター。位置情報は？』

『よかった……。ゲッターより応答！』

オペレーター達の声が相乗して聞こえてくる。リヨウマはモニターの一つを点けた。すると木々が乱立しており、自分達は樹海の中にいる事が分かった。

『おい、ここは……』

『位置情報特定。ネフィリムの放散爆発の痕です！』

ミチルの声にリヨウマは周囲を見渡す。サオトメ研究所が望める景色はいつもと変わったところはない。

『おれ、達は……』

帰ってきたのか？ その疑問を口にする前にミチルが喜びに満ちた声を出す。

『よかった。たった三十分でしたが、消息不明で』

その言葉が信じられなかった。リヨウマは聞き返す。

『……何だって？ 三十分？』

リヨウマの様子がおかしいと判じたのかミチルも疑問の声を出した。

『ええ、三十分ですよ。放散爆発の余波で通信網がおかしくなっただけみたいです』

『通信がイカれただけ？ じゃあおれ達は？ あの四日間の出来事は？』

要領を得ていない質問だったのだろう。ミチルは、『四日も何も』と返した。

『まだ一日も経っていません。捜索隊を出すべきか悩んでいたんですが、急にゲッターの反応が復活したので』

「急に？ そんな馬鹿な。おれ達は、確かワケが分からん世界に呼び出されて……、それでミサイルの迎撃に、失敗して……」

『疲れているんですよ。連日の戦闘ですし。帰還してください。それとも、こちらから部隊を送りましょうか？』

間もなく研究所からベータが発進する。代わり映えしないベータの機体。その姿にゲッターステルスの機影がだぶる。

「……夢でも見ていたのか？」

ハヤトの呻り声が聞こえてきた。リョウマは早速繋ぐ。

「ハヤト？ 生きてんのか？」

『ああ。辛うじて、な』

「おれ達、妙な世界に行っていたよな？ それこそ、この惑星と寸分変わらない……」

ハヤトは何も答えない。ムサシはまだ気絶しているようだった。ベータ部隊がゲッターを回収する。リョウマは未だにこれが現実なのか、夢なのかの判断がつけかねた。

漂っている、という感覚があった。

サオトメは報告を聞き流しながら、「またしても」と口を開く。

「正体不明の現象に我々は立たされたわけか」

『しかし、シグナル消失の三十分間にパイロットの心肺も全く見られず、これは行方不明になった、というよりも』

「別の時空へと飛んだ、と言うべきか」

サオトメの声にミチルは、『いえ、ありえませんか』と応ずる。

『放散爆発はこちら側で起こった事です。もし次元を飛んだとするのならば……』

濁した先をサオトメは言い放つ。

「ゲッターチームは奴らと出会った可能性が高い」

『でも誰も言わないのが奇妙なんですよ』

ハヤト辺りが突っかかってくるかと思っていた。それにリョウマとて黙っていないと。だが実際にはゲッターチームは口を閉ざしている。何が起こったのかは推測するしかないが恐らく自分達の想像以上だろう。

「ゲッターはあの次元に飛んだのだとすれば、口を閉ざしたくもなるかもしれない」

『ですがあちら側の事は秘中の秘。もしリョウマさん達が誰かに教えるような事があれば』

「あり得んな。あれは人類全体の業なのだ。一つでも漏らせば自分達が抹殺されかねない事くらいは理解しているとして」

サオトメは修復されていくゲッターをモニターの一つに捉える。それでも未だに拭えないのは浮遊感とも言える感覚だ。

「向こう側で恐らくワシは死んだな」

サオトメの述懐にミチルは声を差し挟む。

『向こうで、の出来事は記録出来ません。よしんば記録したとしても、こちらの履歴を削除すれば』

「ミチル。お前がシステムAIを務めている以上、情報漏れはあつてはならない。ゲッターのレコーダーは」

『無論、削除済みです。その中に気になる事が』

ミチルの提示したデータにサオトメは首肯する。

「……やはり、得ていたか。これはハヤトの組み上げたデータだな」

『疑似餌の可能性もありますが』

「ここまで嘘八百を並べられんさ。どうせ奴が喚いたところでこの研究所の人間は皆、ワシの言う事を聞く。ハヤトには人望がない事も全て承知の上よ」

『了解しました。ジン・ハヤトの組み上げた仮説は』

「棄却せよ。なに、奴も馬鹿ではあるまい。これが妄言だと言われかねないと分かっている口を閉ざしておるのだ」

『では引き続き、ジン・ハヤトの監視を厳とします』

「ゲッターの秘密に辿り着く人間がいるとすれば、あれ以外にあり得ない。リョウマは本能だ。分かっているても、いや分かっているからこそ口を閉ざす。そういう性質だよ」

『ムサシさんは、どうなさいます？』

「ルナリアンの言う事をまともに聞く人間がこのサオトメ研究所にいらなくても？」

『では監視は継続で』

サオトメは椅子に腰かけて呟く。

「真のゲッターの継承者は何者なのか。それを知るには奴らはまだ青い」

「何者なのか、か」

ハヤトは自室でヘッドフォンを片手にそれを聞き届けていた。システムAIであるミチルの目を掻い潜るのはこの研究所ではほとんど不可能に近いが一つだけ、それが可能な場所があった。

「さしものAIでも地獄の釜を常に見張っているほど暇ではあるまい」

ハヤトが自室から掘り下げて向かっていたのは地獄の釜のすぐ傍である。ゲッター2の機能試験を兼ねた実験動作の時、間違えて掘ってしまった事を装って既に穴は開けておいた。そこに通信機器を置いて中継点とし、地獄の釜での傍でも通信傍受が可能となった。サオトメはすっかりもうプロトゲッターに自分が関わらないと思いついでいる。しかしハヤトはこのプロトゲッター——地獄の番人でさえもこの謎を解くための必要な存在であると悟っていた。

「博士はオレ達にわざと隠している。次元を渡った事も。そしてその次元の行き着く時間も」

ハヤトの個人レコーダーにはゲッターから既に消去されたデータがバックアップされていた。ネット接続時の端末に繋げばそれだけ足が付きやすい。ハヤトは年代物のスタンドアローン状態端末を使い、その情報を整理していた。

もう一つの次元。ネフィリムが送り込まれているであろう惑星。そこで出会った「早乙女」を名乗る研究者。聞き出した真実——。

「もし、これらが本当ならば、オレ達がこのサオトメ研究所にいる事自体が仕組まれている。それがゲッターの意思なんかではなく、一人の狂科学者の、エゴに過ぎない事だとすれば……」

ハヤトは拳を握り締めて覚悟を決める。

すると年代測定結果のコンソールに結果が映った。その結果にハヤトは瞠目しながらもやはりと確信を得た。

今より遡る事三百年前、とそこには記されていた。

第七話 「崩壊への序曲 1」

まず行われたのはゲッターが異空間に遭遇した時に発生したと思われる衝撃の感知だ。

イーグル号、ジャガー号、ベアー号に分離した三機をそれぞれメンテナンスマシンが忙しなく精査する。異次元の証拠でも見つけられれば御の字。そうでなければ、ゲッターが赴いたのはどこなのか。メカニック、研究員総出で、レプリカントの本拠地を炙り出すべく昼夜を問わず作業が行われていた。一人のメカニックがふらつく。その背へとリヨウマは声をかけた。

「無理すんなよ。休めばいいんだ」

「そうはいきませんよ、リヨウマさん」

リヨウマの厚意にメカニックは甘える事はない。今も謎の光線を照射されている三機を見やり、「ようやく、なんですから」と呟く。

「ようやく、か」

ようやく敵であるネフィリムとレプリカントがどこから来るのかの目星がついた。つまりサオトメ研究所としては喜ばしい事であり躍進であるはずなのだ。だが、当のパイロットであるリヨウマの胸中は穏やかではなかった。

「リヨウマさん？ 帰ってから、変ですよ」

メカニックの声にリヨウマは幾ばくかの逡巡の後、「なあ」と尋ねていた。

「並行世界、って信じるか？」

メカニックはリヨウマが冗談を言っているのだと思ったのだろう。ははん、と訳知り顔になる。

「さては新しい映画か、あるいは小説ですか？ 生憎、そういうのには疎いもんですから。流行つてのは」

「違う！ おれが言いたいのは、そういうものがあるかどうか、てめえら科学者の側面から答えられるかって話だ」

リヨウマの声が真に迫っていたせいだろう。メカニックは冗談だ

とは今度は思わなかったようだ。

「並行世界、ですか。専門じゃありませんが、枝分かれした分岐する未来とか過去とかはあるらしいです。何せ、異空間から物が運ばれてくるご時勢ですよ。並行世界くらいは現実味を帯びてきた。むしろSFのガジェットとしては古いくらいです」

「ガジェットだとか、そういうんじゃないよ」

「言いたい事は分かりますよ。ネフィリムがやってくる、いややってきた場所は異空間であり、それはもしかするとこの惑星の並行宇宙かもしれない、と」

メカニツクの先回りする声にリヨウマは少しばかり気後れしながらも訊いてみる。

「ネフィリムの本拠地が、その、並行世界である可能性は」

「真つ先に、世界の有識者達が疑ったのはそれです。並行世界からの侵略行為。ですが、これを実証するのは無理が生じる事が判明しました」

「何が、無理だつて言うんだよ？」

リヨウマにはわけが分からない。世界の頭脳が付き合わされて無理、などという事があるのか。メカニツクは、「並行世界だとすると」と口にする。

「この時代のものが、あちら側にもなければおかしいんです。たとえば、高度に技術発展した並行世界をシミュレートするとすれば、そのような高度文明が我らに宣戦布告することそれ事態がまずおかしい」

「高度な文明からの、一方的な侵略行為とかじゃねえのか？」

メカニツクはその可能性を断ずる。

「あり得ません。高度な文明ならばそれと同程度の高度な文明に侵略するのが筋なんです。これは並行世界が似たような分岐が隣り合っている、とする仮説から導き出されます」

「どのように導き出されるのか、リヨウマにはちんぷんかんぷんだ。」

「あのよお……、訊いておいて何だが、よく分からん」

「無理ありませんよ。専門分野でなければこれは趣味の領域です。そうですね、例えばリヨウマさん、今僕に話しかけたでしょう？」

メカニツクが自分を指差す。リヨウマはこくこくと頷くしかない。「それと、もう一つ、話しかけなかった場合の分岐があるんです。この限りなく近い分岐が隣り合う並行世界だとします。リヨウマさんが話しかけなかった世界と、話しかけた世界。この二つはとても接近していて、二つを同時にシミュレートは出来ませんが、話しかけなかった場合を仮定する事は可能です」

「……頭が痛くなるような話だな」

こめかみを突いていると、「喋り始めたのはリヨウマさんでしょう？」と言われてしまった。そう言われればぐうの音も出ない。

「話しかけたこちら側の世界と、話しかけなかった世界。仮にB分岐だと名付けたこの世界はそのまま存続します。ですが、推測するにこれはさほどお互いの世界を侵犯するものでない事から統合される可能性があります」

「よく分からんな」

「つまり、僕に話しかけても話しかけなくっても、同じ未来が待っているって事ですよ。限りなく近い並行世界なんですから」

リヨウマは鼻の下を搔いてすすり上げた。よく分かっている証拠である。

「まあもつと有り体に言えば、リヨウマさんがゲッターに乗った未来と乗らなかった未来、とでは随分と様相が違うでしょうね」

それならばまだイメージしやすい。乗らなければハヤトはこの研究所をテロの対象にしていたし、ムサシとも出会わなかった事だろう。自分はベータ部隊として一生を終えていた可能性が高い。

「それくらい、劇的に違わないと並行世界とは呼べません。しかし、それくらい違うと、今度はお互いを観測出来ない。つまり干渉が不可能になります」

「何でだよ？　そこが分からないんだが」

「ゲッターに乗った世界と乗らなかった世界では、まずこの惑星の損耗状態が桁違いでしょう。もしかしたら滅びかけているかもしれない」

「大げさだろ」

リヨウマは肩を竦めるがメカニックは、「大げさなものですか」と応じる。

「ゲッターに乗れる人間は、リヨウマさんを皮切りにしなければ現れなかつたんですから」

「結果論だろうに。おれが乗ったから、ハヤトとムサシが乗って、ゲッターは完成を見たって?」

馬鹿馬鹿しいと切り捨てようとしたがメカニックは真剣である。

「馬鹿馬鹿しくないので。その通りなのです。リヨウマさんでなければゲッターにパイロットが乗っていてもやられていたかもしれません。あるいは最初のオベリスク型の時点で、もう研究所ごとになかったかも。それを変えたのはリヨウマさんですよ」

そこまでおだて上げられると悪い気はしないが今はそういう問題ではない。

「かゆくなるぜ」

「それほどまでに劇的に変わると、今度はゲッターに乗った未来と乗らなかった未来に差が生まれる。その差こそが、干渉不可能になるほどの溝なのです」

「溝、ねえ……」

リヨウマは赤外線が照射されているゲットマシン三機を視界の端に見やる。今も研究員達は忙しなくゲッターを検査していた。

——あれは、差なんてもんじゃねえ。

リヨウマの意識にあったのはゲッターステルスなる機動兵器が跳梁跋扈し、ネフィリムに似た意匠の武装や、あるいはネフィリムそのもの、そしてタツヒトそっくりの研究員のいる世界だ。あの世界が並行世界なのではないか、と相談をするつもりだったがどうやってもあれを論拠として持ち出せない。経験しておきながら非現実だ、と思い込んでいる節がある。

「なあ、それじゃ、おれじゃなくなつてタツヒトが生きている未来もあるって事だよな?」

「リヨウマさん、自分を責めては……」

「責めちゃいねえって。ただ純粹に、並行世界つてのはどういうもん

か分からなくなつてな」

リヨウマの目が自分を責める翳りが無い事を察したのかメカニツクはぼつりと語り出す。

「……あつてもおかしくはありませんね」

「じゃあ、ゲッターじゃない機動兵器が、その、第一線にいるつて可能性は？」

「それこそコンピュータ上の試算ですよ。ゲッター線以外では、どう足掻いたつてネフイリムオベリスク型を傷つけられないんですから」
それは何度かの実証で分かっている。それでもあの世界の機動兵器はゲッターと同質だった。

「じゃあ質問を変えるぜ。ゲッター線の兵器が、こういう形じゃないつて可能性はあるか？」

リヨウマの質問にメカニツクは怪訝そうにする。

「分かりませんけれど……、この形を提唱したのはサオトメ博士ですから、あの方に聞くのが一番なんじゃ」

「サオトメのジジイには言いたくないんだ。一メカニツクの意見でもいい。このゲッターの形状、これがベストなのか？」

ゲッターステルスのような派生機体の可能性。あるいはこの形状が間違いであつたかもしれないという思案。メカニツクは呻つた末に、「これがベスト、だと思えます」と判断を下した。

「自分も、このゲッターを見るまでゲッター線兵器つてピンと来なかつたんですよ。正直、ベータのほうが強そうだと思つていたくらいで。三機のマシンが合体して分離変形するつても合理的じゃないつて言うか」

メカニツクの本音にリヨウマは切り込む。

「じゃあ、こつじやないゲッターもあるつて事か？」

「ええ、まあ。可能性の話ですけど。でも、エネルギー転換炉や炉心の位置、それにエネルギーパーティション、全てを含めて考えると、やっぱりこれなんですよね。どうしてだか分からないんですけれど、これ以上にゲッター線放出に適した形状つて何でかかないんですよ」

どうしてだか存在しない形状。リヨウマは鎌をかけてみた。

「物は言いようだが、例えば、ステルス機が変形して、ゲッター1みたいなになるつての、出来るのか？」

ステルス機、という言葉にメカニックは胡乱そうな顔をしながらも答える。

「出来ない、わけじゃないですが、効率悪そうですね、それ。それならばステルス機で使ったほうがいいでしょうに」

メカニックには今のゲッターの形がベストに見えているのだ。リョウマはゲットマシンを視界に入れながら、「こいつはさ」と呟く。「そういう、亜空間戦闘とか視野に入れて造られたのか？」

「まさか。そこまで考える余裕はないですよ。ただ単にネフィリム迎撃のための切り札として、サオトメ博士の理論を実証しただけです」

やはりサオトメで止まる。リョウマは歯噛みした。サオトメの知っている事さえ掴めればあの世界の出来事も実証出来そうなのに。だが、と自分の中で踏ん切りがつかない。サオトメにだけは知られたくないのもある。

「リョウマさん？　もしかして、前回の戦闘で亜空間に引きずりこまれたんですか？」

メカニックの声にリョウマは声を潜める。

「出来れば他言無用で願いたい。おれ達はあの時、どうモニターされていた？」

「だから言ったじゃないですか。三十分間のロストだったつて」

そんなはずはないのだ。体感時間でも四日以上、あの世界にいた事になっている。

「その、異次元だと時間感覚がおかしくなるとか」

「あり得ない話じゃないですけど突飛過ぎますよ。大体、だつて言うんなら何で誰も進言しないんです？　ハヤトさんも無口だし、ムサシさんも教会に籠つちやつて」

「それは……」

二人があの世界で何を感じたのか。お互いに聞く事はなかった。あの世界の出来事が全て夢だといわれてもおかしくはないからである。共有幻想、で片付けられかねない。

「疲れているんじゃないですか？ 放散爆発に巻き込まれたんなら、それこそ大事故ですし。一回、メデイカルルームで診断を受けたほうが」

「もう受けたよ。異常なしだ」

身体には、とは言外に付け加える。ハヤトもムサシもやはりあの世界の事を語っていないのだろう。医師は簡潔に異常なしと述べただけだ。

「だったら、余計に休んでいたほうがいいですよ。前回のトーテム型から三日はネフィリムが来ていない。いつ襲来してもおかしくない敵ですから休める時に休んだほうが」

メカニックのお節介にリヨウマは手を振った。

「分かった、分かったって。ただな、並行世界について持論を聞きたいんだ。もし、ゲッターのいない世界があるとすれば」

「それこそあり得ませんって。ゲッターなしじゃ、どうやって人類はネフィリムと拮抗するんです？」

分からない。しかしあの世界の出来事は幻ではない、と言いたかった。その割には自分の背負ったものが重たい。世界一つの消滅という、現実が。

「リヨウマさん？」

怪訝そうにメカニックが覗き込んでくる。リヨウマは、「悪いな」と後ずさった。

「無駄話につき合わせちゃまって」

「いえ、リヨウマさんも結構考えるんですね。僕らもなんですよ」

「メカニックも？」

それは意外だったのでリヨウマは目を見開く。メカニックはゲットマシンを眺めて、「あのマシンが」と呟く。

「もし、少しの計算上のずれでもあれば、合体は成立しないんです。チェンジ一つを取ってしても精密作業レベル。だっていうのに、三人ともそれを怖がりもしない。誰一人恐れない事が、僕らにとっては何よりも勇気付けられますよ」

「勇気、か？」

メカニツクの大げさな言い分にリヨウマは辟易する。だがメカニツクは譲らなかつた。

「奇跡のようなものです。それに何事にも恐れず動じないメンタリテイを三人ともが有している。これは奇跡とか勇気とかを超越して、もう運命としか……！」

運命。

その言葉にリヨウマは重量子ミサイルが撃ち込まれる光景を思い出す。あの世界の、あり得てはならない宇宙の夜明けも、運命の一つだったのだろうか。運命が、自分達を縛り付けている。三人ともが逃れられない性として、ゲッターに、あるいはそれぞれの存在に依存している。

「運命、か。だったらおれやみんなも運命共同体だよな」

「ええ」とメカニツクは嬉しそうにするが、その笑顔を直視出来なかつた。自分は果たして、本当に運命の守り手なのか。正直、自信がなかつた。

「僕みたいなのでよかつたら話聞きますよ。リヨウマさん達も疲れているでしょうし」

「ああ、またな」

手を振ってリヨウマは踵を返す。左手首にはめた端末から声が発せられた。

『リヨウマさん……。やっぱり何かあったんですね』

「何もねえ、勘繰るな、ミチル」

勘繰るな、と言われて引き下がる性質ではないのは知っている。ミチルは、『やっぱり何か』と呟いた。

『もつとゲッターを精査する必要がありそうですね。異次元で、何があったのか』

「あのよお、おれが何にもねえって言っているのに信用出来ないのか？」

『今回ばかりは』とミチルが強く粘った。

『放散爆発の時、いいえ、ゲッター線と放散爆発が相乗した、という事はさらなるエネルギーが見られたはずなんです。その間、ゲッターと

三人のパイロットはどこへ行っていたのか?』

「考え過ぎだったの」

『何も無い割には、三人とも無口じゃないですか』

「何も無いから無口なんだろう」

ミチルはそれでも承服出来ないようで、『何か……』とぶつぶつ呟いている。リヨウマはこの会話とてサオトメに筒抜けである事を自覚した。この研究所で、ひいてはゲッターに関わってからサオトメの目を離れた事など月面以来一度もない。月面とて、サオトメの支配ではなかったものの、ゲッターには乗っていた。

ゲッターが自分達を縛って、どこにも行けないようにしているのではないか。かねてから浮かんでいた疑念が確信を伴ってくる。

ゲッターロボとは何なのか。リヨウマはその謎から解き明かさないう限り、この違和感を証明する手段はないと考えていた。

第七話 「崩壊への序曲 2」

「ゲッターロボとは何なのか」

その命題を打ち込んでもやはり満足はいく返答は帰ってこなかった。

ハヤトは煙草を吹かしながら端末と向き合っている。サオトメの管轄下ではあるが、ハヤトは好奇心を抑えられなかった。あの世界、あの出来事、全てが未だに生々しい。だということに、全ての事象はあの世界を否定している。空白の三十分。放散爆発の向こう側。

自分達は確かに別の惑星に降り立っていたのだ。四日間の間、別の星にいたというのにその事実がレコーダーにも書き込まれていない。ハヤトがまず疑ったのはメカニックや研究員連中で、彼らの端末を盗み見たが、それらしき改ざんはなかった。ならば、と今度はミチルに裏からアクセスしようとするもミチルの権限を越えるだけのアクセス権はこの研究所には存在しない。仕方なしにハヤトが持ち出したのは反政府団体所属時に使っていた端末である。別口から研究所のネット経路に潜り込もうとしたところ、一発で端末の回路が焼き切られた。今使っているのはもう三台目である。

「問おう。ゲッターロボとは何なのか」

検索をかけてみてもやはりサオトメによるゲッターロボの完成までの日取り程度しか出てこない。研究レポートが一つとしてない事にハヤトは疑いを持っていた。何よりもあの世界の、あの早乙女の言葉――。

ハヤトは検索する文字列を変えた。

「レプリカントはどこから来るのか」

裏資料が並ぶがどれも満足いく答えではない。異次元からの侵略者説、別宇宙の侵略者説、あるいは某国の科学兵器……。全てがノン、であった。

「どれも、オレの納得行く答えを出してはくれない」

やはりサオトメに直接掛け合うしかないのか。そう思ってハヤト

は画面をスクロールさせる。すると、ある一つの論文に行き当たった。

「ゲッター線は人類の侵略者……、おいおい随分と攻めたタイトルだな」

論文を開くとそこにはゲッター線がどこまで残酷なのかを示す論説が載っていたが、どれも推測や主張ばかりで客観的事実に欠けている。

「こんな論文、誰が書いたって言うんだ？」

著者を見やる。シキシマ、とあった。ハヤトはシキシマの経歴を洗う。すると驚くべきところに着地した。

「……おいおい。これはオレも予想だにしない」

シキシマの所属していた研究団体。その一つにサオトメ研究所が上がっていた。ゲッター線を否定する研究者がいた。その事実だけでもセンサーシヨナルだ。

「ゲッターは、人類の味方ではない？」

ハヤトの問いに端末も何も答えない。その代わりに、彼は立ち上がっていた。端末を持ったまま格納庫へと歩み出る。ハヤトの姿を見つけてメカニック達が三々五々に散った。彼らの了承を得ずに、ハヤトはアイドリング状態だったベータに乗り込む。それをようやくと言った様子でメカニックが見咎める。

「は、ハヤトだ！ ジン・ハヤトが脱走するぞ！」

その声には電光石火の如く、駆り出された職員達だがハヤトはこう言い捨ててベータを発進させた。

「安心しろ。逃げやしない。どうせオレはもう、ゲッターに取り憑かれているのさ」

その言葉を誰も否定する事は出来ずに、発進したベータを見送る事だけが彼らの務めだった。

ハヤト脱走、の報はすぐさまサオトメのいるブロックに届いた。しかしサオトメの取った方針は、「慌てるな」である。

「ハヤトの位置は逐一モニター出来る。いつでも奴の首輪を爆破出来るのだ」

その証拠にミチルはハヤトが出る前にハヤトの異常行動をモニターしている。ハヤトは端末を手にベータに乗った。目的地のない逃避行ではない。

『博士、やはりジン・ハヤトは』

「分かっておる。勘付いた、か。あるいは消されたものに取り憑かれたようだな」

抹消された記録。ない、のならば記録としても不完全なそれだがハヤトは異世界を見ている。あの世界に何が起こり、何が生まれたのかを知る者はこちらでは数少ないが、リヨウマも気にしている様子がミチルから報告されてきた。

「リヨウマは並行世界と。奴らしからぬ難しい考えよ」

サオトメは手を組んで熟考する。ここからどう出るか。ゲッターチームの内部分裂すらあり得るが、それを危惧する気持ちはサオトメにはない。むしろ、ゲッターチームが今までになく行動力を発揮している証拠だと感じているほどだ。しかし、ミチルは気が気でないらしく、『博士……』と不安げな声を振り向けた。

『このままでは、ゲッターの運用に支障が出ます』

「ゲッターがいざという時に動かせぬ、か。ミチルよ。お前はまた、奴らを完全には理解出来ておらぬようだな」

『理解も何も、リヨウマさんはまだ、心中は分かりませんが、ジン・ハヤトの身勝手な行動、それにムサシさんはああ言ってもルナリアンですし……。正直、今のゲッターチームは空中分解寸前です。ここで誰か

が働きかけねば』

「では、お前がその軸となるか？ AIであるお前が」

サオトメの言葉にミチルは二の句を継げなくなったらしい。鼻を鳴らし、「何も心配は要らん」と口にした。

『何故です。何故、博士はそこまで向こう見ずにいられるのです？』

「ワシの行動が向こう見ずに映るか？」

思わぬ言葉にサオトメは聞き返す。ミチルは若干の反感を込めた口調で返す。

『ええ……。リヨウマさんを死地に追いやったり、ハヤト侵入を分かかっていて止めなかったり、危険な月面任務を充てたり、博士……。本当に、ゲッターチームを生かすつもりなんですか？』

AIから説教を受けるとは思わなかった。サオトメは口角を吊り上げる。

「そうまで言われてしまえば立場はないな」

ミチルはハツとして、『失礼を』と佇まいを正す。サオトメは片手を上げた。

「いい。思っている事を口にしてくれる部下は久しく失っていたものでな」

タツヒトの事を忘れたわけではない。しかしリヨウマさえいれば、と言ったのも嘘ではない。あれは強がりでもなんでもなく、本当に「ナガレ・リヨウマ」さえいれば問題なかったのだ。

『……リヨウマさんは、背負っています。タツヒトさんの分までも』

「背負わせておけ。どうせ、連中はこの惑星の存亡をかけておるのだ。一個人レベル、背負えないのはおかしい」

サオトメの言い草があまりにも人間離れしていたせいか、ミチルは糾弾する。

『博士！ リヨウマさんやゲッターチームを思うならば今の言葉は暴言ですよ！』

「ああ、分かっているさ。しかし、ミチル。随分とまた、……暴言とは、人間らしい言葉を使うようになったのだな」

ミチルが言葉をなくす。サオトメは中空を睨んで、「何も心配いら

んよ」とこぼす。

「全ては万事順調なのだ。奴らが異世界に行ったのも、いずれは知らねばならぬ事。ワシの口から言ったのでは奴らは信じぬだろうからな」

『……ゲッターが最終的に何を目指して設計されたのか、そろそろ教える頃合なのでは?』

ミチルは知っている。知っていながら黙っている事に耐えられなくなっているのだ。それほどまでに、彼女は人間らしくなくなってしまった。リヨウマと邂逅したこの数十日で。

「まだまだ! まだ連中の誰にも知らせるわけにはいかん。地獄に落ちた事だけを、連中は知っていればいい」

サオトメの言葉は時に暴力のような情け容赦のなさを感じさせるだろう。しかし全ては人類のためなのだ。それを理解しているのは悲しいかな、ミチルだけである。

『博士……、ですがゲッターが』

「最悪、リヨウマとムサシで行かせる。自動操縦でももう奴らはオベリスク型程度に遅れを取らん」

ハヤトは、とサオトメは考える。あれは自分と同じ目をしている。

求道者の目、世界の真実を知る事を許された者の目だ。あの輝きを持つ目の持ち主を無理やり止める術はない。

『全て、ゲッターと人類のため、なんですよね』

この期に及んで確認してくるミチルにサオトメは言いやった。

「くどいぞ。その通り。ワシは人類とゲッターの安寧のためならば地獄の羅刹にでもなろう」

涅槃

眠ればどれほど楽だっただろう。

しかし、目を閉じるとどうしてもあの景色がちらつくのだ。惑星から立ち上る光。本来あってはならない宇宙の夜明け。重量子ミサイル着弾時の取り返しをつかないあの感覚。

ベッドで眠る事を許さない光の奔流にムサシは精神が苛まれていた。何度眠ろうとしてもどこかであの光が邪魔をする。教会に逃げ込んだがどこにも安息はなかった。月明かりを浴びて落ち着こうと感じたが、闇が降り立つ度に恐怖は増す。ムサシは、最早歯の根が合わなくなっていた。

気候も変わっていないはずなのに異常に寒気がする。吐いて楽になるのならば吐けばよかったがそうもいかず、かといってリョウマやハヤトが誰かにあの事を述べたとも思えずにムサシには苦しんだ。教会ですがりつくように偶像へと頭を垂れる。

「助けてくれえ……」

情けない声音だった。ルナリアンである自分にとって惑星の死など問題ではないはずなのに、あの時感じたのは月面で虐殺された自分の同朋よりもなお色濃い人々の死の声だった。ゲッターはそれを何倍にも増幅してくるようだ。それも機体から離れば離れるほどに。逃れられぬ、と言っている。自分の心の臓も、ゲッターも。

ムサシは何度目か分からぬほどに咽び泣き、そして嗚咽の果てに立ち上がった。僧兵の背中では憔悴し切っている。それでも正面を切つて戦わぬのは男が恥じる。ムサシは格納庫へと歩み出していた。すれ違う人々がとんでもないものを目にしたように避ける。自分の眼光は恐らく炯々としていて、正気には見えないのだろう。メカニックが止めた。

「ムサシさん。寝ていないんですか？」

「眠れないのだ」

「よくないですよ。メディカルルームで睡眠薬でももらって無理やり眠れば」

「もうもらってきている」

ムサシの手には錠剤の空があった。

「十錠飲んででも全く眠れなかった」

その言葉にメカニックが息を呑む。

「そんな……。ムサシさんの薬はそうでなくっても常人の何倍も効果のあるはずですよ……」

「呪縛なのだろう」

ムサシの声にメカニックは繰り返す。

「呪縛……」

「ゲッターが、逃れてはならぬと言っているのだ」

ムサシが格納庫に向かうのを数人のメカニックが押し止めようとするがムサシは手を払っただけでそれを吹き飛ばした。

「すまない。ベアー号に乗せてくれ」

ゆらりとコックピットに続くエレベーターに飛び乗ろうとする。

研究員が目を見開いた。

「ムサシさん？ 駄目ですよ、今検査中——」

「聞こえなかったのか？」

押し殺した声音に研究員達は蛇に睨まれたように動けなくなっていた。ムサシは再三、告げる。

「ベアー号に乗せてくれ。それだけでいい。ゲッターになっている必要はないから」

ぶつぶつとそう呟きつつムサシはパイロットスーツにも身を包まずにベアー号へと飛び乗った。ムサシの体重を抱え込んだコックピットが軋む。

「ゲッター……。お前は俺に何を望む？」

ムサシはベアー号の中で瞑想する。ゲッターは何の目的で自分を選んだのか。最早、ただの偶然とは思えなくなっていた。もし、月面にリヨウマが来なかったとしても、ゲッターだけは自分の下に現れたのではないのだろうか。その運命が必然だったとするならば。

回線が開けムサシへと声がかけられる。

『ムサシさん？ ベアー号に籠ったって聞いて』

ミチルの声だ。ムサシは目を閉ざしたまま応じる。
「ああ。もう俺に一般の生活は必要ない。全てゲッターの中で事足りる」

あまりに突飛な言葉にミチルは息を呑んだようだ。

『どうしてそこまで……。やっぱリヨウマさん達と何か見たんですよね？ それを私に報告してくださいれば』

「俺は何も見っていない」

ミチルの言葉を制するように繰り返す。何も見ていない、と。

『でも、心労を和らげる事くらいならば出来ます。リヨウマさん達と話し合えば……。こういう時のためのチームじゃ』

「リヨウマは、あいつは何か言ったのか？」

ミチルは沈黙する。それが答えだった。

「リヨウマが言わないのなら、言うべき事はでないのだろう」

『リヨウマさんとムサシさんは違います。あなたはルナリアンで、誰よりも孤独を感じているはず。だって言うのに、さらに背負うなんて』

「背負っているのではない。俺は、託されたんだ」

主語のない口調にミチルが困惑する。

『託されたって……』

誰に、だろう。きつと誰にでもない。ムサシはぎゅつと拳を握り締める。あの宇宙の夜明け、自分の中の何かが、本能的な部分が告げている。

このまま何もせず静観していてなるものか。

「ミチルさんよ。俺はゲッターの中にいる。いつでも回線を繋いでくれていいが、出るつもりはない」

『だから、何で……。ネフィリムの脅威は今のところ』

「そんな事は、関係がないんだ。ネフィリムがどうだとか、俺には、ああ、そうなんだ。関係がない」

ルナリアンである自分には惑星の危機など二の次だった。今までにはヨロイのゲッターへの報復こそが生きる目的であったが、異世界でヨロイのゲッターに似た存在と遭遇し、さらには世界の破滅すら見て

しまったまなこには生半可なまやかしや常識など逆に嘘くさい。

『ムサシさん……』

「放っておいて欲しい。俺は、出来ればここで知りたいんだ。ゲッターとは何なのかを」

『ゲッターは、ネフイリム迎撃のための兵器で……』

「それだけならばどれほどいい事か。きつと、こいつには何らかの意思がある」

ムサシの声にミチルは、『兵器ですよ』と返す。

『意思なんて』

「ある。なければ、こいつはあの世界を見せなかった。ゲッターとは、何らかの手段を持って俺達へと関わってくる存在なのだ」

最早自分に語りかける口も無駄だと悟ったのか、ミチルは声を小さくした。

『……ゲッターから降りる場合は声をかけてください。また、スクランプルは許可しておりませんので』

「心配せずとも、俺は計器にすら触れんよ」

事実、アームレイカーに手も入れずただ腕を組んでいる。ムサシはゲッターが語りかけてくるのを待つ。それだけを決めた。

ミチルの回線が切れムサシは瞑目したまま自嘲気味に呟く。

「これでは狂人だな」

きつとメカニックを含め全員にそう思われているに違いない。この状態の自分を客観的に評価する存在がいるとすれば、それはゲッターそのものかあるいはゲッターの生みの親。

サオトメ博士。あの人物だけはこの行動に意味があると感じていてもおかしくはない。

ムサシは自分の中で問いかける。その問いこそがゲッターへの。ひいては根源への問いかけになり得る。

——お前は何者だ？

心の芯を打ったような声に反響するのは水音だった。常闇の中にムサシは浮かんでいるイメージを持つ。ぼやり、と空間が歪み、赤い鬼が顕現した。地獄の番人。ゲッターの黄色い眼窩がぎよろりと睨

みつける。

——お前は何者だ？

再び問いかけると空間全体を震わせる声が返ってくる。

——我は真なり。

思わぬ返しにムサシは存在そのものを揺るがされかねない。空間内に巨大な鉤爪を広げたゲッターの影が現れる。

——大宇宙の真の答えなり。

——では問おう。大宇宙の意志とは何か？

ゲッターはエネルギーパーティションの内側にある牙を剥いて囓った。

——小さき者が知ってどうする？

確かにゲッターに比すれば自分の存在など、矮小にも過ぎる。それでも問わずにいられない。

——何故、この惑星にはゲッターが必要であったのか。その真なる答えを問おう。

ゲッターは牙を収めて今度は菩薩のような安らかさを携えて答える。

——進化の先にある可能性こそ、我の求めるところなり。光の渦へ。

ゲッターが指し示したのは星雲だ。しかしただの螺旋ではない。その星雲の中の渦に飛び込むとさらに小さな星雲があり、その連鎖に終わりはなかった。ムサシは額に汗の弾を浮かべる。

無間地獄。ゲッターの誘いに必死の自我で応戦する。

——光の先に何がある！ 答えよ、ゲッター！

無理やりでも答えを聞き出さなければ、今の自分の肉体では耐え切れまい。ムサシの言葉にゲッターは思惟を重ねる。

——恐れずとも。いずれこの光の中で全員が回帰する。全ての生命は等しく、この虚無の向こうへと。

光の連鎖の向こうにあったのは闇の連鎖だ。またしても止め処ない。このままではムサシの精神とて限界であった。問いかけをやめるべきか、と考えたが奥歯を噛み締めて膨大な情報の瀑布に耐え切

る。

——ゲッター！ お前はどこにいますと云うのだ！

——全ての生命の先へ。選ばれし人類という種を携えて。

その瞬間、ムサシの脳髓を痺れさせたのは電撃的なイメージの連鎖である。

海面が渦巻き、惑星が粟立つたかのように荒れ狂う。

上空の気流が寄り集まって像を成したのは巨大なゲッターの顔面であつた。

ゲッターは地表を焼き尽くし、全ての生命と共に跳躍する。惑星間の跳躍。通常ならば考えもつかないところだが、ゲッターは種の保存のために別の惑星へと飛んだ。赤い地表の惑星が瞬時に緑に包まれる。

岩場には三人の男の顔が刻み込まれていた。彼らの眼光にあるのはその先の未来だ。何を見据えているのか。ムサシが探るとさらなる宇宙の果てに存在したのは大戦争の火線であつた。惑星規模のゲットマシンが宇宙の常闇を覆い尽くす。緑色の光条が一つ放たれば惑星が容易く消し飛んだ。

それは戦争であつた。種の存続をかけた大戦争が勃発し、ゲットマシンの攻撃を耐え凌ぐのは虫の意匠を持つ兵器群である。

それらの一つ一つから声が飛ぶ。思惟が飛ぶ。

——ゲッターに遅れを取るな！

——ゲッターを破壊せよ！

——忌々しいゲッターめ！

この憎悪の渦はどうした事だろう。何故、皆が皆、ゲッターを恨んでいる？ その答えはゲッターがとある惑星へと放った攻撃に起因しているようだ。

赤い、ゲッターに近い意匠を持つゲットマシンが地表に向けて紫色の光線を放つ。すると地表が瞬時に焦土に変わった。ゲッター軍団を先導している者の一人が背中を向けている。その男はヘルメットを被り、鎧に身を包んでいた。

何者、とその顔を見ようとす。振り返った顔にムサシの神経が粟

立った。

その顔はまさしく、自分自身であったからだ。何故、という疑問を挟む前に相手が声をかける。

「ここは未来の戦場」

意識だけムサシはそのゲッター対何者かの戦場へと飛んでいるようだった。ムサシは問いかける。

——あなたは……？

「お前であり、また別の言い方をすれば、選ばれし人類でもある」

指差されてムサシは狼狽する。まだ身体はベアー号にあるはずだ。自分が大宇宙を航行した覚えはない。

——ここは、何光年先なんだ？

「言うほど先の未来でもないさ。いや、もつと言えば過去だ。かつて、この惑星があった宙域で繰り広げられていた生存戦争だよ」

——過去？

ムサシは視線を振り向ける。虫の意匠を持つ大軍勢はゲッター軍団に気圧されている。戦力的に押し負けているのだ。

「ゲッタービーム一つで艦隊程度は消滅出来る。何ら難しい事ではない」

——侵略戦争なのか？

ムサシの問いかけに相手は、「違う」と応じていた。

「これはゲッターの意思であり、大宇宙の意思に従った結果なんだ。ゲッターに奴らは選ばれていないだけ。そのただ一つの事実が、相手にも分かっている。いや、分かっている目を逸らしているのかもしれない」

大軍勢にゲッタービームが掃射される。艦隊が牡丹のような爆発の光の輪を広げて消滅する。次いで出現したゲッター2に近い白色の巨大ゲットマシンが保有するジャイロ型のドリル機構を使用して真空の渦巻きを形成した。惑星一つを容易く振り切る攻撃に艦隊が後ずさっていく。

——やったのか？

「いいや。殺し尽くさなければならぬ」

相手が手を薙ぐと黄色い機影が姿を現す。今度はまるでゲッター3のような無骨なゲットマシンがその巨大な機体を回転させて突っ込んでいく。機体の大きさからしてもどう考えても光速を超えるはずがないのに、その速度は目で追えなかった。その軌跡を辛うじて視界が拾い上げたレベルだ。艦隊が塵芥と化し、爆発と死が連鎖する。

——何という事を……。

これではまるで暴力の連鎖反応だ。間断のない攻撃で艦隊は消耗していた。それに比してゲッター軍団の如何に無限な事か。次々に惑星の合間から出現するゲッター達がそれぞれの攻撃手段を用いて艦隊を蹴散らしていく。それ一つを取ってしてみても大陸を焼けるほどのビームが何発も重なり、艦隊を攻撃するがバリアーが発生し攻撃したゲッターの半数がその反動で消滅した。

——何だ。死が恐ろしくないのか？

艦隊もそうだがゲッター軍団もそうだ。まるで死を恐れぬ軍隊が常に歩みを進めているような感覚である。

「死など。生物はその生死レベルで動いているのでは宇宙を制せない。宇宙を制する大原則として個体の死に囚われる必要はないんだ。俺なんぞ、何百回も死んでいる。だが俺が死んだ程度で」

その時、艦隊から発射された光線が話していた相手を射抜いた。ゲッター軍団が応戦の火線を向ける。まるでその死など問題ではないように。

——まさか……。

「そのまさかだ」

答えたのはカプセルの中に入っている無数の個体であった。話していた相手が全裸で入っておりその数を数えるだけでも気が遠くなりそうだ。カプセルが開き、服飾を纏った彼が答える。

「今も死んだな」

まるでちよつと風が吹いたような言い草。腕を組んでゲッター軍団の行く末を見つめている。彼はどこから来たのだろうか。

——あんだ、どこから。

「火星から」

火星、という惑星の場所が分からない。彼は無数の惑星が一つの恒星を中心として回る座標を示す。

「太陽系だ。元々は地球かららしい。しかしゲッター軍団のデータベースにあるのは火星からのものだ」

地球、という言葉にムサシは頭が割れそうになる。聞き覚えはあるはずなのにどうしても分からない。

——何だ……、この感覚は……。

「故郷の記憶が起因しているのさ。お前は選ばれし種の一つなんだ。いずれゲッターの、大宇宙の光の中に回帰する。分かる時が来る。何故、一十一は二なのか。いや、二だと思っ込んでいるのか。全ては光の中だ。それを言葉でもなく、感情でもなく、それぞれの個体の持つ原初の記憶が知っているんだ」

その受け答えにムサシは呻いた。何かが分かろうとしている。分かってはならない何かが。その手がかりが目の前にある。

「無理もない。ゲッターの中だろう？ 今のお前の肉体は。そのゲッターじゃ、ちよつとばかり理解には厳しいかな」

そこまで相手は理解していると言うのか。ムサシは真剣に尋ねていた。

——教えてくれ。ゲッターとは何なんだ？ どうして、俺はゲッターに選ばれた？

「ゲッターは似た個体を選ぶ。どの次元であれ、どの世界であれ、あるいは何百光年と離れた全く縁もない地であっても、それがゲッターであるのなら変えられない運命なのだ。お前は、運命を選び取った」

——俺は何だ？

「トモエ・ムサシ……。皮肉なものだ。名前さえも同じだとは」

相手の声にムサシは瞠目する。ヘルメットに手を添えて相手は答えた。

「俺の名は、巴武蔵。オリジナルの個体は当に死んだが、ゲッターの記憶が俺を覚えている。俺はだからゲッターの進軍に異を唱える事はない」

巴武蔵。同じ名前と同じ顔。ムサシは理解出来ずにうろたえる。

「決しておかしな話ではないのだ。別の宇宙に可能性があるように、この大宇宙の中に、同じような個体がいても何ら。ただし、お前らが置かれている境遇は少しばかり切迫しているようだ」

巴武蔵はこちら側の、ネフィリムの脅威でさえもお見通しなのか。ムサシは尋ねていた。

——ネフィリムは何故、人類を襲う？

「答えなど簡単なんだ。お前は当に知っていると思ったが。どのような戦争であれ、違うから戦うんだ。相手が自分達と違う。ただそれだけで火種になる」

答えになっていない。ムサシは声を浴びせようとしたが、「それ以上は何がある？」と聞き返された。

「このゲッターの進軍の理由でさえ、相手がゲッター線の導きを理解出来ないから。ただそれだけだ。一十一の理解出来ない赤子に教え込むのに、ここまで時間と労力を要する。まあ仕方あるまい。相手は言語も思考体系も何もかも違う、異種族なのだから」

——レプリカント……。

「そう。知っているじゃないか。偽物は本物に淘汰されなければならぬ」

——ならば、ゲッターの存在理由はレプリカントを屠る事……。

ムサシの言葉に巴武蔵は怪訝そうにする。

「……分からないな。確かにそれを、お前が言うんなら正当だろうが、他の二人までも思い浮かべているのが」

思考を読まれている。そう感じてブロックしようとしても巴武蔵の前では意味がなかった。

「ナガレ・リヨウマに、ジン・ハヤト、か。これも皮肉な巡り合わせとしか言いようがないな。ただ一つだけ、教えておこう、トモエ・ムサシ。お前は本物だが、お前を取り巻く世界は偽物なのだ」と

意味が分からない。ムサシの質問は出現した巨大な仏像の呻り声に遮られた。坐像が宇宙空間を舞い、ゲッタービームを回避している。悪い夢だと思えなかった。

そうか。自分はあまりにも睡眠不足で白昼夢を見ているのだ。ム

サシの納得を他所に巴武蔵は戦闘本能に火をつけた。

「おいでなすった！ 連中のトップだ。必ず殲滅せよ！」

巴武蔵の号令でゲットマシンがそれぞれ展開する。小型のゲッターが前面に集合しゲッター線のバリヤーを張った。何体かは坐像へと向かっていく。坐像はその腕に保持している杖を振るった。ゲッターの腹腔が破れ、機体が塵と化す。

「まだまだ！ ギリギリまで引き付けろ！」

坐像の背後から出現したのは立像である。憤怒の表情で塗り固められた立像が台座に乗ったまま光速移動する姿は奇怪に映ったがゲッターはさらにそれを上回る速度で展開する。立像を抑えようとゲッタートマホークを振るい上げたゲッターと立像の一つの菩薩が剣を振るう。剣と斧が干渉し合って火花を散らした。坐像に比すれば小型の立像がそこかしこでゲッターとの戦闘を繰り広げる。

ゲッター1に似た赤い機体が菩薩の背後に回ってゲッタービームを照射するが、菩薩は手で弾いた。すぐさまその首根っこを掴んだかと思うとゲッターの背骨を引き抜く。爆発したゲッターを尻目に他の立像達も次々に前線を突破していく。

「射程距離だ。ゲッターチェンジに入る！」

直後、宇宙そのものを震わせる轟音が響き渡り、赤いゲットマシンが上部へと移動する。

ゲットマシンの移動だけで惑星や衛星が次々に消滅した。憤怒の表情を持つ立像が白いゲットマシンへと突っ込んでいく。その瞬間、赤いゲットマシンと白いゲットマシンとの間で巨大なスパークが巻き起こった。瞬時に発生した光に目が眩む。生物が目にしていい光ではなかった。

あれは、宇宙創造の仮説にあるビッグバンというものなのではないのか。爆発の光が拡張し、突っ込んでくる立像を破碎していく。坐像は距離を置いて立像達を制した。

艦隊が前に突っ込む。

どうしてでもゲッターチェンジを阻止するつもりらしい。ミサイル弾頭や包囲光線が敷かれ、ゲットマシンの機動を邪魔する。しかし

それを上回るエネルギーを放射したゲットマシンの前に艦隊はあまりにも無力であった。ゲットマシンが放射線状に広げたのは単なるエネルギーの皮膜だがその皮膜の大きさが桁違いだ。ムサシは呼吸困難に陥った。これほどまでのスケールでのゲッターチェンジなど頭がない。

惑星を滅ぼし、宇宙の大原則を振り曲げ、全ての質量を吸収してゲットマシン三機が合体する。否、合体などという生易しいものではなかった。

これは一種の破壊である。破壊から生まれるものがこのゲッターの本懐なのだ。白いゲットマシンがビッグバンを引き起こしつつ赤いゲットマシンと接合する。その瞬間に発生したフィールドだけで艦隊が半数にまで減った。

黄色いゲットマシンの接合を阻止しようと立像が次々に攻撃を仕掛ける。縄のようなもので縛りつけようとするが黄色いゲットマシンを中心軸に振るわれた暴風で立像がたちまち焼き切られる。その正体は節のある腕だった。ちょうどゲッター3が展開する大雪山おろしをこのゲットマシンは宇宙規模で行ったのだ。その衝撃波で立像は碎け散り、その存在の証明すら残さず消し飛んでいく。

「ゲッターチェンジ、行くぞ！」

巴武蔵の声に従って黄色いゲットマシンが合体する。その瞬間、全てのゲットマシンに血潮が走った。緑色の、ゲッター線の血である。繋がった感覚を確かめるように脚部が飛び出す。それだけで何十個か惑星を犠牲にする。

両腕が飛び出すとその指が折れ曲がるたびに重力干渉が巻き起こった。最後に赤いゲットマシンの両目に光が入り、宇宙規模のゲッターが全身からエネルギーの瀑布を生み出した。エネルギー体と化したゲッターの放つ光だけで艦隊がひしゃげ、粉々になっていく。ほとんど原形を留めていない立像達は恐れ戦いた表情を浮かべる。

『チエエイインジ！ ゲッターアアアアアアア、エンペラアアアアアア！』

轟く声にムサシは瞠目する。この声の主を、自分は知っている。し

かしまさか、という思いに囚われたムサシへと宇宙規模のゲッターの肩に乗った巴武蔵が目にする。

「これこそが、ゲッターの絶え間ない進化の可能性！ 全てを破壊し全てを生み出す皇帝！ ゲッターエンペラー！」

ゲッターエンペラーと名付けられたゲッターは口腔から気流を噴き出す。その気流が瞬く間に銀河と化した。そうか、天の川はゲッターの吐息だったのだ、とムサシはこの期に及んで見当違いの事を考えていた。

ゲッターエンペラーに対抗するべく坐像が両腕を掲げる。すると空間がねじれ、新たな立像が出現した。今度の立像は坐像の倍近くある。ムサシはスケール感覚がおかしくなりそうだった。

「ゲッターエンペラー。目標、如来軍団」

巴武蔵の声にゲッターエンペラーは立像を睥睨する。それだけで立像達が竦み上がった。一睨みで亀裂の走ったものさえもいる。

「破壊せよ！ ゲッター！」

『ゲッターアアアアアアアアアアア、ビイイイイイイイイイイイーム！』

宇宙に響き渡る声は聞き間違えようがない。ムサシはその声の主を呼んだ。

「リョウマ……」

その声を掻き消すかのように視界が一面緑色に染まる。放たれたゲッタービームは宇宙に衝撃を走らせた。空間そのものが鳴動し、今にも砕け散りそうである。ムサシは限界であった。この場を立ち去らなければ。そうでなければ自分はゲッターに吞まれてしまう。

巴武蔵が振り返り、ムサシに声をかけた。

「ムサシよ！ お前は知るだろう！ ゲッターの無限の可能性を！ 選ばれたのだから、知る権利はある。だが、他の二人は別だ！ いいか？ ゲッターはお前を選んだのだ！ ゆめゆめ忘れるなよ。選ばれた以外の種族は、皆——」

そこから先の言葉を聞く前にムサシはこの大戦争の空間から弾き出されるように消失していた。

第七話 「崩壊への序曲 3」

ハツと気がつくともメカニックや研究員達がベアー号に取り付き、自分に救命措置を施していた。ムサシの目が開いた事にミチルが声を上げる。

『よかった……！　ムサシさん！』

「俺、は……」

指先の感覚を確かめようとする。救護班がムサシの脈をはかっていた。

「脈拍、正常です」

『急にベアー号で昏倒されて。それで意識がなかったものですから。ムサシさんの言葉通りに放っておく事は出来ずに、私……』

自分はまだベアー号にいるのか。ムサシは周囲を見渡しベアー号のキャノピーとコックピットのアームレイカーを視界に入れる。

「俺は、ミチルさん。俺は、何時間くらい倒れていましたか？」

何時間、という問いかけにミチルは言い辛そうに返す。

『いえ、たった三分間ですけれど……』

またしても自分は時空を超えたのか。ムサシは自分の指先を確かめつつ救護班に手を払った。

「いや、もういい……。もう大丈夫だから」

『不安ですよ。ムサシさんにまで何かあったら、って』

「……俺にまで？」

まるで他の連中にも何かあったかのような言い草だ。ムサシが勘付いたのが伝わったのかミチルは答える。

『ハヤト……さんが、つい先刻、研究所を脱走したのです』

「ハヤトが……」

何故、という思いよりもムサシにはある予感がついて回った。ハヤトはあの世界での出来事を自分やリヨウマよりも克明に記憶しているはずだ。当然、この世界に馴染めるはずがない。

「確かめに行ったんだ」

どこへ、という主語は抜けていたがムサシには確信があった。重い

頭を振るって意識を鮮明に保とうとする。しかし意識の糸に緊張を走らせようとすると今度は先ほどの大戦争の様子が網膜の裏に再生された。思わず目をきつく瞑り、「ミチルさん……」と声にする。

『何でしようか?』

「ゲッターは、本当に人類の救済者なのか? 教えて欲しい。サオトメ博士に、直接聞きたい。本当に、ゲッターは人類を救えるのか。そもそも、このゲッターは」

その段になってムサシは計器の一つに触れ、どこか夢見がちに呟く。

「——このゲッターは、本物なのか?」

訪れたのは孤島であった。木の一本も生えていない禿げ上がった大地に小さな半球状の家屋があった。ほとんど鉄製で、ハヤトはインターフォンを押す前に壁を叩いてしまったほどだ。

「鋼鉄の家、か」

それを皮肉ったのは孤島の周りが全てプラネットシエルの外殻で覆われているからである。ここに居を構える主人はもしかすると絶対の孤独の中に浸りたかったのかもしれない。しかしプラネットシエルのネットワークがそれを許さなかった。

現にシキシマの居所を突き止められたのもプラネットシエルの管理するネットワークからであり、この孤島が真の意味で孤島であったのは三年前までだ。周辺の海域は埋め立てられ、最早残存する生命体はいなかった。そういう点では海ごと干上がった土地とも言えなくはない。緑一つない土は脆く、踏み締めるとからからに乾いている。

「草木を使って水を沁み込ませる、という事すら知らんのか」

そんな相手が果たして本当に目的の人物なのか。ハヤトには幾ば

くかの不安があつたがインターフォンを押してみる。すると、『どちら様かな』と電子音声が発せられた。ハヤトは即座に飛び退いた。

先ほどまで自分の頭があつた空間を引き裂いたのは赤い光線である。動物的本能がなければ確実に首を落とされていた。加えて警戒心を持つていた事が幸いした。まさか出かけに他人の首を搔つ切るような相手だとは思わないからだ。

「……危ない事だ」

『惜しいな』

扉の上から出てきたのはアイカメラである。単眼のカメラがハヤトの姿を拡大した。

『珍客だったものでね。このワタシを頼るなど』

「それもそうか。狂科学者、シキシマの自宅を訪問するなど、正気の沙汰ではないのかもしれない」

『おや、ワタシの事を知つてもなお訪問するといふのか』

「ああ。あんたに用があつてきた。こう言えば通じるか？ ゲッターのパイロットだと」

その言葉に扉がキイと音を立てて開く。誰かが立っている気配はない。

『罨ではないよ。来たまえ。話をしよう』

第七話 「崩壊への序曲 4」

ハヤトは一つ息をついて扉へと歩み寄った。今度は光線が発射されず、ハヤトは無事に邸内へと入る。その瞬間、視線をそこらかしこから感じた。一つ一つに視線を向ける事すら困難なほどの視線の渦。ハヤトはあえて気付いていない振りのまま入ってすぐの階段を降り始める。どこからか電子音声が聞こえてくる。

『すまないね。変わった造りで』

「いや。変人が住むには相応しい」

その言葉に笑い声が返された。

『手厳しいな。変人、とは』

「入ってすぐの階段、いや、インターフォンを押すや否や首を落としかかるレーザー。全く、客人への礼節も、ましてや歓迎などあり得ない。シキシマ博士、あんたは誰も信じていないんだな」

その言葉にシキシマの電子音声が答える。

『そういうのを見抜いたのは、この世では二人目だな』

一人目は想像に難くない。ハヤトは言い放っていた。

「あんたはサオトメ博士と何らかの対立の末、袂を分かった。その原因を、オレは知りに来たんだ」

早速来た意図を話すとシキシマの気配が薄らぐ。

『だとするならば、お前は客人だな』

瞬間、見張っていたと思われる無数の目線が離れ、ようやく暗がりの中に一人だけだと言う事を自覚出来た。

「この研究所、あえて研究所と言わせてもらうが……、あんたの身体の中みたいだな」

『当たり前とも遠からずだよ。ジン・ハヤト君』

自分は名乗った覚えはない。そう考えていると降り切った終点があった。地下空間が広が照り、その最奥に座している人影があった。緑色の電磁波がカプセルの中で光を放っているせいで逆光になって見えない。

「このエネルギー光体は、ゲッター線か？」

『その通りだよ。やはり君は聡明なようだ。今、ゲッター線だと分かるなり懐に忍ばせた銃を取ろうとしたな』

僅かな所作の差を見逃さないシキシマの声にハヤトは緊張を走らせる。視線は減ったが確かにシキシマは見ているのだ。

「ゲッター線を、容易く露出させていいものではないくらいは」

『心得がある、かね？ サオトメの下で何を学んだのか、あるいは盗んだのか知らないが、反政府組織のリーダーの面目くらいはありそうだな』

いつの間にそこまで調べ上げた？ しかしその疑問よりもハヤトは最奥に座すシキシマらしき人影が全く身じろぎしない事に気がつく。

「そこまでオレの事を知っているのなら話は早い。ゲッター線とは何だ？ 何であんたは、サオトメ研究所での所属歴がありながら、ゲッター線否定の論文なんて書いた？」

追放されるのは目に見えているだろうに。しかしシキシマは狼狽すらしめない。

『ワタシは、正しい事を、ただ正しく成しただけだ。狂科学者、だと思っっているだろう？ しかし真に狂っているのはサオトメのほうだよ』

「あんたも大概だ。こうしてオレを招きいれ、いつでも殺せるようにしている辺りがあの老人とさして変わらない」

哄笑が上がった。どこから見ている？ ハヤトは視線を走らせたがどこにでもいて、どこにでもないような、奇妙な感覚がついて回った。

『ワタシの事を恐怖しているのかね？ 先ほどよりも心拍数が上がっているが』

どこからかモニターしている。ハヤトは拳銃を取り出した。『おっ？』という声が上がった瞬間、引き金を引く。弾丸は座しているシキシマの影に突き刺さる。しかしシキシマらしき影はよろめいただけだ。死んだ気配もなければ、血が迸る事もない。

「オレは、あんたや、サオトメ博士の敷いたレールだけで生きていくの

は御免だ」

歩み出てハヤトは拳銃を突き出す。どこからか見ているシキシマが赤い光線を照射する。ハヤトは間一髪、ステップを踏んで回避した。

『ではどうするかね？ ゲッターに関わってしまった以上、君はもう地獄へと行くしかないのだ』

「それは、博士にも言われたな。地獄行きだと。だがな、シキシマ。あなたにも分かるだろう？ 地獄へ行くのにも、駄賃がいるんだよ」

ハヤトは銃を突き出したまま駆け出す。赤い光線が交差されハヤトの肉体を引き裂こうとする。立ち止まり、ハヤトは目の前のシキシマらしき影を見据えた。その眼差しの先には、白骨化した遺体があった。最奥で座していたのは最初からこの死体だった。ならば真のシキシマ博士はどこにいるのか。

「シキシマ。あなたはこの研究所そのものだな？」

見通したハヤトの声に、「参った、参った」と白骨死体が嗤う。死者の笑みにハヤトは眉をひそめた。

「ワタシの手品がばれるとは」

本当に、ただ手品を披露しただけのような言い草。しかし赤い光線は確かに自分の眼前にあり、これを超えれば死は免れない。

「心拍数が正常値に戻ったね。この死の瀬戸際にて、よくもまあ、落ちて着けたものだ」

「あんたや、博士、それにお荷物二人に振り回されたせいで、ちよつとやそつとじゃビビらなくなっちゃった」

殺気は確かに存在する。しかしそれ以上に、シキシマにあるのは好奇心だ。ここを突き止めたハヤトの頭脳に興味があるようである。

「やれやれ。この身体もね、動かすのに苦労はするんだ」

白骨化した遺体の頭蓋に金属製のチューブが通っている。どうやら内部には機械部品が詰まっているらしい。

「狂気の科学者は自分の死に様さえも作品にするか」

「狂気に染まった自負はないよ。言ったらろう？ おかしいのはサオトメのほうだと」

白骨遺体のシキシマはそのまま歩み出た。足の筋の代わりに人造筋肉が備え付けられている。白骨遺体、というよりもこれはサイボーグだ。

「この身体に自分を下ろすのにもなかなか面倒があつてね。だから君を試すついでにダウンロードした。最新のバージョンのワタシを、ここにインプットさせてある」

こめかみを突いたシキシマは確かに狂っている。狂っているが話せないほどの人物ではあるまい。ハヤトは拳銃を仕舞った。

「いいのかな。ワタシはこれでも全身武器だが」

「構わんさ。オレは話をしに来たただけだからな」

ハヤトの姿勢にシキシマはガタガタと頭蓋を揺らして嗤った。死者の笑み。しやれこうべの笑い声。

「全く、飽きんよ、君は。ワタシを突き止めた、という事は、だ。ある程度の推論に至っている。違うかね？」

シキシマの声に、食えないな、と認識しつつハヤトは話を切り出した。

「先の戦闘で、オレを含むゲッターチームは放散爆発に巻き込まれ、別の惑星に降り立った。いいや、降り立ったと誤解していた」

「誤解？ ふうむ」

シキシマは興味深そうに聞いている。ハヤトは話を続けた。

「放散爆発の向こう側、当然ネフィリム、レプリカントの巣窟だと判断した。しかし、現に存在していたのはこちら側と寸分変わらぬ地形の惑星と、その惑星で頂点を極めた人類だった。レプリカントはいなかった」

ハヤトの声に、「それにしては」とシキシマが声を挟む。

「何か気になっていそうじゃないか」

ハヤトはあちら側の世界の事を事細かに話す事に決めた。どこから話すべきか決めあぐねていたがまずは軍事だろう。

「あちら側では、ゲッター線兵器が存在した。その時点で、オレはおかしいと感じたんだ。何故なら、サオトメ博士の理論ではゲッター線兵器はネフィリムにとって有害であり、そのお陰でオレ達は戦えている

のだと」

「その根底条件を揺るがしかねない、というものを見たのか」

「ゲッターステルス。向こう側の主兵器だった」

ハヤトは懐に仕舞っておいたゲッターステルスの写真を差し出す。シキシマが受け取り、眼窩の奥に備え付けられているカメラで拡大している。

「これは、ゲッター線兵器だが、意匠がまるでネフィリムそのものだ」
「オレもおかしいとは感じた。どうして相手側の兵器の規格に合わせたゲッターがいるのか？ ひよつとして、あの世界はこの先、レプリカントの侵略にあった挙句の、成れの果ての世界なのではないだろうか、と」

「その推論を誰に話した？」

ハヤトは打ち明ける。

「向こう側の、早乙女博士だ」

早乙女という名前。こちら側と同じだが文字が違う。今はもう使われていない文字基準を使っていた。

「早乙女、という文字は、オレ達が生まれるずっと前に死滅した文字、古代文字であった」

シキシマは話を聞きながらゲッターステルスの写真を解析する。どうやら本物かどうかを判断しているらしい。

「ゲッター、か。ワタシもゲッターの道楽には付き合った事がある」

「調べさせてもらった。シキシマ博士。あんたは、ゲッターの、武装部門の生みの親らしいな」

シキシマは感心したように、ほう、と息をつく。

「ワタシの、封印された技術特許だが。もうサオトメのものになっていたかと思っていたよ」

「サオトメ博士はこういうところでヘマをする。だからオレのような人間に勘繰られるんだ」

実際、この情報があったのはミチルの管理下にあるシステムの、本当に隙間の部分であった。目を凝らさなければ一生発見出来ない場所だ。

「君も好きだねえ。この情報、得るのに結構大変だったんじゃないか？」

「だな。だからこそ、オレはリターンが欲しい」

ハヤトは指先を曲げる。シキシマは頭蓋骨を傾げた。

「リターン、とは？」

「シキシマ博士。あんたが狂っていきようがオレには何の関係もない。ただ一つ。あんたは真実を知ったはずだ。オレが向こう側で聞いたのと同じか、あるいはまた別の真実を。だからこそサオトメについていけなくなつた」

「離反の原因は思想の違い、という事か」

他人事のような口調だがシキシマからしてみればもう他人なのかもしれない。事実、もう自分は死んでいるのだから。

「何だ？ あんたは何を知ってサオトメについていけなくなつた？」

「ジン・ハヤト君。君は、この世界がどこまで完璧だと思うかね？」

唐突な質問だったがハヤトは戸惑わずに答える。

「プラネットシエルの恩恵がある場所は、ことごとくだらうな。実際、その恩恵のない月面では苦労したさ」

「月面……。なるほど、それも君が疑念を持つ理由の一つか」

見透かされている事にいちいち驚く事もなくハヤトは首肯する。

「月面で、オレは最高指揮官に言われた。レプリカントと真の人類の決着は既に三百年前についている、と。最初は意味が分からなかったさ。現在進行形でレプリカントは攻めてくるし、ネフィリムの脅威は増すばかりだ。決着などついていない、とオレは言ったがどうやらその前提が間違いだつたらしい」

ハヤトは幾ばくかの沈黙の後にシキシマへと尋ねていた。

「オレ達の赴いた次元は、あの次元は未来でも、別世界でもない。あれは過去であつた。真の人類とレプリカントが戦争する、過去世界であつたのだ」

ハヤトの結論にシキシマは興味深そうに応ずる。

「その仮説は大変に魅力的だが、穴があるね。どうして、過去から未来へと、ネフィリムとレプリカントが攻めてくる？」

「オレにもそれは謎であったさ。だが、考え方だ。そもそも偽人類と真の人類を見分ける術は？ オレは知っているぞ。そんなものは存在しない。遺伝子を解析し、強制的に見出さない限り、九割以上の確率で偽人類も、真の人類も同じなのだ」

「だが奴らには爪も牙もある。それをどう説明するかね？」

「簡単な事さ。それは逆なんだ」

ハヤトの確信めいた声にシキシマは面白がって尋ねる。もう結論は出たも同然なのだ。

「逆？ 逆とはどういう事か？」

「真の人類こそが、爪も牙も得た。オレ達はゲッターから重量子爆弾で滅亡させられる一種の人類の姿を見た。では問おう。誰が？ 一体誰が、重量子ミサイルの発射を宣言した？」

ハヤトの命題にシキシマは答える。と言つても、ほとんどハヤトの反応を見ているだけだ。

「国家」

「ノン。国家の縛りは最初に存在しない。それはゲッターステルスからして明らかだ。あのようなものを一国家が所有していたとは考え辛い。量産機なのだからな」

「ではそれこそ別の種族だ。侵略種族がいた」

「それも考えたが、ノンだ。別の種族の可能性、それはあった。そもそもレプリカントが重量子爆弾を落とした。そう考えるのが一番であった」

「では敵はレプリカントだった」

結論に至った命題にハヤトはさらに疑問を呈す。

「では、消滅した種族は？ 彼らは何だったのか？」

今の命題と解答が成立する場合、生き残っているのは真の人類ではない。

「それこそ大昔の戦争だった。その惑星は別の銀河にあり、ゲッターは真に空間と惑星を移動した」

「それは限りなくゼロに近い。膨大な宇宙があるといえども、全く緯度も地軸も、地形も、何もかも一致する惑星が存在する可能性。その

惑星に漂着する事、それそのものがあり得ない。ならば、オレはこの惑星の過去に飛ばされたのか、あるいは未来に行つたのか、と考える。そのほうがしつくりくる」

「では未来だった」

ハヤトは頭を振る。

「そうであつたのなら、ゲッターが残っているのはおかしいんだ。ネフィリムもレプリカントも、ゲッター線が弱点なのだから。どうしてゲッターをメインとした未来が待っている？ 敵もないのにゲッターは何を想定して造られていると言うんだ？ それこそあり得ない」

「もつと物事を単純に考えてみてはどうだろうか。別の侵略生物によつて惑星の存続は壊滅的だった。だから、ゲッターを使っている」
「それも考えたさ。だがね、それにしてもオレ達への待遇がよ過ぎたんだ。外宇宙から来る敵を想定したにしては、大気圏からやってきたオレ達への理解が早かつた」

それらを加味した上での結論は、やはり過去世界であつた。

「ゲッターステルスが現行で使われているゲッターよりも高性能であつた事の証明はない」

「そうだな。しかし、こつとも言える。現行の最新兵器であるゲッターロボに乗っているオレ達、いいや、オレが相手のほうが高性能だと感じた」

「現場の意見だな」とシキシマは嗤う。ハヤトは付け加えた。

「それに、向こう側の、早乙女博士の発言もあつた」

「興味深いね。君は向こう側で早乙女に何と言われたのか」

何と言われたのか。リョウマやムサシには明かしていない事実を、ハヤトは思い返していた。

第七話 「崩壊への序曲 5」

「何のつもりだ？」

ハヤトの声に前を行く早乙女が顔を振り向ける。

「何の、とは？」

「オレ達に対する態度が、あまりにもよ過ぎる。オレが推測するに、お前達はオレ達の呼ぶネフィリムやレプリカントの主であるはずなんだ」

ハヤトの糾弾混じりの声に早乙女は嘆息をついた。

「ネフィリム……。そう呼ばれているのか、彼らは」

初めてそれを知ったような言い草にハヤトは困惑する。相手はそうと分かっただけで侵略行為を進めているのではないのか。

「待つて欲しい。人類に、宣戦布告したのは、あんたらだ」

「確かに宣戦布告はした。だが人類に？ まさか」

早乙女は嘲るように口にする。

「もう人類は統一された意思の下、合い争う事なんてないのだよ。今までの諍い、付和など大宇宙の意思の前では無意味だという事に気付けたのだ。この惑星の人類は物分りがよかった」

この惑星の、と区切った辺りに引っかけかりを覚えつつもハヤトは尋ねる。

「物分りがいい？ ならば何故、侵略してくる？ オレ達の世界を奪おうとするんだ？」

「誤解があるようだから言っておこう。人類同士、あるいはもつと簡単に言いかえれば、ゲッターに選ばれた存在同士が戦うのは非常に無意味で、理解に苦しむのだよ」

ゲッターに選ばれた？ ハヤトは問いを重ねる。

「ゲッターに、意思でもあるような言い草だが……」

「その通りだ。ゲッターには意思がある。その意思が命じたのだ。この惑星を引き渡せ、と」

「何だと？」

驚愕の事実にはハヤトは緊張を走らせる。比して早乙女は冷静で

あつた。

「引き渡せ、と言つても何ら不都合はない。我々は死んでも光の中へと還れるのだから」

早乙女の言葉に何らかの宗教か、とハヤトは判ずる。それを見透かしたように、「原始宗教は」と早乙女が続けた。

「全てゲッターの意思の代弁者であつた。ゲッターが何を言つていいのか、噛み砕くために言語があり、救世主がおり、世界があつた。ゲッターの意思、それ一つで惑星の文明が動いた。この惑星は、今にゲッターの意思通りに進むため準備を始めている」

「それが、ゲッターステルスか？」

ハヤトの問いに、「あれは尖兵だ」と早乙女は答えた。

「ゲッターの、いずれ来る大戦争に備えて、我らも準備をせねばならぬ。その軍勢に入るための、試験のようなものだ」

ハヤトは額を押さえて後ずさつた。早乙女の言葉の半分も理解出来ない。

「理解が不能、か。分からなくもない。最初にゲッターの意思を受信した人間は狂人とされてきた。集団の異端者だ」と

「博士、あんたもそうではないと？」

「ワシはな、ジン・ハヤト。ゲッターさえあれば何もいらん。そうとさえ思えてくる。この胸を満たすのは充足感だ。ゲッターの存在が、ワシの心を満たしているのだ」

胸元を引つ掴んで早乙女は訴えかける。しかしハヤトにはそれさえも狂人ではないのだと判じる術はない。

「……分かんたろうさ。しかし、その決定的な違いがもうすぐ訪れようとしている。ある一つの生命の終点、この惑星における循環が巻き起こる」

「それも、ゲッターが教えているというのか？」

冗談じみた声にサオトメはこめかみを突いた。

「ゲッターに選ばれた人類達の中でも、ワシは特別耳がいい。ゲッターの声が聞こえてくる。囁いてくる。もうすぐ滅びが訪れる、と」

「滅び？ お前らが、か？」

「ワシらが、ではないよ。この惑星上で、全ての人類が同じ意思に統率された。だから戦争は起きないはずなんだが、ワシらは一つだけ、禁を破ってしまっていた。ゲッターの囁きが聞こえてくる頃にはもう遅かった。神の領域に、手を伸ばしていたのだ」

早乙女が中空を掴もうとする。ハヤトはその迫力に気圧されたように訊いていた。

「何を、造ったんだ？」

早乙女は口角を吊り上げて言い放つ。

「人間だよ。もう一つの人間の形を、ワシらは造り上げた後だった」

「人間。人間か」

ハヤトの話を黙して聞いていたシキシマはその響きがおかしくって仕方がないように笑い声を上げる。ハヤトはそのような気分になれず、沈痛な顔を翳らせた。

「太古の昔、神は土をこねて自分の似姿を造った。最初の人間、アダムは神の造った土人形だった」

「博識だな、ジン・ハヤト」

シキシマの賞賛を風と受け流し、ハヤトは言葉を継いだ。

「そういう事だったらしい。つまり、神に成り代わった人類は、もう似姿レベルならば造れたんだ。一つの大陸を与え、一つの文明を与え、一つの言語を与え、もう人類は新たなフロンティアに旅立とうとしていた。旅路は、ゲッターが大宇宙で戦争を繰り広げる前線へ。ゲッターの進化の先を目指すために、その戦線へと加わろうとした、その準備期間にオレ達は訪れてしまったのさ」

「軍備増強。つまり、その一端こそが」

そこまで言葉を継がれてハヤトは言わざるを得なかった。

「ネフィリムであった」

悪魔の胎児

事の真相を話し終えたハヤトは少しばかり楽だった。サオトメ研究所では決して誰にも打ち明けられなかった上に、言っても狂人扱いだろう。

白骨の狂科学者は、「それが全ての始まりか」と呟く。
「終わりでもあった」

ハヤトはそう答えるほかない。何故、あの時間軸だったのか、それだけが謎だったがそれこそゲッターの、大宇宙の意思が見せたかったのかもしれない。一つの種の終わりとは、かくも虚しいものなのだと。

「重量子ミサイルを撃つたのは、やはり我々なのだな」

シキシマは今の説明だけで理解したらしい。サオトメとは違うベクトルでの天才か、とハヤトは納得する。

「ああ。それこそ我らの原罪だった」

煙草を、ハヤトは懐から出す。一服つかなければやっていけない話だった。シキシマも指を差し出す。どうやらこの白骨遺体、煙草を吸うらしい。ハヤトは一本渡して火を点けてやった。眼窩と頭蓋の穴から煙が棚引くのは不気味だったが、今しがた話した事実比べれば動く死体など生易しい。

「この事実を、どう説明すればいい？ オレは、リヨウマにも、ムサシにも言えず仕舞いだった」

「リヨウマ、ムサシ。それがゲッターチームか」

シキシマはゲッターチームの情報までは手に入れていないらしい。ハヤトが説明しようとする、「今分かった」とシキシマは答える。
「ナガレ・リヨウマ。ベータ部隊のエースか。なるほど、ゲッターの第一のパイロットに選んだのは間違いいではない。トモエ・ムサシはルナリアンだな。ネットワークが隔絶されていて月面の情報は全く手に入らなかったがサオトメ研究所にあるネットワークからある程度は仕入れられる」

ハヤトはその言葉に確信を新たにする。

「やはり、シキシマ博士。あんたはサオトメ研究所にアクセス出来るのだな」

あの難攻不落の要塞にアクセスし、何の足跡も残さない方法を心得ているのだ。シキシマは、「いい方法を一つ教えてやろう」と片手を持ち上げた。

「二回死んでみるんだよ。そうすればどこでも入り放題だ。何せ、死人の足跡なんぞ追っても意味がないんだからな」

「違うない」

ハヤトは納得しながら紫煙をくゆらせた。レプリカント云々に関する事実も、死人ならばどこまでも客観的に見られるだろう。

「レプリカント……、偽人類の真相をどうするべきか。オレには判別がつけられない」

「意外だな、ジン・ハヤト君。いいやもうハヤト君と呼ばせてらおうか。そこまで知ったのならば分かるだろう？　ワタシが何故、サオトメを信用していないのか」

「サオトメ博士はどうしてだかこの事実を秘匿し、レプリカントとネフィリムを人類の敵に見立てた。現状の管理システムを作り出したのは間違いなくサオトメ博士だ。シキシマ博士。あんたは、その秩序に異を唱えた」

「偽りの人々が偽りの秩序を享受する。まさしく偽の上に塗る偽。それを恥だとも思わないのは、どうしてだか人間として許せなくなつてね」

「人間、か」

その定義すら、最早曖昧な部分になってしまった。ハヤトは再び言葉にする。

「レプリカントは、偽物は、オレ達自身……。この惑星に繁栄した、人類はかつてもう一種類いた。そちら側こそがゲッターに選ばれた人類だった。……しかし何故だ？　ならば何故、あのゲッターは動く？」

「君達の乗るゲッターロボは、あれは何よりも偽物だ、という事だろう」

シキシマの見解にハヤトは腑に落ちる事が多々あった。ヨロイのゲッターの存在。明らかに性能で劣るこちらのゲッター。さらに言えばプロトゲッターを何故、レプリカントが動かさせたのか。それらの答えは全て、偽人類がこちら側である事を示唆している。

「驚きだな。あれだけの化け物がそれでもまだ偽物だとは。ならば真のゲッターは、どれほどなのか」

「サオトメはゲッターの意思を継ぐつもりはない。ワタシはだからこそ反対したのだ。この惑星に巢食うゲッターの遺伝子を駆逐し、ゲッターの守り手を破壊する。それこそがサオトメの目的」

「あのネフィルムが全て、ゲッターロボであった。その事実……」

しかし分からぬ事もある。過去世界の人々は何故、それでもなおネフィルムを送り続けてきたのか。何らかの目的があったのではないのか。

「未来世界の救済にしては、過去から送られてくるネフィルムは多い。それに加えて、迎撃されるという事は、失敗だと分かっているはず。それでも送ってくる理由とは何だ？」

シキシマは立ち上がりモニターの一つに電源を入れる。そこに映し出されていたのはプラネットシエルに覆われた惑星だった。衛星カメラを使っているのだろう。

「銀色の外殻に覆われた我らが母なる星よ」

かつて自分達もその殻を砕こうとした。何の意味があるのかも分からずに。しかし、今ならば理解出来る。殻を割る事に意味はあったのだ。

「何かが、サオトメ博士は何かの覚醒を恐れて、プラネットシエルを推進したのだな？」

ネフィルムとレプリカントの脅威は絶好の隠れ蓑だ。それを言い訳にすればプラネットシエル程度の文句は通る。

「これはワタシの推測だがね」と白骨のシキシマは手を掲げた。

「秘密があるとすれば、この惑星そのものではないのか。つまり、惑星そのものを銀色の外殻で覆い、管理する必要性があった。サオトメは、この惑星を制御下に置かねばならなかった」

「何を覆い尽そうとしていたのだと思う？」

ハヤトの質問にシキシマは、「君のほうが真実に近い」とからからと嗤った。

「……早乙女、向こう側の早乙女博士は言っていた。ゲッターの意思。全ては大宇宙の意思であり、それに沿って計画は進められているのだと。オレには、最初その意味が分からなかったが、一度ゲッターの声を聞けば今もな。少しだけ聞こえるんだ。ゲッターの声だ。そして、間断なく重なる鼓動が。脈動が」

ハヤトの耳朶を打っているのは決して幻聴ではない。この脈動は自分のものではなく、もつと大きな存在のものだ。すぐ傍に巨大な生き物の気配を感じられる。この惑星の、どこにいてもそうだった。特にサオトメ研究所ではそれが顕著であった。誰も、その音が聞こえていない事が不思議なほどだ。

「最初は、頭がおかしくなったのではないかとオレも疑ったさ。しかしそれ以上に、オレが確信していたのはあちら側の世界での出来事が必要不可欠であった。オレ達、いや、このジン・ハヤトがゲッターについて知るには一度あの世界を体感せねばならなかった」

ハヤトは煙草を捨てて踏み消す。シキシマは、「求道者か」と呟く。「同じ眼をしとるよ。サオトメと君はね。どこまでも自分の道を問い質す求道者の眼だ。そして、それが間違っているなど露ほども感じていない」

「当たり前だろう。オレは、真実が知りたいただけなのだから」

シキシマはくつくつと笑う。

「長生き出来んよ」

「ゲッターに乗った時点で、長生きなんて考えちゃいない」

ハヤトの言葉にシキシマは、「よかろう」と手を掲げる。

「見せるのは君が初めてだ」

シキシマの白骨化した指先からさらに極小のサブアームが伸長し、高速のタイピングを可能にした。瞬時に組み上がったプログラムが送信され、先ほどの衛星画像に色を添える。

その映像は驚嘆すべきものだった。

「惑星の中に、何か、いる……」

そうと形容するほかない。X線か、あるいは熱源反応だろう。透過された惑星の核に近い部分に、地殻ではない、何かの物陰があった。身体を胎児のように丸め、惑星の中で息づいている。ハヤトは思わず後ずさる。

「これは……」

「ワタシが発見したが、サオトメは揉み消した。このような事実は存在しない、と。その後だ。たちまちワタシの研究は糾弾され、サオトメ研究所から半ば追放の憂き目にあつた。それも全て、これが原因であるの言うまでもない」

「胎児、のようだな」

「そう。ワタシはこれをこう名付けた。エンブリオ、と」

エンブリオ。その言葉に惑星の中に潜む謎の生命体が脈動を走らせたのが感知させられた。この惑星は、怪物を内に抱えたまま生きていくというのか。

「早乙女博士も、同じ事を言っていたな。エンブリオのために手を取り合うべきだとも」

「ワタシはそんな思想には反対だな。何せ、こいつはゲッター以上の破壊神、いいや、ゲッターそのものとも言える」

シキシマの言葉にハヤトは眉根を寄せる。

「どういう意味だ。エンブリオとゲッターには、因果関係があるのか？」

「ハヤト君、ゲッターに乗っているのならば知らないかね？ 地獄の釜の存在を」

サオトメが隠しているサオトメ研究所地下に眠るゲッター線の地獄。その番人、プロトゲッターが思い起こされハヤトはハッとす。

「地下のゲッター線量が膨大なのは、偶然ではない……？」

「ようやく気付いたか。ワタシは何年も前にそれを提唱しようとして追い出されたのだ。地下に眠るゲッター線。ゲッター線兵器を造る上ではなるほど、確かに有効ではあるし、何よりも守らなければならぬものだ。だが、その守りを鎖に繋がれたプロトタイプのゲッター

が成しているのだと知った時、ワタシは素直に信じられなくなった」
「プロトゲッターが成立したのは、つい数年前ではないのか？」

ハヤトの疑念にシキシマは頭を振る。

「違う。これは物事の前後の問題だが、サオトメ研究所がゲッターを造ったのではない。ゲッターがあるからサオトメ研究所があり、プロトゲッターを造ったのではなく、プロトゲッターがあつた場所に在つたのだ」

シキシマの言葉にハヤトは理解に苦しむように額に手をやった。

「……だとすれば、いや待て。そもそもサオトメ研究所はいつからあつた？ どうしてサオトメ博士はゲッターロボを、何の原型もないところから造り出せた？ 全ては、素体があつての事だ。そのはずならば、素体を造つたのは誰か……」

「素体を造つたのは、ゲッター線に適合した人類のほうだろう」

——ゲッター線は敵ではない。

レプリカントの発した言葉が今さらに思い出されハヤトは全てが繋がつたのを感じた。

「レプリカントにとつて、ゲッター線は害毒ではなかつた？」

ある種の推論だつたがシキシマは首肯する。

「だとすれば、何故、ネフィリムはゲッター線兵器であるゲッターに弱い？」

「あれは弱いのではないよ。ベクトルの違うゲッター線なのだ」

「……どういう意味だ？」

シキシマはカプセルへと身体を向ける。緑色のゲッター線。その光がスパークを起こしていた。

「ワタシは、我らの発見したゲッター線はもしかすると原始的な、とても微弱なものではないのか、という推測を立てた。何故ならば、光体としては不完全に過ぎ、純粋なエネルギーにしては危険が多いからだ。これでは一般流通など出来ない。だからワタシはこう考えた。このゲッター線は原初のものなのだ」と

「オレ達のよく知るゲッター線が、原初？」

「原始的、と言い換えたほうが適切かもしれないな。ゲッター線は何

の加工も、あるいは年季も入っていない状態だと、この緑色の常態になるのではないか、という推論だ。これに、ある種のスペクトルを混ぜて年数を経たものが、これだ」

シキシマが手を掲げると床からせり出されてきたカプセルがあった。ハヤトは瞠目する。

赤い光が、カプセル内でぶつかり合って干渉している。

「赤い、ゲッター線」

「ワタシはこれを、次世代のゲッター線、ネクストゲッター線と名付けた。レプリカントとネフィリムの用いるのは、あの赤い光はネクストゲッター線である可能性が高い。つまり、この惑星に順応し、ある程度の進化を遂げたゲッター線ではないのだろうか」と

「待つて欲しい。ゲッター線は、では進化すれば赤くなるか？」

「二つの派生系として、この赤い光がある。純粹進化を繰り返しても、緑色のままの場合もあった。恐らくは亜種なのだ。ネクストゲッター線は、ゲッターという進化の一つの可能性」

今まで敵だと思い込んできたネフィリムがゲッター線の亜種であり、ゲッターロボであった。その事実はハヤトに震撼をもたらしたが同時に納得もあった。何故、ゲッター線でなくてはネフィリムを即時迎撃出来ないのか。亜種を駆逐するのに純粹種が最も相応しいではないか。

「ヨロイのゲッターも、赤いゲッター線であった」

「この惑星の進化に引かれたか、あるいは、先に言ったエンブリオに関連しているのかもしれない」

「シキシマ博士。あんたは、ヨロイのゲッターに関しては、何か？」

返答如何によつては、とハヤトは銃のグリップを握り締める。しかしシキシマは首を横に振る。

「何も。残念ながらね。あのゲッターがいつから、どこにいたのかなどまるで分からなかった。最近のサオトメ研究所のデータベースに上がったのが最初だ。だからワタシはあのゲッターに関しては知らんよ」

「まるでサオトメ博士は知っているかのような口ぶりだ」

指摘するとシキシマは、「そうとも言える」と応じる。

「サオトメは、奴はこのヨロイのゲッターに関して何かしら知っていて、黙っている可能性がある。そもそもワタシのような凡才とて、赤いゲッター線が亜種だという事に気付けた。あの——悔しい事だが、天才、サオトメが、亜種だと言う事を見抜けないはずがない」

そうだとすれば全て知っていた上でどうしてサオトメはネフィリムを駆逐せねばならなかったのか。疑問は深まるばかりである。

「亜種、である事を前提条件に話を進めるが、ゲッター線の亜種であるネフィリム、ヨロイのゲッター。この二つが共謀している可能性は？」

「無きにしても非ずだが、それは君達の戦闘データが否定していてね」

ゲッターとの戦闘データ。しかし純粹種のゲッター線対亜種のゲッター線と考えればしっくりと来るではないか。

「亜種と純粹種の、潰し合いだった、とは」

「考えられんね」

シキシマは即座に否定する。

「何故だ」

「そうなれば、ハヤト君。君の言っていた事実と相反する事になる」

あちら側の、過去世界で聞いた物事が成り立たない。ゲッターの意思通りに物事は進んでいるという事が。

「それこそ、向こうの早乙女博士の勘違いであった」

「それはないな。同じサオトメの名だろう？ オリジナルであれ、レプリカントであれ、差はない。そう感じられる。もし、ゲッターの意思とやらが全て物事を進めているのだとすれば、純粹種のゲッター線から進化を果たした亜種のゲッター線に対して施しを授ける意味がない」

「純粹種のゲッター線を残す、か」

もしも大宇宙の意思とやらが存在するとすれば、の話だが、大げさすぎてハヤトにも確証はない。

「亜種のゲッター線が宇宙の残りカス、言ってしまうえば間違いの上になり立っているのだとすれば、ゲッターの意思は味方するはずがない

のだ。どうしてゲッターの声を授けたのか。その命題にこそ、答えはある」

ハヤトはいくつか想定した答えがあったが、一つだけ明確なものがあった。

「この推論は、あまり自信がないが」

「言ってみるといい」

シキシマに促され、ハヤトは言葉にする。

「ゲッターの意思は、エンブリオを守る意思のある者、意思のある種を選んだとすれば？　つまり、亜種であろうが、純粹種であろうが、どうでもよかった。エンブリオを敵視するかしないかで、施しを受けさせるべきかを判断していた」

さすがに飛躍し過ぎか、と感じたがシキシマは、「なるほど」とその答えに納得する。

「エンブリオが、全てのルーツであった。このエンブリオ、ワタシの研究では純粹ゲッター線の放出に関係していると思われる。模式図を用意した。これを見たまえ」

モニターに映し出されたのは先ほど影しか見えなかったエンブリオの全体の予想図だ。その姿に息を呑む。

「これは——ゲッターじゃないのか？」

一対の角。亀甲の図柄の並んだ顔面、未発達四肢を持っているその姿はゲッターを想起せざるを得なかった。

「その通り。ワタシは、この惑星のゲッター線の源が、このエンブリオにあったのではないか、と考えている」

「待つて欲しい。ならば、過去世界でオレの見た連中は」

ハヤトの推測にシキシマは先んじて答える。

「そう。ゲッター線をこのエンブリオに頼る方法論を見出し、これこそがゲッターの意思だと考えていた可能性が高い。あるいは知っていたのか。ゲッターの意思が、これを守る者にこそ使命を与える事を」

ゲッターの意思の集った胎児。その姿も併せてハヤトはこう呼称せざるを得なかった。

「……ゲッターエンブリオ」

第七話 「崩壊への序曲 6」

「ワタシもそれを考えていたのだ。このエンブリオはただの胎児型のゲッター線放出体ではなく、むしろゲッターそのものではないか、とね」

飛躍しているが、ゲッターからゲッター線が放出されるのは既に実証済みだ。ハヤトはよろめいて呟く。

「何てこった……。この惑星は、最初からゲッターの、その卵だったってわけなのか？」

「正しくは母体であった、というべきかもしれない」とシキシマは補足する。

「惑星のエネルギーを吸い上げ、全てを枯渇させてまでも、このゲッターエンブリオは成長を続けようとしている」

その言葉に早乙女の事実が重なった。ゲッター戦役に加わる事には既にこの惑星は存在しない。

「まさか……。ゲッターエンブリオが生まれる事を、過去世界の人々は知っていた？ 知っていて、この時間軸にネフィリムを送っているのか？」

ハヤトの言葉を受け止めてシキシマは、「そう考えると」と口にする。

「ネフィリムを送っているのは胎児の守りか。なるほどな。何も考えず数だけを送ってくるわけだ。当然、最初のほうはエンブリオ自体を傷つけないために弱いネフィリムが送られてくる」

「強化されていくネフィリムは、胎児の成長速度を試算しての事だった……」

ネフィリムにレプリカントが乗っているのならばその成長記録の意味もあったのかもしれない。しかしそのネフィリムが次々に迎撃され、過去世界へと戻されていけば焦りもするだろう。

「過去世界の人々はネフィリムによる観測が出来ない事に業を煮やしている頃合だ。本気が来るぞ。それこそ、未来世界の、我ら偽人類を

本当に殺すためのネフィリムが、今に……」

シキシマの予言に、ハヤトは額を伝う汗を拭う事も出来なかった。

何もかもが不明のまま、事態だけが転がっていく。

齒噛みする間もなく、ハヤト脱走とムサシの異変が耳に入り、リヨウマは自室で動けずにいた。自分はどうするべきなのか、まるで分からない。誰かが告げてくれれば早いのだがこういう時、道を示してくれるハヤトがいないのは痛かった。

「おれは、どうすりゃいいんだ……」

『リヨウマさんは、何もせずともいいのだと思います。今は、休息されては』

「んなわけにはいかねえのさ。おれは戦い続けなきゃならねえ」

あの異世界で見たゲッターと似た人々。それらをミチルに言及しようとしても恐らくはサオトメが握り潰す。サオトメは自分がゲッターを動かす適度なパーツとしてしか考えていないだろう。そのパーツが二個も損傷した。最後の一個である自分だけはどうしてもここで踏み止まらなければならない。

発狂も、脱走も出来ず、ただただ、ゲッターの戦闘を待つだけ。これでは死んでいるのも同じだ。

「なあ、ミチル。タツヒトが、生きてりやよかったんじゃねえかな」

だからか、弱気な言葉を発してしまう。ミチルは、『とんでもないと声にする。』

『リヨウマさんがいなければ、ゲッターロボは稼動していません』

「でもよ。おれが来なければタツヒトは死なずに済んだ。ひよつとするとよ、おれは疫病神なのかもしれないねえって思うときもあるのさ。ムサシを月面からこの惑星に連れて来たのもおれだ。ムサシは、月面で仲間と一緒にいつまでも暮らしていたほうが幸せだったのかもしれないねえ」

『そんな……！ リョウマさんは、誰よりもよくやっています！ 誰よりも、人類の平和を』

「その平和つてのも、よく分からなくなっちゃった」

果たして人類の平和は本当に必要なのか。異世界で目にした物事がちらつき、一枚岩でない事を物語る。自分は何を信じて、戦えばいいのだ？ ここに来て正義が揺らぐ。ネフィリムを倒せば人類に明日があると思いついてた。ベータ部隊で戦っていた時はそれだけ考えればいい。しかしゲッターに乗ってから、その事実は一変した。陰で死んでいく人々、ゲッター線という魔性に誰もが取り憑かれていくようだ。亡霊達を一度は振り払ったと思っていた。だがここに来て亡霊の魔の手が囁くのだ。

——惨たらしく死ぬ。

安息を許してはくれない。ゲッターに乗らぬのならば存在価値はない。逆にゲッターに乗るのならば、最も惨い方法で死ぬと命じる。リョウマはベッドの上で身体を折り曲げた。

誰も助けてはくれない。自分より先にハヤトとムサシが参ってしまったのだ。ここで自分まで逃げるのは筋違いである。

その時、ミチルが何かを感じ取ったように声にした。

『面会人……？ リョウマさんに？』

その言葉にベッドから身体を起き上がらせる。

「面会人……。こんな時に誰が」

『通してもらおうとごねている？ でも博士は絶対に許さないでしょうに……。えっ、許可は出た？』

ミチルも信じられないように声にする。リョウマはぼんやりする頭で誰が来るというのか、考えていた。

『……リョウマさん。面会人です』

「誰だよ。ハヤトも、ムサシもいねえぞ」

『あなたにですよ、リヨウマさん。タツマ、と言えば分かる、この事です。』

タツマ。その名前にリヨウマは目を戦慄させる。どうしてこの場所にタツマがやってくる。理解出来ないでいるとミチルが尋ねた。

『どうします？ 博士の許可が下りたとはいえ、面会、という場合にはないでしょうし』

ミチルは自分を慮ってくれている。しかしタツマとなれば、リヨウマも避けて通る事は出来ない。自分の分身であり、誰よりも理解者であるからだ。

「……分かった。会おう」

第七話 「崩壊への序曲 7」

「よう、リヨウマ」

タツマは見張りを立てられ、なおかつ両腕を拘束された形で現れた。まるで最初の日にはサオトメ研究所でこねていた自分の鏡像だ。

「タツマ……」

それに比して今の自分の境遇はどうだ。拘束もなく、タツマを逆に迎える側になっている。数十日前には考えられなかった状況である。

「ミチル。タツマの拘束を解いてやってくれ。それに見張りも要らない」

『しかし、それではリヨウマさんの身の安全が』

「いいんだよ。こいつは昔ながらのダチなんだ」

リヨウマの言葉にタツマの両手を拘束していた手錠が外され、見張りも消えていった。タツマは息をつく。

「お前が僕の立場をどうこう出来る側になるとはな」

タツマの皮肉めいた声にリヨウマは視線を走らせる。監視カメラがあるものの、ほとんど打ちっ放しのコンクリートの壁があるだけの、簡素な部屋だ。

「タツマ……。ここはサオトメ研究所だぜ？ 国のお偉いさんでも入るのに苦労するタブーの場所だ。何でおれがここにいと知った？」

「消去法だよ。お前に行く当てを提供するとすればベータ部隊よりも高次権限がありなおかつ軍備を増強しているのはこの国じゃサオトメ研究所くらいだ」

「そんなに有名かね」

自嘲気味に呟くとタツマは、「久しぶりに会ったんだ」と手を伸ばそうとしてきた。その手をリヨウマも取ろうとする。その瞬間、タツマの拳の位相が変わった。

何をされたのか、最初分からなかったほどだ。タツマのボディブローがリヨウマの鳩尾に食い込んでいた。

「何を……。タツマ……！」

「衰えたな、リヨウマ。これが予見出来ないほど平和ボケしちまった

のか？」

そのまま吹っ飛ばされる。リヨウマはコンクリートの壁に背中を強く打ち付けられた。肺の空気が一挙に漏れ出る。

『何を！ 警備の者を呼びますよ！』

ミチルの声にリヨウマは手を掲げる。その行動に、『リヨウマさん？』とミチルが戸惑った。

「……呼ぶ、な。ミチル、頼むぜ」

引きつった笑みを浮かべてリヨウマは立ち上がる。ダメージはあつたが人間のパンチならばまだ耐えられる。

特別な意味があつたのはむしろ、それが親友の不意打ちであつた事だ。

「どういうつもりだ。タツマ。こんな場末まで来て、おれと喧嘩やろうつてのか？ お前に負けた事は一度もねえぜ」

血の混じった唾を吐いてリヨウマは口元を拭う。タツマは超然とした立ち居地のまま、「変わったな、お前」と口にしていた。

「変わったけど？ 変わったのはてめえのほうだろうが」

「いいや。こう言つたほうがいいか。——弱くなつたな、リヨウマ」

その一言はリヨウマの神経を逆撫でさせるのには充分であつた。リヨウマは思考が戦闘本能で焼け爛れそうになるのを感知し、慌てて制する。今は親友の前だ。獣の部分は見せられない。

「……話をしに来たんじゃねえのかよ」

「そういうところも含めて、だ。リヨウマ。以前までなら何も考えずに突っ込んできて僕を殺そうとしたはずだ。だっていうのに、変に理性がある。それがお前を弱くしている」

「……人の事を狂犬みてえに言いやがって」

それでもまだ理性の線が引かれていた。リヨウマの様子にタツマは鼻を鳴らす。

「僕は、親友として、今のお前を見に来たつもりだったんだが。……ここまでになると拍子抜けだな。以前、河原に訪れていた時、お前の眼は使命に燃えていた。でも今は、何もかもを失つたがらんだ。そんな虚無に、僕は殺せない」

「ざけた事、言ってるじゃねえっ！」

思わず拳でコンクリートの壁を殴りつける。それだけで亀裂が走った。しかしタツマは臆する事もない。

「その拳、壁に放つよりも僕に放つべきだ。どうして、そこまで牙を抜かれたみたいになってる？」

その挑発がリヨウマの辛うじて保っていた理性の一線を越えた。跳躍し、タツマの首筋目かけて蹴りを放とうとする。しかし、非情になり切れない自分が歯止めをかけた。蹴り払いはタツマの眼前の空気を引き裂いただけだ。それだけでも空間が震え、通常の間人ならば失禁もやむを得ないレベルだったが、タツマは眉一つ動かさなかった。

「その程度か、リヨウマ」

踏み込んできたタツマがリヨウマの顔面へと拳を見舞う。かわす事が出来ずにリヨウマは拳を食らってしまった。姿勢を崩したリヨウマの足元を払い、タツマは見下ろす。まるで絶対者のように。

「リヨウマ。そこまで弱くなったのは、お前が以前の野性を捨てたからだ。飼い慣らされて、随分と尻尾を振る事まで覚えたらしい。女の声に、やられたか？ リヨウマ」

歯軋りをする。今にも迸りそうな自分の原始本能を抑える。

「てめえ、タツマ……！ いくらダチでも侮辱するって言うんなら」

「言うんなら、何だ？ 以前までならもう殺しているな。だって言うのに、まだ悠長にお喋りしている辺り、随分と腑抜けたらしい」

「てめえっ！」

リヨウマが飛びかかる。しかしその拳は殺傷のために振るえなかった。どこかで制御がかかり、殺さないでおく神経が働く。タツマは拳を受け止めて、「そんなもの」と声にする。

「以前までのナガレ・リヨウマならば放たなかった」

返すように放たれた拳にリヨウマは後退する。親友を殴る事など出来ない。

「……タツマ。何でここまで来て、おれにこんな真似をさせる？」

「リヨウマ。以前、言っていたな。自分は地獄の片道切符なのだ。」

しかし、地獄には咎人が行くもの。お前は、何の罪を犯したというんだ？」

リヨウマは歯噛みする。そう易々と言えない現実。

「てめえには関係ねえだろ」

「関係ない？ リヨウマ、僕は、善も悪も超越してここにいるんだ。ベータ部隊の代表として命じる」

タツマが懐から委任状を取り出す。リヨウマは目を見開いた。

「ナガレ・リヨウマを強制的に帰還させると」

そのような事はサオトメから一言も聞かされていない。当然、ミチルが反感を示した。

『そんなの！ 研究所を通していませんよ』

「だから、直々に、僕が来たんだ。お前を連れ戻す。これは、もう決定事項なんだよ」

リヨウマはよろめき、「んな事はまかり通らねえ」と声にする。

「おれはもう、ゲッターで戦うって決めたんだからよ」

「それにしちや、迷いのある拳だ。そんなもので、何かを救えると思っ
ているのか？」

タツマの試すような言い回しにリヨウマは拳を握り締める。

「おれが今まで、どれだけ血の滲む思いをしてきたのか、てめえには分
からないんだろうさ」

「ああ、分からないね」

タツマの返した言葉にリヨウマは意外そうにする。

「何だど？」

「他人の痛みが分かるほど、僕はお前とツーカーだとは思っていない。
勝手にベータから逃げ出し、今も地獄にいるのだと思いついてお
前には」

「てめえ、終いには……」

「終いには、何だ？ 僕を殺すのならばもつと早くにやればいい。そ
の迷いが、誰かを救えない。その迷いが、誰かの命を枯らす」

リヨウマはそれ以上考えられなかった。思考が焼け爛れ、怒りが全
身の筋肉を弾けさせる。

「タツマア！」

リヨウマの放った拳に呼応するようにタツマも拳を放つ。クロスカウンターが巻き起こりお互いによるめいた。

「……やれるじゃないか。本気を」

タツマが唇の端を拭う。リヨウマは、「関係がねえ」と口にしていった。

「誰かを守れなくなるかもしれないなんざ、最初から守れねえ奴の言い草だ。おれは迷わない！ おれは、人を守る！ そのためにゲッターに乗っているんだ！ それ以外の事なんざ、全部余計なんだよ！」

放たれた思いと共にリヨウマは拳を放つ。タツマの鳩尾へと食い込んだ思いの拳は鋭く響き渡った。

「それが、お前の答えか……」

タツマが口元に笑みを浮かべる。いつものような気安い笑みにリヨウマはようやくタツマの真意を悟った。

「タツマ。てめえ、おれの迷いを断ち切らせるために」

「半分はそうだが、半分は、聞きたかったんだ。ベータ部隊を辞めてまで、お前が貫きたかった信念を。人を守る。いい言葉じゃないか」

タツマが崩れ落ちる。リヨウマは慌ててタツマに肩を貸した。

「馬鹿野郎。そのために、おれの拳を受けるなんて」

「忘れたのか、リヨウマ。お前はいつだって、口より先に手の出る奴だった」

タツマの笑みにリヨウマも釣られたように笑う。ゲッターがどのような意図を持って造られたのであれ、自分の行うべき事はもう決まっていた。心に決めた信念は、もう既にあっただのだ。

「人のために、おれは戦う」

もう一度口にしてそれを新たにする。タツマは、「どこまでもお前らしい」と呟く。

「人のため、か。僕もようやく、お前から離れられる」

ある意味ではもう一人の自分同士なのだ。タツマは、ベータ部隊を選んだ自分の鏡像であった。

「ありがとよ。おれに、選ぶ権利をくれて」

「選べるのはいつだって戦いに赴く奴の特権さ」

その時、警鐘が鳴り響いた。聞き慣れた音声にリヨウマは顔を上げる。

『ネフィリム出現！ 座標は、それに研究所近辺に、これは……、三つ？ 対象は、三つです！』

ミチルの声にリヨウマは眉根を寄せる。

「三つ、だと……」

今までネフィリムは一回に一体だけだった。だとこののに三体のネフィリムが同時出現したと言うのか。タツマが手を払う。

「行けよ。リヨウマ」

その声にリヨウマは首肯した。

「ああ。おれは、戦う」

「一つだけ、忠告していいか？ 死ぬな、リヨウマ」

タツマの言葉を背に受ける。リヨウマは沈黙を是とした。

間もなく駆け出し、リヨウマはコックピットブロックへと続くエレベーターへと飛び込んだ。

「ネフィリムの反応だと？」

ハヤトがそれを聞き届けたのはシキシマの研究所での事である。反応が三つ、という事に瞠目する。

「本気の戦力だな。恐らく、もう悠長に戦っているつもりはないのだ」
シキシマの分析にハヤトは視線を振り向けた。

「行かなければならない。オレは、こちら側の味方のつもりはないが、

ゲッターがどこに行き着くのかは、見据えたい」

シキシマは、「行くといい」と応じる。

「ゲッターに魅入られた存在よ。どこまで、君達が運命に弄ばれるのか。正直、楽しみだ」

歪んでいるとは思う。しかし、この科学者の言う事もまた真理。

ハヤトはベータに飛び乗り、ミチルへと繋いだ。

「システムA.I. ジャガー号をアイドルリングモードに。出撃時にベータから乗り換える」

『了解しましたが……。今回のネフィリムは今までと違います』
「データを」

送られてきたのは今までのどのネフィリムとも異なる形状のものだった。卵型の楕円に翼が生えているものが一つ、逞しい両腕が生えているものが一つ、頭部が生えているものが一つずつだった。

『これよりこの三体のタイプをオシリス型と呼称します。オシリス型は高エネルギーを散布しており、それによって浮遊していると考えられます。研究所に、三体も投入してくるなんて』

「それだけ向こうも必死なのだろう。ゲッター線同士の、生存競争か」

ハヤトの呟いた声にミチルは返答する。

『やはり、そこまで辿り着いていましたか』

「分かっていて、道化を演じていたのかシステムA.I.。それともどうする？ オレのベータを遠隔操作で破壊するなど造作もないだろう」

その覚悟があったが、ミチルは意外な声を発する。

『いいえ。博士からはそう頼まれていません。ただ、あなた方が辿り着く末を見据えている、と。だから私は手を下さない。全ての権利は、ゲッターにこそある』

「ゲッターか。あれが地獄の審判者である事を、お前達は本気で信じているのだな」

しかしあれ以上に相応しい存在もあるまい。ハヤトはベータの推進剤をフルロットルにして現場へと急行した。

三匹が征く

ベアー号内でムサシはその接近を感じ取っていた。ネフィリムオシリス型。今までのネフィリムとは一線を画するのは気配で分かる。ゲッター線の決着を全てつけるために送り込まれてきたのだ。ムサシはビジョンの中にあつた巴武蔵と意識をリンクさせる。

——俺は、どうするべきなのだ？

「簡単な事だ。ゲッターのしたいようにさせろ。元より、お前らのネクストゲッター線と、偽人類の諍いはその惑星のものだ。決着をつけるのはお前達自身でなくてはならない。そうでなければゲッター戦役には加われない」

ムサシはアームレイカーに両手を突っ込む。出撃態勢に入ったところでミチルの声が弾けた。

『ムサシさん。大丈夫なんで？』

「ああ、もう大丈夫です、ミチルさん。……もし、ゲッターロボが存在しなければ、この惑星の人間は不幸な滅びを迎えていたんでしようか？」

ゲッターによる反抗よりも、もしかするとネフィリムに早期に滅ぼされていたほうが幸福だったのではないか。浮かんだ考えに、『分かりません』とミチルは返す。

『でもリョウマさんは、諦めていませんよ。それに、ジン・ハヤトも』
「リョウマ……。ハヤト……」

脳裏に浮かんだのはエンペラー合体時に木霊したリョウマの声だ。あの声の持ち主は確かにリョウマであったが、では自分達と共にいるリョウマは？ 浮かんだ疑念を振り払うようにリョウマの声が通信網に割り込む。

『なに、辛気臭い考え方してんだ、ムサシ！ てめえの恨みはまだ晴らしてねえだろ！』

「リョウマ……。しかし一個人の考え方なんて、ゲッターの意思の前では」

『ゲッターがどう考えているとか、んなもんは置いとけ！ おれ達は、今を生きる。そのために友を憂いている場合じゃねえんだ！』

仲間の怨嗟の声も、ゲッターの意思の傲慢さも、全てを振り払った場所にリヨウマはいるのだ。その考え方が眩しかった。

「……そうだな。戦おう。それが、俺達に出来る唯一の反抗だ」

『リヨウマさん、ムサシさん。ジン・ハヤトが到着しました。これから向かっているそうです』

『遅れてすまないな』

ハヤトの声にリヨウマは言い返す。

『遅いぞ！ ハヤト』

『なんだ、いやにやる気があるじゃないか、リヨウマ』

二人のやり取りを聞きながらムサシは感じ取る。ここで潰えるわけにはいかない。潰えてしまえば、繋ぐ人の思いがないのだと。

「リヨウマ。ハヤト。いっちょ暴れるか」

ムサシの声に二人とも呼応する。

『おうよ！』

『ゲッターロボの真価を見せてやろうぜ』

ムサシはアームレイカーに入れた手に力を込め、スロットルを開いた。

「発進！」

イーグル号、ジャガー号、ベアー号が研究所から飛び立ったの報を受け、サオトメは眼前の存在に目を向けていた。地獄の釜の底を守る

役目を買って出た番人、プロトゲッター。思えば、これが全ての始まりであった。

「プロトゲッターがあり、あのゲッターロボがある。我々は選ばれた側ではなかった。ゲッターの意思は遙か昔、もう真の人類を選んできた。被造物である我々はただ淘汰される運命しかなかったが、彼らの間違いは、我々に知能と、同等の繁殖力を与えた事だ。三百年かけて、偽人類は隆盛を築き上げた。これは罰なのか？ 本来在ってはならない種が、運命を振り曲げてでも発達した罰が、降り注いでいるのか？」

その罰の形がネフィリムであり、自分達は滅ぶのが筋なのかもしれない。サオトメは片手に白い布をかけたカプセルを抱えていた。これもまた原罪の一つ。

「ワシはどこまでも鬼になろうとした。全てを投げ打つても、ゲッター線を用い、生き残ろうと。それがレプリカントの意思ならば、ゲッターの意思を上回れないかと。ワシは悪魔にでもなった。それがこれだ」

白い布を取り払う。脳髓がカプセルの中の培養液に浮いており、今も活動していた。

「ミチル。全ては、この時のために」

サオトメはチューブをプロトゲッターの制御系へと繋ぐ。次の瞬間、プロトゲッターが面を上げ、黄色い双眸を輝かせた。

神格巨人

「ゲッター、チェンジ！」

リヨウマの声に応じてイーグル号が機首となり両翼を折り畳む。その後ろからジャガー号が続き接合した。ベアー号が合体し脚部を展開したと思うと両腕も出現し、ウイングがゲッターの両腕の背部へと接合する。最後に一对の角が割れ亀甲型のエネルギーパーティションに緑色の血潮が滾る。ゲッター1へと合体を遂げた三機のゲットマシンは襲い来る三体の襲来者を目にした。

翼の生えた卵と両腕の生えた卵、頭部の生えた卵。どれも今までとは違うネフィリムだ。頭部の生えたネフィリムは樹海を踏み潰しながら進んで来る。

『どうやら反重力で浮いているらしいな。しかも、ゲッターよりも強力だ』

ハヤトの推測にリヨウマはどのネフィリムから倒すべきか考えた。出来れば迅速に、一体ごとに倒さなければ。

リヨウマの思案を他所に、最初に動いたのは両腕のあるネフィリムだった。逞しい両手を開くとそこから拡散された赤い光線が次々に発射される。ゲッター1はウイングを展開させて機動する。

「拡散粒子！ どうやって避ければいい？ ミチル」

当然、ミチルのバックアップを期待していたのだがミチルは反応を寄越さなかった。その事に驚愕している間に眼前へと現れたのは頭部だけのネフィリムだった。

「いつの間に……」

『空間転移か……』

忌々しげに放たれたハヤトの声を聞き届ける前に頭部だけのネフィリムから巨大な光条が放たれる。リヨウマは慌ててゲッター1を上空へと昇らせた。樹海が焼かれ、眼下に広がったのは地獄絵図である。

「あの威力……」

『一発でも食らえばまずいな。リヨウマ。頭だけの奴を最初に叩く。異論はないな』

「ああ、そうだな。それで……」

その声を遮ったのは甲高い高周波である。リヨウマは思わず耳を塞ぎ機器に突つ伏す。ハヤトとムサシにも影響しているらしい。

『何だ、この音は……』

ムサシの呻きにリヨウマは視線を走らせた。両翼の生えたネフィリムが殿で佇んでいる。戦闘は二体に任せ、さながらバックアップなのだろう。こうして妨害する事でゲッターを無力化しようというのだ。

「しやらくせえ！ ゲッター、Eトマホーク！」

左肩のウイングの皮膜を仕舞い、Eトマホークを顕現させる。リヨウマはゲッター1を両翼のネフィリムに走らせた。Eトマホークで両断しようとするも空間転移してきた頭部だけのネフィリムがバリアーを張る。走った青白い電磁にリヨウマは歯噛みする。

「この野郎！」

頭部を搔つ切ろうとするがその時には背後に佇んでいた両腕のネフィリムがゲッター1を拳で叩きつけていた。重力そのもののような重たい一撃にゲッター1の機体が樹海へと墜落する。

「チクシヨウ！ ゲッターがまるで赤子だ！」

『今まで複数のネフィリムを相手取る事なんてなかったからな。ゲッターとはいえ、ここまでののか』

『リヨウマ、ハヤト……』

二人の弱気な声にリヨウマは奮い立たせる。

「ブルってんじやねえ！ おれ達はいつだって戦ってきた。前に進むために、人を守るために、だ！ その邪魔をする奴は、誰だって許さねえ！」

Eトマホークを保持したままゲッター1が跳ね上がる。頭部だけのネフィリムを切り裂こうとしてまたしても妨害電波が邪魔をする。ぶれた攻撃射程の隙を逃さず両腕のネフィリムが腕を突き出し、太い光条を弾き出した。一発は回避するがもう一発がゲッター1の機体

表面を焼く。エネルギーパーティションに亀裂が走り、循環路に問題が発生した。

『このままでは……。リヨウマ！ なぶり殺しにされるぞ！』

「だからと言ってゲッター2や3じゃ、こいつらの動きを押さえ切れねえ！ ゲッター1でやつとだ！ オープンゲットしている間の隙を狙ってくるに決まっている」

ゲットマシン単騎になればそれこそ危うい。リヨウマはどうすべきか思考を走らせる。それをせせら笑うかのように両翼のネフィムから高周波が放たれゲッターの動きを阻害した。

「……なんつー連携だ。恐れ入ったぜ……。ネフィムとレプリカント野郎は、マジにおれ達を殺そうってのか」

リヨウマは声に憔悴を滲ませる。このままではやられる。そのような予感にリヨウマは歯噛みする。

「せめて、一瞬でも隙が出来れば……」

この敵の注意を逸らす事が出来れば、もしかしたら。そのような楽観主義を踏み潰すように三体のネフィムが密集してゲッターを押し潰そうとする。

その時、ミサイルの発射音が響き、ネフィムに命中した。リヨウマは顔を上げる。ベータ部隊が改八式を駆って出撃していたのだ。

「ベータ……。研究所のじゃ、ない」

機体に刻印されていたのはこの国の防衛組織のものだった。

「タツマ……！」

『よう、生きているか、リヨウマ』

繋がった通信にリヨウマは声を荒らげる。

「馬鹿野郎！ ネフィムに対してベータじゃ」

『勝てない、ってか？ だが、お前はいつだって確率論を無視して戦ってきた。その助けをしたいのさ。行くぞ！ 全機、空中変形！』

その声で飛行形態のベータの編隊が一斉に変形機動に移る。メインアームが背部から伸び、サブアームを脚部としてビーム兵器を備えたベータが全部で六機ネフィムへと銃口を向けた。

『一斉射撃だ！』

タツマの命令で攻撃が成される。ネフィリムは突然の火線に戸惑う事なく対応した。両腕のネフィリムが腕を交差させて防御し、頭部のネフィリムはバリヤーを張る。だがそれに臆する事なく、一機のベータが頭部のネフィリムへと突っ込み、銃口を押し込んだ。

『見ていてくれよ、ナガレ！　これが俺達の……』

名も知らぬベータ部隊の人々が次々に特攻紛いの事をしてネフィリムの注意を逸らそうとする。全てはゲッターの攻撃に繋ぐために。「やめろ……、やめてくれエ！」

人を守るためにゲッターに乗っているのだ。だというのに、自分達のために犠牲が出るなど。

『リヨウマ。お前が守るべきものはもっと大きなものだ。僕達はその助けになれて光栄なんだよ』

「死んじまつたら！　死んだら意味ねえだろうが！」

喚いたリヨウマの声に隊員達の声が続く。

『いいえ。リヨウマさんが居てくれたから、空中変形を試みる事が出来た』

『あなたがやったから、可能性が拓けたんですよ』

雄叫びを上げながらベータ部隊の機体の一つ、また一つと炎に包まれていく。リヨウマは頭を振った。

「そんな事のために……、命を散らすんじゃない！」

『いいや。お前は地獄への片道切符だと言った。今まで率先して戦ってくれてありがとう。僕らなりのケジメだ。散れ！　レプリカント！』

タツマの操縦するベータがビームを掃射しながらネフィリムへと突っ込んでいく。頭部のネフィリムの攻撃で脚部が溶解し、両腕のネフィリムの張った対空砲火で次々に機体が焼かれていく。

『リヨウマ！　僕の屍を超えていけ！』

響き渡った声に最後のベータが両翼のネフィリムへと特攻する。爆発の光が広がり、ネフィリム達の目を一瞬だけ眩ませた。

「……すまねえ。タツマ」

ネフィリム達が再びゲッターへと視線を向けようとする。しかし

そこにゲッター1の姿はなかった。既に上空へと躍り上がったゲッターマシン三機が合体軌道に移っている。

「詫びは、地獄で済ませるさ。行くぜ、ハヤト！　ムサシ！　チェンジ、ゲッター！」

ジャガー号を機首としてベアー号、イーグル号が合体する。両腕のネフィリムが赤い光条を走らせた。それを掻い潜ってゲッター2がEドリルを突き出す。

『Eドリルハリケーン！』

掲げられたドリルからゲッター線の旋風が頭部のネフィリムへと攻撃を加える。ゲッター2はそのままネフィリムを貫いた。卵型の身体が引き裂け、放散爆発が巻き起こる。爆発の光を引き裂いて出現したのは節のついた両腕だった。網のように伸長した腕が両腕のネフィリムを絡め取っている。

『全ては託された命の果てに。六分の一G殺法、一の陣、奥義！』

ゲッター3が暴風を作り出し両腕のネフィリムを暴風圏に引き込む。ネフィリムは内側から弾け飛び嵐のように螺旋の腕が駆け抜ける。

『大・雪・山おろし！』

ムサシの声に相乗して放たれた攻撃に両腕のネフィリムが崩壊する。その爆発の合間から駆け抜けたのはミサイルの群れだった。一斉掃射されたミサイルが両翼のネフィリムへと突き刺さろうとする。その直前に両翼のネフィリムが火線を張った。赤い光条で塗り潰されていく景色の中、ゲッター3の両腕が伸長してネフィリムへと迫る。両翼のネフィリムは翼から真空の刃を発生させて引き裂いた。両腕が切り裂かれる。しかし引き裂かれた煙幕の内側にもうゲッターはいない。

三機のゲッターマシンがイーグル号を機首として再び合体する。エネルギーパーテーションにゲッター線の血が宿り、黄色い眼窩がネフィリムを睨む。両翼のネフィリムからビームが一射されるが赤い機体が跳ね上って回避した。その手にはEトマホークがある。

「ダブルEトマホーク、ブーメラン！」

両腕に保持していたEトマホークを接合させ、ゲッター1が投げ放った。両翼のネフィルムがバリヤーを張って防御する。ゲッター1はすかさず追撃した。胸部にゲッター線を充填させエネルギーの瀑布を広げさせる。

「これで！ ゲッタービーム！」

ピンク色の攻撃色に転じたゲッター線が一挙に放たれ両翼のネフィルムを塗り潰していく。光の向こう側へと両翼のネフィルムが消えた。

ゲッター1が手を掲げる。その手へとEトマホークが戻ってきた。「やったか？」

しかしリョウマの安息を消し飛ばすように両翼のネフィルムから放たれたのは複数の赤い光条だった。慌ててゲッター1が回避機動に入る。しかし今までと違い赤い光線はどこまでも追尾してきた。

「ホーミング性能だと！」

『フレアを焚け！』

ハヤトの指示にリョウマはフレアを焚いて追尾から逃れる。ゲッターのアイカメラに映ったのは、卵のネフィルムではなかった。

両翼を頭部に備えた人型である。まるで神のように、赤い眼がゲッターを見下ろしている。その巨大さはゲッターの比にならない。まるでスケール感が違った。

「このネフィルムは……」

『まさしく巨人、か』

『こいつが、卵の中に入っていたってのか』

鋼鉄の虚無

両翼のネフィリムが真の姿へと変貌した。その事実にはリヨウマは驚愕すると共にその手が広げられたのを視認する。直後、指先から何本もの光線が一拳に放たれゲッター1へと襲い掛かった。

「野郎！ しかも追尾機能付きとか、いい趣味してやがる！」

『ゲッター2の速度で乗り切るか？』

「いんや、奴さん。オープンゲットの隙さえも与えてくれねえだろう」
その証拠に幾何学方向から襲い掛かるビームは予測不可能だ。オープンゲットしてゲットマシンになれば防御力も大きく下がる。ゲッター1は制動をかけて前を遮ったビームを避けたが後ろから追いつがるビームの回避までは充てられなかった。背中にビームが突き刺さりゲッター1がよろめく。

「このままじゃ……」

『機動不能になるぞ……』

『かといって迂闊に変形も出来ないとは』

既にダメージは危険域に達している。リヨウマは両翼のネフィリムを睨み据える。どう足掻いてもネフィリムを倒す手段が思い浮かばない。赤い警告色と共に絶望に突き落とされる感覚があった。ネフィリムが足を上げて踏み潰そうとする。ゲッターなど所詮は羽虫だとしても言うように。絶望の影が視界を覆い尽くした時、突然に火線が開けた。

三機の何かがネフィリムへと攻撃を加える。さしものネフィリムでも反応が遅れた様子だ。リヨウマはそれを視認する。

「何だ？」

「もしやまたベータか？ その予感には直後に発生した現象で上塗りされた。」

『チェンジ、ゲッター1！』

なんと三機の影が一つに重なりゲッター1の姿を顕現させたのである。黒ずんだその赤い鬼にリヨウマは見覚えがあった。

「プロトゲッター……」

『誰が乗っているんだ？』

ハヤトの疑問に応じたのは見知った声だった。

『大丈夫ですか？ リヨウマさん』

「その声……ミチルだっていうのか」

ミチルが乗っているなど信じられない。しかしその疑念は次の言葉で払拭された。

『しぶといな。さすがはワシが地獄への道連れに選んだ三人だ』

「ジジイ……。何やってやがる」

サオトメの声にリヨウマは困惑する。どうしてサオトメとミチルがプロトゲッターを動かさなければならなかったのか。プロトゲッターはネフィリムの攻撃を掻い潜り、赤いマント型のゲッターウイングを展開する。

『ゲッタービームだ』

マントの内側から拡散されたゲッタービームが放たれネフィリムを翻弄する。その動きのキレは老人だけのものではない。

「ミチルが、やっぱり乗ってんのか……」

しかしどうやって？ ミチルは研究所のAIのはずだ。繋がった通信の先にコックピットが窺える。リヨウマは目を戦慄させた。そこにあったのはゲッターの計器と繋がったカプセルの中に浮かぶ脳髓であったからだ。

「何だよ、これ……。ミチルじゃねえのか？」

『はい、私です。私、そのもの、と言い換えてもいいかもしれませんが』
リヨウマは瞠目する。プロトゲッターにミチルが収まっていると
いうのか。しかしどうして脳髓だけの存在で？ 疑問を払拭出来ず
にしていると、『やはりか……』とハヤトが呟いた。

「ハヤト？ どういう事だ？」

『システムAIにしちゃ、ミチル、というAIは出来過ぎていた。月面のルナ、というAIを思い出せ、リヨウマ。地上であれに勝るAI技術の躍進。それに一人の犠牲も何もなかったとは思えない』

ハヤトが何を言わんとしているのか、リヨウマにはまるで分からない

い。ただ映し出された脳髓とカプセルは自分に生々しい現実を告げていた。

ミチルはただのシステムではない。

『本来ならば、このような形で貴様らに露見するはずではなかったのだが、事が事だ。教えよう。ミチルはシステムAIではなく、正しくは生体コンピュータだ』

発せられた言葉の意味が分からずリヨウマは硬直する。しかしハヤトは得心が行ったようだった。

『やはりか。あの写真、タツヒトと一緒に写っていたもう一人の子供。あれこそがサオトメ・ミチルであったんだな』

「ハヤト？ てめえ、何を掴んでいやがった？ 何でそう易々と納得出来る？」

『そう考えるのが自然なんだ。サオトメ・ミチルは元々人間であったが、とある時期にサオトメ研究所を束ねるシステムAI、いや生体コンピュータとして利用されるようになった。そうなった経緯は、この老人に尋ねるのが早い』

リヨウマはプロトゲッターに通信を繋ぎサオトメへとがなる。

「何がどうなってやがる！ ジジイ！」

『なに、簡単な事よ。この時代のコンピュータでは限界が生じた。ゲッターの運用も、あるいはプラネットシエルも。だからこそ、人柱を立てた。ワシとミチルがいればこそ、これまでの計画が可能だった』

「……何言つてやがるんだ。おい、ジジイ！ てめえ、何言っているのか分かってんのか！」

まだ息のあったミチルを、この老人は自分の娘を、自ら道具にしたと、告白しているのだ。リヨウマは戦慄く視界の中にカプセルを見据えたが自分以外は冷静だった。

『リヨウマ。今は割り切れ。ネフィリムが来るぞ』

『ミチルさんがそうだったのは残念だが、俺達にはもう、過去のあやまちを正すだけの力もないんだ』

どうしてだかハヤトもムサシも悲観的である。リヨウマは歯噛み

して迷いを振り払う。

「……ジジイ。生きて帰ったらためえをまず、殺す」

リヨウマの凶暴な宣告にサオトメは、『それが生きる目的となるのならば』と答えた。

『やるといい。今は、ネフィリムから生き残れ。それがワシの命令だ』
リヨウマはアームレイカーを思い切り引いてゲッター1を機動させる。両翼のネフィリムは赤い眼でゲッター1を見据えた。

「どうやってこのデカブツを破壊する？　今までみたいなゲッタービームは通用するのかわ？」

先ほどまでの卵型とは一切が異なっている。完成された様子のネフィリムを倒す方法が全く浮かばない。

『ゲッター2の速度だけじゃ、殺せないだろうな』

『だからと言ってゲッター3のパワーだけでも、こいつは倒し切れまい』

ハヤトとムサシでさえもこの状況を打破するだけの方策を持っていない。リヨウマの迷いの胸中へと語りかける声があった。

『リヨウマさん。一つだけ、方法があります』

ミチルの声だ。リヨウマは思わずカプセルの映像を切って声だけを聞く。

「ミチル。そうなつてまで、ゲッターに尽くす事はねえ」

『いいえ。今までもそうでしたし、これからもそうなのです。私がゲッターに、リヨウマさんに出来る事はこれくらい。だから——』

「そんな寂しい事！　言うんじゃない、って言ってんだ！」

リヨウマは顔を伏せる。ミチルの存在価値がゲッターのためだけにあったなどあんまりだった。一人がゲッターのために死にゆくなど間違っているのだ。

『……これはサオトメの名を持つ者の運命。私は、幸福なんです。かつての私は、難病で十歳まで生きられないと言われてきました』

リヨウマはハツとする。ミチルはただ生体コンピュータとして弄ばれたわけではないと言っているのだ。

『だから、博士には……父には感謝しているのです。私は人間ではな

くなりましたが、生体コンピュータとして役立てた。それに何よりも、リヨウマさんに出会えた。それが尊いんです』

「やめろ……。そんな風に、飾り立てるな」

普通に生きて普通に死ぬべきだったのだ。ミチルは、命を弄ばれた結果、こうして生き永らえてしまった。この地獄を見ずに済んだかもしれないのに。

『たとえば地獄でもいい。リヨウマさんとならば』

頬を熱いものが伝った。ミチルの生き様に、あるいは先ほど散っていったタツマに、自分にゲッターを託したタツヒトに。どうして、そこまで眩しく、自分に未来を任せられたのか。自分など、何も無い、虚無の存在なのに。

「おれは、虚無だ。このゲッターっていう鋼鉄の虚無の腹の中でしか、生きられない咎人なんだ」

ハヤトとムサシは何も言わない。それが逆にありがたかった。今慰められれば全てをかなぐり捨ててしまえばよかった。

『リヨウマさん。このオシリス型ネフィリムを打倒する方法は、一つだけあります』

改めて言い放ったミチルにリヨウマは顔を上げる。もう涙は見せない。全ての戦いが終わるまで、泣くわけにはいかなかった。

『今よりプロトゲッターのエネルギー、つまりゲッター線をゲッター1へと送る。その膨大なゲッター線をもってして行使出来る技、それこそがオシリス型ネフィリムを打倒出来る』

サオトメの声にリヨウマはゲッター1を振り向かせた。プロトゲッターが研究所の屋上へと降り立つ。その瞬間、瘴気のように地下からゲッター線の光が浮かび上がった。

リヨウマは瞠目する。まるで研究所そのものを包み込むかのようなゲッター線の光がプロトゲッターを媒介にして寄り集まっていく。魂の光だ、とリヨウマは胸中に呟いた。

『ゲッター線、その純粹なる光は亜種を打ち砕く。受け取ってください、リヨウマさん！』

プロトゲッターが身体を開き、エネルギーの瀑布をゲッター1にぶ

つける。あまりのエネルギー量に計器が瞬時にして振り切れた。百パーセントのゲッター線貯蔵量を越えたゲッター線が全身から緑色の光を放つ。エネルギーパーティションなど、最早意味を成していない。ゲッター線はそれそのものがゲッター線の光体と化していた。

「計器が、見えねえ……」

何もかもが光の向こう側へと埋没していく。指先も、アームレイカーも、あるいは「ナガレ・リヨウマ」という肉体でさえも還元され、ゲッターという純粹なる力へと呑み込まれていく。

『リヨウマ！ ハヤト！ ムサシ！ ゲッターを今までのようにテクニクで操縦するのではない！ 原始本能で操縦せよ！』

サオトメの声が耳朶を打つ。しかし、今にも消え入りそのような意識がリヨウマという個体の消滅を間近にしていた。

「消える……、いや、溶ける……。光の渦へと。おれも、ハヤトも、ムサシも……」

ゲッターから赤い装甲版が外れ緑色の光を放つ鬼と化す。ネフィリムが慄いて後ずさった。この光は危険だと本能で察知したのだろう。両翼が広げられたかと思うと、幾重もの光条が充填されていく。勝負を決めるつもりなのは明白だった。

『リヨウマさん！ 全てをゲッターに委ねて！ 戦うという事だけを、ゲッターロボの意識に乗せてください！ そうすれば見えてくるはずです。光の向こうにある究極の技、ストナーサンシャインが！』
ゲッターに委ねる。そう言われても計器も見えず、アームレイカーも消失した視界の中ではゲッターを御する術はない。リヨウマは意識を保とうとするがゲッター線がそれを許さなかった。

リヨウマの意識は瞬時に引つ張り込まれ、どことも知れぬ銀河を漂っていた。その銀河の向こう、光の渦が連なる先に、何かが待っている。赤い鬼の威容を持つ巨大戦艦が、リヨウマを睨んでいる。鬼の内部に人影を見つけた。

——あなたは……。

その人影が振り返りリヨウマを指差す。

——征け！ ゲッターチーム！

その声にリヨウマは一気にゲッターの中へと引き戻された。アームレイカーは存在しない。計器も無茶苦茶だ。しかしリヨウマの手は確かにゲッターの一部と繋がっていた。自身の身体を見やる。機械部品と肉体が融合し、ゲッターの声が直接脳内に響く。

「そうか、これが……」

全てはゲッターの意思が招いた事。どちらを選ぶのか、それは遙か彼方にいるゲッターの帝王が選ぶのではない。

「おれ達を選ぶんだ。……聞こえてっか？ ハヤト、ムサシ」

『ああ、何とかな。戻ってこられたみたいだが、あのゲッターロボは』
ハヤトも同じものを見たらしい。ムサシは、『ゲッターの、大宇宙の意思だ』と事前に知っていたようだ。

『全てがどちらを選ぶのか』

「選ぶ？ 冗談きついで」

リヨウマは声を張り上げた。

「おれ達が、選ばせてやるんだよ。行くぜ、ゲッター！」

緑色の光体と化していたゲッター1の機体を覆っていくのは赤い装甲だった。新たに装甲版が展開され、ゲッター1が全身を開く。先ほどまでの傷跡は失せ、今のゲッター1には新たな息吹が宿っていた。黄色い眼窩が輝き、瞳孔が煌く。

『ゲッターに、眼が……』

ミチルの声にリヨウマは思惟を飛ばした。両翼のネフィリムが光条を発する。ゲッター1は片手を払っただけだ。それだけで全ての光線が弾かれ、ゲッターに命中する前に霧散した。

「ゲッターが、今まで以上におれ達に馴染んでくれているぜ。これが、ゲッターの力だ」

『三人とも！ 三つの心を、一つにするんだ！』

サオトメの声に躍り上がったゲッター1が両腕を胸の前で交差させる。指先がエネルギーを帯びてスパークを弾けさせた。両手を上下させるとその間で光の球が発生する。眩いばかりの光の球が、まさしく地上で太陽のように照り輝く。

「ストナー、サンシャイン！」

ゲッターの内奥に刻まれた技の名前を発した瞬間、ゲッター1が光の球を発射した。ネフィリムに命中した瞬間、その肉体が爆ぜ、球を中心として消滅していく。ネフィリムが抗うが光の球が渦を成して質量を吸収しているのが分かった。

これこそがストナーサンシャイン。全ての物質をゼロの向こう側に帰す技。

単純な熱量だけでも相当だがネフィリムの身体を破碎するのは熱量ではない。重力だ。ストナーサンシャインの内側から発生したゲッター線の重力磁場がネフィリムの存在を許さないのである。

両翼のネフィリムは放散爆発さえも起こさなかった。巨大な熱量に引き裂かれ、渦へと吸収される。その最期は呆気ない。リヨウマは最早機械類が無茶苦茶に交差したコックピットの中で声にする。

「これが、ゲッターロボだ」

ネフィリムが先ほどまで存在した、という証明さえも消し去った攻撃。樹海は焼け爛れ、地表は見る影もない。

プロトゲッターがその時、突然跪く。ゲッター1が目を向けるとプロトゲッターが手を掲げた。

『何も心配はない。これで、ネフィリムと我々の、長きに渡る闘争に幕が下りた』

『終わったのです。ネフィリムとレプリカント、いいえ、真の人類として、ゲッターの意思がなければ使えないストナーサンシャインを見せ付けられれば、もう手出しはしません』

ミチルの声にリヨウマは茫然自失で眩く。

「終わったのか……」

自身の手と等価になったゲッターの掌に視線を落とす。

『はい、これで——』

そこから先の言葉を上空から舞い降りた一撃が遮った。

リヨウマは目を見開く。

ゲッタートマホークがプロトゲッターの腹腔に突き刺さっていた。ちようどジャガー号のコックピット位置だ。そこにはミチルが収まっているはずである。

「ミチル！」

リヨウマの叫びを他所に雲を引き裂いて殺気が飛んでくる。赤いゲッタービームがゲッター1へと幾何学の軌道を描いて襲い掛かった。リヨウマは咄嗟に回避する。

『そうか……。まだ、奴がいたな……。赤い、亜種のゲッター線の守り手。真の人類の観測者』

砂嵐にまみれた通信の中でサオトメが口にする。雲が円形に抉れ、腕を組んで舞い降りてきたのは漆黒の鬼だ。赤いエネルギーパーティションに血潮さながらのゲッター線を走らせている。

「ヨロイの、ゲッター……」

リヨウマの声に通信網が繋がった。

『その名は正しくはない。我が名は、ゲッターノエル。この惑星に落とされし、エンペラーの嫡子、エンブリオを守護する目的を仰せつかっている』

初めてまともに繋がった通信よりも驚愕するべきはその声の質だった。この声音は……。

『リヨウマ？』

ハヤトの声にヨロイのゲッター——ゲッターノエルは黄色い眼窩で睨み据える。

『どうやら、気付いている者もいたようだな』

超越者の余裕を漂わせた声にゲッター1は飛びかかっていた。一も二もない。プロトゲッターを——。

「よくもミチルを、やりやがったなア！」

振るわれたEトマホークの一撃をゲッターノエルは片腕で受け止めようとする。しかしEトマホークの刃が発振したかと思うとゲッターノエルの腕に傷跡をつけた。咄嗟に飛び退いたゲッターノエルは傷跡を見やり口にすする。

『なるほど。今までの、偽物のゲッターロボの力ではない、と思ったほうがいいか』

「来やがれ。てめえを倒さなければ、人類に明日がねえってならな！」
リヨウマの声にゲッターノエルは応じる。

『違うな。逆だ、ナガレ・リヨウマ。人類に明日があるとすれば、それはこのゲッターノエルの勝利に他ならない』

言葉の意味が分からずにリヨウマが攻撃の準備にかかる悲鳴が迸った。

『世界各地で、ネフィリムが同時出現しています！ 対象、オベリスク型！ この数は、十、二十……。どんどん増えていきます！』

オペレーターの声にリヨウマは戸惑う。

「どういうことだ？ さっきのネフィリムで、全ては決したはずじゃ……」

『目覚めの時が来たのだ。ネフィリム迎撃レベルでは、もう止める事は出来ない。ゲッターエンブリオが、覚醒する。それはつまり、この惑星の消滅』

放たれた言葉にリヨウマは息を呑む。研究所から送られきた映像にはオベリスク型が多数出現する様子が克明に表示されていた。

「……どうなってやがる」

『全てを決するというのならば。ここで選択しろ、ゲッターチーム。真の人類の前に敗退するか、エンブリオの誕生を見守るか』

「しやらくせえ！」

ゲッター1が空間を駆け抜ける。突き出された拳に応じてゲッターノエルも拳を突き出していた。二つの拳がぶつかり合い、空気が割れる。

『……ここまで分からず屋だとはな。ノエル、力づくだ』

ゲッターノエルは拳を開きゲッター1の手首を掴む。次の瞬間、手首ごと折り曲げられた。直に繋がった神経が激痛を伝える。リヨウマはコックピットの中で雄叫びを上げた。

『偽物のゲッターロボよ。お前らに明日はない』

南極点を観測していた人工衛星が捉えたのは南極の氷に亀裂が走り、大地が割れる光景だった。それだけならばよくある自然の崩壊現象だったかもしれない。しかし、直後に空間を引き裂いて現れたのはネフィルムオベリスク型が十体以上であった。ネフィルムはそれぞれ浮遊して両腕を開き、十字を描く。まるで何かを祝福するかのよう

に。
ネフィルムから音波が放たれ地形が歪んだ。瞬間、地表から出現したのは赤い腕だった。未発達ながら、五指を備えたそれは人間のものだ。赤い装甲版を纏った腕が出現し、空を掴む。

人工衛星は、その奥、マントルの内側に潜む黄色い眼窩までも映し出していた。

「これが終わり、という奴か」

シキシマは眩き、観測される事象を目にする。世界各地でのネフィルムの異常発生。そしてたった今舞い込んできた南極点での巨大な腕の映像。全てが合致する事実の一つだけだ。

「エンブリオが目覚め、この惑星は消滅する」

最終話 「聖なる未来へ 1」

「惑星の声とゲッターの意思を聞かない者はこの場において排除される。その理があるというのか」

ジャガー号が軋みを上げる。ゲッターノエルの出力は明らかにこちらより上だ。やはり亜種のゲッター線、それそのものが血肉として流れているゲッターノエルは進化した種だと認めざるを得なかった。

『ハヤト……。何かを知っているのか？』

感知したムサシの声にハヤトは返す。

「何でもない。ただ、常人よりも真理に近いだけだ」

『真理だとか、んなもん、どうでもいいだろ』

リヨウマの声に同調し、ゲッター1がひねり上げられた片手を掲げる。

『全て叩き切るにはよう、こんなもんじゃ生ぬるいつてんだ！』

リヨウマの声がゲッターの血潮となり、折り曲げられた手首にゲッター線の血脈が宿ったかと思うと右手首が修復した。その事実にはヤトは瞠目する。

「リヨウマ……。人のたがから外れようというのか」

『今さら人間めいた事言つてんじゃねえ。ヨロイの野郎を倒せるんなら、悪魔にでもなるぜ！ ネフィリムの駆逐にもな！』

リヨウマの張り上げた声に呼応してゲッター1が跳ね上がりEトマホークを打ち下ろす。ゲッターノエルは片腕を翳した。すると腕に収納されていたカッターが露出しEトマホークの刃と干渉し合う。片手を開いたゲッターノエルが肩越しに視線をやった。その先には刺し貫かれたプロトゲッターがいる。

『ミチル……。私のミチルが……。』

サオトメの嘆きが聞こえてくる。ジャガー号に収まっていたミチルは即死か、とハヤトは断じた。プロトゲッターを貫いていたトマホークがゲッターノエルの呼び声に従ってその手に収まった。

『トマホーク相手になら、トマホークでいいだろう』

ゲッターノエルの手に渡った事により赤いゲッター線の刃が顕現

する。振り払われた一撃にゲッター1がよろめいた。ゲッターノエルの一閃はこちらの最大出力に匹敵する。Eトマホークが押し負けてゲッター諸共煽られる。

『嘗めやがって……。エンブリオだ？ んなもん、知るかってんだ！ てめえらレプリカントだつてなら殺し尽くしてやらア！』

興奮状態にあるリヨウマはEトマホークを振るい下ろしゲッターノエルを捉えようとするがそれよりも速く相手は背後に回っていた。

『この速度……』

「オープンゲットする！」

ジャガー号に備え付けられていた緊急信号が走り、三機が分離した。先ほどまでゲッター1の胴があった部分をトマホークが引き裂く。

「落ち着け！ リヨウマ。奴は何もデタラメを言っているわけじゃないんだ」

ゲッター1の状態ではリヨウマを説得出来まい、と考えての分離だった。先ほどまでのネフィリム戦ならば分離など考えられなかったが相手はゲッターノエル一機。まだ渡り合える。

『落ち着けだど？ てめえこそ、おかしくなったんじゃねえのか？ レプリカントがおれ達だなんて性質の悪い冗談だろ！』

そうであつて欲しいのは心情だろう。しかし、とハヤトがどうやってリヨウマを説得するべきか考えているとムサシが声を差し挟んだ。

『……ゲッターの導きだ』

どこか上の空のような声音に二人ともムサシに注目する。

『ムサシ？ どこかやられたのか？』

『いいや、リヨウマ。ハヤト。言わねばならないと思っていた。しかし言えなかった。全ては俺の招いた事でもあった。真の人類と、偽人類の確執。三百年前の重量子ミサイルの着弾が、全ての始まりだったんだ』

どうしてだかムサシは自分と同じ見解に至っている。疑問よりも今は一人でもリヨウマを説得出来る人間がいたほうがありがたい。「聞いた通りだ。リヨウマ。レプリカントは奴らじゃない。オレ達こ

そがレプリカントと呼ばれる生命体だったんだ」

『嘘こけ！　じゃあ何で、おれ達は普通に生活しているんだよ』

「それが普通じゃなかった、って話さ。何の能力も持たない人類こそが出来損ないの側で、牙や爪を持っている人類こそがゲッター線に選ばれた存在だった。リヨウマ、ムサシもどうしてだか同じものを見ているし、サオトメ博士だってそうだ。今に聞いてみる。博士、こんな時になんだが、我々こそがレプリカントであり、あんたは原初ゲッター線を生かすために、このプラネットシエルという磐石な平和を築いた。違うか？」

応じるようにプロトゲッターが軋みを上げて手を伸ばす。腹部を貫かれており、分離変形も儘ならないのだろう。

『……始まりはたった一発。どちらが宣戦布告したわけでもないが、きつと我らが祖先、最初期ロットのレプリカントは危うさを感じたのだ。ゲッター線に選ばれなかった事。そして、造られた人類は所詮、造られたものでしかないという事実を。鳥籠の屈辱を』

『ジジイ、てめえついにもうろくしたか』

リヨウマの声にサオトメは冷静に答える。

『ミチルが使い物にならないようになったのは衝撃だが、まだいかれとらんわ、馬鹿め。全て、ハヤトとムサシ、そしてヨロイのゲッターのパイロットの言う通りだ。リヨウマよ、認めるがいい。我々こそがレプリカントであり、偽物の人類だった』

衝撃的な事実によりヨウマは言葉をなくしているようだ。ハヤトはジャガー号に組み込んでおいたシステムで強制変形を試みる。ジャガー号が機首となりベアー号、イーグル号と合体していく。リヨウマは、『嘘だろ……』と声にしていた。ゲッター2へと変形した状態でハヤトはゲッターノエルと相対する。速さでは引けを取らない。問題なのは相手の言うエンブリオの実態。

「リヨウマ。今さら偽物、本物を論じたところで仕方がない。重要なのは、このままでは世界が滅び、惑星も砕け散る、という事だ」

ハヤトの声にリヨウマは、『どういう意味だ？』と問う。

「この惑星の地殻にはマントルじゃない、ゲッター線の塊であるゲッ

ターエンブリオとやらが眠っている。赤いゲッター線を持つネフィリムがプラネットシエルを攻撃するのはそれがエンブリオを封じる術だったからだ。エンブリオ解放のために、ネフィリム共は戦っていた。まあ、偽人類の一扫も兼ねて、だったのかもしれないがな」

最早、真実などどうでもいい。問題なのは世界各地で同時出現したオベリスク型。もう相手は手をこまねいている場合ではないと悟ったのだ。ゲッターの手が回る前に、あるいはプラネットシエルが惑星を覆い尽す前に決着をつけようとしている。

『ゲッターエンブリオ……。今の話じゃ味方って感じじゃねえな』

『どうかな。エンブリオそのものは意思なんてないのかもしれない。敵味方の区別ではなく、ただ単に生まれようとしているだけなのかな』

『俺は、ゲッターエンブリオはいずれ来る戦線を切り拓くために必要なのだと聞いた。だから、この惑星は本来の旅立ちの時に比べてもう三百年遅れているんだ。本当は、三百年前にはもう、エンブリオと共にゲッター戦役に加わるべきだった』

いやに詳しいムサシの言葉はリヨウマを説得するには充分だっただろう。レプリカントは自分達自身。それを知って、この男が立っていられるのかハヤトにすら分からなかった。

『おれ達が、偽人類……。じゃあこのゲッターも』

ハヤトはサオトメへと通信を繋ぎ、「そうだろうな」と声にする。

「真のゲッターではない。恐らく、プロトゲッターを基にして造った模造品のゲッターロボ。さしずめ、ゲッターレプリカ、というべきか」
模造品とはいえ何人もの血を吸ってきたこのゲッターロボは正真正銘の悪魔である。しかしそれでも埋められない隔絶が存在した。

ゲッターノエルがトマホークを手に一直線に向かってくる。ゲッター2の速度を活かし、ゲッターノエルは残像を切るに留まった。

『なるほど。速い、な』

「月面戦や、その後の戦闘とはもう別物だと思ってもらおうか」

ハヤトは相手のパイロットに話しかける。しかし、この違和感は何だ。相手の声、戦い方、立ち振る舞い、全て他人とは思えないのは。

それを払拭するようにツインEドリルを出現させ、ゲッター2が臨戦態勢に入る。ゲッターノエルは漆黒の機体に赤い血潮を滾らせた。『先ほど、ストナーサンシャインを顕現させたのを目にした。あれは、真ゲッターロボのエネルギーを転化したな』

どうやら相手からすればプロトゲッターの名は真ゲッターロボと呼ぶらしい。ハヤトはゲッター線貯蔵量を視界に入れる。

「一時的なものようだ。この偽ゲッターは、炉心のシステムが奴さんやプロトゲッターとは違う。一時的に蓄えて放出する。どこからゲッター線を得ていたのかといえば、さしずめ地殻からか。地表にも微量ながらゲッター線があるのかもしれないな」

ハヤトの声にムサシが応ずる。

『このゲッターは完成品ではない。だからゲッター戦役には加われな
いし、ともすればここでヨロイに破壊されるのも、運命なのかもしれない』

あれほどゲッターノエルに敵意を燃やしていたムサシだがどこか達観している。何かを感知したのか、あるいは何かを知ってしまったのか。以前までのルナリアンではなかった。

『……ぎげんな』

リヨウマの押し殺した声にハヤトはムサシ共々聞き返した。

「リヨウマ？ 何を——」

『ふぎげんな、って言ったんだ』

リヨウマは諦めていない。この期に及んでリヨウマは何をしようというのか。ゲッターノエルのパイロットが問いかける。

『ナガレ・リヨウマ。惑星は滅びに向かい、選ばれしゲッターロボは戦役に加わる。名誉な事だ。その現象の前に偽りは無意味なだけ。どうして受け容れられない？ エンブリオの誕生を祝うのは人として生まれたのなら当たり前前の事』

『当たり前？ 馬鹿言ってるじゃねえぞ、てめえ。惑星ごと壊して生まれるゲッターなんて、それこそ悪夢だろうが』

『ではナガレ・リヨウマ。お前は何のために戦う？』

ゲッターノエルがこちらを指差す。答えの如何によっては、とハヤ

トは強制的に権限を委譲するボタンに指をかけていた。

最終話 「聖なる未来へ 2」

何のために戦う？

今まで問われた事もなかった。考えた事も、ほとんどない。過去の亡霊に報いるため。犠牲をこれ以上増やさないため。レプリカントを抹殺するため。ネフィリムに勝つため。自分の代わりに死んでいったタツヒトの、男の無念のため。

人類のため。

だが全ては偽りであった。虚飾が全てを覆い尽していたのだ。プラネットシエルの外殻然り、自分を取り巻く状況然り。何もかもが嘘だった。人類は嘘。ゲッターも嘘。プラネットシエルも嘘。

しかし嘘でないものがあつたのではないか。リヨウマはその感覚にアームレイカーに突っ込んだ手に視線を落とす。

「嘘じゃねえものもあつたんだ。少なくとも、人の思いや、死んでいった人間がいた事は、嘘じゃなかった。おれに託していった奴らの思い、消えていった者達の人間くさは、嘘じゃなかったんだ。そんなもの、優劣なんてつけられるわけがねえ」

拳を握り締める。

タツヒト、タツマ……。どうして自分なんかに希望を繋げた？ 彼らは何のために死んだ？ それは、自分ならば、ナガレ・リヨウマならばその先を行けると信じていたからだ。リヨウマは言い放つ。

「おれは、偽物かもしれねえ。それこそ、無意味に無意味を重ねるような行為かもしれねえし、このゲッターだって元を辿れば偽物だ。でもよ、こいつに魂を売り渡して、死んでいった奴らに流れている血の色はよオ……。少なくともおれ達と同じ、赤だったぜ！ 真っ赤な真っ赤な、鮮血だったんだ！」

リヨウマは声の限りをゲッターに注ぎ込む。ゲッターは、亡霊達は、偽物であっても命をとした、その灯火がゲッター炉心に火を点ける。ゲッター線が輝きを放ち、エネルギーパーテーションに緑色の血潮が滾る。

「熱くなれ！ 焼け付くほどに！」

ゲッター2が強制分離する。ハヤトが戸惑いの声を上げた。

『これは……。オレへの優先権を超えて、ゲッターが動いている？』

『全て、リョウマの意思通りに……。』

二人して信じられないような声を上げる。リョウマは、「今さらブルってんのか？」と煽った。するとハヤトが答える。

『……やれやれ。このゲッターという魔物の前では、これは浅知恵だったか』

『ゲッターの意思を、人の身で超えるのか、リョウマ……。』

ムサシの戸惑いに、「構うこたアねえ！」と返す。

「ゲッターがどう感じるだとか、大宇宙の意思なんて、んなもん全部知るかよ。こちとら偽物なんだ。だったら、偽物なりに暴れさせてもらうぜ！」

ゲッターノエルへと三機のゲットマシンが突っ込む。合体軌道を取ったゲットマシンが螺旋を描いて衝突し、ゲッターノエルが僅かによろめく。

『偽物だつて分からないのか！ 全ては虚しい行為なのだ！』

「うるせえよ。偽物偽物つてな。本物だろうが偽物だろうが、おれの理念は変わらねえ。人を守る。そう誓ったんだよ」

『誓っただど？ 誰にだ！ ゲッターと大宇宙の意思以上に、尊重するべきものなど……。』

「てめえには一生分からねえさ。熱く今を生きる友にだよ！ 気合入れる、二人とも！ チェイイイインジ！ ゲッター！」

イーグル号を機首として両翼が折り畳まれる。ジャガー号が接合し、その後にベアー号が続いた。ベアー号が脚部を展開すると同時に両腕が引き出され、内部にトマホークを備えたウイングが両腕の後部に取り付けられる。

「ゲッターー！」

ゲッターノエルに衝突する形で変形合体を遂げたゲッター1がEトマホークを振り翳す。相手はトマホークでいなしたが一撃の威力が今までと段違いであった。思わず、と言った様子でゲッターノエルが後ずさる。

『この攻撃力……。ゲッター線の恩恵を……』

「ゲッターを選んだ？ 選ばなかった？ んなもんでいちいち女々しく泣いてるんじゃないやねえ！ 人の道は、人が切り拓くんだ！」

『減らず口をー』

ゲッターノエルが赤いゲッター線を胸部に充填する。それと同時にゲッター1も緑色のゲッター線を胸部に充填した。攻撃色に転じたゲッター線の瀑布が襲いかかる。

「ゲッター、ビーム！」

同時に放たれたゲッタービームが干渉し合い、爆発の牡丹が押し広げられる。その合間を縫うようにゲッター1が駆け抜けた。もちろんゲッターノエルと遅れを取らない。突き出された拳同士が僅かにぶれ、お互いの顔面を打ち据えた。クロスカウンターに二体のゲッターがそれぞれよろめいた。

「効くぜ……。だがな」

鼻血を拭ってリョウマはゲッター1に機動をかける。最早、ゲッターはアームレイカーで動かすものではない。自分と一体化した機械群それぞれが細胞となり血潮となり、ゲッターと共鳴する。際限なくゲッター線が放出し、緑色の光が駆け抜ける。対して漆黒のゲッターノエルはまだその形を保っている。つまりまだ本気は出していないという事だ。

ゲッター1がゲッターノエルの背後を取る。無論、反応した相手のトマホークが引き裂いた。しかしそのゲッター1は残像だ。

『ゲッター2並みの速度だと？』

「違う、よく見やがれ」

引き裂いた残像は確かにゲッター2のものであった。その事実にはゲッターノエルのパイロットが震撼する。

『……僅かな間に、もうゲッターチェンジを』

「言つたらうが。目え瞑つても、おれ達は合体出来るんだよ」

ゲッターノエルが反応する前に振り上げた蹴りがその機体を打ち据えた。ゲッターノエルはトマホークを振り翳しゲッター1に向けて突き出す。拡散したゲッター線が膜のように展開し、ゲッタービー

ムの嵐を巻き起こした。

「野郎、味な真似をしてくれるじゃねえか。負けてらんねえよな！」

ゲッター1がEトマホークを両腕に保持し機体を中心軸に据えて回転する。巻き起こした暴風域からゲッタービームが乱射された。ゲッターノエルは即座の模倣よりもやってのけると判断したりヨウマの判断に恐れを成したようだ。

『どうしてそこまで……』

「どうしてかって？ それはおれ達がゲッターチームだからだよ」

Eトマホークをゲッターノエルに向けて振り下ろす。相手の肩を引き裂いた一撃が赤いゲッター線を血糊のように噴き出させる。しかしゲッターノエルはEトマホークを引っ掴みゲッター1へと攻撃を加えた。トマホークの突き出た部分でジャガー号へと亀裂を走らせる。

「ハヤト！」

『ごっちはいい！ お前はそいつとのケリをつけろ！』

仲間の声にリヨウマは笑みを浮かべる。

「おうよ！」

雄叫びが激震し、ゲッター1の眼窩に宿った瞳孔が輝く。ゲッター1はEトマホークをゲッターノエルの脇腹へと押し込んだ。

「お返した」

『貴様……！』

赤いゲッター線が充填され即座にゲッタービームが放たれる。しかしその光条は空を穿った。代わりのようにゲッターノエルを捉えたのは網状に張った両腕である。変形を果たしたゲッター3が両腕を引き伸ばしていた。

『まだ月面での借りを返していなかったな。食らえ、最終奥義！ 大雪山おろし、一の舞！』

ゲッターノエルを中心として暴風が巻き起こる。装甲版が捲れ上がったがゲッターノエルの出力ならば逃れられた。それを封じたのは即座に躍り上がったゲットマシンだ。空中で合体し再びゲッター3となったその機体から放たれたのは両手を合わせた形で放たれた

手刀である。ゲッターノエルを頭部から叩きつける。

『一の舞！ 相乗月面割り！』

ムサシの声が響き渡り、ゲッターノエルが赤い光線を発射して逃れようとする。しかし既に布石は打たれていた。ゲッター3は内蔵している全てのミサイルポッドを開け放ち、ゲッターノエルに照準する。

『三の舞、怒号針鼠！』

まさしくその名の通り、怒号のようにミサイルが乱舞しゲッターノエルへと突き刺さろうとする。ゲッターノエルは全身を回転させて螺旋エネルギーを巻き起こし、ゲッター線の暴風で相殺した。爆発の光が次々に広がり、ゲッターノエルが中空に躍り上がる。

『相当な威力だが、この程度では』

「墜ちない、か？ ならばこれを食らえ」

ゲッター3が腕の関節部位の全てを開放して両腕を樹木のように広げている。開放された部位それぞれに砲門があり、それら全てが一斉にゲッターノエルを狙い澄ます。

「終の舞、超！ 大雪山おろしい！」

それぞれの砲門から放たれたのは威力を低くしたゲッタービームそのものだ。ゲッタービームと大雪山おろしの相乗効果で瞬く間に樹海が赤く炎に染まっていく。再び分離し、ゲッター1へとチェンジする。

「これでやっただろう。おれ達は、エンブリオとやらを止めねえと」

ゲッター1がサオトメ研究所へと帰還しようとしたその時、樹海が割れた。何が巻き起こったのか、整理する時間もない。樹海を割いて現れたのは真っ赤な腕だ。未発達な五指を広げて何かが蠢いている。

「これは！」

『まさか、これが……』

『ゲッター、エンブリオ……！』

あまりにも巨大なそれがゲッター1を掴み、地表の中へと引き込んでいく。抗う事も出来ず、ゲッター1は一瞬で呑み込まれてしまった。

最終話 「聖なる未来へ 3」

「リヨウマ達は、ゲッターチームはどうなった？」

サオトメの声に研究所の人々が次々に報告する。

『現在調査中ですが、マントルを超えて、このままでは地殻に入ってしまう！』

『ゲッターロボ、なおも潜行中！ 緊急停止信号受け付けません！』

サオトメはプロトゲッターの操縦桿を握りながら歯噛みする。プロトゲッター、つまり純粹なるゲッターの主が動けばリヨウマ達のゲッターは助けられる可能性がある。

——いやそれよりも。

サオトメの脳裏を掠めたのはプロトゲッターさえ使えば、この惑星を脱出出来るかもしれない、という事だ。エンブリオ覚醒時に惑星は崩壊する。プラネットシエルでこの時を待って重ねてきた準備も全く意味を成さなかった。ネフィリムの一斉蜂起に、プラネットシエル外殻は無意味だったのだ。サオトメは悔しさよりも今は、とゲッターウイングを展開する。

「逃げねば……。そうでなければ、ゲッターと心中など」

プロトゲッターは名前こそ試作品を閉じているがその実は真なるゲッターである。航行能力は充分であった。ゲッター戦役の本丸に突っ込まなくともゲッターの恩恵は得られる。サオトメは発進させようとして全く動かない事に気が付いた。

「システムが、全部エラーを起こしている……。何故……」

原因はすぐに分かった。ゲッターを掌握出来るプログラムなど自分分は二つと知らない。

「ミチル、お前か……」

『博士……。あなただけ、逃げる事は許されない』

「たばかるか。創造主に向かって」

『その口ぶり……。あなたの嫌う、真の人類そっくりですよ』

舌打ちを漏らしたサオトメは操縦桿を滅茶苦茶に動かした。それでもゲッターは応じない。

『無駄です、博士。ゲッターの運動系統は全て、私が掌握しましたから』

「何をやろうとしている？ ミチル、このままでは滅びるのだ。さあ、行こう。お父さんと一緒に」

その言葉にミチルは逡巡の沈黙を挟んだ。抱え込めたか、と感じたサオトメにノイズの走る映像が投射される。映し出されたのは生前のミチルの顔を再現したものだった。

『……あなたに、父の資格はない』

サオトメは思わず叫んでいた。

「おのれ！ プラネットシエルとゲッターのために生かしておいたその命、ここで使おうとも思わんのか！」

『ゲッターのためには使います。ですが、あなたの意思には添えません』

プロトゲッターが勝手に動き出す。何をするのかと思えば、ゲッター線を充填し始めた。照準は研究所である。

「まさか……、やめろ、ミチル。彼らは生きているのだぞ」

『あなたに、そんな事を言う筋合いはない』

研究所から人が次々と逃げていく。恐らくは別の命令系統でミチルは避難誘導を既に行ったのだろう。

「たわけ……、父の言う事が聞けんのか！」

『私の身は、ゲッターのために使います。全てはエンブリオを止めるため。それに、リヨウマさんが待っている』

「あの男は、お前のような醜いAIなど、待っているものか！ 脳みそでしかないくせに、ワシを裏切るなど……！」

放たれた罵声にもミチルは臆する事はない。

『リヨウマさんのために、地獄の釜を開けます。プロトゲッター、いいえ、真ゲッターロボ』

充填されたゲッター線が血脈となり、プロトゲッター——真ゲッターロボが両手を重ね、光の球体を作り出す。

「まさか、そんな……！」

『ストナーサンシャイン』

放出された光の球体が研究所を焼き払い、瞬く間にクレーターを開けた。その爆心地の底には地獄の釜へと続くゲッターの死骸が積み重なっている。ストナーサンシャインの一撃でも葬り切れない怨念が渦巻き、地獄門を閉ざしていた。

『もう一撃……』

ストナーサンシャイン発射形態に移ろうとすると直後に右肩に何かが命中した。よろめいた真ゲッターはその対象を見据える。

『ゲッターノエル？』

視線の先にはゲッターノエルがトマホークを投擲した形で佇んでいる。先ほどのストナーサンシャインで倒せなかったのか。それにゲッターエンブリオに迎えられなかったと言う事は恐らく……。

真ゲッターは降り立ち、ゲッターノエルと同じ地表に立つ。

『何の用ですか？ 言っておきますが、あなたを相手取っている時間もない』

『それはこちらと同じだ。ゲッターエンブリオは同化現象に入った。由々しき事態だ。エンブリオ、真のゲッターの後継者が吸収するのがよもや原初でも、亜種でもない、偽物のゲッターなど』

その言葉にサオトメは瞠目した。

「やはり、エンブリオは同化現象を起こしておるのだな？」

ゲッターノエルのパイロットが尋ねる。

『早乙女博士か』

「ワシを知っておるのか？」

『別の「サオトメ」だな。そのような些事は関係がない。今、エンブリオを止めねば惑星崩壊どころではない。ゲッター戦役に影響する。この惑星で連綿と戦い継がれてきたものが無意味と化すんだ。ゲッター線の後継者が、真でも、亜種でもない、偽物など、絶対に許されない』

『リョウマさん達は、偽物じゃありません』

『ここで言い合っても仕方なからう。地獄の釜を開けて、そこからエネルギーを得る。その状態で、エンブリオに突っ込むしか、方法はあるまい』

その言葉にサオトメは肌が粟立つのを感じた。地獄の釜は開いてはならない。禁断の代物だ。そこから溢れるゲッター線を浴びれば人間ではただでは済まない。

「純粹ゲッター線を浴びれば、レプリカントであるワシは……」

『喧しいぞ。サオトメ、貴様はこの期に及んで自分の保身しか考えられないのか。だから繰り返し返すんだ。ゲッターに弄ばれる歴史を』

「何を言っている？ ワシは……ワシは……」

サオトメの脳裏に蘇ってきたのは銀河の渦であった。螺旋の光の向こう側で何人もの自分の似姿がゲッターの道を切り拓き、死んでいく。それが正義に殉ずる場合もあれば、悪に染まった場合もあった。

「これは……、ワシは何を見ている？」

『見えたようだな。ゲッターの輪廻が』

ゲッターノエルのパイロットは見透かしたように提案する。

『ゲッタービームを併せれば、恐らく』

『地獄の釜は、開く』

同時に真ゲッターとゲッターノエルが踊り上がる。サオトメはコックピットで頭を振っていた。

「ワシは……。ワシは……」

その先に待っていたのは情けないほどに純粹な意思だ。死にたくない。それだけだった。そのようなサオトメの意思を無視するように二機のゲッターが光を帯びる。ゲッター線の共鳴現象。亜種のゲッター線と純粹ゲッター線がそれぞれの輝きを解き放った。

『貫け！』

『ファイナルゲッター、ビーム！』

赤いゲッタービームとピンクのゲッタービームが重なり合い、それぞれのエネルギーを高めて地獄の釜へと着弾する。地獄の釜を塞いでいた唯一のたがが外れ、間欠泉のようにゲッター線が噴き出した。あまりにも強力なゲッター線の瀑布に真ゲッターが出力過多を起す。

『これが、本物のゲッターの導き……』

ミチルは自分の身体を動かしていた。驚くべき事だが、先ほどまで

脳髓だけのカプセルだったのに、今の自分には血肉があった。懐かしい自分の手、肉体という概念が蘇ってくる。

「これは、幻?」

声ももう電子音声ではない。声帯を震わせていた。

『いや。ゲッターが、システムではこの先を突破出来ないと判断したのだろう』

ゲッターノエルのパイロットはどこか冷静であった。人工知能が受肉するなど普通に考えればあり得ないのに、どうしてだかその程度は当然だと考えているようだ。

「……行きます」

ミチルは操縦桿を握り締める。ここから先は確かに人工知能「ミチル」では辿り着けまい。息を吸い込み、ゲッター線にまみれた空気を肺に充填した。

「ゲッター線の大量放出地帯に突っ込む!」

「やめろお、ミチル。これ以上は、ワシは……」

最早、サオトメに意識はほとんど存在しなかった。ただこれ以上は自我が持たない。しかしサオトメの制止を振り払うだけの力強さをミチルは湛えていた。

「お許してください、博士。いいえ、お父さん。私は、リヨウマさんのところへ」

真ゲッターがゲッターウイングを展開し噴き出したゲッター線へと特攻する。ゲッターノエルも同時に突入し、声が相乗した。

『「シャインスパーク!」』

最初のゲッターと亜種のゲッター、それぞれの記憶の奥に刻まれた技を発しながら二機のゲッターはこの惑星の核へと向かった。

最終話 「聖なる未来へ 4」

「なんてえ、パワーだ」

何度もEトマホークを振るい落とすものの、指先一つ傷つかない。それほど強固な装甲を持つ相手にリヨウマは狼狽していた。

『オープンゲットは？』

「出来るならとうにしているぜ。指自体は短いのに、がっちり掴んで離さねえ」

ゲッターエンブリオの存在する空間はただの地面ではない。明らかに空洞が存在し、エンブリオのために血管めいた鍾乳洞になっている。

『よく今まで、こんな状態で惑星が保っていたものだ』

ムサシの声にリヨウマも初めて見る惑星の内部に驚嘆する。サオトメがプラネットシエルを進めていなければ速やかに惑星は崩壊していただろう。

『なかなか皮肉だな。プラネットシエルで惑星は延命されていた。だが、その結果が』

ハヤトの声を引き継ぐように甲高い鳴き声が上がる。惑星の核にいたのは身体を丸めた形の巨大な胎児だ。一対の角を持ち、表皮は赤い。

「ゲッターエンブリオの、その成長……」

『本来、エンブリオは三百年前に産まれていた、と仮定するのならば、ゲッターエンブリオは育ち過ぎた。熟れた果実みたいなものだ。その証拠に、見ろ』

ハヤトの示したのはゲッターエンブリオ本体の身体がどろどろに溶け出している部分だった。それをゲッター線で修復しては溶け出しを繰り返している。この惑星での揺籃の時期は過ぎているのだ。それでも惑星の養分を吸い続けている。

「こいつ、何が目的で、ゲッターを」

その時、ゲッター線貯蔵量が急激に減退した。リヨウマが目を見開く。

「まさか、ゲッター線を……」

『吸収して、少しでも成長の糧にしようとしている。育ち過ぎた胎児にとつてしてみれば、それは毒だろうに』

ゲッターエンブリオはどこまでも成長しようとしている。ゲッターの進化が止め処ないように、エンブリオもこの惑星を破壊するまで進化し続ける。

「冗談じゃねえ。このまま枯渇させられたら、ゲッターは」

『偽物のゲッターロボをも吸い尽くすか。そのような存在を放てば、惑星崩壊は免れまい』

リヨウマは声の限り叫んだ。

「ゲッター、ビーム！」

しかし放たれた攻撃色のゲッタービームをもエンブリオは吸収する。

「無敵か？ 無敵だつてのか？」

あり得ない。無敵の存在などいない。しかしハヤトはそれを肯定した。

『亜種のゲッター線ならばあるいは、だったかもしれないな。原初のゲッター線はこいつに吸われてしまう』

『かといって亜種ゲッター線、つまりネフィリム連中がこっちの味方をするわけじゃないんだろ？』

『ああ。ネフィリムはゲッターエンブリオを放つ事しか考えていない。その先なんて一切だろう』

リヨウマは歯噛みする。このまま成す術もなく吸収されるのか。ゲッターに乗っているのに、何も守れないまま死んでいくというのか。

「……おれは、まだ負けていねえ」

身体に張り付いた機械部品を引っ掴み、リヨウマは叫ぶ。

「負けられねえんだ！ これ以上、誰かが自分のために死んでいくのは見たくねえ！ 犠牲は、おれで止める！ そのためなら、何も怖くねえぜ。全てを焼き尽くしてでも、超えていく！」

ゲッターがEトマホークを顕現させエンブリオの指を切り裂こ

うともがく。エンブリオが掴む力を強くした。ゲッターの装甲が悲鳴を上げる。

「まだ、まだ……」

その時、赤い閃光が視界の一部を引き裂いた。エンブリオの指が破碎し、ゲッターが自由になる。次いで出現した緑色の閃光がエンブリオの腕を貫通する。ゲッター1がウイングを広げて周囲を見渡した。「何だ？」

赤い閃光が形状を伴う。ゲッターノエルが全身のエネルギーパ―ティションから光を放ちながら佇んでいた。腕を貫通したのはプロトゲッターだ。ゲッター1の前に出る。

『リヨウマさん！』

「ミチル？ ミチルなのか？」

その割にはあまりにも清々しい声音だ。今までの機械音声ではない。『信じられないかもしれませんが、人間になれたんです。戻れたんです』

どういう事なのか、整理する前にプロトゲッターがゲッターウイングを膜のように展開して一撃を防いだ。エンブリオが指を突き出しそこからビームを放ったのだ。

「何て奴だ。指先で放ったビームが、こっちのゲッタービームと同質かよ」

『同等、いいえ、それ以上でしょう。この真ゲッターロボでなければ防げなかった』

プロトゲッターの本当の名前らしい。リヨウマは、「どうする、つてんだ」と口にしていた。

『エンブリオを倒す事は、ゲッター線兵器では出来ません。恐らく、それは絶対に不可能なんです』

「だったら、指をくわえて惑星崩壊を見届けろって？」

『いえ、破壊は無理でもエンブリオの活動を限りなくゼロにする事は可能なはずです。それには亜種のゲッター線の手助けがどうしても必要』

やはり同じ結論に行き着くのか。リヨウマはゲッターノエルを見やった。

「まだ、あんた、エンブリオを守る、って言い出す気か？ それとも偽物は消えろ、とでも？」

『……こちらの意思は変わらない。ゲッターの意思を尊重し、大宇宙の意思に沿う。それが出来なければ観測者としてこの場所に何百年もいた意味がない』

リヨウマは説得など不可能だと感じた。Eトマホークを発振させ、ゲッターノエルと向き合う。

『リヨウマさん？ どうして攻撃姿勢を』

「どうやら、ミチル、こいつとは真つ向勝負以外に、お互いを理解する事が出来ねえみたいだ」

『そんな！ 同じゲッター線から生まれし存在。彼とて、エンブリオの成長が危ういレベルに達している事は理解しているはず』

「だから、だろうよ」

ミチルは理解出来ていないようだった。これは男にしか分からない。

「ケリつけようぜ。ヨロイのゲッター。ここで生き残ったほうが本物で、負けた側は偽者だ」

ゲッター1がEトマホークを構える。ゲッターノエルもトマホークを構えた。

『言っておくが、エンブリオ誕生は我らが悲願。確かに、このエンブリオの成長は予想外だったが、何も問題はない。手はある』

「その手を聞き出すには」

『戦うしかあるまい』

「言うと思ったよー！」

ゲッター1が駆け抜けEトマホークで襲いかかる。ゲッターノエルはトマホークの赤い刃で受け止めた。干渉波が飛び散る。

「分かり合えないのならば、拳で語るしかねえってなー！」

『偽物のゲッターは邪魔なのだ』

振るわれたトマホークをゲッター1は回避し、ゲッターノエルの頭

部を蹴りつけた。その足を引つ掴みゲッター1が振り回される。あまりの膂力にリヨウマはウイングを全力で展開した。制動用の推進剤が焚かれゲッター1を縫い付ける。Eトマホークを振るって距離を取り、リヨウマは口にした。

「ハヤト、ムサシ。悪いがこの勝負、おれに預けてくれねえか？」

突然の提案だ。反対意見も出るかと思われたが二人は受け容れた。

『お前とあいつとの因縁は、それが相応しいだろうな』

『リヨウマ。負けるなよ』

リヨウマは口角を吊り上げる。戦うのにこれ以上相応しい舞台はあるまい。

ゲッター1が一気に距離を詰め、ゲッターノエルを射程に入れる。ゲッターノエルが旋風を巻き起こしゲッタービームを乱射した。その暴風域へとゲッター1が突入する。

装甲版が捲れ上がり今にも崩壊しそうなバランスの中、リヨウマはただただ追いつく事を願った。ゲッターノエルを倒す事、それしか考えていない。

『どうして……。だってゲッター同士が戦ったって、もう……』

ミチルの声に応じたのはハヤトだった。

『オレ達は、そこまで器用には出来ちゃいないのさ』

『リヨウマが戦うというのなら、俺達は全力でサポートする。だが今は、それを必要ないのだというのなら、それに従おう』

Eトマホークが弾き飛ばされる。リヨウマはゲッター1をさらに突っ込ませようとする。

「このまま、焼け付いても、手を伸ばす！」

伸ばした先が地獄でも構わない。

ゲッター1の手がゲッターノエルの結晶体に触れる。そこから流れ込んできたのは記憶の瀑布だった。

ゲッターノエルがこの惑星に降り立った原初の記憶。まだ人類はゲッター線に選ばれた事も知らず繁栄を極めていた。だがゲッター線が選んだと知った時から人類の行動理由が変わった。自分達の繁栄よりもゲッターの繁栄を望む種。それは最早、生き物とは呼べな

い。総体だ。

「……そうか。お前は、その度に人類に絶望していたのか。だから三百年前の世界で一つの反逆を起こした。ゲッターステルスを破壊したのは、お前の絶望の証だった」

読み取られた事を感じたのか、相手のパイロットは告げる。

『ここから先は観測者として、偽物の人類の繁栄を見続けなければならなかった者の末路だ。その結果が、錆び付いたこの身だった』

「じゃあ何で、おれをあの時、助けた？ 何か理由があったのか」

相手は語らない。

ゲッターノエルが拳を放つ。

ゲッターも負けじと拳を放った。

お互いによるめき、攻勢の逆転が何度も起こる。ゲッター1を駆るリョウマはただただしゃにむに向かつていった。ゲッターノエルの振るったトマホークがゲッター1の腕を狩る。リョウマはそれでも動じない。もう一方の手で相手を引き寄せたかと思うとヘッドバットを食らわせた。ゲッターノエルの頭部に亀裂が走る。

Eトマホークを保持し、リョウマは雄叫びを発した。ゲッターノエルもトマホークを手にこちらへと攻撃を浴びせようとする。

その一閃がお互いに最後の一撃となった。

ゲッター1のEトマホークがゲッターノエルの頭部を割る。粉碎された頭部をもともせず、ゲッターノエルのトマホークが脇腹に食い込んだ。機械油が噴き出し、お互いに行動不能になったのはそれより数秒を要した。決着がついたゲッター同士の戦いでリョウマは辛うじて声を搾り出す。

「てめえは、何を見てきたんだよ。ただ単に人類だとか偽人類の歴史じゃねえだろ。人の光を、見出さなかったって言うのか。それは嘘だろ」

リョウマの言葉に相手は応じなかった。ゲッターノエルは頭部を粉碎されておりパイロットが生きているのかは分からなかった。

「ハヤト。生きてるか？」

『装甲が少しでも薄ければ、オレごと両断されていたな』

脇腹に突き刺さったトマホークをゲッター1は手にして無理やり引き抜く。片腕を失い、装甲もほとんどボロボロになったゲッター1はもう使い物になりそうにない。

「エンブリオは……」

エンブリオは惑星から養分を吸収し、最終段階に入ろうとしていた。つまり巢立ちの段階だ。惑星そのものを破砕し、ゲッター戦役に加わるために誕生しようとしている。止められるのは亜種のゲッター線の持ち主のみ。

『だが、ゲッターノエルはもう破壊されてしまった……』

『ストナーサンシャインで……』

「いいや、奴さんにはストナーサンシャインは効かねえだろう。ゲッター線兵器は通用しないはずだ。何より、もう手がねえ」

ストナーサンシャインを撃つための腕がないのだ。リヨウマはある決意をしなければならなかった。その決断によってのみ、未来は拓かれる。

「……イーグル号の制御系は、まだ生きているな？」

『何をする気だ？』

ハヤトの追及の声がかかる前に、イーグル号がゲッター1から分離する。取り残されたジャガー号とベアー号は合体したまま困惑の中に閉ざされる。

『リヨウマ！』

その声の主へとイーグル号に乗ったリヨウマは視線を振り向けた。ハヤトがジャガー号から身を乗り出し、ボタンを構えて佇んでいる。「リヨウマ！ イーグル号を置いて戻れ！ でなければ強制的に合体させる」

「てめえの事だ。それくらいの準備はしていると思っただけ」

存外に落ち着いた胸中だった。怒りも、悲しみもない。それしか方法が思いつかないのだから。

「ゲッターチームだろう？ オレ達は」

「珍しいじゃねえか、ハヤト。てめえがチームだとか言い出すのは」

ハヤトは男の面持ちを崩さずにリヨウマへと要求する。

「独断専行が過ぎるお前の事だ。考えは分かっている。コントロールを失ったノエルに、乗り移ろうというんだな」

ハヤトの言葉にリヨウマは嘆息をつく。

「分かっているなら、止めんなよ」

「分かっているから止めようとしている。我々レプリカントにとって亜種のゲッター線は毒だ。死ぬぞ、リヨウマ」

詰めた声にリヨウマはフツと笑みを浮かべる。

「てめえも相変わらずだな」

「戻って来い。今ならば間に合う」

「間に合わねえさ。もうおれは決めたんだからな」

イーグル号の推進剤が焚かれようとする。ハヤトがボタンを突き出したが、押す事はなかった。震える指先で何度も押そうとするがその度に彼は頭を振る。

「……押させるな」

「押させねえ。おれの決定だ。てめえが背負い込むもんじゃねえのさ。じゃあな。——あばよ、ダチ公！」

推進剤の焚かれたイーグル号がゲッター1から離れてゲッターノエルの直上に舞い上がる。そのまま機首を上げて合体軌道に入った。両翼を折り畳み、イーグル号がゲッターノエルに接合する。コックピットが自動的に移動し、リヨウマはゲッターノエルのパイロットとようやく邂逅を果たした。

「よう、生きていたのか」

「……減らず口だな」

そこにいたのはコートに赤いマフラーをつけた自分の似姿であった。眼光も何もかも自分と同じである。

「てめえの、名前は？」

「——流竜馬。オリジナルの、エンペラーの流竜馬のコピーだ。何てこたアねえ。おれも、レプリカントの事は言えないさ」

この男もまた逃れえぬ運命の渦に翻弄されたのだ。リヨウマは最後の敬意としてコックピットブロックを開け放った。

「行くなら今だぜ」

「行く？ 冗談を言うな」

コックピットブロックが閉ざされる。流竜馬は口角を吊り上げた。「地獄の果てまで、案内してやる」

その声音にリヨウマは声を張り上げる。

「後悔しても知らねえぞー！」

イーグル号から緑色のゲッター線が放出され、エネルギーパーティションがノエルと合体する。赤い装甲版を引き移したそれは最早ゲッター1でもゲッターノエルでもない。

「チエイインジ！ 偽ゲッターロボレプリカ！」

リヨウマの声が響き渡り、ゲッターレプリカが身体を開く。悪魔の羽根を想起させるウイングが展開し、エンブリオへと向かっていく。真ゲッターでさえもその勢いを止める事は出来なかった。

『リヨウマさん？ どこへ行くんですか？』

「どこへ行く？ 愚問だぜ、ミチル」

竜馬とリヨウマがお互いの操縦テクニックを用い、ゲッターレプリカが駆け抜ける。エンブリオは修復した五指を広げてゲッタービームを放った。

ゲッターレプリカが手を開くと赤いゲッター線で構築されたトマホークが顕現しゲッタービームを弾く。もう片方の手を開くと緑色のゲッター線で構築されたトマホークが出現した。両者を合わせ、接合したゲッターレプリカは投擲する。

「ダブルゲッターアアアア、トマホオオオーク！」

内奥から発せられる声に従い、ゲッタートマホークが一陣の風となってエンブリオの腕を両断する。エンブリオが激痛に喚く。ゲッタービームではない。今度は、エンブリオが握り拳の中に充填しているのは全く異なるエネルギーだった。その光を目にしてミチルが叫ぶ。

『まさか、ストナーサンシャイン？』

『リヨウマ！ 恐れるな！ 行け！』

ハヤトの声に後押しされ、リヨウマは声にする。

「おうよ！ 最後のゲッターチェンジだ！ 行けるな？ もう一人の

おれ」

「何を当たり前の事を——、言つてやがる！」

戦闘本能を研ぎ澄まされた流竜馬が叫ぶ。

リヨウマの雄叫びが相乗し、ゲッターレプリカが変形した。

イーグル号を機首とし、全身が巨大な鷹を想起させる形状へと変形を果たす。赤いゲッター線の推進剤と緑色のゲッター線の推進剤が同時に焚かれ、螺旋を描いて一羽の鷹がエンブリオへと特攻する。その手からストナーサンシャインが放たれると、誰もが思っていた。しかし、ゲッターレプリカが侵入した瞬間、エンブリオの活動が徐々に収まってきた。エンブリオが体内に入ってくるゲッターレプリカを排出しようと手を伸ばすがその頃には既に遅い。

ゲッターレプリカはエンブリオの初期能力であるエネルギー吸収を最大限に利用し、ゲッターエンブリオと同化していた。

エンブリオが甲高い鳴き声を上げて手を伸ばす。その手もすぐさま退化した。エンブリオの形状が次々と縮小していくのである。

『これは……、エンブリオが還元されていく……』

『リヨウマが、あいつがやったんだ』

ジャガー号とベアー号が分離し、真ゲッターの入ってきた通路を指して突き進む。ミチルが狼狽する。

『リヨウマさんは？』

『あいつはやってのけた。だからオレ達は……』

そこから先には嗚咽が混じっていた。ハヤトの意図を理解する前にミチルは真ゲッターを走らせ、惑星の核から脱出していた。次々に核へと通じる道が閉ざされていく。ミチルは最後に声を投げようとしたが、それさえも阻むように最後の扉が閉ざされた。

真最終回

研究所の跡地は、何もない焦土と化している。周囲を見渡してから、彼女はそつと花束を置いた。この場所は国からゲッター線の汚染地域に指定されており、誰も近寄ろうとはしない。

「もう四年前、になるんですね」

ミチルは自分の掌を眺める。思考しかなかった自分がゲッター線によって受肉し、今では生活に支障がないレベルまで回復している。ゲッター線はある意味では恩恵であった。

「一人か？」

声をかけてきた人物にミチルは振り返る。コートを着込み、煙草の紫煙をくゆらせながらハヤトが立っていた。

「ハヤトさんこそ。いいんですか？ 新しいゲッターの研究に着手しなくっても」

「オレがやらなくてもいいような段階まで行ったさ。聞いたと思うが第一次のパイロットは」

「ムサシさんでしょうか？ あの人は、やっぱりゲッターに魅入られていたんでしょうか？」

ロケットの棚引かせた煙が網膜の裏に焼きつく。今日、新たな国家プロジェクトとして立ち上がったゲッター研究は日の目を見た。純粹ゲッター線で動く新たなゲッターロボを主軸にしてゲッター戦役に加わるべく研究が発足したのだ。ハヤトはその責任チームのリーダーでもあった。

「博士は？」

「お父さん、サオトメ博士ですよ……。あの人は、もう人間としての思考回路も、機能もないそうです。ただ朽ちていくだけ、だとか」

「亡者を冒瀆し続けた男の末路、か」

まるで自分もいずれそうなような口ぶりにミチルは問いかけていた。

「ハヤトさんは、後悔していないんですか？ あの時、リョウマさんを止められたのはハヤトさんだけでしょうか？」

恨み言を言うつもりはない。それにもう終わった事だ。しかしどうしても納得出来なかった。ハヤトだけが止められたのに、その道を閉ざす事をしなかったのは。

「あいつの気持ちだが、分かってしまった。だからオレは止められなかった。それだけの話さ」

ハヤトは煙い息を吐き出す。リヨウマを止めなかったのは同じ境遇にあればハヤトもそうしたからかもしれない。

「地獄の釜は閉じ、ゲッターエンブリオは封印された。あの時大量出現したネフィリムも全てが消失。もう、人類は、いいや偽人類は真の人類の侵略に怯える事はなくなった」

「もう、本物も偽物もないんじゃないですか？ だって、私達は生きています。きつと、リヨウマさんはそう言いたかったと思うんです。生きているのならば、真も偽もないと」

今さらにリヨウマの戦う理由が分かった気がする。あれだけ傍にいながらあの時は全く分からなかった。しかし今ならば。リヨウマはたった一つの単純な理由で戦っていた。

——生きているから。生きていけるから、戦っていたんだ。

それを守るために何の躊躇いもなかった。リヨウマは行ってしまった。この惑星を守るために、彼岸へと。

「オレはリヨウマにはなれなかった。ムサシでも同じだろう。誰も、誰かの代わりになれないんだ。そんな簡単な事が分からずに、三百年も合い争っていた。人類の浅はかさが、今は……」

そこから先をハヤトは言葉にしなかった。愛おしいのか、それとも憎らしいのか。

「行きましょう。車を用意してあります」

「運転出来るのか？ システムAIが」

わざと言っているのだ。ミチルは頬をむくれさせる。

「失礼ですね。もうシステムAIじゃありませんよ」

「そうだったな。ミチル。安全運転で頼む」

踵を返す。リヨウマは何を望んでいたのか。この先、この惑星はもう危機に襲われないのか。その保障は誰にも出来ない。しかしミチ

ルは覚え続けている。

たった一人の男が、その意地を通し続けて守ったこの惑星の未来を。

何万光年も旅を続けてきた。

恐らく母なる星に帰れる事はないだろう。それでも構わなかった。ゲッターロボはようやく、ゲッター戦役に加わる事が出来た。

「来たな」

ヘルメットを被り、鎧姿の巴武蔵の声にコックピットを開いて応じた。

「随分と遅れてしまった。申し訳ない」

「いいき。これでも早いほうだ。歓迎しよう、トモエ・ムサシ」

ムサシは火線の集中する宙域を見据えた。巴武蔵に尋ねる。

「ここは、最前線か？」

「いいや、その逆だ。一番最前線からは程遠い」

やはり遅過ぎたのだろうか。ムサシの懸念に巴武蔵はにこやかに応じる。

「遅かったのを悔いているようだが、そんな事はないぞ。えーと、ちょうど五十年前くらいか。その時にもうその惑星からの先遣隊は戦役に突入してもらっている」

その言葉には違和感があった。何故ならば自分達こそがあの惑星から旅立った最初のゲッターチームであるからだ。

「そんな馬鹿な。俺達以外に、誰が戦役に加わるって」

「ほら、あれだ。ちょうど今、敵を撃墜しようとしている、あれだよ」
巴武蔵が指差す。いつか見たように菩薩像が宙域を舞い、杖を突き

出してゲッターを破壊していく。その中で幾何学の軌道を描き、菩薩へと飛びかかった影があった。緑色と赤色のゲッター線を放出し、鷹のような姿のその機体が菩薩を押し戻す。

『チエンジ！ ゲッター！』

聞き覚えのあるその声にムサシはようやく理解した。それと同時に涙が溢れてくる。止め処ない。

「そうか。お前は、もう来ていたんだな」

変形した赤と黒の色を持つゲッターロボが菩薩へとゲッタービームを放つ。菩薩が粉碎され、その爆発を背にしてゲッターが腕を組んだ。そのコックピットに収まった人物も同じように腕を組み、声にする。

「待っていたぞ」

偽ゲッターロボ レプリカ 完

あとがき

あとがき

拙作『偽ゲッターロボ レプリカ』を読んできださりありがとうございます。
ございます。

「仮面ライダーやエウレカセブンと来て何でゲッター？」と思っ
てる方も「ポケモン二次やっているのに何でロボ物？」と思っ
ている方もいらつしやると思いますが、今回のあとがきはとりあえずどうして
ゲッターロボという原作に着手したのか、から紐解いていきます。

そもそも自分、前からロボット物を二次創作でやってみたいな
思っていました。ですがガンダムは先行作品が多いのと、変に独自解
釈を入れられないほどの情報量と設定なので無理だと判断。ならば
スーパーロボットもので考えたもののマジンガーは公式がもうな
んか二次創作っぽいしやりたいことはやってもらっているので必要
ないだろうと。

ならばと自分の好きなロボットとしてゲッターが出てきました。

しかしゲッターロボの二次創作、果ては公式の派生作品に関しても
存在する一種の「呪い」はご存知でしょうか？ 俗に言う「ゲッター
は完結しない」です。

これに関しては色んな解釈があると思います。

そもそも石川賢先生の描いた世界観が膨大過ぎてすくい切れない、
という解釈。

あとは公式のゲッターに関する描写がお粗末というか毎回監督が
変わったり演出が変わったり、回によってばらつきがあったりと安定
しません。そのせいでゲッターロボにはこれ、という決まった答えが
ないのです。

ある意味では二次創作がやりやすく、またある意味ではとてつもな
く難しい作品でありました。

まずゲットマシンの三機合体。これをどこまで書き込むか。それ
だけでも人によって異なるでしょう。私は実際に三機を立体化し（ケ
ネックスというおもちゃを使いました）それぞれ空想上での合体では

なく実際にこれがこうなつて、こうこうで合体するのだ、という口
ジックを頭の中と実際の手で覚えさせました。そのお陰か合体描写
で特に困った事はなく、次に困った描写に立ち止まる事になります。
ゲッターにおける困った描写の一つ、敵。

公式では恐竜帝国だとか百鬼帝国だとか虫の種族だとかバグだと
かインベーターだとか鬼だとかメタルビーストだとかもう色々出過
ぎてその時点で安定していません。

しかもインベーターと鬼に関してはよく分からないまま終わる始
末……。

いわゆる、これ！ という答えがないのです。サーガの最後である
アークにしてもバグとの最終決戦の場面で終わってしまうのである
先どうなったのかも分かりませんしそもそも考えていたのかも分か
りません。

というか言い出すとゲッター線って何？ だとか真ゲッターって
どれくらい強いのか？ だとか疑問が尽きないのです。

後付設定とだれかれ構わず取り出せてしまう手軽さのせいでスパ
ロボでは壊れ性能になつたり、とにかくゲッターだ、真ゲッターだ、ス
トナーサンシャインだと出してしまふせいでキャラもぶれぶれ。も
うよく分かりません。

一応『チェンジ真ゲッター』の三人を踏襲しているものの、武蔵が
出てきたり出てこなかったり、そもそも元のゲッターが出てこなかつ
たりいきなりブラックゲッターだったりやり放題です。この界限は
とてもではないですが無法地帯というほかありませんでした。

そこで一度見直すに当たって最初のゲッターの設定を踏襲した『新
ゲッターロボ』に近い設定で始めようと思いました。ただ龍馬がその
まま出てくるとまんまなのでベータのパイロットにしたり、ハヤトは
ほぼそのまんまでしたがちよつとだけ変えたり、ムサシは月面人にし
たりとこちらなりに解釈を変えて新しいゲッターを目指しました。

三話までは本当にぱぱつと書いてしまいました。私は一日に一万
文字平均で書くのですが今回のゲッターの場合、時には一万五千の大
台を突破する時もありました。

そう、私もゲッター線に取り憑かれたようにオーバーヒートを起こしたのです。

そして同時に理解しました。

どうして今までゲッターの派生作品や漫画は完結しなかったのか。出来ないのです。

ちよつとやそつとの力技ではこのゲッターという作品は制御出来ません。制御しようとする人間の精神を壊してしまう作品です。恐らくは『飛燕』も『偽書』も、こうして終わらなかつたんだろうなあと思いながら書きました。

無理が生じてくるのです。

ゲッターという物語の持つ底知れなさがこちらを取り込んで離さない。一万五千文字と先に言いましたがそれを二時間ほどで書き上げていたのだから恐らく常軌を逸していたのでしよう。ぱぱつと書けたと言いましたが違うのです。

私はぱぱつと書かされていたのです。ゲッターの意思に。

このままでは身体が持たない、と早期に判断し、ゲッターを書くのを一時中断しました。

そうしてからプロットを見直し、最後まで書く判断をしました。

恐ろしくこれは無理のあるプロットかもしれません。

ネフィリムもゲッターの一部であり、亜種のゲッター線の持ち主。赤いゲッターの守護神であるゲッターノエルを擁するレプリカントと純正ゲッター線を守護する人類との生存戦争。

実はレプリカントはこちらであり相手側が真の人類であった、という仕掛けは最初から考えていました。自分にしては計画性のあるプロットでしたがそうでもしないとこのゲッターは根本から捻じ曲がりやはり「完結しない」呪いにかかつていた事でしよう。

そもそもこの作品、お気づきだったでしょうか？

・「太陽系」という言葉を一切用いない。

・「地球」という言葉を一切用いない。

この二点に気付いて最初からこの惑星が地球ではないと分かっていた方がいるとすればさすがです。拍手と賛美を送るしかありません。

ん。

知らず知らずの内にこの惑星が未来の「地球」だと騙されていた方は計画通りです。

月という言葉は広義に惑星に伴う衛星に適応されるのでこの場合「地球である」という判断材料にはならないのです。

ルナリアンですが六分の一G殺法という強力な武術を使う人々の住まうところを考えた結果月面に辿り着きました。六倍の出力の馬鹿力を使える人間と考えるとそりゃすごい、ゲッターに乗せるしかない、となるわけです。

またルナリアンが実のところ真の人類に近い存在であり後半でムサシが遠く離れたゲッター戦役に唯一精神で辿り着けるのはそういう理由があったからです。あとはまあ都市伝説めいて繰り返されている「ゲッター3のパイロットは死亡フラグ」にもちよつと触れた形となりましたね。

『チェンジ』と『新』と『真対ネオ』からそれぞれ引用した部分もたくさんあります。気づかれた方もいらつしやるんじゃないでしょうか？ それぞれの主題歌から表現を出したところもありました。

「ヨロイのゲッター」ことゲッターノエルには強大な敵として立ちただかつてもらいました。黒いゲッターというとブラックゲッターが定番ですが今回はちよつと定番から外した感じで。ヨロイのゲッターという仮称は『真対ネオ』の最終局面で出てくる神ゲッターの別称から。またその黒い姿に赤い血潮のゲッター線というのはこれはブラックゲッターをより真ゲッターっぽくしたら、というアイデアだったのですが『偽書』に「漆黒のゲッター」なるものがあるのを後から知りました。やっぱり出てくるようなアイデアはやり尽くされているものなのだなあと感じました。

ノエルは福音。後半に出てくるゲッターエンブリオという存在を祝福するための守護者として役割付けたのは我ながら正解だと思えます。エンブリオの存在によって地下はどうしてゲッター線が多いのか？ 地獄の釜とは？ という問いにもケリをつけられました。

また今回のプロトゲッターは純粋な意味での試作のゲッターロボ

ではなく真ゲッターの退化した純粹ゲッター線の守護者でありゲッターノエルとは相克の存在というのも結構跡付けです。それもこれも必要だったのは主役ゲッターロボが「偽物」であるため……。

「偽」ゲッターロボ「レプリカ」というタイトル。これは単純です。「大事な事なので二回言いました」という事です。

最初から主役ゲッターロボは偽物であり、内蔵ゲッター線に限りがある点から考えてみるとアークやネオゲッターに近いものだと思ってもらっていいのかもしれませんが。

真と偽の逆転。最後の最後に「ネフィリムが本物であり、今まで主人公達の乗ってきたゲッターは偽物」というのはトツプをねえ2！の仕掛けに近いですね。

どうして登場人物の名前は全員カタカナなのか、というのも「偽物感」に拍車をかけるためでした。真の存在が必ずしも物語の主人公とは限らない、というのも入れたかったメッセージではあります。

最後に、予定になかった事。

・ミチルが受肉し、人間になる。

これ、結構重要な要素の癖に最後の最後に決まった事でした。シテムA Iとして今回登場していただいたミチルはノエルに貫かれて死ぬ予定でしたがかわいそうなので受肉させ、今回のゲッターの戦争でも救われた部類に入る人間にしました。基本いい人でしたからね……。

・ハヤトはゲッターの探求者としてエンブリオの謎に触れる。

そもそもエンブリオの存在は最初から決まっていたのにどうやって出そうか四苦八苦しました。惑星そのものを卵殻として存在するゲッターロボなんて今までなかった（と思います）のでどうやろうか分からなかったのもあります。そもそも今回、スケール感デタラメ（ゲッター戦役やネフィリムの巨大さ）ゲッターなので「あつ、こいつの大きさどうしよう……」みたいなにはよくぶち当たりました。

・ムサシがゲッターの使者として旅立つ。

これは当然の帰結だったのですが最後の旅立つ段階でどういう風にゲッターに乗せるかにちよつと変更点がありました。真ゲッター

に乗せるか違うゲッターに乗せるか程度の違いですが、ちよつと迷いました。

・サオトメの処遇。

これも悩んだ末で「こいつは死んでもおいしい生き残ってもおいしいな」と思いながら廃人にしました。非道だったですがこの人物がいなければ全ては始まらなかつたので漫画版に近い措置ですかね。

・ナガレ・リョウマについて。

最後の最後、ゲッター戦役で「待っていたぞ」に関しては実はプロットにありませんでした。リョウマはあのままゲッターエンブリオと運命を共にして終わってもよかつたのですが救済が欲しいな、と思つた結果、ゲッター戦役で戦う「偽ゲッターロボレプリカに乗るナガレ・リョウマ」が完成したわけです。

ちなみにこの「偽ゲッターロボレプリカ」という名前。最後の最後まで考えていませんでした。

ノエルとゲッターが合体するんだからそれに相応しい名前がいいな……。でもそれっぽい名前は全部公式が持つていつているし……。と思つたらあるじゃないですか、いい名前が。タイトルに。

というわけでタイトル回収。「偽ゲッター」と「ゲッターノエル」の合体形態「偽ゲッターロボレプリカ」が完成したわけです。

ただゲッター二次創作を書いている時、この界限が切望されていながら何故公式でも書き手がいないのかを理解しました。

感じたのはゲッターという創作物そのものに「吸われている」感覚です。

気のせいだろ、と言われたらそこまですが書いている時何度か「吸われている」感覚に陥りました。ゲッターという大きな何かに自分は抗つて書いているのであって、これは通常の二次創作の比ではない。それこそ石川賢先生の持つ倫理観やイメージ、強烈なビジュアルなどを全て放り投げてぶん投げて自分流にアレンジするのは骨が折れました。

とてつもない情報量と、それに付随する人間達のドラマ。

描こうとした時ゲッターという作品の底知れなさを窺い知りまし

た。

「吸われている」時、私は常に抗おうと頑張ってきましたが、結局ゲッターの大きな意思には勝てなかったんだと思います。

そもそも勝ったか負けたかをジャッジするのは私の判断ではないので（読者の判断なので）あとがきでも無理に勝ったか負けたかを突き詰めるのはよしておきます。

ゲッターの二次はこれが最初で最後です。

やりようはあるのですがやってしまうと終わりがありません。

なのできりのいいところでしたっかりと終わらせておきます。

ともかく無茶な二次創作だった！

終わった後に感じたのはそれだけです。

ですがこういう形でも一応はゲッターの物語にピリオドが打てたのは嬉しいです。

偽物の物語はこうして終わりました。

2015年 10月23日 オンドウル大使より